

日本アフリカ学会 第57回学術大会 研究発表要旨集



2020年5月23日(土), 24日(日)
東京外国語大学 (オンライン大会)

目次

大会スケジュール	1
大会参加者へのご連絡	3
プログラム	7
公開シンポジウム	17
フォーラム	26
発表 A 会場	60
発表 B 会場	79
発表 C 会場	98
発表 D 会場	116
ポスター発表	130

Table of Contents

Schedules	1
Announcement for Participants	3
Programme	7
Public Symposium	17
Forum	26
Presentations: Venue A	60
Presentations: Venue B	79
Presentations: Venue C	98
Presentations: Venue D	116
Poster Presentations	130

大会スケジュール

総会

2020年5月23日（土）15時～（Zoomにて開催）

評議員会

2020年5月23日（土）12時～（Zoomにて開催）

公開シンポジウム

2020年5月24日（日）13時～15時30分（Zoomにて開催。

同時にYoutubeによるストリーミング配信を実施）

プログラム要旨集公開期間

2020年5月13日（水）～2020年5月31日（日）

発表資料・質疑応答用掲示板公開期間

2020年5月23日（土）～2020年5月31日（日）

Schedules

General Assembly

Saturday 23 May at 3 p.m. (Zoom Meeting)

Meeting of the Board of Councilors

Saturday 23 May at 12 a.m. (Zoom Meeting)

Public Symposium

Sunday 24 May at 1 p.m. ~ 3:30 p.m. (Zoom Meeting)

Open Period

Abstracts: Wednesday 13 ~ Sunday 31 May

Presentation Data & the Bulletin Board: Saturday 23 May ~ Sunday 31 May

大会参加者へのご案内

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、今回の学術大会は基本的にオンライン開催とします。具体的には、発表資料をオンラインストレージサービス Dropbox 上に一定期間掲載し、質疑応答は Dropbox のコメント機能を用いて行っていただくことにします。ただし、公開シンポジウムについては、TV 会議システム「Zoom」を利用して開催します。

参加資格

日本アフリカ学会会員であれば、誰でも参加できます。参加費は無料です。

学術大会の形態

通常の学術大会における報告と質疑応答を、オンライン (Dropbox) に置いた発表資料にコメントを付けて議論するというやり方に代替します。5 月 23 日～31 日の期間、発表資料閲覧およびコメントの付与と返答を可能とします。

学術大会発表資料の閲覧方法

- ・第 57 回学術大会ウェブサイト「プログラム」ページに、『第 57 回学術大会プログラム要旨集』を掲載します。
- ・同じく、第 57 回学術大会ウェブサイトにて、発表資料の Dropbox 公開リンクを掲載します。発表資料は『第 57 回学術大会プログラム要旨集』に記載されたセッション（フォーラム、A～D 会場、ポスター発表）および発表番号順に基づいて分類されています。
- ・発表資料の公開リンクは、メーリングリストでも通知します。
- ・公開シンポジウムについては、Zoom 上で実施、配信するため、発表資料は Dropbox 上に置きません。

質疑応答

質疑応答は Dropbox のコメント機能を用いて行うことができます。質問やコメントを付すこと、それへの返答は、この機能を使ってください。

掲示板

会員間の情報交換のために、Dropbox 上に掲示板を設けます。利用は日本アフリカ学会
会員限定とし、リンクをメーリングリストでお知らせします。

公開期間

- 要旨集は5月13日（水）～31日（日）の期間公開します。
- 発表資料、掲示板は5月23日（土）～31日（日）の期間公開します。
- 公開期間終了後、発表資料、質問・コメントは消去されます。

発表資料の入手

発表資料のダウンロードはできません。発表資料を入手したい場合には発表者に直接お
問い合わせください。

公開シンポジウム

2020年5月24日13時～15時半。Zoomにて開催します。

定員300人。参加方法については公開シンポジウムのページをご覧ください。

For Participants of the 57th JAAS Annual Meeting

Following the rapid spread of COVID-19, it was decided to hold the 57th JAAS Annual Meeting online. All data to be presented will be put on Dropbox (an online storage service), and discussions will be held using its capabilities. The public symposium (in Japanese) will be carried out through Zoom.

1. Participation

- All JAAS members may participate free of charge.

2. Meeting Online

- Presentations and discussions will be held online. The data to be presented will be put on Dropbox from Saturday the 23rd to Sunday, May 31st. Any JAAS member can visit and comment on the data during this time.

3. Details on the Data

- The abstracts of the presentations will be put on the website of the 57th JAAS Annual Meeting.
- The link to Dropbox will be put on the same website and will also be distributed through the JAAS mailing list.
- Presentation data for the public symposium will not be put on the Dropbox.

4. Discussions

- Questions, comments, and replies can be added to the data to be presented on Dropbox.

5. Bulletin Board

- For the purpose of exchanging information, a bulletin board will be open on Dropbox; its use is strictly limited to JAAS members, and the link will be sent through the JAAS mailing list.

6. Open Period

- Abstracts will be accessible on the website between Wednesday the 13th and Sunday, May 31st.
- The data to be presented and the bulletin board will be accessible between Saturday the 23rd and Sunday, May 31st.
- Following the end of the above-mentioned period, all data will be completely deleted.

- No Dropbox data are downloadable. Please contact each presenter if necessary.

7. Public Symposium

- The public symposium will be held in Japanese, starting at 1 p.m. on Sunday, May 24th.
- Access will be enabled to a total of 300 people. Participants need to register. The registration form will be distributed afterward through the JAAS mailing list. Those who register will be invited to the Zoom meeting later on.

8. Contact Information

- Secretariat of the 57th Japan Association for African Studies Annual Conference
c/o African Studies Center – Tokyo University of Foreign Studies
3-11-1, Asahicho, Fuchushi, Tokyo 183-8534, Japan
Email: jaas2020.tufs@gmail.com

プログラム

フォーラム

フォーラム 1

新しいアフリカ言語研究1 方法論の刷新

中川 裕
東京外国語大学
序論

中川 裕 (東京外国語大学)、アレナ・ウィツラック=マカレヴィチ (エルサレム・ヘブライ大学)、木村 公彦 (東京外国語大学)、言語音の限界線: カラハリ言語帯音韻類型論

大野 仁美
麗澤大学
物語作成手法は文法項目調査に有効か: コイサン事例研究

河内 一博
防衛大学校
ビデオ実験による形態統語論・意味論・語用論の類型的研究

フォーラム 2

新しいアフリカ言語研究2 アフリカの手話言語の諸相

箕浦 信勝
東京外国語大学
マダガスカル手話の形態統語論的諸相について: 動詞の自他対応を中心に

森 社也
日本貿易振興機構アジア経済研究所
ウガンダ手話に見られる動詞への新たなタイプの語彙化

宮本 律子
秋田大学
タンザニア手話の社会言語学的状況

亀井 伸孝
愛知県立大学
フランス語圏アフリカ手話 (LSAF) の話者人口推計: ろう学校およびろう者団体の調査を手がかりに

フォーラム 3

新しいアフリカ言語研究3 バントウ諸語のマイクロバリエーション研究

米田 信子
大阪大学
バントウ諸語のマイクロバリエーション研究とは?

竹村 景子 (大阪大学)、宮崎 久美子 (ザンジバル国立大学)
ザンジバルのスワヒリ語諸変種に見られるマイクロバリエーション

阿部 優子
東京女子大学
バントウ諸語に見られるテンズ・アスペクト標識のマイクロバリエーション

小森 淳子
大阪大学
受動文の類型: ニジェール・コンゴ語族の中のバントウ諸語の特徴

フォーラム 4

アフリカにおける社会連帯経済の可能性

斎藤 文彦
龍谷大学
南アフリカにおけるソーシャルビジネスの可能性

辻村 英之
京都大学
社会的連帯経済としてのフェアトレードのサステナビリティ: ルカニ村・フェアトレード・プロジェクトを事例として

フォーラム 5

在来知と生態学的手法の統合による革新的な森林資源マネジメントの共創【II】

安岡 宏和
京都大学
趣旨説明

戸田 美佳子
上智大学
家計調査から見たカメルーン熱帯林地域住民による野生動物消費とそのニーズ

本郷 峻
京都大学
森林性ダイカー類の個体数密度に対する人間活動の影響: 効果的な個体数管理システムの構築に向けて

安岡 宏和 (京都大学) 他
カメラトラップと狩猟データにおける種構成の相違: 持続的狩猟の指標としてのR/B比の可能性と課題

ウィリアム・カムゲン (京都大学) 他
Estimation of Dung Decay Speed for Forest Duikers (*Philantomba monticola* & *Cephalophus* spp.) in Southeast Cameroon: Seasonal Differences and Implication for Monitoring

平井 将公、安岡 宏和
京都大学
カメルーン東南部における非木材林産物のアベラビリティと地域住民のアクセシビリティ

フォーラム 6

サハラ以南アフリカのサニテーションをCo-createする

牛島 健 (北海道立総合研究機構)、清水 貴夫 (総合地球環境学研究所・京都精華大学)
サニテーションの問題解決におけるCo-creation: 「サハラ以南アフリカのサニテーションをCo-createする」趣旨説明

清水 貴夫 (総合地球環境学研究所・京都精華大学)、中尾 世治 (総合地球環境学研究所)
汚泥の農業利用をめぐるサニテーションをCo-createする: プルキナファノ中北部州Ronguin村とローカルNGOとの協働の事例から

林 耕次 (総合地球環境学研究所) 他
定住した狩猟採集民のサニテーションをCo-createする試み: カメルーン東部州の事例より

片岡 良美 (北海道大学)、Sikopo Nyambe (北海道大学)、山内 太郎 (北海道大学・総合地球環境学研究所)

映像を活用した参加型アクションリサーチ: ザンビアにおけるサニテーション課題解決をめざす子どもクラブの事例

草郷孝好
関西大学・総合地球環境学研究所 (コメント) 持続的な生活改善のための協働型アクションリサーチの重要課題: サニテーションプロジェクトへのコメント

FORUM 7

Uses of Research by Researchers of African Descent in Japanese Universities

Rebecca Babirye
Tokyo Christian University
Coming to Tokyo, Losing Faith: Chronicles of African Pentecostal Migrants in Japan

Kasaon Stephanie
Sophia University
Sustainable Forest Management for Local Livelihood Support, Biodiversity Conservation and Carbon Sequestration: Institutional Arrangements and Contextual Socioeconomic Conditions Associated with Sustainable Forest Social Ecological Systems: A Case Study of Kenya's Participatory Forest Management Model

Emmanuel Vincent Nelson Kallon
Tokyo University of Foreign Studies
Patterns of Strategic Interactive Politics in Transitioning States: The Case of Post-conflict Sierra Leone and the Challenge of the Management of Development Aid

Amelia Maisha Silas Tunzine
Tokyo University of Foreign Studies
Land Titling in Mozambique: Tenure Security for Communities or Investors?

Ian Karusigarira
Tokyo University of Foreign Studies
Victims of Violence or Heroism? A Historical Analysis of Revolutionary Regime, Culture and Survival Apocalypse in Uganda

発表 1

	A会場	B会場	C会場	D会場
1	<p>佐藤 光 明治大学</p> <p>アフリカにおける民主化と社会保障制度改革：南アフリカとナミビアを事例にして</p>	<p>石川 博樹 東京外国語大学</p> <p>経済活動から見た北部エチオピアの2王国の比較研究</p>	<p>西浦 昭雄 創価大学</p> <p>南アフリカの経済的不平等とBEE政策</p>	<p>John Ngoy KALENGA Hosei University</p> <p>Estimating the Injury Rates and Causes of Fatalities in the Japanese Mining Industry, 1924-2014</p>
2	<p>井上 直美 東京外国語大学</p> <p>アフリカにおける責任ある企業行動の推進：国際協力のアクターの役割に着目して</p>	<p>鈴木 英明 国立民族学博物館</p> <p>曖昧な「ボンベイ・アフリカン」：ジェイコブ・ウエインライトの日記の分析から</p>	<p>長辻 貴之 早稲田大学</p> <p>Electoral Blind Spot in Africa</p>	<p>Seera Georgina Kyoto University</p> <p>Food Portion Photographs: Validity for Portion Size Estimation in Food Intake Surveys in Mukono, Uganda</p>
3	<p>アブディン モハメド 学習院大学</p> <p>ナイル川の水資源開発と流域安全保障上の挑戦：エチオピア・リネッサンダム建設を事例に</p>	<p>中尾 世治 総合地球環境学研究所</p> <p>タカラガイの季節的暴落：仏領西アフリカの内陸における植民地通貨導入直後の貨幣状況</p>	<p>島田 周平 名古屋外国語大学</p> <p>2019年ナイジェリア総選挙からみえた「地域」の重み</p>	<p>Eunji Choi Kyoto University</p> <p>Terminal Management in Addis Ababa: Analyzing the Role of Tera Askebaris in Megenagna Terminal</p>
4	<p>鈴木 裕之 国士館大学</p> <p>マンデ文学研究3：マサ・マカン・ジャバテによるマンデの「人間喜劇」</p>	<p>上林 朋広 一橋大学</p> <p>創られた「伝統」の浸透：ズール語教科書の出版と歴史意識</p>	<p>阿久津 昌三 信州大学</p> <p>大統領の椅子：特に、ガーナ共和国における大統領のガバナンスと政権交代の事例を中心として</p>	<p>加藤 (山内) 珠比 京都大学</p> <p>Growing Market on Nutrition in Tanzania: Mixed Porridge Flour</p>
5	<p>三島 禎子 国立民族学博物館</p> <p>ソニンケ民族の文化運動と地域ラジオ局：「文化運動」の映像取材から見えてきたもの</p>	<p>寺本 理紗 京都大学</p> <p>性的寛容な社会において男性の選り好みの強さが女性の性戦略に及ぼす影響：ボツワナのカタの連続的離婚の事例から</p>	<p>阿毛 香絵 京都精華大学</p> <p>セネガルの高等教育の場におけるイスラーム：社会変容の現場から</p>	<p>米川 正子 筑波学院大学</p> <p>US Responsibility in the DRG: Power Dynamics, "Genocide", and Forced Repatriation of Rwandan Refugees</p>
6	<p>矢野原 佑史 京都大学</p> <p>「システム」に尋ねる：現代カメルーンにおける社会的課題に対するヒップホップ・ミュージシャンの見解</p>	<p>松井 梓 京都大学</p> <p>小さな島のごシップ？：モザンビーク島の女性たちの断片化された交際圏</p>	<p>盛 恵子 国立民族学博物館</p> <p>セネガル、ティジャーニーヤ・イブラヒミヤにおける女性の宗教的権威</p>	<p>Christian Otchia Nagoya University</p> <p>Did Social Unrest Thwart the Battle against Ebola in the Democratic Republic of Congo?</p>
7	<p>松平 勇二 兵庫県立大学</p> <p>グイのラメラフォンの構造的変化：共鳴板の形態と鏝の本数に注目して</p>	<p>林 愛美 大阪府立大学</p> <p>ケニア・ナロクにおけるFGM/C廃絶運動の拡大とマサイの女性の参画</p>	<p>池邊 智基 京都大学</p> <p>参詣の場における「声」の権威：セネガル・ムリッド教団の祭事マガル・トゥーバの事例</p>	<p>Isaac Kwaku Adu (Sophia University) et al.</p> <p>Achieving Sustainable Development: The Case of Environmental Awareness among Farmers and Senior High School Students in Ghana</p>
8	<p>大山 修一 京都大学</p> <p>ナイジェリアの国境閉鎖が与えるニジェールの物流と市民生活への影響</p>	<p>眞城 百華 上智大学</p> <p>アフリカにおける「女性兵士」比較研究の視座</p>	<p>ヘバタツター・オマル 名古屋大学</p> <p>イスラーム世界の女性をめぐる研究</p>	<p>Doke Victor Hiroshima City University</p> <p>Prevention Measures and Coordination Efforts against Violence Recurrence: The Case of Bawku Conflict in Northern Ghana</p>
9	<p>青池 歌子 京都大学</p> <p>ニジェール国ニアメ市における家庭ゴミ収集：手押し車を使った収集方法と収集人たちをとりまく社会関係</p>	<p>阪本 公美子、大森 玲子、津田 勝憲 宇都宮大学</p> <p>野生植物を食べると健康になる？：タンザニア中部ドドマ州Chinangali I村における質問票インタビュー調査より</p>	<p>村津 蘭 京都大学</p> <p>ペンテコステ派・カリスマ派を起因とする霊的存在の変容：ベナンのデリヴァランス儀礼を事例として</p>	<p>Stanislaus Acquah Utsunomiya University</p> <p>Influence of TICAD on Trade: The Case of Ghana</p>
10	<p>坂梨 健太 龍谷大学</p> <p>熱帯アフリカにおける舗装道路工事と住民の応答：カメルーン南部を事例として</p>	<p>鈴木 功子 京都大学</p> <p>エチオピア南西部地方都市におけるヘルス・エクステンション・ワーカーによる保健衛生活動：公衆衛生活動に注目して</p>	<p>橋本 千絵、竹元 博幸、古市 剛史 京都大学</p> <p>野生チンパンジーのメスにおける隣接集団関係</p>	<p>Pedro Miguel Amakasu Raposo de Medeiros Carvalho Kansai University</p> <p>Africa (or Asia) Renaissance?</p>

発表 2

	A会場	B会場	C会場	D会場
11	<p>神代 ちひろ 京都大学</p> <p>マイクロクレジットを「分ける」： ブルキナファソ農村における又貸し を事例に</p>	<p>有井 晴香 北海道教育大学</p> <p>エチオピア農村におけるリプロダク ティブヘルスをめぐる男性の役割</p>	<p>古市 剛史 京都大学</p> <p>何が父系社会を進化させたのか：ヒ ト亜科とコモザル亜科の比較から</p>	<p>AMANFO Smart Edward Sophia University</p> <p>Determinants and Impacts of Chinese Foreign Direct Investment (FDI) in Africa: Analyzing the Mechanism and Evidence of FDI-Domestic-Unemployment Reduction Relationship</p>
12	<p>井手上 和代 立命館大学</p> <p>ケニア・ナイロビにおける小規模零 細事業主の資金調達：生産形態と在 来金融の変化に着目して</p>	<p>日下 智志 広島大学</p> <p>SDGsゴール4達成に向けたアフリカ 諸国数学カリキュラムの基礎的研究 ：分数の学習内容とその配列に焦 点をあてて</p>	<p>伊谷 樹一（京都大学）、小林 淳平 （京都大学）、神田 靖範（国際農林 業協働協会）</p> <p>サイチョウが育む森の保全と利用： タンザニア、東ウサンバラ山の事例</p>	<p>Fongzossie Fedoung Evariste, DINGOM Aurelie Taylor, NGUENANG Guy Merlin University of Douala</p> <p>Regulating the Commercial Use of Cameroon's Non Timber Forest Products in a Challenging Context of Access and Benefit Sharing: State of the Art and Prospects for Conservation and Development</p>
13	<p>田端 友佳 京都大学</p> <p>ザンビアの農業投入財支援プログラ ムにおける情報技術の導入と農業組 合における化学肥料の分配</p>	<p>飛内 悠子 盛岡大学</p> <p>クク人はなぜウガンダ人になったの か？：南スーダンからウガンダ南部 への移住とブゲレレの今</p>	<p>山田 祐 京都大学</p> <p>マダガスカル・アンカラファンツイ カ国立公園における自然保護と地域 住民による生業活動</p>	<p>Kye Ri Kim 韓国外国語大学</p> <p>An Understanding of Kianda, the Symbol of Luanda City</p>
14	<p>久保田 ちひろ 京都大学</p> <p>小規模農家による契約農業への参加 と離脱：ケニア・ナクル県における サヤインゲン栽培の事例から</p>	<p>阪本 拓人 東京大学</p> <p>サヘルにおける農耕民と牧畜民の対 立と共生：現地調査とシミュレー ションによる検討</p>	<p>寺田 佐恵子（日本学術振興会）、松 浦 直毅（静岡県立大学）</p> <p>ガボン共和国ムカラバ・ドウドウ国 立公園周辺地域における地域住民の 野生動物保全に対する認識：アフリ カゾウによる被害と国立公園からの 利益の影響</p>	
15	<p>佐藤 秀 京都大学</p> <p>タンザニア北部における農業経営目 的の多様性：キリマンジャロ州の2 農村を事例として</p>	<p>島津 侑希 名古屋大学</p> <p>エチオピアの職業技術教育・訓練 (TVET)機関における実務訓練プロ グラム：工場で学生はなにを学ぶか？</p>	<p>内藤 直樹 徳島大学</p> <p>サハラ以南アフリカにおける世界農 業遺産サイトの保全と活用：オールド ニョキエ/オルケリ マサイ牧畜遺産 サイトの事例から</p>	
16	<p>宮脇 幸生 大阪府立大学</p> <p>新たなコモンズと資源管理システム の生成：エチオピア西南部農牧民 Tsamakoにおける灌漑システムの事 例から</p>	<p>小川 未空 広島大学</p> <p>ケニアにおける中等教育の急速な拡 大と卒業生の進路：通学制の学力上 位者に焦点を当てて</p>	<p>松本 尚之（横浜国立大学）、川口 幸大（東北大学）</p> <p>東アジアからアフリカへ：ラゴスの 中国系移民コミュニティと現地社会 の関係</p>	
17	<p>若月 利之 島根大学</p> <p>Nigeria ケッピ州は過去10年で10万 ha規模の新規水田稲作を内発的に拡 大したか？</p>	<p>谷口 京子 広島大学</p> <p>マラウイの小学校における留年・転 校・退学要因：学校要素と個人要素 の分析から</p>	<p>菅野 淑 愛知淑徳大学</p> <p>セネガル人女性の日本移住に関する 予備的考察：愛知県名古屋市の事例 に</p>	
18	<p>古澤 礼太 中部大学</p> <p>ガーナ共和国首都アクラ沿岸漁業に おける魚の仲買：ガ民族の小規模漁 業の事例</p>	<p>児玉 夏菜、園枝 美佳 慶應義塾大学</p> <p>絵本を読む子どもの反応と絵本寄付 の可能性：絵本でつなぐアフリカと 日本</p>		

ポスター発表

<p style="text-align: center;">P1 李 勝勳 国際基督教大学</p> <p style="text-align: center;">Voicing and Phonation in African Languages Using Electroglottograph</p>	<p style="text-align: center;">P2 大石 高典 東京外国語大学</p> <p style="text-align: center;">Diversity of Forest Landscapes Recognized by Forest Dwellers of Eastern Cameroon: Intra- and Inter-Group Variation among the Baka and the Bakwele of Southeastern Cameroon</p>	<p style="text-align: center;">P3 川畑 一朗 京都大学</p> <p style="text-align: center;">ザンビア都市部における家内工業のワイヤーおもちゃ製造と鹿材利用</p>	<p style="text-align: center;">P4 田中 文葉 京都大学</p> <p style="text-align: center;">バカ・ビッグミーの歌・踊り遊びにみられる幼児の愛着行動</p>	<p style="text-align: center;">P5 島田 将喜 (帝京科学大学)、高橋 康介 (中京大学)</p> <p style="text-align: center;">タンザニアにおける「フィールド実験」の展望</p>
<p style="text-align: center;">P6 彭 宇潔 国立民族学博物館</p> <p style="text-align: center;">カメルーン南東部における地域住民の居住形態：狩猟採集民バカと焼畑農耕民コナンペンベ、ンジメを事例に</p>	<p style="text-align: center;">P7 大塚 亮真、山越 言 京都大学</p> <p style="text-align: center;">野生動物との近接は魅力的か？：マウンテンゴリラのエコツアーリズムに関連するYouTube動画における人間とゴリラとの近接に着目して</p>	<p style="text-align: center;">P8 南 倉輔 京都大学</p> <p style="text-align: center;">カメルーン南東部におけるカメラトラップを用いた食肉目の占有推定：被食動物・人間活動との関係に着目して</p>	<p style="text-align: center;">P9 関野 文子 京都大学</p> <p style="text-align: center;">バカ社会における参加型プロジェクトとローカルシステムの相互作用</p>	<p style="text-align: center;">P10 Devena Haggis (University of Tsukuba), Peter Kariuki Kamau (Kenyatta University)</p> <p style="text-align: center;">Stadia, Sport Infrastructure and Heritage in Nairobi, Kenya</p>
<p style="text-align: center;">P11 望月 優、園枝 美佳 慶應義塾大学</p> <p style="text-align: center;">農村部における学校アクセスと見守りの輪</p>	<p style="text-align: center;">P12 松本 卓也 総合地球環境学研究所</p> <p style="text-align: center;">野生チンパンジーの採食行動の発達過程：チンパンジーの子も「おやつ」を食べる？</p>	<p style="text-align: center;">P13 小西 達貴 (北海道大学) 他</p> <p style="text-align: center;">カメルーンにおける狩猟採集民のトイレと子どもの健康状態</p>	<p style="text-align: center;">P14 近藤 加奈子 京都大学</p> <p style="text-align: center;">モザンビーク北部ニアサ州における住民の水の採取と利用：水運の選択に影響を及ぼす要因</p>	<p style="text-align: center;">P15 日達 真美 (長崎大学) 他</p> <p style="text-align: center;">養育者の適切な子どもの給餌行動に関する態度の決定要因：ケニア共和国クワレ郡における横断研究</p>
<p style="text-align: center;">P16 原田 英典 (京都大学) 他</p> <p style="text-align: center;">地域住民による糞便汚染・曝露の可視化を活用した水・衛生ワークショップ：ザンビア・ルサカでの初期的試み</p>	<p style="text-align: center;">P17 田 曉潔 筑波大学</p> <p style="text-align: center;">痛に刻む牧畜民マサイの感情：ライオン狩りにまつわるナラティブに着目して</p>	<p style="text-align: center;">P18 関谷 雄一 東京大学</p> <p style="text-align: center;">「熱帯下の警告」と現代アフリカ：開発の問題を中心に</p>		

Programme

FORUM

Forum 1
Current Trends in African Linguistics 1:
New Methods and Approaches

NAKAGAWA Hiroshi
Tokyo University of Foreign Studies
Introduction

NAKAGAWA Hiroshi (Tokyo University of Foreign Studies), Alena Witzlack-Makarevic (Hebrew University of Jerusalem), KIMURA Kimihiko (Tokyo University of Foreign Studies)
The Phonological Typology of the Kalahari Basin Area

ONO Hitomi
Reitaku University
How Does a Cooperative Picture Task Reveal Less Known Grammatical Traits?

KAWACHI Kazuhiro
National Defense Academy of Japan
Typological Morpho-Syntactic, Semantic, and Pragmatic Studies Based on Video Experiments

Forum 3
Current Trends in African Linguistics 3:
Bantu Microvariation

YONEDA Nobuko
Osaka University
What is Bantu Microvariation?

TAKEMURA Keiko (Osaka University), MIYAZAKI Kumiko (State University of Zanzibar)
Microvariation of Swahili Varieties in Zanzibar

ABE Yuko
Tokyo Women's Christian University
Microvariation of Tense-Aspect Markers in Bantu

KOMORI Junko
Osaka University
A Typology of Bantu Passive Constructions in Perspective of Niger-Congo Family

Forum 5
Co-creation of Innovative Forest Resources
Management Combining
Ecological Methods and Indigenous
Knowledge II

YASUOKA Hirokazu
Kyoto University
Introduction

TODA Mikako
Sophia University
Bushmeat Consumption of Cameroon Rainforest Inhabitants and Their Needs: From Family Income and Expenditure Survey

HONGO Shun
Kyoto University
Anthropological Effects on Population Density of Forest Duikers: Toward the Establishment of an Effective Management System

YASUOKA Hirokazu (Kyoto University) et al.
Differences in Species Compositions of Camera-trap and Hunting Harvests: Potential and Issues of the R/B Ratio as an Indicator of Sustainable Hunting

William Kamgang (Kyoto University) et al.
Estimation of Dung Decay Speed for Forest Duikers (*Philantomba monticola* & *Cephalophus* spp.) in Southeast Cameroon: Seasonal Differences and Implication for Monitoring

HIRAI Masaaki, YASUOKA Hirokazu
Kyoto University
High Availability of NTFPs and Limited Accessibility of Local People in Southeast Cameroon

Forum 6
Co-Creating Sanitation in Sub-Saharan Africa

USHIJIMA Ken (Hokkaido University), SHIMIZU Takao (Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto Seika University)
Introduction

SHIMIZU Takao (Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto Seika University), NAKAO Seiji (Research Institute for Humanity and Nature)
Co-creating Sanitation Value Chain Sludge on the Crop Field: From the Co-working Case Study on Ronguin, Centre-nord Region, Burkina Faso

HAYASHI Koji (Research Institute for Humanity and Nature) et al.
Attempt to Co-creating Sanitation of Settled Hunter-gatherers: From the Case of Eastern Cameroon

KATAOKA Yoshimi (Hokkaido University), Sikopo Nyambe (Hokkaido University), YAMAUCHI Taro (Hokkaido University, Research Institute for Humanity and Nature)
Utilization Video to Community-based Participatory Research: A Case Study of Children's Sanitation Club in Zambia

KUSAGO Takayoshi
(Kansai University, Research Institute for Humanity and Nature)
Key Issue in Collaborative Action Research to Improve Sustainable Livelihood: Comments on Co-creating Sanitation in Sub-Saharan Africa

FORUM 7
Uses of Research by Researchers of African Descent in Japanese Universities

Rebecca Babirye
Tokyo Christian University
Coming to Tokyo, Losing Faith: Chronicles of African Pentecostal Migrants in Japan

Kason Stephanie
Sophia University
Sustainable Forest Management for Local Livelihood Support, Biodiversity Conservation and Carbon Sequestration: Institutional Arrangements and Contextual Socioeconomic Conditions Associated with Sustainable Forest Social Ecological Systems: A Case Study of Kenya's Participatory Forest Management Model

Emmanuel Vincent Nelson Kallon
Tokyo University of Foreign Studies
Patterns of Strategic Interactive Politics in Transitioning States: The Case of Post-conflict Sierra Leone and the Challenge of the Management of Development Aid

Amelia Maisha Silas Tunzine
Tokyo University of Foreign Studies
Land Tilling in Mozambique: Tenure Security for Communities or Investors?

Ian Karusigarira
Tokyo University of Foreign Studies
Victims of Violence or Heroism? A Historical Analysis of Revolutionary Regime, Culture and Survival Apocalypse in Uganda

Forum 2
Current Trends in African Linguistics 2:
Multiple Aspects of African Sign Languages

MINOURA Nobukatsu
Tokyo University of Foreign Studies
On Morphological Aspects of Malagasy Sign Language (TTM): Especially Focusing on Intransitive-transitive Pairs of Verbs

MORI Soya
Institute of Developing Economies - JETRO
The Newer Type of Verb Lexicalization in Uganda Sign Language

MIYAMOTO Ritsuko
Akita University
A Socio-linguistic Report of Tanzanian Sign Language

KAMEI Nobutaka
Aichi Prefectural University
Estimation of the Population of the Signers of Langue des Signes d'Afrique Francophone (LSAF): With the Surveys on the Schools and Associations of the Deaf

Forum 4
Possibilities of Social and Solidarity Economy in Africa

SAITO Fumihiko
Ryukoku University
Possibilities of Social Business in South Africa

TSUJIMURA Hideyuki
Kyoto University
Sustainability of Fair Trade as Social and Solidarity Economy: A Case of Fair Trade Project for Lukani Villagers

ORAL PRESENTATION 1

	Venue A	Venue B	Venue C	Venue D
1	<p>SATO Hikaru Meiji University</p> <p>Democratization and Social Security System Reform in Africa The Case of South Africa and Namibia</p>	<p>ISHIKAWA Hiroki Tokyo University of Foreign Studies</p> <p>A Comparative Study of the Two Kingdoms of Northern Ethiopia: Based on the Analysis of Their Economic Activities</p>	<p>NISHIURA Akio Soka University</p> <p>Economic Inequality and Black Economic Empowerment (BEE) Policy in South Africa</p>	<p>John Ngoy KALENGA Hosei University</p> <p>Estimating the Injury Rates and Causes of Fatalities in the Japanese Mining Industry, 1924-2014</p>
2	<p>INOUE Naomi Tokyo University of Foreign Studies</p> <p>Promoting Responsible Business Conduct in Africa: The Role of Development Co-operation</p>	<p>SUZUKI Hideaki National Museum of Ethnology</p> <p>Ambiguous "Bombay African": Observations with Diary of Jacob Wainwright</p>	<p>NAGATSUJI Takashi Waseda University</p> <p>Electoral Blind Spot in Africa</p>	<p>Seera Georgina Kyoto University</p> <p>Food Portion Photographs: Validity for Portion Size Estimation in Food Intake Surveys in Mukono, Uganda</p>
3	<p>Mohamed Abdin Gakushuin University</p> <p>The Development of Water Resources and the Rising Challenges on the Security of the Nile Basin: The Case of the Great Ethiopian Renaissance Dam</p>	<p>NAKAO Seiji Research Institute for Humanity and Nature</p> <p>Seasonal Depreciation of Cowry: Monetary Situation after Introduction of Colonial Money in the Inland of French West Africa</p>	<p>SHIMADA Shuhei Nagoya University of Foreign Studies</p> <p>Importance of Regional Issues in Nigerian Politics Seen in the 2019 General Election</p>	<p>Eunji Choi Kyoto University</p> <p>Terminal Management in Addis Ababa: Analyzing the Role of Tera Askebaris in Megenagna Terminal</p>
4	<p>SUZUKI Hiroyuki Kokushikan University</p> <p>Studies of Mande Literature 3: Mande "Human Comedy" by Massa Makan Diabaté</p>	<p>KAMBAYASHI Tomohiro Hitotsubashi University</p> <p>The Infiltration of the Invented "Tradition": The Publication of isi Zulu Book and Historical Consciousness</p>	<p>AKUTSU Shozo Shinshu University</p> <p>The President Seat: A Case Study of the Governance of President and Regime Change in Ghana</p>	<p>KATO-YAMAUCHI Tamahi Kyoto University</p> <p>Growing Market on Nutrition in Tanzania: Mixed Porridge Flour</p>
5	<p>MISHIMA Teiko National Museum of Ethnology</p> <p>Cultural Movement and Regional Radio in Soninke: Behind the Video Coverage of Culture Week</p>	<p>TERAMOTO Risa Kyoto University</p> <p>How Male Mate Preference Affect Female Mating Strategy in Sexually Indulgent Population: The Case Study of Sequential Monogamy among Kgatla in Botswana</p>	<p>AMO Kae Kyoto Seika University</p> <p>Islam and Higher Education Spaces in Senegal: Knowledge, Power and Social Change</p>	<p>YONEKAWA Masako Tsukuba Gakuin University</p> <p>US Responsibility in the DRC: Power Dynamics, "Genocide", and Forced Repatriation of Rwandan Refugees</p>
6	<p>YANOHARA Yushi Kyoto University</p> <p>"(Go and Ask) Why": Social Solution through the Viewpoint of Cameroonian Hip-Hop Musicians</p>	<p>MATSUI Azusa Kyoto University</p> <p>Gossip in a Small Island: Fragmented Social Circles of Women in Mozambique Island</p>	<p>MORI Keiko National Museum of Ethnology</p> <p>Women's Religious Authority in a Sufi Order, Tijāniyya Ibrāhīmiyya of Senegal</p>	<p>Christian Otchia Nagoya University</p> <p>Did Social Unrest Thwart the Battle against Ebola in the Democratic Republic of Congo?</p>
7	<p>MATSUHIRA Yuji University of Hyogo</p> <p>Structural Changes of the G'ui Lamellaphone Focusing on the Shape of Sound Board and Number of Keys</p>	<p>HAYASHI Manami Osaka Prefecture University</p> <p>The Role of Maasai Women Leaders in the Expansion of Anti-FGM/C Movement in Narok, Kenya</p>	<p>IKEBE Tomoki Kyoto University</p> <p>Authorization the Voice in the Space of the Pilgrimage Practice: The Case of the Festival <i>Magal Touba</i> of Mourids Sufi Order in Senegal</p>	<p>Isaac Kwaku Adu (Sophia University) et al.</p> <p>Achieving Sustainable Development: The Case of Environmental Awareness among Farmers and Senior High School Students in Ghana</p>
8	<p>OYAMA Shuichi Kyoto University</p> <p>Socio-economic Impacts of Border Closure in Nigeria to the Logistics and the People's Life in Niger</p>	<p>MAKI Momoka Sophia University</p> <p>Comparative Study on "Female Soldiers" in Africa</p>	<p>Habatalla Omar Nagoya University</p> <p>Research on Women in the Islamic World</p>	<p>Doke Victor Hiroshima City University</p> <p>Prevention Measures and Coordination Efforts against Violence Recurrence: The Case of Bawku Conflict in Northern Ghana</p>
9	<p>AOIKE Utako Kyoto University</p> <p>Household Waste Collection in Niamey Metropolitan Area, Niger: Pushcart Collection and Social Network Surrounding the Waste Collectors</p>	<p>SAKAMOTO Kumiko, OHMORI Reiko, TSUDA Katsunori Utsunomiya University</p> <p>Does Eating Wild Edible Plants Improve Health Condition?: From Questionnaire Interviews in Chinangali II, Dodoma, Central Tanzania</p>	<p>MURATSU Ran Kyoto University</p> <p>Transformation of Spiritual Entities under the Influence of Pentecostal / Charismatic Churches: A Case Study of deliverances in Benin</p>	<p>Stanislaus Acquah Utsunomiya University</p> <p>Influence of TICAD on Trade: The Case of Ghana</p>
10	<p>SAKANASHI Kenta RYUUKOKU University</p> <p>Local People's Responses to Paved Road Construction in Tropical Africa: A Case Study of Southern Cameroon</p>	<p>SUZUKI Noriko Kyoto University</p> <p>Healthcare Activities by Health Extension Workers in Local City, Southwestern Ethiopia: With Special Reference to Public Health Activities</p>	<p>HASHIMOTO Chie, TAKEMOTO Hiroyuki, FURUICHI Takeshi Kyoto University</p> <p>Inter-group Relationships of Female chimpanzees in Kalinzu Forest, Uganda</p>	<p>Pedro Miguel Amakasu Raposo de Medeiros Carvalho Kansai University</p> <p>Africa (or Asia) Renaissance?</p>

PRESENTATION 2

	Venue A	Venue B	Venue C	Venue D
11	<p>KUMASHIRO Chihiro Kyoto University</p> <p>“Distribute” Microcredit: A Case Study from Relending in Rural Burkina Faso</p>	<p>ARI Haruka Hokkaido University of Education</p> <p>Male Involvement in Reproductive Health in Rural Ethiopia</p>	<p>FURUICHI Takeshi Kyoto University</p> <p>Factors Responsible for Evolution of Male-philopatric Group: From the Comparisons of Homininae and Atelinae</p>	<p>AMANFO Smart Edward Sophia University</p> <p>Determinants and Impacts of Chinese Foreign Direct Investment (FDI) in Africa: Analyzing the Mechanism and Evidence of FDI-Domestic-Unemployment Reduction Relationship</p>
12	<p>IDEUE Kazuyo Ritsumeikan University</p> <p>Financing of Jua Kali in Nairobi, Kenya: Focusing on the Production Patterns and Changes in Informal Finance</p>	<p>KUSAKA Satoshi Hiroshima University</p> <p>Basic Research of Mathematics Curriculum in African Countries for Achieving SDGs Goal 4: Focus on Fraction’s Learning Content and Sequence</p>	<p>ITANI Juichi (Kyoto University), KOBAYASHI Junpei (Kyoto University), KANDA Yasunori (JAICAF)</p> <p>Conservation and Utilization of Forests Grown by Hornbills: In the Case Study of the East Usambara Mountains in Tanzania</p>	<p>Fongzossie Fedoung Evariste, DINGOM Aurelie Taylor, NGUENANG Guy Merlin University of Douala</p> <p>Regulating the Commercial Use of Cameroon’s Non Timber Forest Products in a Challenging Context of Access and Benefit Sharing: State of the Art and Prospects for Conservation and Development</p>
13	<p>TABATA Tomoka Kyoto University</p> <p>Introduction of Information Technology and Sharing of Fertilizer among the Cooperative Members in Farmer Input Support Programme in Zambia</p>	<p>TOBINAI Yuuko Morioka University</p> <p>Why were Kuku Come to Uganda?: The Migration from South Sudan to Southern Uganda and the Present-day Situation in Bugerere</p>	<p>YAMADA Tasuku Kyoto university</p> <p>Conservation Activities and Local Livelihood in the Ankarafantsika National Park, Madagascar</p>	<p>Kye Ri Kim Hankuk University of Foreign Studies</p> <p>An Understanding of Kianda, the Symbol of Luanda City</p>
14	<p>KUBOTA Chihiro Kyoto University</p> <p>Participation and Withdrawal of Contract Farming by Small-scale Farmers: A Case of French Beans Cultivation in Nakuru County, Kenya</p>	<p>SAKAMOTO Takuto Tokyo University</p> <p>Conflict and Coexistence between Herders and Farmers in the Sahel: Examination with Field Data and Computer Simulation</p>	<p>TERADA Saeko (Japan Society for the Promotion of Science), MATSUURA Naoki (Shizuoka University)</p> <p>Local People’s Perception on Wildlife Conservation in Areas Surrounding Moukalaba-Doudou National Park in Gabon: Effects of Damage by Elephant and Benefit from the National Park</p>	
15	<p>SATO Shu Kyoto University</p> <p>Diversity of Farmers’ Management Objectives in Northern Tanzania: Case Study on Two Villages in Kilimanjaro Region</p>	<p>SHIMAZU Yuki Nagoya University</p> <p>Cooperative Training Program at TVET Institute in Ethiopia: What do the Students Learn at the Factory?</p>	<p>NAITO Naoki Tokushima University</p> <p>Conservation and Utilization of GIAHS Sites in Sub-Saharan Africa: The Case of Oldonyokie/Olseri Maasai Pastoralist Heritage</p>	
16	<p>MIYAWAKI Yukio Osaka Prefecture University</p> <p>New Commons and Creation of Resource Governance Systems: Irrigation Systems mon the Tsamako in Southwestern Ethiopia</p>	<p>OGAWA Miku Hiroshima University</p> <p>How do Secondary School Graduates Access Higher Education?: The Case of Top Student from an Day School in Rural Kenya</p>	<p>MATSUMOTO Hisashi (Yokohama National University), KAWAGUCHI Yukihiko (Tohoku University)</p> <p>From East Asia to Africa: Chinese Community and Its Relationship with Nigerian Society</p>	
17	<p>WAKATSUKI Toshiyuki Shimane University</p> <p>Did the Kebbi State, Nigeria, Has Been Expanding more than 100,000 ha of <i>sawah (SUIDEN)</i> Based Rice Farming Endogenously during 2011-19?</p>	<p>TANIGUCHI Kyoko Hiroshima University</p> <p>Factors Influencing Grade Repetition, Transfer, Dropout in Primary School in Malawi: School and Student Level Factors</p>	<p>KANNO Shuku Aichi Sykutoku University</p> <p>A Preliminary Consideration of Senegalese Migrant Women in Japan: In the Case of Nagoya-City, Aichi Prefecture</p>	
18	<p>FURUSAWA Reita Chubu University</p> <p>Fish Brokerage of the Fishery in Accra, Ghana: The Case of Artisanal Fishery of Ga People</p>	<p>KODAMA Kana, KUNIEDA Mika Keio University</p> <p>Assessing the Potential of Donating Children’s Book: The Story Book Connection between Africa and Japan</p>		

POSTER PRESENTATION

<p>P1 LEE Seunghun International Christian University</p> <p>Voicing and Phonation in African Languages Using Electroglottograph</p>	<p>P2 OISHI Takanori Tokyo University of Foreign Studies</p> <p>Diversity of Forest Landscapes Recognized by Forest Dwellers of Eastern Cameroon: Intra- and Inter-Group Variation among the Baka and the Bakwele of Southeastern Cameroon</p>	<p>P3 KAWABATA Ichiro Kyoto University</p> <p>Home Industry and Utilization of Solid Waste for Wire Toys Manufacturing in Urban Zambia</p>	<p>P4 TANAKA Ayana Kyoto University</p> <p>Attachment Behavior of Young Children in Playful Song and Dance among Baka Hunter-Gatherer</p>	<p>P5 SHIMADA Masaki (Teikyo University of Science), TAKAHASHI Koko (Chukyo University)</p> <p>The Perspective of "Field Experiment" in Tanzania</p>
<p>P6 Peng Yujie National Museum of Ethnology</p> <p>Residence Styles among Local People in Southeastern Cameroon: Cases from Baka, Kounanbembe, and Nzime</p>	<p>P7 OTUSKA Ryoma, YAMAKOSHI Gen Kyoto University</p> <p>Are Close Interactions with Animals Attractive?: Focusing on Close Interactions between Humans and Gorillas in YouTube Videos Related to Mountain Gorilla Tourism</p>	<p>P8 MINAMI Sosuke Kyoto University</p> <p>Occupancy Estimation of Carnivore by Camera Trapping in Southeastern Cameroon: Focus on the Prey Animal and Human Activity</p>	<p>P9 SEKINO Ayako Kyoto University</p> <p>Interaction of Project and Local System in Baka Society</p>	<p>P10 Devena Haggis (University of Tsukuba), Peter Kariuki Kamau (Kenyatta University)</p> <p>Stadia, Sport Infrastructure and Heritage in Nairobi, Kenya</p>
<p>P11 MOCHIDUKI Yu, KUNIEDA Mika Keio University</p> <p>Rural Access to Schools and Community Surveillance</p>	<p>P12 MATSUMOTO Takuya Research Institute for Humanity and Nature</p> <p>Developmental Research on Feeding Behavior of Wild Chimpanzees: Do young Chimpanzees have a "Snack"?</p>	<p>P13 KONISHI Tatsuki (Hokkaido University) et al.</p> <p>Sanitation Facilities of Hunter-Gatherers and the Health Status of Their Children in Cameroon</p>	<p>P14 KONDO Kanako Kyoto University</p> <p>Water Access and Use among Rural People in Niassa, Mozambique: Factors Affecting Water Resource Selection</p>	<p>P15 HITACHI Mami (Nagasaki University) et al.</p> <p>Determinants of Attitudes toward Optimal Child Feeding among Caregivers: A Cross-Sectional Study in Kenya, Kwale County</p>
<p>P16 HARADA Hidenori (Kyoto University) et al.</p> <p>A Wash Workshop Employing the Self-visualization of Fecal contamination and Exposure: An Early Trial in Lisaka, Zambia</p>	<p>P17 TIEN Xiaojie Tsukuba University</p> <p>The Emotion of Pastoralist Maasai in the Scars: From the Narratives of Lion Hunting</p>	<p>P18 SEKIYA Yuichi Tokyo University</p> <p><i>Alerte sous les Tropiques et Afrique Contemporaine: Autour des problèmes du développement</i></p>		

公開シンポジウム

公開シンポジウム

アフリカ研究と社会との繋がりを考える：開発をめぐる対話

Utility of African Studies to the Society: A Dialogue about Development

趣旨

研究と社会の繋がりは、古くて新しいテーマです。

研究のための研究であってはならないとか、研究者が象牙の塔に閉じこもることがあってはならないといった議論は、はるか昔からなされてきました。しかし最近、この点が様々な機会に強調され、研究が社会に役立つことが強く求められるようになったと私たちは感じています。「持続可能な開発目標」(SDGs)への貢献を大学が競い、研究がどの開発目標に貢献するのかを研究者に申告させる、といった動きはその一つでしょう。

SDGsの重要性や、現代社会が解決すべき深刻な問題に満ちていることに異論はありません。しかし、前述の動きに違和感を感じるのは、そこで「研究が社会に役立つ」というとき、「役立ち方」の回路が狭く捉えられる傾向があるのではないかと、ということです。ややもすると、「役立つ」ということが、市場価値や政策への短期的な貢献と同一視されているのではないかと、という懸念です。

こうした傾向が生まれる要因は複雑ですが、重要な背景として、近年の急速なグローバル化とテクノロジーの進展があることは間違いないでしょう。この動きによって、これまで比較的市場から離れていた制度が次々に商品化、市場化され、ランキング付けされるようになりました。教育や研究がその影響を受けていることは明白です。一方で、グローバル化やテクノロジーの進展は、逆の動きも顕在化させています。自国ファーストを称揚するナショナリズムが力を得て、ゼノフォビアが世界各地で顕在化するなど、テクノロジーだけでは解決できない問題に私たちは直面しています。

もとよりアフリカもこうした動きから無縁ではありません。むしろこうした動きから直接的な影響を受けていると言えるでしょう。アフリカ開発に関する議論は、近年顕著にITを使ったビジネスへの傾斜を強めています。その一方で、脆弱なガバナンス、ゼノフォビア、和解や癒しといったテクノロジーだけでは決して解決できない問題が多々存在するのもアフリカなのです。

かかる状況の中でアフリカ研究に従事する者は、どのように社会との繋がりを捉え、どのような実践を行うべきなのでしょう。そうした研究や実践は、いかなる形で現実社会にインパクトを与えることができるのでしょうか。本シンポジウムでは、アフリカ研究者の取組みを通じてこうした点を考えたいと思います。

シンポジウムでは、日本、そしてアフリカの社会と様々な形で繋がりつつ、アフリカ研究やそれをベースにした実践を行っている研究者に、ご自身の取組みについてお話をいただきます。議論を噛み合いやすくさせるために、広義の開発に関わる研究をなさっている方々に問題提起をしていただきます。開発にトピックを絞るのは、そこで研究と社会の繋がりが（あるいは緊張関係）が先鋭的な形で表れやすいからです。

スピーカーの皆さんには、①どのような研究を行っているか、②それがどのような形で社会に役立つと考えるか、③これからあるべき開発（と研究の関係）とはどのようなものか、に触れる形でご自身の取組みを紹介し、その可能性と課題についてお話しいただきます。その後、外交、援助、ビジネスなどでアフリカに関わる実務家の皆さんやアフリカを専門としない研究者の方々に、こうしたアフリカ研究者の実践がどのように見えるのか、コメントをいただきます。最後に、報告者、コメンテーター、そしてフロアを交えて、研究と社会の繋がりに関して意見交換を行います。

私たちは、研究を社会に還元するための多様な回路があると考えます。研究と社会の多様な繋がり方を認識することが、アフリカ研究をより豊かにし、研究者と実務家との間に建設的な対話を可能にすると信じています。このシンポジウムがそうした対話へと繋がるよう、主催者として努力したいと思います。

日本アフリカ学会第 57 回学術大会実行委員会

日時

2020 年 5 月 24 日（日）13:00～15:30

場所

Zoom を用いオンラインにて開催。同時に Youtube によるストリーミング配信を実施。

定員・申し込み

300 名・参加希望者は[シンポジウム参加申込フォーム](#)から登録してください。

プログラム

13:00-13:10	趣旨説明・司会 武内進一（東京外国語大学 教授）
13:10-14:10	<p>報告①増田研（長崎大学熱帯医学・グローバルヘルス研究科 准教授）</p> <p>報告②丸山淳子（津田塾大学学芸学部多文化・国際協力量科 准教授）</p> <p>報告③竹ノ下祐二（中部学院大学看護リハビリテーション学部理学療法学科 教授）</p> <p>報告④黒崎龍悟（高崎経済大学経済学部国際学科 准教授）</p> <p>報告⑤杉村和彦（福井県立大学学術教養センター 教授）</p>
14:10-14:40	<p>コメント①加藤隆一（国際協力機構アフリカ部長）</p> <p>コメント②合田真（日本植物燃料）</p> <p>コメント③岩崎稔（東京外国語大学 教授）</p>
14:40-15:30	ディスカッション
閉会の辞	武内進一

研究から実務への距離、あるいは「役に立つ」の加減
アフリカにとってのグローバルヘルスとグローバルエイジング研究、
そして、その社会的意義
増田 研（長崎大学）

Distance between Study and Practice

Justification of Studies of Global Health and Global Ageing in Africa

Ken MASUDA (Nagasaki University)

【アフリカにおけるグローバルヘルス】

地球規模での健康への取り組み「グローバルヘルス」は、時代が MDGs から SDGs へ移ってもなお、感染症（結核、マラリア、HIV/AIDS など）と母子保健を中心的な課題として動いている。それは「調査によるベースラインの把握」と「介入」による実践そのものが活動の中心となる実務的分野である。「面白い」だけでは研究にならない厳しさがある。

そこでは研究は、あくまでも実践・実務のために行われる。その意味においてグローバルヘルスにおける「研究の必要性」つまり社会的意義（justification）の主張は容易である。

「悪いやつ（たとえば病原菌）を叩く」「足りないもの（たとえばワクチン）を補う」「（知識を持たない）人々を啓発する」。原虫感染症であるマラリアを例にとれば、1992年のマラリアサミットから1998年の Roll Back Malaria Initiative へと国際的な取り組みのトレンドがあり、(1)早期診断と迅速な治療、(2)突発性流行の検出と対策、(3)薬剤含浸蚊帳を用いた媒介蚊対策、(4)妊婦のマラリアの予防といった課題設定が国際社会によって定められた。そこに求められる専門分野は医学・薬学・公衆衛生学であり、議論の多くは数字ベースである。社会科学の直接的貢献は上記の行動指針でははっきりとは求められていない。

この点で、1990年代の私のエチオピアでの研究は大きく異なる。エチオピアで住み込み調査をしていた私は、社会が抱える課題を歴史的、社会的観点から掘り下げることを目指していたが、直接的にフィールドに益するためにやっていたわけではない。社会人類学者たる私にとって研究から実務への距離は遠く、国際保健の論文の末尾によく見られる「Recommendation」を私は書いたことがない。日本アフリカ学会は、人文社会領域が卓越する学会であり、本学会における医学・公衆衛生と社会科学の間の距離もかなり遠い。

【アフリカにおけるグローバルヘルス】

発表者（増田）は2012年からアフリカにおけるアフリカにおける未来の人口高齢化を見据えた、高齢者ケアと社会福祉の研究を行っている。この研究課題もまた「研究から実務への距離」が遠い。そのうえアフリカ大陸が高齢化するのは21世紀末の話であり、当のアフリカの人々にとっても時間的にイメージしにくい「遠い未来」の話でさえある。

だが、この課題は以下の諸点において重要である。(1)グローバルエイジングの議論の脈絡にアフリカを位置づけられる。(2)人口が急増するアフリカにおける人口学的な理解との接点にある。(3)ポスト感染症対策の時代への取り組みの入り口となる。(4)保健医療（感染症、非感染症、老年医学）と社会保障・福祉、貧困、障がいといった関連する議論を束ねられる。(5)人類学的には「医療人類学」や「保健の人類学」あるいは「ケアの人類学」などの複数の視点を取り入れられる。これらも進めていくうちに気づくようになった領域の広い「社会的意義」であり、本来であれば基盤Aなどという小さな科研で済ませられる課題ではない。

日本人がアフリカで進める高齢者ケアの研究プロジェクトは、いまもって、実務との間に大きな距離がある。社会福祉や社会保障の制度設計は、どの国でも未経験領域であり（日本も同じく）、「やって失敗、また失敗」の試行錯誤になる可能性が高い（日本も同じだった）。プロジェクトを進めながらも、どのくらいの「意義」を主張できるのかは、いまもって手探り状態である。

役に立つ観光・役に立つ研究
アフリカの住民参加型観光から学ぶこと

丸山淳子（津田塾大学）

Useful Tourism, Useful Research
Learning from community-based tourism in Africa

Junko Maruyama (Tsuda University)

今日、地域住民を積極的に観光に参加させることによって、地域の社会経済状況を改善するという考え方が、グローバルに普及している。いまや観光には、観光客に「楽しみ」を提供する産業という枠を超え、これまで開発プロジェクトが担ってきたような、自然保護、文化保全、貧困削減、紛争解決、女性の地位向上などに役に立つ「万能薬」となることが期待されるものとなった。その期待は、ミレニアム開発目標の達成が芳しくなく、ビジネス・ポテンシャルを活かした開発手法が模索されるアフリカで、とくに高まっている。

私が研究を続けてきた南部アフリカのサンの暮らす地域でも、近年になって、こうした動きがみられるようになってきた。彼らの生活域で観光が活発化し、日常の一部として観光が組み込まれ始めてきたのである。同様の傾向は、とくにアフリカの「辺境」と呼ばれる地域の少数民族を研究する研究者らも見出しており、住民参加型の観光がアフリカの地域社会をいかに再編していくのかという問題意識を共有しながら、共同研究を進めることとなった。その成果の一部は、『アフリカ研究』92号などでも発表してきたが、本報告では、この共同研究を題材に、観光をトピックとして研究することによって、いかなるかたちで社会とつながり、「役に立つ」ことが可能かを考えることを目的としたい。

住民参加型の観光が、問題解決に「役に立つ」ことが期待されているが故、それに関する研究も、その観光をより良いものにして問題解決に「役に立つ」ものであることがしばしば期待される。たしかに即効的な貢献として、私たちは、対象の社会の実情を理解し、かつ外部者としての観光客の視線も共有できる「有能な仲介者」になれる可能性があり、実際に観光の企画にアドバイスを求められたり、観光客への解説者になったりといったことも経験してきた。とはいえ、その多くは現場で偶発的に生じたもので、いわゆる実学としての観光学を専門にしているわけではない私たちができることは限られている。

むしろ、私たちがなんらかのかたちで「役に立つ」ために意識的にやってきたことは、もっと迂遠なものであった。例えば、私たちの共同研究では、南アフリカの観光従事者のトレーニングセンターで事例報告を行ったり、日本で民族文化観光を成功させているアイヌ観光や地域おこしとしての観光などの現場も訪れ、異なる地域の経験をつなぐことを心がけてきた。観光は極めてグローバルな現象であり、アフリカの様々な地域、日本においても共通する課題や可能性が見いだすことができ、また観光の現場でも、他地域の取り組みを知ることへの関心が高いことが、その背景にある。また住民参加型観光には、地域社会はもとより、行政、企業、NGOなど幅広い分野の人々が関心を寄せており、それをトピックとすることで、多様なアクターとの対話の場を開くことが可能になるのである。

一方で、アフリカで実際に進められている住民参加型の観光から、私たちが学んだことは、多くの住民が日常生活の延長として、極めて軽やかに観光に関わり、そして観光から離脱していくことであった。その軽やかさは、観光が問題解決に「役に立つ」べきであるというグローバルな期待とは裏腹に、むしろ彼らが、観光を都合よく使いながら生活を構築し、観光の場をある種の「楽しみ」の場として位置付けていることを示している。このことは、もともと「楽しみ」のためであった観光でさえも、問題解決に「役に立つ」べきであるという考え方がグローバルに普及し、それに向かって多くのアクターや資金が動いているという状況そのものを問い直す必要性を感じさせる。それはまた、「役に立つ」研究が、ときに過剰に求められる現状を考えると時の手掛かりにもなるはずである。

基礎研究を通じて人々と野生生物の多様な関係性の創造を目指す

竹ノ下祐二（中部学院大学看護リハビリテーション学部）

(Re)Construction of the relational value of biological diversity through fundamental studies.

Yuji TAKENOSHITA (Chubu Gakuin University)

保護は世界の霊長類学における最重要の研究課題だが、そうなったのはさほど昔のことではない。もちろん、野生霊長類学者の多くは古くから保護にかかわってきた。しかし、それは研究としてではなく、自らの研究対象のために行なう「活動」であった。保護が「研究」となるのは1990年代以降、盛んになるのは2000年以降である。

「持続可能な開発」という用語は1990年代からさかんに用いられるようになったが、私がアフリカで大型類人猿の野外研究をはじめた90年代後半には、少なくとも現場レベルでは、開発は保護と対立するものという考えが主流であったように思う。しかし、この20年のあいだに、現場の景色はすっかり様変わりした。自然保護の目的は、かれらを守ることそれ自体ではなく、保護を通じていかに地域の発展を実現するかである。

いうまでもなく、そうした変化は、1992年の生物多様性保全条約(CBD)にはじまり、現在の国連持続可能な開発目標(SDGs)に至る一連の流れによってもたらされたものである。これら生物多様性をめぐるグローバル・ポリシーは、自然を市場原理の下に組み入れ、野生生物の存続が経済的利益を生み出す仕組みを作り出すことを目指してきた。

大型類人猿に関しては、かれらを観光資源として活用することが推奨されることになった。他方、かれらは生息地周辺の人々にとって、農作物を荒らすなど、害をなす存在でもある。市場化された自然保護の現場において、それは住民に経済的損失をもたらし、発展を阻害する要因として認知される。そこで、現在の大型類人猿保護の基本戦略は、まずエコツーリズムを振興し利潤を得、その利益を住民と類人猿の対立の緩和に振りむけることで「利益の公正な分配」を実現し、ひいては生息地の周辺地域の持続可能な開発をめざすこととなっている。

大型類人猿の社会や生態の基礎研究に対して求められる役割も、こうした時代の変化に対応して変わってきた。90年代後半から2000年代前半までは、研究者は自然破壊をもたらす開発に抗するため、「大型類人猿がいかにすばらしい存在か」と、かれらの内在的価値を人々に提示しなくてはならなかった。現在は、かれらの内在的価値はさておき、研究成果を活かした観光開発や、生態学的知見を応用した獣害対策など、大型類人猿の経済的活用への貢献が求められる。私自身も、そうした提案を行なうプロジェクトに参加してきた。

しかし、はじめてアフリカの地を踏んで四半世紀が過ぎ、このままでいいのかという思いを禁じえない。私自身がアフリカに行つてまで研究したかった大型類人猿は、観光商品と害獣というたったふたつの「意味」しか持たないものではないはずだ。

大型類人猿に限らず、野生生物の基礎研究者は、研究対象の「市場価値」を高めることだけを考えていて、未来は先細りする一方ではないだろうか。かといって、20年前のように、かれらに固有の「内在的価値」を教条主義的に訴えていけばよい時代でもない。そこで、本発表では、第三の価値のありかたとして「関係価値」の再構築(または創出)を提案したい。「関係価値」とは、何かとつながっていることそのものを価値とみなす考えである(阿部, 2011)。商品や害獣といった関係にとどまらない、人と野生生物との多様なつながり、多様なかかわりかたの可能性を示すことこそ、研究者ならではの貢献ではないだろうか。

自然エネルギーの研究を通じたタンザニアと日本の農村の往還

黒崎龍悟（高崎経済大学）

Approaching the rural areas of Tanzania and Japan through the study of natural energy

Ryugo KUROSAKI (Takasaki City University of Economics)

報告者はタンザニアの農村におけるフィールドワークを通して、地域の内発的発展のプロセス解明と支援を大きな研究テーマとしてきた。とりわけ着目しているのは、外部から導入される新しい技術がいかに対象地域に定着・普及するかで、参与観察や実践活動を通して検証してきた。農村開発や技術協力の現場では、対象地域の多面的な事情に配慮した適正技術の開発・導入が常識化しているが、適正技術といえども万能ではない。技術を受容する人びとが主体的にその技術に働きかけ工夫・改良するプロセスにこそ適正技術の普及・定着や地域の発展を理解するポイントがあることが明らかになってきた。このことに根差しながら、現在は共同研究の枠組みで自然エネルギーの地産地消を軸にした循環型資源利用のモデルづくりに取り組んでいる。

自然エネルギーの活用はグローバルに認められているアジェンダである。例えば、代表的な自然エネルギーである太陽光発電の普及はアフリカの多くの国でさまざまな団体による支援の下で進められており、安価な材料や手軽なキットも出回っている。こうした取り組みの評価は、太陽光パネルを設置した世帯数といった定量的な指標かつ短期間での達成度で示されがちである。しかし、タンザニアの農村を詳しく見れば、多くの世帯が太陽光発電のシステムを導入したものの、正しく運用しないためにシステムの一部のバッテリーを破壊し、またそのことによって収入を失っていること、そして新しいバッテリーを購入するためにさらなる収入を求めて耕地・牧草地を拡大して環境へ負荷をかけるという悪循環が生じていることが明らかになってきた。一方で、このような課題はありながらも新しい技術を受容しようと試行錯誤する人びとの姿や、時代状況に対応する能力の底上げも少しずつではあるが確認できる。マクロレベルの統計では見えてこない実態を多面的・継続的に捉えながら実践的にも関与していくことが、タンザニアの社会との大事なつながり方のひとつであると考えている。

また、タンザニアが抱える問題にアプローチするには、タンザニアの社会だけでなく日本の社会にもつながることが必要だと考えるようになってきている。日本の抱える課題とアフリカの抱える課題の同時代性は近年、指摘されるようになっており、エネルギー問題はその代表ともいえるものである。インフラが整備されていないアフリカの農村で地産地消型のエネルギーを実践することは、日本が分散型エネルギーを志向する流れと同調している。技術面（エネルギーをいかに生み出すか）と運用面（エネルギーをいかに使うか）といういわばハードとソフトの2つの局面から、相互に学ぶことは少なくないのではないかと。例えば、日本における分散型で小規模なエネルギー生産・消費のためのイノベーションがアフリカの日常を支えたり、また運用の経験では一歩先を行っているアフリカから日本が学んだりする可能性がある。さらに、戦前や戦後間もない日本では、採算の問題から電力会社が配電しなかった農村で水力を利用した自家発電が小さな灯をともし、人びとが限られた電気を大事に使っていた事例などがある。日本の過去のエネルギー利用のあり方から現在の日本やアフリカの社会が学ぶこともあるだろう。

ミクロレベルでのごく小規模な試みは、世界を席卷する市場や政治の動向ひとつで吹き飛ばすようなものではある。しかし、人びとの生活の地平に立ち、抱えている課題の同時代性を意識しながらローカルとローカル（やその歴史）を結びつける作業が、今後、研究がより実質的に社会とつながる機会であると捉えたい。

援助から交流へ
地域と地域のつながりが電灯をともし

杉村 和彦（福井県立大学）

From Aid to Exchange
Regional Connections Turn on Lights

SUGIMURA KAZUHIKO (Fukui prefectural University)

アフリカを援助する。またそれに対応して援助や協力を正当化し合理化する学が生まれる。専門家集団としての「援助」や「協力」が、その現場に駆けつける。アフリカに無電化農村があるとして、日本の市井の人が参加することはあまりない。しかし私が生活している福井にも、タンザニアの無電化農村の話聞いて、素人ながらかかわりを持つことはできないかと考える人もいる。こういう問題に市民が参加できないか、日本の地域社会の人が、アフリカのある地域社会の人達と長期的につながり、まず仲間になって、その中で「援助」の一端も担う。こうした実践の一つとして、福井に生まれたソーラーを使った市民共同発電所と福井・タンザニア姉妹村運動の一端を紹介する。

タンザニアの首都、ドドマ近郊の農牧民のゴゴ社会は、天候が極めて不順であり、食糧不足が頻発する地帯で、また農業近代化が著しく遅れた社会ともなっている。10年前に報告者が科研の仲間とともに「地域の内発的発展」の研究で地域に入り、照明用に太陽光パネルを滞在先の家の屋根に設置した。当初は個人的に使う予定であったが、村人が携帯電話の充電に使いたいというので、充電器を置くと充電屋さんが生まれた。太陽光パネルが牛市などで売られ、牛持ちの資産家は購入することもできる。しかし婚資としての「牛を持つこと」が重要であった。しかし上記のことがきっかけになって、発電への関心も生まれた。その後、より大きなソーラーの電源を使った住民集会所ができて、そこにテレビがおかれ、村の人が楽しむテレビ映画館が始まり、自主財源を生み出している。無電化であった村の子供たちは、夜間に勉学の機会ができ、中学への進学者が現れた。

タンザニアの農牧民地帯での内発的発展とかかわる太陽光発電の可能性を福井で話すと、「地球温暖化防止」に取り組む福井のNPO「エコプラン」や太陽光による市民発電所が強い関心を持ち、共同して推進することになった。資金は助成金の他に市民から出資金を募り、計画に連動して県民らに節電を呼びかける事業としてもおこなっている。その中でまず、首都のドドマのNPOの施設に発電機を設置し、トウモロコシなどの製粉などの実証実験を行い、農村への展開を考えている。

このプロジェクトは地域が地域を支える協力である。長期的なつながりの中で物事の展開を考える姉妹村協議会の中で合意されたことは、タンザニアの農村電化をサポートしながらも、それを福井とタンザニア、日本とアフリカが市民レベルで交流し、楽しみながら行おうというものである。タンザニア農村の特産品を送ってもらいながら、フェアトレード的に販売する。これまでの援助はあまりにも短期であった。つながりを次の世代まで続けるという構えをプロジェクトは持つ。

援助はこれまで一方向的であった。しかし地域と地域が長期的につながり、かかわって行こうということをプロジェクトの中心的な目標とし、持続な電源開発も組みながらも、「福井・タンザニア姉妹村協議会」として、仲間づくりから始める。そうした中で、参加するものの中から「アフリカのことを深く学ぶ」という視点が生まれてきた。とりわけ今日アフリカの農村の人達もスマートフォンを持ち、スカイプなどもでき、日常的な対話が可能だ。友人となる村の人達との対話の中で目標値を常に可変的に動かすやり方が、福井の地域の人にも様々な形で参加を促す状況が生まれている。

フォーラム

Forum 1

新しいアフリカ言語研究 1

方法論の刷新

中川裕（東京外国語大学）

Current trends in African Linguistics 1

New methods and approaches

Hirosi NAKAGAWA (Tokyo University of Foreign Studies)

アフリカ言語学は、世界の言語の多様性と普遍性の理解の拡大に重要な役割を果たしてきた。特に、アフリカの諸言語に特有の現象に関するデータを提示することで、既存の言語学的知見を刷新する記述的な貢献を続けて来た。従来の日本におけるアフリカ言語学も記述的性格をもつ調査研究が盛んで、特に個別言語の精緻な記述に強みを発揮して来た。

このような堅実な実証的研究の蓄積の過程で、どの語族においても多くの個別言語の記述の整備が進み、アフリカの諸言語がもつ言語学的特徴についての知識が格段に拡大した。この状況を背景にして、近年、アフリカ言語学は新しい段階に入りつつある。すなわち、これまでの個別的な記述の蓄積を総合的に考察することによって、より一般的な研究に発展させる研究動向が活発になってきている。そこでは、これまでになかった言語横断的研究方法が用いられ、アフリカ諸言語の類型的特徴の解明が展開されている。このような世界的な新しい研究潮流とともに、日本におけるアフリカ言語学の研究も目覚ましい発展を見せている。

このフォーラムでは、日本のアフリカ言語学の新動向から、従来の研究にはなかった新しい手法を用いる研究、一特に資料収集方法に特色が認められる研究—、を取り上げ、その手法について解説し、それによって得られる新知見の一部を提示する。そして、新しい研究手法が、言語の多様性・普遍性に関する、より良い理解をもたらすことを具体的に示す。

フォーラムは以下のように構成される。

- (1)序論（中川裕）
- (2)中川裕[登壇者]、アレナ・ウィツラック=マカレヴィチ、木村公彦
「言語音の限界縁：カラハリ言語帯音韻類型論」
- (3)大野仁美
「物語作成手法は文法項目調査に有効か：コイサン事例研究」
- (4)河内一博
「ビデオ実験による形態統語論・意味論・語用論の類型的研究」
- (5)全体討議（座長：河内一博）

フォーラムの背景の略述(1)の後、(2)は、世界の言語音の多様性・普遍性を探求する分野である音韻類型論に、新規のアプローチ（従来の研究とは異なる性質の言語サンプリング）を導入し、コイサン諸語=カラハリ言語帯の事例を対象とすることによって、従来の研究ではほとんど顧みられることのなかった「言語音の限界縁はいかなるものか？」という重要な問題に挑む。(3)は、最近提案されたテキスト収集の新技术であるシナリオ共同作成法の通言語的な有効性を論じる：従来の調査票調査や物語テキスト分析では意味の確定がむずかしかった文法現象を対象に、この手法による調査がどこまで妥当性を発揮するかをカラハリ言語帯の事例研究で検証する。(4)は、研究対象となる事象や範疇（例えば、空間移動、因果関係、定・不定の区別）の表現について調査するのに適したビデオ・クリップを話者に見せて口述してもらい新しい資料収集方法を用いる。この方法は同一の事象・範疇に使われる表現を、同じ条件下で言語横断的に比較することを可能にし、形態統語論・意味論・語用論の類型的研究に新知見をもたらす。報告では、この方法を使った研究によりどのような主張ができるかについて述べる。これら3つの報告の後、聴衆との(5)全体討議を行う。

言語音の限界縁：カラハリ言語帯音韻類型論

中川裕(東京外国語大学)

アレナ・ウィツラック=マカレヴィチ(エルサレム・ヘブライ大学)

木村公彦(東京外国語大学)

The Phonological Typology of the Kalahari Basin Area

Hiroshi Nakagawa (Tokyo University of Foreign Studies)

Alena Witzlack-Makarevich (Hebrew University of Jerusalem)

Kimihiko Kimura (Tokyo University of Foreign Studies)

人類の言語音の多様性を探求する研究分野「音韻類型論」は、本来、言語音の普遍的傾向（言語音の多様性の内包）と言語音の限界範囲（言語音の多様性の外延）の両方の解明に向かうべきものだ。しかしながら、従来の音韻類型論は前者に重点が置かれすぎて、後者に関わる「言語音の限界縁はいかなるものか？」と「その限界縁をなす稀少特徴はどのように説明できるか？」という重要な問題をなおざりにしてきた。本研究は、これらの問題に取り組む。そのために音韻類型論に新しい研究手法を導入する。

その新規性は3つある：

- (1) 世界中に**遍在**する「ありふれた音韻特徴」を重視する従来のアプローチを逆転させて、地理的に**偏在**する「めずらしい音韻特徴」を重視する新アプローチを採用する。
- (2) 世界で最も複雑な言語音類を多用するコイサン諸語の音韻論的精査によって、言語音の複雑度の限界範囲の解明に挑戦する。
- (3) 音素目録に基づく頻度調査に依存しがちだった従来の研究に対し、音素目録だけでなく語彙における音素の分布を分析する。

コイサン諸語は系統を異にする3つの語族（トゥー語族・カー語族・コエ語族）からなるが、多数のめずらしい音韻論的特徴を共有する一つの言語地域「カラハリ盆地言語帯」を形成する。しかも、この言語地域が共有するめずらしい特徴は複雑かつ多面的で、言語音の多様性の限界縁の広範囲に関わる：調音位置・調音様式・喉頭調整・気流機構、音素目録、音素配列論、音交替、超分節音のいずれにも極めて複雑な稀少特徴を有する (cf. Nakagawa et al. 2019, Witzlack-Makarevich & Nakagawa 2019)。また、その稀少特徴が、語族内部および地域内部に多様な変異を伴い分布するため、分布の分析から稀少特徴の歴史を探ることが可能である。したがって、上記の、本研究の核心をなす学術的な二つの問いの探求にとってコイサン諸語は最適な事例である。

発表では、はじめに、従来の音韻類型論の手法である「広域標本言語」による「音素目録ベース」の通言語比較アプローチについて簡潔に解説し、それがもたらした成果を評価し、その問題点を指摘する。次に、報告者が現在進めている「地域標本言語」による「音素目録ベース・語彙ベース」の通言語比較という新しいアプローチについて解説し、それが、従来の研究の成果をどのように発展させるか、また、従来の研究が捉えることのできなかつたどんな新しい知見をもたらすかを報告する。

References

Nakagawa, H., T. Güldemann, F. Lionnet, and A. Witzlack-Makarevich (2019) Khoisan phonological typology database and the relative frequency of consonants in the Khoisan languages. 13th Conference of the Association for Linguistic Typology, Association for Linguistic Typology, University of Pavia, Italy.

Witzlack-Makarevich, A. and H. Nakagawa (2019) Linguistic Features and Typologies in Languages Commonly Referred to as 'Khoisan'. In H. Ekkehard Wolff (ed.) *The Cambridge Handbook of African Linguistics*, 382-416, CUP.

物語作成手法は文法項目調査に有効か
コイサン事例研究
大野仁美（麗澤大学）

How does a cooperative picture task reveal less known grammatical traits?

Hitomi ONO (Reitaku University)

言語の文法調査がある程度まで進むと、テキストの収集と分析が必須となる。その段階では、いったいどのようにしてテキスト資料を収集すれば良いかが方法論上の大きな問題となる。従来の研究においては、話者が知っている別の言語を刺激としてもちいる「翻訳タスク法」や、絵・写真や動画を刺激に用いる「画像描写法」が用いられて来た。これに対して、本研究では、新しいテキスト収集法である、複数枚の絵を用いて1つの物語ができるように2名の話者が共同で取り組むタスクが、どのような文法現象の調査に効果的であるかを、グイ語（コエ語族）のケースを用いて報告する。

このタスクは、コミックスタイルの絵16枚を1枚ずつ見せ、それぞれ何が描かれているかを話者2名にのべてもらった後、その16枚を1つの物語ができるように並べ替えてもらうというもので、ここでは「物語作成手法」と呼ぶ。

従来の「翻訳タスク法」を用いた場合、その結果は刺激に利用した言語の文法カテゴリーという枠組みのバイアスをもつ。それに対して、もう一つの従来の手法である「画像描写法」はそのような枷から解放されるので、これまで、（文字情報の無い）絵本を見せて物語を語ってもらう方法が広く実施されており成果をおさめてきた（その代表例が *Frog, Where Are You?* (Mayer 1969) である）。

本研究が用いる「物語作成手法」は、本来それぞれの言語の話者の社会認識がどのようなものであるかを言語上にとらえることを目的として開発・採用されたものである

(<https://scopicproject.wordpress.com>; AA 研共同利用・共同研究課題「The Social Cognition Parallelex Interview Corpus (SCOPIC) に基づく社会認識の言語表示に関する研究」)。同時に、16枚の並べ方を考え、そしてそれを1人ではなく話者2人が共同でお互いの考えを調整していくという、当該言語でそのようなプロセスがどのようになされるのかをダイナミックに示す資料が収集できる。この資料はさまざまな観点・目的からの分析に耐えるものである（たとえばグイ語における自然会話で活写されてきた「唱和」現象がこのようなタスクにおいても観察でき、それが通言語的に珍しい現象であることがわかる）。中でも、実際の使用例を収集することやその意味の確定が困難なグイ語の文法項目2つの分析に貢献することが期待できる。

1つめは、アスペクト辞の「非出現」の解釈である。グイ語は時制辞と独立した豊かなアスペクト辞を有する。それらがどのように生起するかに加え、どのような場合に生起しないかについては、ナラティブ内での使用については明確な結論に至っているのに対して、単独の文においてはとらえきれていない面がある。このタスクでは、絵一枚毎の解釈と、それが連結した場合の解釈（ちょうど「コマ送り」と「動画」それぞれに対するような）が得られるので、アスペクト辞の生起を調査するのに有効である。2つめは、想念において用いられる *irrealis* モダリティである。このタスクが用いている「コミックスタイル」は、セリフや思考を表す「ふきだし」を使用しているため、それを解釈する際に、また調査参加者がお互いの意見を調整する際に、この文法項目が用いられる可能性がある。実際に収集した資料から、この方法がどのようにこれらの文法特徴の調査に有効であったか報告する。

ビデオ実験による形態統語論・意味論・語用論の類型的研究
河内一博（防衛大学校）

**Typological morpho-syntactic, semantic, and pragmatic studies
based on video experiments
Kazuhiro Kawachi (National Defense Academy of Japan)**

発表者が現在行っている3つのビデオ実験による研究を紹介する。これらの方法により、同じ条件下で諸言語の話者が行った同一の事象の口述データを通言語的に比較することができるようになり、形態統語論・意味論・語用論の類型的研究に新しい知見をもたらすことができることを説明する。そしてこれらの研究によりどのような主張ができるかについて、特に東アフリカの言語（Sidaama語（エチオピア、ハイランド・イースト・クシ）とKupsapiny語（ウガンダ、南ナイル）、日本語、英語のデータを使って論じる。

まず、ニューヨーク州立大学バッファロー校の国際共同プロジェクト“Causality across Languages” (PI: Jürgen Bohnemeyer) のビデオ実験による研究である。この因果関係に関するプロジェクトは4つのサブ・プロジェクトから成る：(i)「意味類型論」、(ii)「談話」、(iii)「言語と思考」、(iv)「意味と統語のインターフェース」。(i)～(iii)に数秒間のビデオ・クリップを使い、実験参加者は、(i)ではそれぞれのクリップの事象を言い表すのに発表者が（他の母語話者たちとのインタビュー等を通して、メインのコンサルタントとともに前もって）用意した文がどの程度ふさわしいかを数値で評価し、(ii)ではどのような事象が起こったかを言い表し、(iii)では事象の参加者のうち誰が事象の結果の責任があるかを数値で評価する。(i)と(ii)は因果関係の直接性の諸要因 (Bohnemeyer et al. 2000) のうちどれが構文の形態統語的統合度 (Van Valin 2005) の違いとしてどの程度アイコンクに現れるか (Haiman 1983) を調べる。(ii)は言語により、談話において事象のどの部分が述べられ、どの部分が述べられないか、事象におけるどの参加者がどのような文法関係で表され易いか (Fausey et al. 2010) 等という問題を扱う。(iii)は事象の結果の責任を負うべき参加者が誰であるかととらえるか (Singelis 1994) が、各言語でどのように使われる構文のタイプ ((ii)のデータ) に影響を与えるかを調べる。いずれも結果を統計処理し、仮説がどの程度妥当であるかを示す。

第二に、空間移動と状態変化に関する国立国語研究所の共同プロジェクト (PI: 松本曜) の数秒のビデオのシーンの口述実験による研究である。空間移動の類型論 (Talmy 1985, 1991, 2000) が個別言語のデータにどのように適用されるかという問題に加えて、ダイクシスをどのようにとらえるべきか (Wilkins & Hill 1995)、場面のタイプによりどのようにダイクシスを違った種類の構成素・構文で表すか、空間移動の類型論が状態変化の表現パターンにどの程度当てはまるかという問題を扱う。

第三に、(アフリカ以外の言語調査のために考案された研究方法の新規導入として、) アフリカの多くの文化での文脈に適合していると思われる Wallace Chafe の Pear Film (6分29秒) を使った実験による研究である。実験参加者はこのフィルムを見てから、記憶をもとにそのフィルムの内容を語る。一つの文で言い表すことが多い他の二つの種類のビデオ実験とは異なり、参加者は文よりもっと大きな単位の長い物語を語るなので、談話のレベルでの研究（例えば、談話マーカーの使用、定・不定の区別等の情報構造に関する現象）が可能になる。

Forum 2

【フォーラム】新しいアフリカ言語研究 3

アフリカの手話言語の諸相

亀井伸孝（愛知県立大学）

[Forum] Current trends in African linguistics 3

Multiple aspects of African sign languages

KAMEI Nobutaka (Aichi Prefectural University)

近年、アフリカにおいてろう者たちが用いている手話言語の研究が、さまざまな形で進展している。まず、なぜそれらを研究する必要があるのかを、3点にまとめておきたい。

第一に、そこに話されている言語が存在する以上、記載、分析の対象とする価値がある。アフリカ研究においては、ろう者と手話言語の研究は着手されにくく、一方で手話言語学においても、アフリカに関わるテーマは等閑視されがちであった。実際に用いられている言語が未記載のまま放置されている状況は、避けなければならない。

第二に、アフリカ地域に関する深い理解を促すことがある。ろう者たちの集団で視覚的な言語が生まれ、世代間で伝承されているということは、普遍的に見られる現象である。一方、アフリカにおいては、植民地支配と独立、ヨーロッパ諸音声言語の導入、アパルトヘイト、特有の宗教分布、国境を越えた人的移動、開発援助、近年の急速な都市化など、アフリカがもつ固有の歴史および社会条件と不可分の現象としてある。マイノリティの視点によるアフリカ地域理解を補うことにより、アフリカを複眼的に理解することができる。

第三に、手話言語学の裾野を広げることがある。欧米を中心とした主要な国民国家におけるそれらとは異なり、アフリカの手話言語の成立と伝播、変容のプロセスは、前述の通り、アフリカ固有の条件のもとに成立している。比較的均質な「国語」「国民」「アイデンティティ」のもとに成立したのとは異なる、アフリカならではの諸現象の事例を付け加えることにより、世界の手話言語の多様性理解のための重要な糸口を提供することができる。

アフリカの諸手話言語の事例を研究していくことは、人間と言語一般に関する多くの興味深い事例を提供することにつながり、新しい人間観、言語観の創出に貢献するであろう。

このような意義を念頭に研究振興を図ることが必要であるが、これまでは対象が特定の国に偏る傾向があった。人口が多きろう教育の歴史の長い国々に（南アフリカ、ナイジェリアなど）、アメリカの開発援助が関与してきた国々に（ケニアなど）、英語圏の国々に（ウガンダ、ガーナなど）における研究例があり、文献が存在していた。また、アメリカ手話などの主要国の手話言語の影響下でない固有の言語を求めて、アダモロベ手話（ガーナ東部）、ハウサ手話（ナイジェリア北部）などの少数手話言語に焦点が当てられることもあった。

近年では、フランス語圏における調査、島嶼国における調査など、その裾野が広がりつつある。また、最近の傾向として、アフリカのろう者自身が研究に従事し、自ら国際学会などで成果を発信するケースが増えてきた。3年に1回開かれる世界アフリカ言語会議（WOCAL）における手話言語ワークショップでは、音声英語の他に国際手話などで発表するろう者たちの参加もあり、手話と音声の間の通訳が用意されることが多くなっている。

このフォーラムでは、日本でアフリカの諸手話言語の研究に従事する4名の研究者による新しい成果を紹介する。アフリカの多様性を凝縮したような世界を、これら手話言語のトピックの中に見出すことができるであろう。発表と議論を通じ、アフリカ地域研究および言語研究一般の視野の拡張を展望していきたい。

- (1) 箕浦信勝「マダガスカル手話の形態論的諸相について: 動詞の自他対応を中心に」
- (2) 森壮也「ウガンダ手話に見られる動詞への新たなタイプの語彙化」
- (3) 宮本律子「タンザニア手話の社会言語学的状況」
- (4) 亀井伸孝「フランス語圏アフリカ手話（LSAF）の話者人口推計:
ろう学校およびろう者団体の調査を手がかりに」

マダガスカル手話の形態論的諸相について
動詞の自他対応を中心に

箕浦信勝（東京外国語大学大学院）

**On morphological aspects of Malagasy Sign Language (TTM)
Especially focusing on intransitive-transitive pairs of verbs**

MINOURA Nobukatsu (Tokyo University of Foreign Studies)

Minoura (2018) argues how semantically closely related intransitive-transitive verb pairs are produced in Malagasy Sign Language (TTM). So far there are no pairs recorded where the intransitive form is derived from the transitive form for TTM. The two forms of the pairs are, a. identical (i.e. labile), b. morphologically derived (from intransitive to transitive), or c. syntactically derived (from intransitive to transitive).

I have some more examples from my fieldwork in August 2019. Some newly found derivational processes are very peculiar. The resultant forms are probably very difficult to be transcribed by e.g. Hamburg Notation System (HamNoSys). It seems they are challenging not only morphologically but also phonetically/phonologically. In other words, these forms might broaden horizons for the morphological, phonological, phonetic description of signs.

One example of such pairs is CHANGE/CHANGE (MIOVA/MANOVA). The intransitive form of the pair is made with the unchanging 1-handshape used throughout the sign. On the other hand, the transitive form of the pair starts with the 1-handshape, which is identical with its intransitive counterpart. Then in the middle of the production of the transitive sign, the handshape changes from 1-handshape to T-handshape. The change is not a gradual one but a sudden one made in the middle of locational and directional change of the hands.

The pair CHANGE/CHANGE raises some questions. Is the sign monosyllabic or disyllabic? Why does my language consultant make the change of the handshape in the middle as opposed to using the T-handshape all the way through? (I will have to ask her this question in person when time and circumstances are appropriate.) Is it a suffix or something else to be described as involving suprasegmental changes.

In this paper, I would like to dig into the morphological and phonetic/phonological aspects of the intransitive-transitive pairs of TTM verbs featuring the above-mentioned CHANGE/CHANGE pair.

Reference:

Minoura, Nobukatsu (2018), "Causative marking in Malagasy Sign Language," *Area and Culture Studies* 97, Tokyo University of Foreign Studies, pp. 162-202.

ウガンダ手話に見られる動詞への新たなタイプの語彙化
森 壮也 (日本貿易振興機構アジア経済研究所)

The newer type of verb lexicalization in Uganda Sign Language
MORI, Soya (Institute of Developing Economies - JETRO)

本報告では、東アフリカ、中でもウガンダのろう者によって用いられているウガンダ手話(Uganda Sign Language、以下 UgSL)に焦点を当てる。UgSL については Lutalo-Kiingi(2014)が UgSL の形態統語的な語構造の分析をしている他、いくつかの社会言語学的研究がある。本報告では、これらの研究でもまだ報告されていない世界的にも珍しいタイプの動詞について報告する。

手話言語では、多くの手話において動詞には基本的に3つのタイプがあるとされている (Padden, 1988)。①方向動詞(Directional Verb)、②空間動詞(Spatial Verb)、③非変化動詞 (Plain Verb) である。動詞に伴う動作主や動作対象に対して動詞が方向を伴った屈折変化をするものが①、動詞による対象の位置変化に動詞の方向が一致しているものが②、それ以外の動詞に方向変化が見られない動詞が③である。代表的なものとして、日本手話の場合には、①では、dENWA-wO-kAKERU (電話をかける、通常とは異なったアルファベット表記は、これが手話の語彙であることを示す)、aGERU(あげる)、②では、iKU (行く)、hAKOBU (運ぶ) ③sUKI (好き)、wARAU (笑う) があげられる。

また一方で、多くの手話では、名詞と動詞が同型である語彙、例えば日本手話の oSHIERU (教える)、sENSEI (先生) のような例があり、この語は、①の性質を持つことも知られている。手話言語では、このようにある動詞が名詞と同型で、名詞でも使われるというケースは、これを手型が同じということにまで拡張しても(例えば、hIKOUKI (飛行機) と hIKOUKI-gA-tOBU(飛行機が飛ぶは、動作が前者は小さく、後者は大きい)が手型は同型である)通常は、名詞と動詞の間で多く見られ、分類辞 (Classifier) と呼ばれる形態素特徴を持つ語が語彙化したような語ではこうしたパターンが多い。

こうした現象は、UgSL でも数多く見られ、CALL (電話をかける) が例えばそれにあたる。しかしながら、手話言語は音声言語に比べると非常に語の歴史的変化のスピードが速いと言われ、こうした CL からの語彙化についても同様の報告が数多く報告されている。しかし、UgSL では、さらに驚くことに、通常、CL 由来の名詞ではない語でも①のタイプの動詞に変化して新たに定着している動詞の事例が 2000 年代以後、観察されている。

FREE(無料の)という手話語彙の事例である。通常、この語は
PT₁ GIVE₃ FRIEND 1 BEER FREE (添字は、この動詞が右に添えられた数字の人称に対応した方向性を持つことを示す)

といった文で用いられ、この場合は 副詞である。しかし、この FREE が①のタイプの動詞に変化して、

PT₁ FREE₃ FRIEND BEER 1

という文を構成できるようになっている。本報告では、この新しい言語現象とその持つ言語学的な意味について報告する。

参考文献

Lutalo-Kiingi, S. (2014) A Descriptive Grammar of Morphosyntactic Constructions in Ugandan Sign Language (UgSL), A thesis submitted in partial fulfilment for the requirements of the degree of Doctor of Philosophy at the University of Central Lancashire.

Padden, Carol A. (1988). Interaction of morphology and syntax in American Sign Language. New York, NY: Garland Press.

本研究は、科研費「東アフリカろう者コミュニティの動態研究—祖型手話の記述を通して—」(課題番号 18H00778) の研究成果の一部である。

タンザニア手話の社会言語学的状況

宮本律子（秋田大学）

A socio-linguistic report of Tanzania Sign Language Miyamoto, Ritsuko (Akita University)

本報告では、東アフリカのタンザニアにおけるタンザニア手話(Tanzania Sign Language:TSL, または Lughya ya Alama ya Tanzania :LATとも称される。本稿では以下TSL)のおかれている社会言語学的な状況について報告する。

TSL についての学術的研究は乏しく、Muzale による語彙研究（辞書）、Batamula によるろう教育の報告程度しかなく、現在ライデン大学による記述研究が進行中である。一方、YouTube などを利用して、基本的なタンザニア手話語彙を普及させようとしている試みもいくつかある（"Tanzanian sign language tutorial"など）。

ろう者のコミュニケーション手段である手話がタンザニアにおいて発展し始めたのは1963年に Tabora に初めてのろう学校が建てられてからである。その後外部からの支援を得て計7校の小学校、13のユニット（普通校に併設される特殊学級）が設立された。ろう学校は Tabora(1963), Buguruni (1971), Mwangi (1981) Mugeza (1981), St. Vincent (Luhuwiko)(1984), Mtwivila (1993), Njombe (1994)に建てられ、それらの学校では、授業は口話法（Oralism）中心であったにも関わらず、生徒の間では自然言語としての手話が発展した。そして小学校を卒業したろう者が学校外のコミュニティでも手話を使うことにより、学校に行けなかったろう者にも普及した。ただ、ろう学校を中心とするろうコミュニティごとに語彙や文法が大きく異なり、その結果、7つの変種が並立している状態である。ここには、学校設立者の言語も影響しており、例えば、Arusha・Moshi 地域（フィンランドの団体が設置した学校がある）の手話には今でもフィンランド手話の語彙（および統語）が大きく影響を及ぼしている。

その後、障害者の人権運動の高まりとともに、ろう教育の充実および全国統一手話の必要性が提唱され、その一環として1994年に Tanzanian Sign Language Dictionary の第1版が出版され（900項目）、2004年には第2版（2500項目）が出版された。7つの地域から複数のろう者が参加し、出来るだけ特定の変種に偏らないよう共通する単語として合意できる単語を選んだという。この辞書の出版はタンザニア手話にとって画期的な出来事であったが、最近では SNS などの普及により、各学校の手話（つまり一つの変種）を紹介する動画が簡単に見られるようになったため、ろう教育（特に、ろう学校に勤務する聴者教師の教育）に十分に活用されているとは言えない。

現在は、Sign Wiki- Tanzania という、自由に単語を増やせるプラットフォームも出来た（2020年1月現在2,194語登録）。また、タンザニアろう者協会とダルエスサラーム大学（以下UDSM）との共同でUDSM内に、タンザニア手話通訳養成プログラムが始まっており、現在27名が卒業、20名あまりが履修中であり、ここでは、上記辞書編纂の時に統一されたTSLを用いて教育を行っている。

参考文献

- Batamula, Christi. (2009) Deaf Education in Tanzania- An overview of the current situation. https://fcatanzania.weebly.com/uploads/1/0/4/7/10473141/deaf_in_tz.pdf. Retrieved January 10, 2020.
- Muzale, Henry RT (ed.) (2004). Kamusi ya Lughya ya Alama ya Tanzania (LAT) - Tanzania Sign Language (TSL) Dictionary. Chama cha Viziwi Tanzania (CHAVITA) and Languages of Tanzania (LOT), University of Dar es Salaam. ISBN 9987-691-02-1.

本研究は、科研費「東アフリカろう者コミュニティの動態研究—祖型手話の記述を通して—」（課題番号18H00778）の研究成果の一部である。

フランス語圏アフリカ手話 (LSAF) の話者人口推計 ろう学校およびろう者団体の調査を手がかりに

亀井伸孝 (愛知県立大学)

Estimation of the population of the signers of Langue des Signes d'Afrique Francophone (LSAF) With the surveys on the schools and associations of the Deaf

KAMEI Nobutaka (Aichi Prefectural University)

フランス語圏アフリカ手話 (LSAF) は、西・中部アフリカのフランス語圏諸国に広域的に分布する、アメリカ手話および音声／書記フランス語の影響を受けて成立した手話言語である。今日、セネガルからブルンジまで、少なくとも 11 のフランス語圏の国ぐにのろう者コミュニティにおいて用いられ、かつ世代間伝承されていると見られる。しかし、この言語の話者数については研究がなされておらず、推計値が提示されたこともない。

本発表は、LSAF の話者人口を推計する研究に着手する手がかりとして、いくつかの調査方法を提示し、今後の研究の可能性を探ろうとする試論である。これまでに西・中部アフリカ 9 か国におけるろう者コミュニティでの参与観察で得られたデータを手がかりとする。

(1) LSAF を話すろう者のコアをなす集団として、ろう学校の生徒、教員および卒業生が挙げられるため、学校関係者の人数を算出するという方法がある。この利点は、学校制度面からのアプローチであるため、生徒数などの具体的な数値データを得やすいことである。一方、難点もある。まず、LSAF は未就学のろう者も用いており、ろう学校就学者のみでは過小評価となる恐れがある。また、対象地域の一部の学校では、フランス手話などに教授言語を切り替えた例があり、LSAF を用いない人びとが算入される可能性がある。

(2) 主要都市におけるろう者団体の会員数を手がかりにするという方法がある。アビジャン、ダカール、ドゥアラ、ワガドゥグなどの大都市には、ろう学校の卒業生たちをコアとするろう者の協会が設立されており、それら団体の会員数を参照するという方法である。この方法においても、具体的な数値データを得ることは容易である。一方、難点としては、成人ろう者しかカバーできないこと、同所に複数の団体が成立しているケースがあり、特定団体の構成員と手話言語集団が必ずしも一致しないこと、地方都市や農村における LSAF 話者の状況を捕捉しにくいことなどが挙げられる。

(3) ろう学校運営者やろう者団体役員など、ろう者コミュニティの全容の情報を得やすい立場の人たちを対象とした聞き取り調査により、話者人口の情報を得るという方法がある。ただし、主観や印象、記憶違いなどに左右される可能性が高く、実証性を欠く恐れがある。

(4) 医学的な観点による聴覚障害者人口の推計や、国勢調査における聴覚障害者数のデータを参照するという方法もある。ただし、これらの方法では、音声言語や他の手話言語を使用している聞こえない人びとも含まれる可能性があり、過大評価となる恐れがある。

(5) 「使用する手話言語」を直接的に質問事項として盛り込んだ広域調査を行うという方法が考えられる。これは理念としては検討できるものの、現実的に実施は困難である。国勢調査に盛り込むにしても、政府関係者の手話言語に対する理解が十分でないケースがある。独自の質問紙調査を行うにしても、ろう者における識字率の低さが課題となる。また、多くの場合、ろう者本人において、自分が用いているコミュニケーションが LSAF であるという認識はなく、単に「手話」または「身ぶり」であると考えていることが想定される。

検討の結果、LSAF の話者人口を推計する方法はきわめて限られていると言える。いくつかの方法を組み合わせることで、ある程度の範囲に推計値をしぼりこむことはできるかもしれない。たとえば、(4) の医学的な観点から聴覚障害者人口の上限を見積もり、(1)(2) の方法で LSAF 話者のコアとなる大都市部のろう者人口を推計し、(3) を参照しながら未就学者や地方在住者の人口を加味していく、といった方法が採用できる可能性がある。

Forum 3

新しいアフリカ言語研究 2 バントゥ諸語のマイクロバリエーション研究 米田信子（大阪大学）

Current trends in African Linguistics 2 Bantu Microvariation Nobuko YONEDA (Osaka University)

バントゥ諸語はアフリカ大陸赤道以南に広く分布しており、その数は500～700と言われている。バントゥ諸語の比較研究は、長年にわたって語彙や音韻を中心に行われてきた。一方、文法の研究は、個別の言語の全体像を明らかにすることを目的とした文法体系の網羅的な記述が中心であり、比較研究の対象としては扱われてこなかった。ところが近年になって、文法現象の比較はバントゥ諸語研究において最も注目されるトピックになってきた。

このような研究動向の背景には、①比較が可能なところまで記述研究が蓄積されてきたこと、②バントゥ諸語研究者間の国際ネットワークが密になり、比較に必要な情報やデータの共有が盛んになってきたことがある。特に②の「密な国際研究ネットワーク」が果たす役割は大きく、これはバントゥ諸語のマイクロバリエーション研究の特徴のひとつとなっている。これまでバントゥ諸語は文法的に類似性が高いと言われてきたが、こうした文法的諸現象のミクロナレベルの比較研究を行うことで、バントゥ諸語に見られる文法現象のバリエーションが少しずつ明らかになっている。

本フォーラムでは、日本のバントゥ諸語研究者が国際研究ネットワークのなかで進めてきたマイクロバリエーション研究のうち比較対象のレベルが異なる3つの研究を紹介し、それぞれがバントゥ諸語の研究にどのような貢献をしているのかを報告する。フォーラムの構成は以下のとおりである。

(1) 米田信子

序論「バントゥ諸語のマイクロバリエーション研究とは」

(2) 竹村景子・宮崎久美子

「ザンジバルのスワヒリ語諸変種に見られるマイクロバリエーション」

(3) 阿部優子

「バントゥ諸語に見られるテンス・アスペクト標識のマイクロバリエーション」

(4) 小森淳子

「受動文の類型 — ニジェール・コンゴ語族の中のバントゥ諸語の特徴」

(5) 全体討議（座長：米田信子）

(1)では、マイクロバリエーション研究の背景や具体的な内容を説明し、現在進行している国際プロジェクトとその中での日本のバントゥ諸語研究の位置づけを説明する。(2)では、ザンジバルで話されているスワヒリ語の変種群を対象に、過去テンス、コピュラ文、関係節、命令形の形式に見られるバリエーションを紹介する。これは、比較対象をひとつの言語の地方変種群という狭い範囲に絞った研究である。(3)では、東・南部バントゥ諸語を対象に、動詞構造のテンス・アスペクト標識に見られるマイクロバリエーションを紹介する。これは、国際共同研究のなかで構築されたデータベースを用いて広くバントゥ諸語のデータを比較し、そこに見られるバリエーションを検討するという、いわばマイクロバリエーション研究の典型例である。(4)では、対象をニジェール・コンゴ語族に拡大し、バントゥ諸語に見られる受動文のバリエーションの類型化、およびその他のニジェール・コンゴ語族の諸言語との比較を行う。これは、比較対象をバントゥ諸語以外のニジェール・コンゴ語族に広げることによってバントゥ諸語の特徴を明らかにしようとするものである。これら3つの研究例の報告の後、(5)で聴衆を交えた全体討議を行う。

バントゥ諸語のマイクロバリエーション研究とは？

米田信子（大阪大学）

What is Bantu Microvariation?

Nobuko YONEDA (Osaka University)

バントゥ諸語の比較研究には長い歴史があるが(Meinhof 1899, Guthrie 1967-71, Meeussen 1969 他)、その中心は音韻や語彙の比較であった。ところが近年になって文法現象の比較研究が盛んになってきた。このような同一言語群や方言間の文法現象の比較研究は「マイクロバリエーション研究」と呼ばれ、最近ではバントゥ諸語研究において最も注目されるトピックのひとつになってきた。

バントゥ諸語のマイクロバリエーション研究を牽引してきたのが、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院(SOAS)を拠点として 2015 年にスタートした国際プロジェクト *Morphosyntactic variation in Bantu: Typology, contact and change* (以下 SOAS 国際プロジェクト)である。このプロジェクトでは、バントゥ諸語の形態統語論的現象に関する 142 種類のパラメータを定め (Guérois et al. 2017)、多数のバントゥ諸語の記述研究をもとにデータベースを作成した。このプロジェクト自体はすでに終了したが、このプロジェクトの国際協力メンバーを中心に、世界のさまざまなところで新たなマイクロバリエーション研究のプロジェクトが進行中である。

日本におけるマイクロバリエーションのプロジェクトは、2016 年に AA 研の共同研究としてスタートし、現在は第 2 フェーズが進行中である。第 1 フェーズでは各メンバーが研究対象としている言語のデータを SOAS 国際プロジェクトの 142 種類のパラメータの観点から比較検討し、その成果として 12 の言語のデータをまとめたデータ集 (Shinagawa & Abe 2019) を出版した。バントゥ諸語は文法的に類似性が高いと言われてきたが、こうしたマイクロなレベルで文法現象の比較研究を行うことで、バントゥ諸語のなかに見られるバリエーションが少しずつ明らかになってきた。

このような比較研究が可能になった理由のひとつとして、比較が可能なところまで個別言語の記述研究が蓄積されてきたことが挙げられる。個別言語の記述研究は、日本やヨーロッパを中心に、現在も若い研究者たちの博士論文によって積み上げられている。マイクロバリエーション研究は、その基盤に記述研究があり、個別言語の地道な記述研究の重要性を改めて認識させるものとなった。もうひとつの理由として、バントゥ諸語研究者間の国際ネットワークが密になり、情報やデータの共有が盛んになってきたことが挙げられる。バントゥ諸語に限らずアフリカ諸語の研究者の数は世界的に見ても圧倒的に不足しており、国際的な研究連携は必須である。研究ネットワークが密になったことによってマイクロバリエーション研究は可能になったが、同時に、マイクロバリエーション研究によってこの研究ネットワークはさらに拡大・強化されるものと思われる。その意味でも、バントゥ諸語研究においてマイクロバリエーション研究が果たす役割は大きい。

<参考文献>

- Guérois, Rozenn, Hannah Gibson, & Lutz Marten. 2017. *Parameters of Bantu morphosyntactic variation: Master list*.
- Guthrie, Malcom. 1967-1971. *Comparative Bantu*. I~IV. Farnborough: Gregg International.
- Meeussen, A. E. 1969. *Bantu Lexical Reconstructions*. Tervuren:MRAC.
- Meinhof, Carl. 1899. *Grundzüge einer Lautlehre der Bantusprachen*. Leipzig:F.A.Brockhaus.
- Shinagawa,Daisuke and Yuko Abe (eds.) 2019. *Descriptive materials of morphosyntactic microvariation in Bantu*. ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.

ザンジバルのスワヒリ語諸変種に見られるマイクロバリエーション

竹村景子（大阪大学）・宮崎久美子（ザンジバル国立大学）

Microvariation of Swahili varieties in Zanzibar

Keiko TAKEMURA (Osaka University)
& Kumiko MIYAZAKI (State University of Zanzibar)

スワヒリ語は、先行研究では 24 前後の変種が存在すると報告されている (Nurse & Hinnebusch 1993)。タンザニア連合共和国のザンジバル島においては、大きく分けて北部変種、南部変種、およびザンジバルタウン変種があるとされてきた。標準変種を制定する際にその土台とされたのはザンジバルタウン変種だと言われているが、標準変種とザンジバルタウン変種は全く同一の言語ではない。先述のように、ザンジバル島には大きく分けて 3 つの変種があるとされてきたが、島内の村落部を回ってそれぞれの変種を調べて得られたデータは、島内の変種をさらに細かく分類する必要があることを示していると言える。発表者たちは、標準変種の土台となったと言われているザンジバルタウン変種と標準変種、また、ザンジバル島に存在するその他の変種との関係性およびそれらの使用実態について強い関心を持ち、スワヒリ語諸変種の分布状況をより細かく明らかにしたいと考えている。

本発表では、ザンジバル北部県の地域変種であるチャアニ変種、キベニ変種、ヌングイ変種、トゥンバトゥー・ゴマニ変種と、同南部県の地域変種であるジャンビアニ変種、パジェ変種を対象とし、これらの言語データの中から、文法レベルにおいて標準変種とザンジバルタウン変種およびザンジバル島内の地域変種間にみられるバリエーションについて検討する。文法レベルの検討対象として、テンス・アスペクト、コピュラ文、関係節、命令形を取り上げる。

<過去テンスの例>

(1) 「あなたは彼女/彼を見た。」

- a. U-li-mw-on-a. [標準変種 / ザンジバルタウン変種]
SM2sg-PST-OM3sg-見る-FV
- b. Ku-m-on-o. [チャアニ変種 / トゥンバトゥーゴマニ変種 / キベニ変種 /
SM2sg-OM3sg-見る-PST ヌングイ変種 / ジャンビアニ変種 / パジェ変種]

<コピュラ文の例>

(2) 「私は学生だった。」

- a. Ni-li-kuw-a mwanafunzi. [標準変種 / ザンジバルタウン変種]
SM1sg-PST-be-FV 学生
- b. Ni-ali-kuw-a (> nyalikuwa) mwanafuzi. [キベニ変種]
SM1sg-PST-be-FV 学生
- c. Ni-vu mwanafuzi. [トゥンバトゥーゴマニ変種 /
SM1sg-be.PST 学生 ヌングイ変種]
- d. Ni-evu mwanafuzi. [チャアニ変種 / キベニ変種 /
SM1sg-be.PST 学生 ジャンビアニ変種 / パジェ変種]

<参考文献>

Nurse, D. & T. J. Hinnebusch. 1993. *Swahili and Sabaki: A Linguistic History*. University of California Press.

阿部優子（東京女子大学）

Microvariation of Tense-aspect Markers in Bantu

Yuko ABE (Tokyo Woman's Christian University)

本発表では、東・南部バントゥ諸語の動詞構造のテンス・アスペクト標識のマイクロバリエーションの一例を紹介する。具体的には、動詞語根前に現れるテンス・アスペクト接頭辞 **ki-*と、動詞語根後に現れるテンス・アスペクト接尾辞**-a(n)g* および**-ide*との共起関係を主に東・南部バントゥ諸語で検証する（*はバントゥ祖語形を示す）。接頭辞 **ki-*のデータは発表者が調査および文献（Nurse 2008: appendices）より収集したものであるが、接尾辞 **-a(n)g* および**-ide*の資料は、バントゥ諸語のマイクロバリエーションの SOAS 国際プロジェクトで提供されたものである。

接頭辞 **ki-* が指示するテンス・アスペクトはバントゥ祖語で *persistive* 「持続アスペクト」と再建されており、接尾辞 **-a(n)g* は「未完了アスペクト」「反復アスペクト」「習慣アスペクト」など、**-ide* は「過去テンス」ないし「完了アスペクト」と再建されている（Meeussen 1967: 108-111）。バントゥ諸語は慣習的に A-S の 15 の地理的ゾーンに分けられるが、**-a(n)g* は、南部の R ゾーン以外の諸語に広く見られる一方、**-ide* も東・南部に広がる D から S ゾーンの言語にかけて広く分布するものの、北・北西部の A-C ゾーンの言語や南部に使われない言語がある（Nurse & Philippson 2006:180-183, 190-192）。また個別言語で**-ide* は、様々な種類の「過去テンス」に意味機能が拡張されている（Nurse & Philippson 2006:180-183）。

SOAS 国際プロジェクトで提供された東・南部バントゥ諸語の 142 パラメーターより、**-a(n)g* の有無を示す 67 番のパラメーターで**-a(n)g* を持つのは 48 言語中 25 言語（52%）、**-ide* の有無を示す 68 番のパラメーターで**-ide* を持つのは 47 言語中 37 言語（79%）であり、両パラメーターに共通する 46 言語中、**-a(n)g* と**-ide* の両方を持つのは 24 言語（52%）である。さらに**-a(n)g* と**-ide* の両方を有する 24 言語について個別言語のデータを検証し、**-a(n)g* と**-ide* が同一動詞内で共起するかを検証した。その結果、**-a(n)g* と**-ide* の共起が認められる言語では、多くの言語で**-ide* の意味機能が「完了アスペクト」ではなく「過去テンス」となっていた。

一方、動詞接頭辞**ki-*は、収集したバントゥ諸語 159 言語中、69 言語（43%）に見られる。そのうち研究プロジェクトで提供された東・南部バントゥ諸語の**-a(n)g* と**-ide* の両方を有する 24 言語との対応を見ると、3 種類すべての接辞を持つのは、24 言語中 15 言語（65%）であるが、そのうち同一動詞内で**ki-*と共起できるのは、「過去テンス」として用いられる**-ide* が優勢であること、また**-a(n)g* と**-ide* いずれの接尾辞とも共起する場合は、**ki-*が「持続アスペクト」ではなく、*inceptive* 「起動アスペクト」など異なるアスペクトで実現されていた。これは、**ki-*、**-a(n)g*、**-ide* のそれぞれの固有のテンス・アスペクトが、意味拡張しつつ相補分布的なパターンを成していることを示唆する。

<参考文献>

- Meeussen, A. E. 1967. "Bantu grammatical reconstructions." *Africana Linguistica* 3. pp.79-121. Royal Museum for Central Africa: Tervuren.
- Nurse, Derek. 2008. *Tense and Aspect in Bantu*. Oxford University Press.
- Nurse, Derek and Gérard Philippson. 2006. "Common tense-aspect markers in Bantu" pp.155-196. *JAAL* 27. Walter de Gruyter.

受動文の類型 — ニジェール・コンゴ語族の中のバントゥ諸語の特徴

小森 淳子 (大阪大学)

A Typology of Bantu Passive Constructions in Perspective of Niger-Congo Family

Junko KOMORI (Osaka University)

近年の「受動文」に対する関心は、動詞の形態変化が豊富で、典型的な受動形をもつ言語の個別研究のみならず、形態変化に乏しく受動形をもたないような言語も含めての、通言語的な類型論的研究に向かっている。本発表では、いわゆる「受動文」がどのような形式で表されるかという形態的・統語的な類型を、バントゥ諸語の「マイクロバリエーション」として観察し、さらにその特徴をニジェール・コンゴ語族の中に位置づけて考察することを目的とする。

典型的な受動文とは、i) 対になる能動文があり、ii) 能動文の動詞に形態的な変化が見られ、iii) 能動文の目的語（動作対象）が主語になり、iv) 能動文の主語（動作主）が降格して斜格名詞句になるか削除される、という特徴をもつ。バントゥ諸語では、(1) のスワヒリ語の受動文が典型的な例である。

- (1) mtoto a-li-pig-w-a (na baba)
子供 3sg-PST-殴る-PASS-FV by 父
「子供が（お父さんに）殴られた」

バントゥ諸語は動詞の形態変化に富んでいるので、スワヒリ語のような典型的な受動文のプロトタイプを見ることができ一方、個々の言語を観察すると、スワヒリ語の -w- のような受動形接辞をもたない言語も多く、他の自動詞化接辞(-ik-, -am-など)や独自の接辞(-ban など)を用いる言語もみられる。また、受動形接辞をもつ言語であっても、受動文は、(2) のベンバ語の例のように、いわゆる「非人称受動文」で表す言語が多い。これは能動文の主語を3人称複数(3人称単数の場合もある)の代名詞にするもので、「(誰かが)食べ物を食べた」という文が受動の意味を表す。

- (2) bá-alí-ly-a ífyákulya (ku mumbúlu)
3pl-PST-食べる-FV 食べ物 by 野犬
「食べ物が（野犬に）食べられた」

バントゥ諸語以外のニジェール・コンゴ語族の諸言語を見ると、受動形に特化した形態をもつ言語は少なく、多く言語において「非人称受動文」が用いられる。さらに、マンデ語派やグル語派の言語のように、自他同形の動詞が能動文にも受動文にも用いられる例がある。(3) はバンバラ語（マンデ語派）の能動文と受動文の例である。

- (3) mùso bé dénnin kò (能動文)/ dénnin bé kò (mùso fè) (受動文)
女 PROG 女の子 洗う 女の子 PROG 洗われる 女 by
「女の人が女の子を洗っている」 「女の子が（女の人に）洗われている」

受動形動詞による受動文はバントゥ諸語の顕著な特徴であるが、生産性を失い衰退しつつあるように見える。それがニジェール・コンゴ語族全体の通時的な変化の方向と一致しているものであると捉えられるかどうかは、今後の検討を要する問題である。

Forum 4

フォーラム「アフリカにおける社会連帯経済の可能性」

齋藤文彦（龍谷大学）

辻村英之（京都大学大学院農学研究科）

Possibilities of Social and Solidarity Economy in Africa

Fumihiko SAITO (Ryukoku University)

Hideyuki TSUJIMURA (Graduate School of Agriculture, Kyoto University)

2015年に持続可能な開発目標（SDGs）が採択されたことにより、先進諸国も発展途上諸国も共に環境負荷を伴わない、社会的に包摂生のある開発の実現を要請されることになった。SDGsの実現にはまず先進諸国の取り組みが必要と考えられがちであるが、アフリカ大陸においては、とりわけ南部アフリカにおいては、気候変動の悪影響は今後深刻化することが予測されているため、その実現はアフリカ諸国においても急務である。

あわせて21世紀に入り、資本主義経済の病理や限界がますます強く意識されることになった。そのため、資本主義に代わる経済への模索や、資本主義を補完することによって多角的な経済を模索する試みなど、経済を市場を通じた交換のみに限定せず、より幅広い視点から経済を再構築する試みが本格化している。その中でも、本フォーラムは社会連帯経済（social and solidary economy, SSE）に着目する。SSEとは、価格競争に力点を置いたグローバル市場経済に代わり、包摂的社会において人びとが立場を超えて連帯し生きがいを実感できる経済である。このような新しい試みはアフリカにもおよび、各地で協同組合の活動が見直されたり、ソーシャルビジネスが新しい息吹を吹き込んだりしている。

他方、アフリカでは経済活動において、インフォーマル部門がこれまで主要な役割を果たしてきた。市場による取引を近代的組織で支える仕組みを資本主義経済とするならば、インフォーマル経済はしばしば近代化に取り残された貧しい人びとがその最低限の生活を確保するために営む生業を宿してきた。組織化された市場の外側で、人びとは命を繋いできたのである。その意味で、インフォーマル経済はSSEとの親和性が高く、近代化に取り残されたアフリカであるからこそ、むしろ近代化の病理である資本主義を克服する可能性をより高く秘めているのかもしれない。

本フォーラムでは、このような問題意識から、齋藤が南アフリカのソーシャルビジネスの例を、また辻村がタンザニアにおけるフェアトレード事業の事例を報告する。これら2つの事例の考察を通じて、資本主義経済以降の経済のあり方について模索する。もとよりこれは非常に大きな探求であり、我々の研究もまだ初期的段階にあるが、しかし私たちが今大きな人類史上の転換点に立っている今、参加者の方々との意見交換を通じて、探求を深めたい。

なお、本フォーラムは科研費JP17K00704、ならびに龍谷大学国際社会文化研究所の助成を受け、その成果の部分的報告である。

南アフリカにおけるソーシャルビジネスの可能性

齋藤文彦

龍谷大学

Possibilities of Social Business in South Africa

Fumihiko SAITO

Ryukoku University

2015年に持続可能な開発目標（SDGs）が採択されたことにより、先進諸国も発展途上諸国も共に環境負荷を伴わない、社会的に包摂生のある開発の実現を要請されることになった。SDGsの実現にはまず先進諸国の取り組みが必要と考えられがちであるが、南部アフリカにおいても気候変動の悪影響は今後深刻化することが予測されているため、その実現は途上諸国においても急務である。

本報告ではこれまでの学会発表に引き続き、南アフリカに焦点を当てる。南アフリカはアフリカ最大の経済圏の1つであるが、同時に温室効果ガスの排出も極めて多い。2011年にダーバンにて気候変動枠組条約国会合が開催され、グリーン経済への移行への推進もなされている。しかしその一方で、持続可能性の実現には多くの課題も抱えており、事例研究には好都合である。

本報告では、南アフリカにおけるソーシャルビジネス（SE）の可能性について考察する。2019年の現地調査では、興味深い取り組みを実施している企業家たちに出会った。少し前までは、同国におけるSE活動は、正しくは理解されていなかった。ビジネスとしては利益をあげないし、チャリティーとしても良心的ではないし、とされていた。しかしSEへの理解はこの5年くらいで大きく変化し、今ではケープタンならびにヨハネスブルグ周辺には、多くの活動が展開し始めている。そして、SEを支えるためのいわゆるエコシステム（一連の有機的な支援の仕組み）が急速に広がりつつある。

このようにSEの活動が急速に広がりつつあるため、全体像を理解することは容易ではない。本報告では、同国では教育分野で活動するSEは比較的多いため、そのうちの1つ、SPARK Schoolsについて考察をおこなう。SPARK Schoolsは、Stacey Brewerが設立した。彼女はMBAの勉強をしている時に、自国の教育状況に大きなショックを受けた。南アフリカでは多くの予算がぎ込まれているにもかかわらず、他の途上諸国と比べても、成果がまったく上がらないからであった。そのため、彼女は財政的に持続可能な私立学校教育モデルについての論文を執筆し、MBA課程修了後にそれを実践した。

2013年に初めての小学校が作られ、今ではヨハネスブルグ周辺に21の学校がある。1万人以上の生徒と、千人以上のスタッフが働いている。SPARK Schoolsは、アメリカを初めてとする各地の社会的弱者向けの先進的な教育の取り組みを参考にして創られた。教育の方針として、*service, persistence, achievement, responsibility, kindness* というSPARKを大切にし、将来は大学へ行くことを目指すという高い目標を掲げ、その実現にむけて生徒たちは生き生きと学んでいる。そのために、例えばコンピューターを導入し、生徒1人1人が自分のペースで学習できるようになっている。他方コンピューターでの自習は、生徒を幾つかの班にわけることにより、かかる費用を一定に抑えることに成功した。その結果、公立の小学校と比べても学費の設定で同じくらいか、また学年によっては安い費用でより質の高い教育が受けられるようにした。そのためSPARK Schoolsへの入学希望者は増え続けている。

このビジネスモデルは大変優れており、未だに知識偏重で生徒の主体性を軽視している日本の教育が学ぶことも多いとさえ思う。しかしながら、1つの問題はこのモデルでは、そこそこの低所得者層を対象とすることはできても、最貧困層を対象とはできないという点である。確かに公立学校と比べて競争力のある教育を提供はできるが、その学費さえも払えない課程にはSPARK Schoolsは依然として遠い存在である。これについては、一義的には政府が支援をすべきであろう。その意味で、他のSEに見られるように、この国の教育全体を改善するには政府との政策対話が今後は不可欠となるであろう。

社会的連帯経済としてのフェアトレードのサステナビリティ ルカニ村・フェアトレード・プロジェクトを事例として

辻村英之（京都大学大学院農学研究科）

Sustainability of Fair Trade as Social and Solidarity Economy A Case of Fair Trade Project for Lukani Villagers

Hideyuki, TSUJIMURA (Graduate School of Agriculture,
Kyoto University)

資本主義の補完としての[市場メカニズムでは満たされにくいニーズを人々が協力して（人間を重視する組織・企業などにより）満たす]「社会的経済」。資本主義のオルタナティブとしての（「利益」よりも「連帯」を重視する）「連帯経済」。両者を足し合わせ、資本（市場）主義とは別の論理の下にある社会的組織・実践など非商品化された経済活動・領域が「社会的連帯経済」である。「生産者、労働者、消費者、市民らの連帯に基づく集合的行動による社会的な目的あるいは環境的な目的にプライオリティをおいた経済活動」(Utting, 2015)という定義もある。協同組合、社会的企業、NPO(NGO)などをその主体とし、フェアトレード、CSA（産消提携）、マイクロクレジット、ソーシャルビジネスなどをその取り組みとする。

本研究においては、資本主義システムのさらなる深化「行き過ぎた資本主義」の影響として、民間企業が軽視・無視するようになった社会性・公共性・非営利性の高いニーズ（それらに向かう民間資本の流れが停滞し満たされなくなったニーズ）をすくい上げるものとして、連帯経済を位置付けたい。つまり、「行き過ぎた資本主義」の下であるからこそ意義を持つ（それゆえ拡張している）、資本主義の中にあるオルタナティブな（「利益」よりも「連帯」を重視する資本主義とは別論理の）1セクター（活動・領域）として、社会的連帯経済を位置付けたい。

この位置付けにより、社会的連帯経済の特性が強いほど（連帯経済としての評価が高いほど）、資本主義の下での持続可能性（サステナビリティ）が危うくなることを強調できる。サステナビリティは、経済面、環境面、社会面の指標によって評価されることが一般的だが、連帯経済の度合の高さは、環境・社会面の指標の高さと経済面の指標の低さによって評価される。それゆえ社会的連帯経済について、経済面のサステナビリティの度合の低さをいかに補って持続させるか、その努力・工夫の解明が、連帯経済度合の評価とともに重要な分析課題になる。

本研究においては、タンザニア・キリマンジャロ山中のルカニ村における、コーヒーのフェアトレード・プロジェクトを事例として、①社会的連帯経済の特性・度合の高さと、その高さがゆえに同村で生じている生産者・産地支援の成果・影響を明らかにするとともに、その生産者支援の影響で小売（消費者）価格が上昇し、消費国・日本における販売が困難になっている中、プロジェクトを持続させるためにキョーワズ珈琲が実践している、②フェアトレード・コーヒー販売の努力・工夫を解明する。この2つの課題へのアプローチを通して、③社会的連帯経済やフェアトレードのサステナビリティの評価枠組みの構築をめざしたい。

連帯経済度合の高さを示す指標として、まずはフェアトレードの「最低価格保障」から生じる生産者価格・輸出価格・小売（消費者）価格の高さ（通常コーヒーの価格との比較）、その影響としてのルカニ村におけるコーヒーの生産者・収穫量の増加について明らかにした。次にフェアトレードの「還元金支払」から生じるルカニ村における社会開発の進展（図書館・中学校の建設、保育園の教材購入、コーヒー加工場・苗木場の整備、新品種の苗木普及など）についても解明できた。

引用文献

P.Utting(2015), Introduction, P.Utting(ed.), Social and Solidarity Economy, Zed Books, pp.1-3

Forum 5

在来知と生態学的手法の統合による革新的な森林資源マネジメントの共創

【Ⅱ】

安岡宏和（京都大学）

Co-creation of innovative forest resources management combining ecological methods and indigenous knowledge

【Ⅱ】

Yasuoka Hirokazu (Kyoto University)

中部アフリカの熱帯雨林では、アンテロープ類を主とする野生動物の肉、いわゆるブッシュミートが、人々のタンパク源となってきたが、近年、狩猟の持続性が疑問視されるようになってきている。カメルーン東南部では1990年代から木材生産が拡大し、その過程で整備された木材搬出用道路によって外部のハンターや商人のアクセスが容易になった。それまで世帯内消費や村内での売買に目的が限定されていた野生動物の狩猟は、広域の需要に応じて急激に拡大し始めた。ブッシュミート取引の野放図な拡大は、カメルーンだけでなく、世界の熱帯雨林地域で生じており、生物多様性の毀損だけでなく、重要なタンパク源の消失という観点からも、国際的な関心をあつめている。

このような背景のもとで、京都大学アフリカ地域研究資料センターは、2018年から2023年までの5年間、カメルーン東南部の森林地域においてSATREPSプロジェクト「在来知と生態学的手法の統合による革新的な森林資源マネジメントの共創 (Projet Coméca)」(研究代表者：安岡宏和)を実施している。プロジェクトが目標とするマネジメントは、住民の経験や知識が十全に発揮されるよう、また彼ら自身が運用しやすいように、在来知や慣習的な資源利用のあり方を尊重しながら構成されたものであり、同時に、保全機関にたしても十分な説得力を持つものである。いわば、熱帯雨林の豊かな生態系とそこで暮らしてきた人々が現にもっているポテンシャルを持続的なかたちで引きだしていくことができるような、在来知と科学知の双方に根ざした森林資源マネジメントを〈共創〉することをめざしている。

本フォーラムでは、これまでの成果の一部を報告し、革新的で実用的な森林資源マネジメントとはどのようなものであるかについて議論する。

プログラム

趣旨説明：安岡宏和

報告1：戸田美佳子「家計調査から見たカメルーン熱帯林地域住民による野生動物消費とそのニーズ」

報告2：本郷峻「森林性ダイカー類の個体数密度に対する人間活動の影響：効果的な個体数管理システムの構築に向けて」

報告3：安岡宏和ほか「カメラトラップと狩猟データにおける種構成の相違：持続的狩猟の指標としてのR/B比の可能性と課題」

報告4：ウィリアム・カムゲンほか「Estimation of Dung Decay Speed for Forest Duikers (*Philantomba monticola* & *Cephalophus* spp.) in Southeast Cameroon: Seasonal Differences and Implication for Monitoring」

報告5：平井將公ほか「カメルーン東南部における非木材林産物のアベイラビリティと地域住民のアクセシビリティ」

ディスカッション

家計調査から見た カメルーン熱帯林地域住民による野生動物消費とそのニーズ

戸田美佳子（上智大学）

Bushmeat consumption of Cameroon rainforest inhabitants and their needs: From family income and expenditure survey

Mikako Toda (Sophia University)

カメルーン東南部の熱帯雨林地域では、1970年代に輸出用木材の生産のための伐採事業が開始され、その過程で整備された道路網を利用することで、外部からの人口流入が促され、森林生態系の荒廃に拍車をかけていると指摘されている。また伐採路は森の奥地へのアクセスを容易にし、ブッシュミート取引による野生動物の減少と、さらには象牙を目的にした外来の密猟者による国際密猟が問題となっている。このような背景から、カメルーン政府および国際機関は密猟の取締りと保護区に依存した森林保全を年々強化している。

他方で、家畜飼育に適した環境ではない熱帯雨林において、地域住民はタンパク源を野生動物（ブッシュミート）に強く依存してきた。くわえて、伐採路の整備にともなう流通経路の改善により、ブッシュミートは現金収入源としても重視されるようになってきている。したがって地域住民の生活を維持しながら保全を推し進めるためには、住民のダイエツト（とくにタンパク源）と現金収入のための動物利用の実態を解明する必要がある。

本発表では、カメルーン東南部の SATREPS プロジェクトサイトにおいて、地域住民の現金ニーズ、現状の現金収入や支出の季節変動を把握するために2019年8月より実施している家計調査の結果を報告する。調査地域における主な現金収入源は換金作物のカカオ栽培であるが（Hirai 2014）、本研究では調査対象世帯に、カカオ生産に積極的ではない若者世帯、狩猟活動が行えない高齢者世帯や女性世帯も含めることで、ブッシュミートならびに野生果実等の植物性非木材林産物（NTFPs）の売買からの収入の重要性とタンパク源確保の問題を検証する。

家計調査は、プロジェクト地域に暮らす農耕民20名を対象とし、スマートフォンの家計簿アプリを利用してデータの収集をおこなった。調査協力者に研究の目的ならびにスマートフォンの操作方法を説明した上で、各世帯内のすべての支出項目と収入項目について、その品目および売買額、取引相手の入力を依頼した。またブッシュミートに関しては、写真の撮影と現地名も記録してもらった。

調査の結果、支出項目に関しては教育費や医療費を除くと、ブッシュミートの購入費が最も高かった。森林地域においては植物や昆虫、魚介類などからタンパク質は摂取できる一方、住民はブッシュミートに他では代替できない価値をおいている。他方、収入項目については、カカオや調味料として利用される NTFPs の販売による現金収入のほか、若者男性を含む世帯ではカカオ収入の有無に関わらずブッシュミートを収入源の一つとしていた。さらにカカオ畑を所有しない世帯ではブッシュミート販売が唯一の現金収入源となっている場合もあった。

カメルーンの法制度上、自給目的の狩猟でさえ厳しい条件を課されており、象牙目的の狩猟と同様に「密猟」として扱われるケースが多い。住民は日常生活の一部として狩猟活動をおこなっているつもりでも、取締りの対象となりうる。他方で、本研究からは、村内のブッシュミート取引は高齢世帯や女性世帯にとって動物性タンパク質を確保するための手段となっていることがわかった。すなわち、売買を伴うブッシュミート取引もまた、地域住民の食料安全保障の点からは重要であることが示唆される。以上の点をふまえ、本発表では、住民間、住民-商人間のブッシュミート売買の詳細とともに、地域住民が必要とするブッシュミート消費量についても検討したい。

森林性ダイカー類の個体数密度に対する人間活動の影響 効果的な個体数管理システムの構築に向けて

本郷峻（京都大学）

Anthropogenic effects on population density of forest duikers Toward the establishment of an effective management system

Shun Hongo (Kyoto University)

近年の中部アフリカ熱帯林における商業伐採に伴う狩猟圧の拡大によって、ブッシュミート問題が顕在化する中、効果的な野生動物管理の必要性が高まっている。その実現のためには客観的データに基づく正確な個体数モニタリングが不可欠である。特に、中部アフリカ熱帯林では、中型の偶蹄類であるダイカー類 (*Cephalophini*)が住民の主要なタンパク源のひとつとなっており、ダイカー類の個体数管理は持続的な食料供給のために重要な課題である。

本発表ではまず、森林性ダイカー類（偶蹄類）の個体数密度推定法を概観し、従来法の問題点とカメラトラップ法の有効性について検討する。特に、視野の悪い熱帯林での調査法として有望視されてきた夜間直接観察法が、昼行性のブルーダイカー (*Philantomba monticola*) の個体数を大幅に過大評価する可能性があることを指摘する。

続けて、私たちがカメルーン東南部熱帯林で2018年度より行ってきた、カメラトラップによるダイカー類の密度推定調査の結果を示す。密度推定の結果から、人間活動が個体数密度に与える影響の程度が小型のブルーダイカーと中型のピーターズダイカー (*Cephalophus callipygus*) とでは大きく異なることが分かった。また、狩猟圧の強さは村からの距離だけでなく、村の規模や人口構成（農耕民コナベンベと狩猟採集民バカの比率）によっても大きく異なることが示唆された。

さらに、フィールド調査の過程で見えてきた、従来のカメラトラップ研究の問題点について考察する。従来の研究では、動物の密度や分布に影響を与える要因として、衛星写真などの遠隔探査技術で簡便に得られる変数（例えば、最も近い集落からの距離）が人間活動の代替指標として用いられることが多い。しかし、私たちの調査から、各村の住民の利用域は、村からの単純な直線距離とは必ずしも一致しないことがわかってきた。

以上のような住民活動の実態把握は、個体数密度の正確なモニタリングのためにはもちろんのこと、効果的な管理システムの構築においても重要であると考えられる。これらの知見から、効果的なダイカー類の個体数管理システムの展望について議論する。

カメラトラップと狩猟データにおける種構成の相違 持続的狩猟の指標としての R/B 比の可能性と課題

安岡宏和 (京都大学)、南倉輔 (京都大学)
ブリス・ゼファック (プロジェ・コメカ)、水野佳緒里 (京都大学)
本郷峻 (京都大学)

Differences in species compositions of camera-trap and hunting harvests Potential and issues of the R/B ratio as an indicator of sustainable hunting

Yasuoka Hirokazu (Kyoto U), Minami Sosuke (Kyoto U),
Brice Dzefack (Projet Coméca), Mizuno Kaori (Kyoto U), &
Hongo Shun (Kyoto U)

カメルーンにおいて、ブッシュミート・クライシスに取り組むうえで大きな障壁となっているのは、保全機関と地域住民との協力関係の構築が困難になっているという点である。問題は、カメルーンにおける現行の保全関連の制度上、自給目的の狩猟は、かなり厳しい条件を満たせば合法になるものの、多くの場合、象牙目的の狩猟などおなじように「密猟」として取締りの対象になるという点である。

ほんらい、住民による自給目的の狩猟は彼らの生活と文化の根幹をなす「生業」であり、外部者による「密猟」とは性質の異なるものである。すなわち「生業」としての狩猟を正当なものとして認めることが、保全推進者と地域住民との協力関係の構築をうながし、ひいては、より効果的な生物多様性保全の推進につながると考えられる。

ただし、「生業」としての狩猟に正当性を認めるといっても、「地域住民は持続的な資源利用を心得ているので、彼らの好きにさせる」というのでは、保全機関とのあいだで合意形成にいたることは難しい。なぜなら、交通網が発達し自由に人が往来する今日、そのようなやり方がうまく機能しないことは、ブッシュミート交易の急拡大において如実にしめされているからである。熱帯雨林地域では、元来、野生動物はじめとする森林資源利用のガバナンスはたいへんルーズで、外来者の参入を抑制したり、住民同士で資源管理を強化することは容易ではなかった。また、人々は日々の生活をとおして森林資源に関する広範かつ詳細な知識を身につけているものの、そのような「在来知」は、概して、暗黙的な知識であるため、たとえ彼ら自身が持続的な狩猟をおこなっていたとしても、そのことを保全機関に説得的に提示することは容易ではない。

そこで、本プロジェクトでは、地域住民の主体的参画にもとづく野生動物マネジメントを実現するために、保全機関にたいする科学的なアカウンタビリティをもち、同時に、地域住民が日常的な生活のなかで得られる情報をもとにして、みずから運用できる野生動物のモニタリング方法を考案することを目的として、研究を実施している。本報告では、そのようなモニタリングのための指標として Yasuoka et al (2015) の提案した R/B 比、すなわちレッドダイカー [R] (この地域には 4 種いるが、*Cephalophus callipygus* と *C. dorsalis* が大部分を占める) とブルーダイカー [B] (*Philantomba monticola*) の比に着目して、カメラトラップによって推定した地域群集における R/B 比と、じっさいの狩猟の成果における R/B 比を比較検討しながら、持続的狩猟の指標としての R/B 比の可能性と課題について議論する。

**Estimation of Dung Decay Speed for Forest Duikers (*Philantomba monticola* & *Cephalophus* spp.) in Southeast Cameroon
Seasonal Differences and Implication for Monitoring**

William Kamgaing (Kyoto University), Brice Dzefack (Projet Coméca) & Yasuoka Hirokazu (Kyoto University)

カメルーン東南部に分布する森林性ダイカー (*Philantomba monticola* & *Cephalophus* spp.) の糞消失速度の推定
季節的変異とモニタリングへの示唆

ウィリアム・カムゲン(京都大学)、ブリス・ゼファック (プロジェ・コメカ)
安岡宏和 (京都大学)

Accurate estimate of animal density is a prerequisite for sound management and conservation. Most studies in Central Africa used indirect methods whereby sign (dung or nest) density is converted into animal density using sign production rate and decay speed. We estimated dung decay speed for blue duikers and red duikers during the rainy season and dry season in Nki National Park (Southeast Cameroon) and investigated the factors influencing the decay.

We searched fresh dung piles along line transects. To account for samples that disappear rapidly and allow high resolution of decay speed estimate, we revisited each sample once or twice before 24 hours.

Mean dung decay speed for the blue duiker obtained using a logistic regression analysis was significantly smaller (faster) in the rainy season (1.5 ± 2.6 days) than in the dry season (9.5 ± 15.4 days). Similarly, dung decay speed for red duikers was significantly smaller during the rainy season (2.2 ± 3.1 days) than in the dry season (15.5 ± 12.4 days). Insect attack was the main decay factor, especially in the rainy season.

Differences in dung decay speeds between previously published estimates and our findings suggest that using conversion parameters calculated in single-season, in-situ or ex-situ, can substantially bias animal density estimate. Our study emphasized the importance of developing survey methods that do not depend on conversion parameters to estimate animal density.

カメルーン東南部における非木材林産物のアベイラビリティ と地域住民のアクセシビリティ

平井將公（京都大学）、安岡宏和（京都大学）

High availability of NTFPs and limited accessibility of local people in southeast Cameroon

Hirai Masaaki (Kyoto University) & Yasuoka Hirokazu (Kyoto University)

非木材林産物（NTFPs）は、森林に住んでいる人々の生計を向上するための効果的なツールと考えられており、同時に、生物多様性の保全にも貢献することが期待されている。カメルーン東南部では、他の熱帯地域と同様に NTFPs がさかんに取引されている。なかでも取引量が多いのが、ナッツ類である。ナッツ類は「資本」を損なうことなく、つまり木を残したまま、その果実のみを収穫できるため、生態学的に持続性の高い資源だといえる。

ただし、経済的な観点からいえば、資源のアベイラビリティは、そのバリューチェーンの持続性に影響する、つまり、資源が少なかったり不安定であったりすると、安定的な収入につながらない。したがって、NTFPs が地域住民の生計向上にどれだけ資するかという観点、また、その利用のマネジメントとガバナンスの観点からいえば、ナッツ類の資源量を把握することは、基礎的な情報として重要である。それにもかかわらず、野生の NTFP 種を対象として資源量を把握した研究はほとんどない。

そこで本研究では、10 種の NTFP 種を対象として、その結実量と収穫量について調査した。その結果、カメルーン東南部の NTFP 生産は非常に大きなポテンシャルをもっていることがわかった。とくに、*I. gabonensis* と *R. heudelotii* は、大量のナッツを生産し、取引量も多く、高い経済的価値を持っている。ところが、それらのナッツについて、人々の利用地域における年間生産量を推定したところ、収穫されたナッツは、生産量のわずか数%でしかなかった。また、*I. gabonensis* の収穫に必要な労働時間を計測し、それをもとに推算したところ、もしすべての住民が最大限の労働投入を凶ったとしても、5、6年に一度の不作の年をのぞけば、収穫できるのは生産量のせいぜい 10%程度の収穫にとどまることが分かった。したがって、かりに収穫効率を飛躍的に改善するようなイノベーションがなされたとしても、その資源量には十分な余裕がある。

NTFPs 利用の阻害要因となっているのは、むしろ、資源へのアクセス制限である。カメルーン東南部の森林では 1990 年代からゾーニングが実施されてきた。そのため人々が歴史的に利用してきた土地は、現在では、国立公園であったり、伐採区や観光狩猟区として営利会社に使用权が配分されていたりして、無条件に NTFPs を採集する地域はきわめて限定されている。ボトルネックは、資源のアベイラビリティではなく、資源へのアクセシビリティなのである。

資源へのアクセシビリティが制限される直接的な理由は森林のゾーニングであるが、その背景にはブッシュミート・クライシスである。森に依存して生活してきた人々にとって、NTFPs の採集はそれだけで独立してなされるものではない。人々は、森に入れば、狩猟や漁撈、その他さまざまな生業活動をおこなう。しかし、これらの生業活動は、密猟やブッシュミート取引の取締りに力を入れるカメルーンの森林行政や、営利事業として観光狩猟をおこなう会社とのコンフリクトの原因となるわけである。

したがって、NTFPs 利用の促進するため、あるいは伝統的な（といってもつい 20 年前までおこなっていた）利用のあり方を回復するためには、いまそこにある豊富な資源にたいして十全なアクセシビリティを確保するためには、ブッシュミートをめぐる森林行政機関や営利事業者らのステークホルダーとのコンフリクトをいかに解消できるか、という点が重要である。

Forum 6

サハラ以南アフリカのサニテーションを Co-create する

牛島健（北海道立総合研究機構）・清水貴夫（地球研・京都精華大学）

Co-creating Sanitation in Sub-Sahara Africa

Ken USHIJIMA (Hokkaido Research Organization) and Takao SHIMIZU (RIHN and Kyoto Seika Univ.)

■本フォーラムの趣旨

SDGs-6 に書かれる「すべての人に安全な水とサニテーションを」の達成に向け、世界中でトイレを普及させることを目指した活動が各地で行われている。サブサハラアフリカにおいてもトイレを含むサニテーションの問題は重要な課題の一つである。総合地球環境学研究所「サニテーション価値連鎖の提案：地域の人によりそうサニテーションのデザイン」プロジェクト（「サニテーション・プロジェクト」）では、こうした人びとを取り巻く多様性を、ブルキナファソ（乾燥帯）、ザンビア（サバンナ）、カメルーン（熱帯雨林）と言った自然環境と、都市（周縁部）、地方都市、農村と言った住環境を分類して分析を進めている（図）。

【図：本フォーラムで扱う自然環境と住環境】

	ブルキナファソ	ザンビア	カメルーン
都市（周縁部）	△	○	△
地方都市	△	-	△
農村	○	-	○

（○-本フォーラムで主に触れる環境。△-本フォーラムでは触れないが課題とする環境）

それぞれの環境におけるサニテーションの現状を知るにつけ、アフリカ各地の人びとを取り巻く環境は多様であり、画一的な方法でサニテーションを改善することは難しいことが分かった。これを、単にケースバイケースとして考えるのではなく、サニテーションを貫く一つの問いとして、如何に「人によりそう」形を考えるかについて考えたい。

本フォーラムでは、この問いの一つの答えとして、サニテーション・プロジェクトの各地で見出した、それぞれの地域におけるサニテーションを取り巻く状況や展開の方向を示す。そして、それぞれのフィールドで様々なステークホルダーと共創（Co-Creat）した、そのプロセスを検証する。

■プログラム

【発表者】

牛島健（道総研）ほか：趣旨説明「サニテーションの問題解決における Co-creation 「サハラ以南アフリカのサニテーションを Co-create する」趣旨説明」

清水貴夫（地球研+京都精華大）ほか：「汚泥の農業利用をめぐるサニテーションを Co-create する：ブルキナファソ中北部州 Ronguin 村とローカル NGO との協働の事例から」

林耕次（地球研）ほか：「定住した狩猟採集民のサニテーションを Co-create する試み：カメルーン東部州の事例より」

片岡良美（北海道大学）ほか：「映像を活用した参加型アクションリサーチ：ザンビアにおけるサニテーション課題解決をめざす子どもクラブの事例」

【コメンテーター】

草郷孝好（関西大・地球研）：「持続的な生活改善のための協働型アクションリサーチの重要課題：サニテーションプロジェクトへのコメント」

サニテーションの問題解決における Co-creation
「サハラ以南アフリカのサニテーションを Co-create する」趣旨説明

牛島健（北海道立総合研究機構）・清水貴夫（地球研・京都精華大学）

Co-creating Sanitation in Sub-Sahara Africa

**Ken USHIJIMA (Hokkaido Research Organization) and Takao SHIMIZU (RIHN
and Kyoto-Seika Univ.)**

MDGs に続き SDGs においてもサニテーションの問題解決が大きく掲げられているとおり、サニテーションは世界中で今も未解決の大きな問題と言える。かつては、経済成長を背景に、水洗トイレを普及させ下水道を整備することが、ほぼ世界共通のサニテーション問題の解決策と認識されていた。日本はまさに、この路線に従って、短期間で水洗トイレの普及を成し遂げた成功例であった。しかし、SDGs の重要なポリシーである「誰一人取り残さない」スタンスでサニテーションの解決策を考えるためには、上記のモデルでは対応できる対象が極めて限定的である。多様な状況に対応するための、新たなサニテーションのアプローチが求められている。

サニテーションの問題を考える上で重要な点は、サニテーションは単なるトイレの問題ではなく、トイレを入口とした一連のマテリアルフローの問題であり、またそれに付随する価値フローの問題でもあるということである。例えば、現在の日本のしくみであれば、排泄物は下水道を通り、下水処理場において分解・無害化され、水分は河川等に放流され、残渣の一部は灰にしてセメントの材料等として活用される、という一連のマテリアルフローが構築されている。また、このしくみの中で、多くの人が働き、収入を得られるような価値フローのネットワークも存在している。複雑さの程度は異なるにせよ、各フィールドにおいてサニテーションのしくみをつくるということは、こうしたマテリアルと価値の一連のフローを構築することに他ならないと考える。

こうした仕組みは、一朝一夕で構築できるものではないが、まずは各フィールドの生活者を取り巻く現在のマテリアルフローおよび価値フロー、または社会関係のネットワーク全般を丁寧に紐解き、そこにフィットする形でサニテーションのマテリアルフローおよび価値フローを考えることが、唯一の近道ではないかと考える。そして、そのためには生活者にまずよりそい、そして彼らとの共創（Co-creation）によってサニテーションのしくみを考えていくことが必須と考える。

以上の考えに基づき、本フォーラムでは、サハラ以南アフリカのいくつかのフィールドにおける共創（co-create）の取り組みを題材として、如何にして「人によりそい」、サニテーションのしくみを共創（co-create）することができるかについて議論したい。

**汚泥の農業利用をめぐるサニテーションを Co-create する
ブルキナファソ中北部州 Ronguin 村とローカル NGO との協働の事例から**

清水貴夫（地球研・京都精華大学）、中尾世治（地球研）

**Co-creating sanitation value chain sludge on the crop field
From the co-working case study on Ronguin, centre-nord region, Burkina Faso**

Takao SHIMIZU (RIHN, Kyoto Seika University)、Seiji NAKAO(RIHN)

本発表では、まず、2017 年よりブルキナファソ中北部州バム県（Province du Bam）において、ローカル NGO（AJPEE）と Ronguin 村の農家、そして研究者の間で行われた、汚泥の農業利用とサニテーションを組み合わせさせた活動を報告する。この研究-実践活動を通して明らかになりつつある、半乾燥地の農村におけるサニテーションのあり方を検討する。なお、2017 年ころからの治安不安がさらに悪化したため、本研究-実践活動は現在一次休止している。

サーヘルを間近に控えたバム県はいわゆる半乾燥地（年降水量 600 mm 前後）で、人びとは、主に家畜飼養を交えた天水農業を生業としている。数十年前から気候変動と人口増加に伴う土壌劣化（砂漠化）に苛まれ、食糧増産、ないし生産効率維持のために土壌の改善がこの地域一帯の目下の課題となっている。この課題は国際的にも認知されており、2019 年にノーベル・オルターナティブ賞を受賞した Yacouba Sawadogo 氏は、正に土壌改善と生産性の向上のためのローカル技術（ザイ）の普及を評価されたことはその証左である。さらに述べれば、この地域で広がるこうした技術は、主に家畜糞と作物残滓を混ぜ合わせてコンポスト化したものの使用が一般的であるが、その量は慢性的に不足しており、定住農耕をするモシの人びとの間では家畜飼養が一般化し、それぞれが家畜を殖やしている。

その一方で、この地域では、1980 年代より、3 波に渡り、国際 NGO（Plan International Burkina）の主導による、各回数千個レベルでピット・ラテリン（トイレ）の普及活動が行われた。この活動の結果、この地域には、トイレが点在しており、当初我われが想定した以上に野外排泄は少ない。そして、バム県の県庁所在地である、コングシ市では、トイレの引き抜きを生業とする「引き抜き屋」が存在し、さらに、その汚泥が売買され、すでに一部で農業利用されていることも確認された。

Ronguin におけるトイレの受容は、NGO の活動により想定外に進展している。その進展状況は、単に数が増加しただけでなく、年代を追うごとにトイレが次第に屋敷地内に設置されるようになってきていることに表れている。聞き取り調査において、トイレ設置の障壁となったのは、その臭いであるとする回答が多かったが、いわゆる通気筒をつけて臭いを排出するとともに、トイレの後に灰を入れることで臭いを抑えるという工夫は多くの人実践していることが分かった。また、トイレを共有できる家族単位が「夫婦-子ども」という現代的な単位であったこともトイレ受容を後押ししているものとして、興味深いところである。

こうした背景のもと、発表者は、次のような活動を行った。まず、2018 年度には、ローカル NGO（AJPEE）と Ronguin 村の人びとと共に、汚泥の肥料効果を共有するため、同村内パイロットファームを設置し、家畜糞コンポストと汚泥の生育比較を行った。その結果、汚泥の肥料に若干の優位性が認められた。

そして、2019 年 5 月にはコングシ市の AJPEE 事務所において 40 名の参加者（主に Ronguin 村住民）とワークショップ形式で、汚泥の肥料効果、および、筆者らによる社会調査の結果を参加者らと共有し、この地域におけるトイレのあり方について考察する機会を得た。

定住した狩猟採集民のサニテーションを Co-create する試み
カメルーン東部州の事例より

林 耕次（地球研）、清水貴夫（京都精華大学・地球研）、
中尾世治（地球研）、山内太郎（地球研・北海道大学）

**Attempt to Co-creating Sanitation of settled hunter-gatherers
From the case of Eastern Cameroon**

**Koji HAYASHI (RIHN), Takao SHIMIZU (Kyoto Seika Univ., RIHN),
Seiji NAKAO (RIHN) and Taro YAMAUCHI (RIHN, Hokkaido Univ.)**

アフリカ中部カメルーン共和国の東部州には、かつて森林での遊動生活を主体としていたピグミー系狩猟採集民バカ（Baka）が生活している。1950年代以降は定住化と農耕化の政策が浸透して、現在、彼らは一年の大半を幹線道路沿いの定住集落で住居を構え、焼畑農耕中心の生業を営んでいる。他方で季節に応じて狩猟採集や漁撈活動を伴う森林での移動生活も頻繁におこなっているが、いずれの生活形態においても、彼らの多くは特定の場所にトイレをはじめとするサニテーションの設備を持たず、積極的に使用することはなかった。発表者が2005年から2010年にかけてN村地域のバカを対象とした個体追跡による調査では、森林キャンプと定住集落において日中の行動観察を行ったが、いずれも「便意をもよおしたら草葉の陰に移動して用を足す」というものであった。定住集落においては、他の農耕民や外部からの移住者である商人らが同じ地域に暮らしているが、彼らはいずれも簡単なトイレ（地面に穴を掘り足場に板を渡した、いわゆるピットラトリン）を住居の近くに造り、そこで用を足している。2016年にG村のバカ男性に、特定のトイレを造らない理由を尋ねた際には、「排泄物を一カ所に集めるのは不潔だ」という声があった。確かに、簡略な設備で、こまめな清掃などの管理が行き届いていないトイレは清潔とはいえず、多くの蛆虫が湧いて周辺には蠅が飛び回っている。また、汚物が一杯になったトイレは雨季になると溢れて周辺を汚染する原因となり、衛生的にもリスクを抱えることになる。特定のトイレを持たないバカの人びとにとっては、定住集落の周囲に二次林や焼畑が広がる生活環境や、比較的低人口圧で営まれる生活形態等を考慮すると、あえて特定のトイレを造らないほうが合理的なのかもしれない。他方で、2017年から調査を開始した地方都市のL周辺では、いくつかのバカ集落が点在しているが、そこではいくつかのトイレを観察することができた。大半は囲いや屋根がなく、浅い穴に足場の板や灌木を置いただけの、バカ語で「*bu na yando* (=hole of latrine)」とよばれていた簡易トイレである。L周辺でのインタビューやアンケートによると、トイレが十分に普及していないながらも、衛生面や安全性を考慮すると特定の場所にトイレがあることが望ましいと考える人びとが大半であった。2019年以降の調査では、バカのトイレ作りや安全な飲料水の確保、手洗いの徹底など公衆衛生の改善をひとつの目的とする東部州の州都ベルトアやL周辺で活動をしているNGOとも連携しながら、当事者であるバカの人びとと、より良いサニテーションのあり方について模索している。地方都市Lを拠点とした広域調査では、これまで森のキャンプ地を含む14カ所で計62カ所のトイレを観察した。また、2019年10月の現地滞在中に2カ所の集落にて8カ所の新しいトイレ造りに立ち会う機会を得た。トイレ造りには、石を多く含む土壌を砕くための「つるはし」や先端の尖った鉄の棒などの道具が必要となり、まずはその道具の確保が障害となっているようであった。また、実際の作業は重労働であり、男性数名が交替で行う必要がある。実際に出来上がった新しいトイレは、当初予定していた穴の深さよりも浅くなる傾向があり、実際の使用についても、NGOなどの人びとが理想として考える「長期的に、衛生的に配慮して使う」点では十分とはいえなかった。今後は、経年後の「トイレ跡」の有効利用についても果樹といった有用植物の栽培などを見据えつつ、地域の人びととサニテーションのCo-createについて考え、試行していく予定である。

映像を活用した参加型アクションリサーチ
ザンビアにおけるサニテーション課題解決をめざす子どもクラブの事例

片岡 良美 (北海道大学), Sikopo Nyambe (北海道大学),
山内 太郎 (北海道大学・総合地球環境学研究所)

**Utilizing Video to Community-Based Participatory Research
A Case Study of Children's Sanitation Club in Zambia**

**Yoshimi Kataoka (Hokkaido Univ.), Sikopo Nyambe (Hokkaido Univ.),
Taro Yamauchi (Hokkaido Univ./Research Institute for Humanity and Nature)**

コミュニティメンバーと研究者が協力して、そのコミュニティが抱える問題の解決や、生活を改善するための方法を具体的に推し進めながら開発する実践的研究手法は、参加型アクションリサーチと呼ばれる。本発表では、参加型アクションリサーチの実践において、映像を用いた事例について報告する。

ザンビアのルサカ市近郊の 2 つの未計画居住地エリアで、小学生を中心としたサニテーションの課題解決をめざす子どもクラブ 'Dziko Langa (=My Community)' を 2017 年 8 月に発足し、現地の青年団と協働で運営している。子どもたちが自らサニテーションについての理解を深めるとともに、地域の大人への波及を目指すものである。地域の課題解決への子どもの参画に関する研究では、子どもが子ども同士、また大人と一緒に活動するときを使う、もっとも分かりやすい意思伝達の手段は、話し言葉であり、年齢や能力の異なる子どもたちが考えを伸び伸びと表現できる、開放的な場作りが重要であるとされ (ハート 2000)、写真を活用したアクションリサーチを通じた WASH (Water, Sanitation and Hygiene) 関連行動の変容についても報告されている (Bisung 2015)。また、社会における複雑な課題に取り組む際に、専門家と非専門家の間や非専門家の間で、リテラシーにより理解される専門知だけでなく、「地域固有の知識体系」と呼ばれる、地域のなかで人々が代々伝承していくような知識や技能がどのようにやり取りされるかを明らかにすることの重要性が論じられている (Hoppers 2002)。しかし、アクションリサーチにおける参加者の対話を、サイエンスコミュニケーションの視点から分析する方法は十分に検討されていない。

こうした研究動向を踏まえ、本発表では、子どもたちの話し言葉をそのまま表現可能な、映像に着目した。ルサカ市在住の映像作家との協働により、調査地の人々に馴染み深く、現地で広く活用される子どもクラブの映像制作を試行した。子どもクラブ内には、制作した映像による情報発信の中心となるメディアグループを組織することで、クラブメンバーがより主体的に映像の活用に関われる体制を構築している。映像がもたらしうる実践的な成果としては、地域住民や周辺コミュニティへの波及を促進するツールとなることと、映像制作の過程におけるコミュニケーションによって、子どもクラブのメンバーがこれまでの活動を内省し、理解を深めることを期待している。さらに、映像制作～映像を使った情報発信のプロセスの分析により、子どもクラブが活動を通じてコミュニティにとってどのような機能を持つようになったのか、サイエンスコミュニケーションの視点から考察する。

- ハート R. A. 木下勇・田中治彦・南博文 (監修) IPA 日本支部 (訳) (2000) 子どもの参画 : コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際 萌文社
- Bisung, E., et al. (2015). "Using Photovoice as a Community Based Participatory Research Tool for Changing Water, Sanitation, and Hygiene Behaviours in Usoma, Kenya." *BioMed Research International* 2015: 10.
- Hoppers, O. (2002). "Culture, Indigenous Knowledge and Development: The Role of Universities." Pretoria: Centre for Education Policy Development.

持続的な生活改善のための協働型アクションリサーチの重要課題：
サニテーションプロジェクトへのコメント
草郷孝好（関西大学・地球研）

**Key Issues in Collaborative Action Research to Improve Sustainable
Livelihood : Comments on Co-creating Sanitation in Sub-Sahara Africa
Takayoshi KUSAGO (Kansai University · RIHN)**

途上国の開発アプローチは、経済開発、社会開発、人間開発へと中心軸を変えながら、先進国の支援の下、展開してきた。また、国家単位での開発の目標設定と進捗状況を明確にするために、さまざまな開発指標（経済開発：GDP、GNI 経済指標群；社会開発：BHN 指標群；人間開発：HDI 関連指標群）が構築され、活用されてきた。2015年の「アジェンダ 2030」の国際合意により、持続的開発が最重要視されることとなり、SDGsが国家単位の開発目標と指標に組み込まれ、現在、各国はその実現に向けて、鋭意取り組んでいる。

SDGsは、アジェンダ 2030の基本理念である「誰一人取り残さない社会」と「社会変革」を推進するため、経済・社会・環境のさまざまな課題に取り組む指針といえる。このため、従来の開発アプローチが人間生活の改善を優先してきたのとは異なり、SDGsは地球環境と人間生活の双方の持続的改善のための包括的開発アプローチと実践を必要とする。

環境保護と持続的開発の重要性を国際社会に問いかけたリオ会議（1992年）以降、国の経済社会のしくみの見直しや市民生活の持続的改善に関する研究が進められてきた。前者は、経済社会システムの変革であり、それは、国や社会の決定に委ねることになるが、他方、後者は、日常生活を送る住民が生活を持続的に改善していくのかどうかカギを握る。

では、持続的開発につながる生活改善を導く要素や実践はどのようなものであるのか。持続的開発のための持続的農村生活改善アプローチ（Chambers and Conway, 1991）の適用事例に基づく研究（Ashley and Carney, 1999）から、当事者目線で問題に向き合い解決していくこと、当事者間協働の必要性、制度・社会・経済・環境の持続性、長期的視点を持ち柔軟である取り組みが重要な要素であることが認められた。持続的な開発と生活改善を実現するためには、理論や概念だけではない実践重視の研究手法（アクションリサーチ）が有用となる。アクションリサーチは、当事者と協働し、適切な実践の型を模索し、型のデザイン・選択から、試行と修正、評価を繰り返していくものである。それは、誰が実践を主導するのか、また、どのような活動を重視していくのかなどによって、生活改善の中身や持続性の担保に違いが生まれる可能性がある。

サブサハラ地域の住民のサニテーションの改善を目指す共創型研究は、SDGsの方針に沿う斬新な現在進行形の実践的研究プロジェクトである。本プロジェクトが環境保全と持続的生活改善に資するため、持続的生活改善アプローチが示す要素を参考にして、研究方法の有効性や研究を展開していく上での課題について検討しておくことは有益である。

そこで、ブルキナファソ、ザンビア、カメルーンにおける研究報告について、（1）Co-creationを標榜する協働における住民（当事者）の主体性・内発性、（2）協働の方法論（アクションリサーチ）の選択と有効性、（3）Co-creationの成果把握と評価の必要性、などの点を中心にしてコメントし、SDGsの目指す持続的開発につながるアクションリサーチの適用可能性を探ってみたい。

Chambers, R. and Conway, G.R. (1991) *Sustainable rural livelihoods: practical concepts for the 21st century*, IDS Discussion Paper 296.

Ashley, C. and Carney, D. (1999) *Sustainable Livelihoods: Lessons from early experience*, London: Department for International Development.

Forum 7

Uses of Research by Researchers of African Descent in Japanese Universities

Kinyua Laban Kithinji (JSPS Research Fellow, Department of Global Politics, Hosei University)

The underlying logic by the authorities that facilitate the African students to access Japanese institutions of higher learning is that they will “return back” as crucial human resources trained by Japan to benefit their native countries. While “returning” may hold for those under state backed sponsorship such as MEXT and ABE scholarships, it is variegated in other cases. Furthermore, the “returning” emphasis ignores various scheming strategies among the human resource trained in Japan to help themselves navigate the often harsh economic realities in their native lands. Nevertheless, one of the most ignored issue is how the quality research produced by the African scholars in Japan is utilised either in or outside of Africa. Following the recent ascending trends in African scholars enrolling in Japanese universities, it is perhaps crucial to investigate the nature of research being conducted by Africans in Japanese universities, where it is going, how it is being used, and how best can it be utilised.

Thus, the proposed forum will explore these sets of concerns through a consolidation of various researchers of African descent at the advanced stages as PhD candidates and those in early stages of post PhD careers. We will attempt to answer these sets of questions by providing a platform for six scholars to pitch their ideas of research using the “TED talk” format or “elevator talk” concerning their already ongoing research.

The presenters in this forum will cover a range of topics including;

1. Coming to Tokyo, Losing Faith: Chronicles of African Pentecostal Migrants in Japan by Rebecca Babirye (**Uganda**) of Tokyo Christian University.
2. Sustainable Forest Management for Local Livelihood Support, Biodiversity Conservation and Carbon Sequestration: A Case Study of Kenya’s Participatory Forest Management Model by Kasaon Stephanie (**Kenya**) of Sophia University.
3. Patterns of Strategic Interactive Politics in Transitioning States: The Case of Post-Conflict Sierra Leone and the Challenge of the Management of Development Aid by Emmanuel Vincent Kallon (**Sierra Leone**) of Tokyo University of Foreign Studies.
4. Land Titling in Mozambique: Tenure Security for Communities or Investors? By Maisha Tunzine (**Mozambique**) of Tokyo University of Foreign Studies.
5. Victims of Violence or Heroism? A Historical Analysis of Revolutionary Regime, Culture and Survival Apocalypse in Uganda by Ian Karusigarira (**Uganda**) of Tokyo University of Foreign Studies.

The presentation by these African scholars will be followed by brief expert feedback from invited commentators including **Prof. Shinichi Takeuchi** and **Prof. Yoichi Mine**, on how the research can be used and its future projections.

Coming to Tokyo, Losing Faith:

Chronicles of African Pentecostal Migrants in Japan

Rebecca Babirye (Uganda) Tokyo Christian University/Sophia University

In the past decade, there has been an increased mobility of Africans to various parts of the globe. The motives of migrations vary from economic to education among others. While conventional places targeted by African migrants have been Europe and North America, a significant number has been opting for the East as a new frontier. Consequently, studies of African migrants have been dominated by Euro-American perspectives. In light of a growing connectivity between Asia and Africa, this study will focus on migrants in this relatively new frontier. More significantly, this study situates its thesis on religious experience, which is taken as a significant element in daily Africans political economy, so as to understand the survival mechanisms of the migrants as they encounter an environment hostile to not only their racial differences and economic capability but also religious references.

Taking African student migrants as a case study, this paper will explore the rise of South as a provider of both skilled and semi-skilled workforce to mitigate global labour shortage in developed states. Citing the challenges specific to the African diaspora in developed Asia, this paper will analyse the entanglements of their lived experiences so as to show emerging modalities of African diaspora in Asia. Finally, this paper will show how the African diaspora activates its social capital in order to improve the capacity to further assimilate or access better opportunities.

Sustainable Forest Management for Local Livelihood Support, Biodiversity

Conservation and Carbon Sequestration:

Institutional Arrangements and Contextual Socioeconomic Conditions Associated with Sustainable Forest Social Ecological Systems: A Case Study of Kenya's Participatory Forest Management Model

Kasaon Stephanie (Kenya) Sophia University

The biggest questions in development today have to do with how to prevent climate and ecological collapse without increasing the crushing burdens on the poor. The Sustainable Development Goals (SDGs) are designed to address these questions. Sustainable Forest Management is one of the goals enshrined in SDG goal 15 and is also included in the Global Forest Goals and Targets of the UN strategic plan for forests 2030 that are aimed at contributing to progress on the SDGs and integrate the economic, social and environmental dimensions.

Forests are critical to livelihoods and essential to sustainable agriculture, biodiversity conservation and climate change response. They also contribute to water and air quality and energy needs. Forest management has seen alternating policies emphasize the state, user groups, or markets as essential for solving forest management problems. Each of these systems have had their successes and failures in varying contexts. Panaceas are therefore discouraged as solutions in natural resource management.

Community Forest Management (CFM) is more reflective of local conditions and creates better incentives for people to comply with rules on their own accord, leading to better management of the forests. The objectives of CFM are closely correlated with those of REDD+, a climate change mitigation solution. They both

aim to conserve forests, resulting in greater carbon sequestration and biodiversity conservation, and to support local livelihoods. It is therefore necessary to understand the extent to which the existing institutional arrangements and contextual socioeconomic conditions around community-managed forests are already associated with sustainable forest social ecological systems for better management strategies as well as a critical step in the design and implementation of the REDD+ mechanism in these forests. This research operationalises the Social Ecological Systems (SES) Framework in community managed forests in Kenya for this task.

Patterns of Strategic Interactive Politics in Transitioning States:

The Case of Post-Conflict Sierra Leone and the Challenge of the Management of Development Aid

Emmanuel Vincent Nelson Kallon (Sierra Leone) Tokyo University of Foreign Studies

This essay situates causal explanation on how the use of strategic interactions in the mainstream politics of aid dependent states that have weak institutional structures, and mostly in transition from post-conflict context to relative stability challenge the management of development aid in those societies. Building on the case study of Sierra Leone, this study argues that, strategic interactions within the politics of the post-conflict government resulted into a pattern of instrumentalised policy manipulation between political parties, where policies that eventually metamorphosed into the government development tools were not fundamentally founded on national development framework. This strategic political interaction posed a systematic threat and challenged the management of development aid in Sierra Leone, where in the post-conflict period, the country experienced massive aid but development remained stagnated.

Keywords: Strategic Interactions, Development Aid, Sierra Leone, Policies, Political Parties

Land Titling in Mozambique:

Tenure Security for communities or investors?

Amélia Maisha Silas Tunzine (Mozambique) Tokyo University of Foreign Studies

Land has become a widely debated topic in the world, from governments, academics, civil society groups to local farmers, all have been concerned with issues related to land and more particularly on how to make use of this asset to improve societies well-being and promote economic development. Among the many debated issues concerning this topic there is the concern of promoting a secured land ownership tenure that will give incentives for bigger investment in land as well as the importance of preventing and correcting social inequalities to promote a more equitable and sustainable development. In the current context, the majority of the African population lives off the land practicing agriculture for subsistence and Mozambique is no exception. With the increase in the number and size of land Investments this paper aims to analyze the impact of land titling in tenure security of both investors and communities in Mozambique.

Keywords: Tenure Security, Land Titling, Large-Scale Land Investments

Victims of Violence or Heroism?

A Historical Analysis of Revolutionary Regime, Culture and Survival Apocalypse in Uganda

Ian Karusigarira (Uganda) Tokyo University of Foreign Studies

When a negative legacy of the nasty past in Uganda's political landscape combines (in a complex manner) with the revolutionary political relations, a mutant regime is constructed with cultural qualities stronger than a rock. Such qualities construct how and what the actors (center and periphery) should assemble to exercise political will. Those political relations that will be discussed in detail are: the collective memory of war (and related ideology), repression, state patriarchy and corruption as well as protracted and pervasive protests that seemingly further cement the hegemony of the status quo. Such a socio-political mechanism prevents regime change unless the sideline actors understand how such a regime operates, and how to deconstruct such strong cultural elements. The cultural dimensions of revolutionary regimes and how such dimensions engage with the hegemonic consolidation are a preoccupation of this monograph. It is important to provide a lucid account (significantly) of how post-revolutionary-war culture presents itself in an epoch of presumed participatory politics. Revolutionary regimes present a history of war, victimhood and victory over bad politics and have particularly unique ordering of politics. However, revolutionary regimes build on the historical past to cement even severely the roots of absolutism seemingly with some consensual features connecting them to the assumed democratic grid.

発表 A 会場

A1

アフリカにおける民主化と社会保障制度改革 南アフリカとナミビアを事例にして

佐藤 光 (明治大学)

Democratization and Social Security System Reform in Africa The Case of South Africa and Namibia

Hikaru SATO(Meiji University)

近年の開発途上国では、貧困削減及び社会的保護への関心の高さから、条件付きあるいは無条件の現金給付政策が多く、多くの国で実施されている。もともとはブラジルのボルサ・ファミリア (Bolsa Família)、メキシコのプログレサ/オポルトゥニダデス (Progresa/Oportunidades) に代表されるように、主に中南米地域において発展した政策であるが、近年ではアフリカ諸国においても現金給付政策を実施する事例が増えている。

アフリカの低所得国の場合、現金給付政策は短期的なプロジェクトであることが多く、ドナー国による援助を基に政策を実施している。これらの政策は地域及び対象者に関して明確なターゲットングが行われるため、カバーされる人口の割合は非常に限定的である。低所得国においても、現金給付政策を基に、長期的で安定的な公的社会保障制度の構築を目指す国も出てきているが、まだまだ少ないのが現状である。

人々が生存としてだけでなく、持続的に安心した社会生活を送るためには、現金給付政策が単なる富の再分配としてだけでなく、市民の権利に基づいた社会保障制度として構築される必要がある。社会権は、市民的自由と政治的権利の保障の上に築かれるため、福祉国家は自由民主主義体制の確立によって初めて可能となる。つまり、市民の自由や参政権が認められていない権威主義体制において、たとえ社会保障制度の整備が行われていたとしても、福祉国家の特徴の一つである社会権が確立していない以上、福祉国家とは呼ばれない。しかし、アフリカ地域において自由民主主義体制を確立できた国家の数は少ないのが現状である。

その中であって、南アフリカとナミビアは自由民主主義国家として成熟しただけでなく、民主化過程において現金給付制度を非拠出型の社会保障制度として構築した国家である。一般的に社会保障制度には、拠出負担を基礎とする社会保険制度と、社会手当のように非拠出型の社会扶助制度が含まれる。アフリカ諸国の場合、拠出型制度が柱とされることは少なく、むしろ公的制度が形成される場合、南アフリカやナミビアのように非拠出型制度を中心とすることが多い。

では、なぜ南アフリカとナミビアでは、他のアフリカ諸国よりも先んじて社会保障制度を整備することができたのか。民主化過程において、いかなる経緯のもとで社会保障制度改革を進めてきたのか。本報告では、南アフリカとナミビアを事例にして、民主化過程における社会保障制度改革に関して、政党と労働組合の関係性などの観点を中心に改革過程を分析する。そのうえで、民主化過程にあるアフリカ諸国における社会保障制度の構築および改革を進めるうえでの課題が何であるのか、考察を試みたい。

アフリカにおける責任ある企業行動の推進 国際協力のアクターの役割に着目して

井上直美（東京外国語大学 現代アフリカ地域研究センター）

Promoting Responsible Business Conduct in Africa The Role of Development Co-operation

Naomi INOUE (African Studies Center - Tokyo University of Foreign Studies)

『国連ビジネスと人権に関する指導原則』（以下、「指導原則」）は、2011年の国連人権理事会で満場一致で承認された、全ての国と企業が尊重すべきグローバル基準である。指導原則を策定した Ruggie, J. G. (2013)は、「企業が影響を実際に及ぼしうるのは、国際的に公認された人権の領域全体であって、一般に想定されてきたような限られた部分だけではない」と主張する。指導原則によるとビジネスが尊重すべき人権には、労働現場の問題の全領域に加え、健康、土地、住居、水へのアクセス、身体の安全、先住民の権利、自由な表現、プライバシー、平和的集会や公正な裁判の権利など、あらゆる権利が含まれている。指導原則は、各国の行動計画（以下、「NAP」）を策定することの重要性を訴えており、NAPの策定はアフリカ地域の各国にとっても自国民の権利を守るのに有効な手段である。

デンマーク人権研究所によると、2019年10月時点でアフリカ地域では、ケニア1国がNAP策定済み、3か国が政府主導でNAP策定に着手中、7か国が市民社会等によってNAPを検討中である。アフリカ各国政府は、様々な課題を抱えており、NAP策定に対する優先順位は必ずしも高くなく、政府のコミットメントは十分であるとは言えない。そのため、アフリカ地域での責任ある企業行動の推進においては、各国政府の自主的な取り組みに加え、NGO、市民社会、国際援助機関、先進国政府等の国際協力の各アクターが、重要な役割を担う。前述のNAP策定に着手や検討中の国々は、いずれも国際協力のアクターからの支援を受けつつその取り組みを推進している。

その中でもモザンビークは、2012年に複数の外国政府と国際連合人権高等弁務官事務所(OHCHR)等の支援を受けて、「ビジネスと人権に関する国家プログラム(以下、「BHRプログラム」)」を開始した。同国はアフリカ地域各国の中では、指導原則の承認後の比較的早い段階から責任ある企業行動の推進に着手し始めた。その後、2017年に同国はNAP策定の検討を含めたBHRプログラムの準備フェーズを、司法・憲法・宗教省の主管の下にローカルNGOが主体となり開始した。これは英国政府の資金で運営されるNGOのWestminster Foundation for Democracyの協力を得て行われた。しかし、予定されていた実施フェーズ(2018-22年)の実施は見送られた。他方、英国企業による採掘産業への直接投資が増加するのに伴い、投資や貿易活動を通じた責任ある企業行動の推進は加速した。採掘産業への投資国である英国にとって、モザンビークでの責任ある企業行動の推進は、自国の経済政策の一環であり、資源確保戦略を支えるものとなっていた。

IMFによると資源保有国のモザンビークは、低所得国の中でも民間資金の流入が多い国の4位(2017)に位置している。同国では国際協力に加えて、先進国からの投資や貿易を通じて責任ある企業行動の推進を行うことが可能である。欧州の貿易政策は、ビジネスと人権の課題を重視する。しかし、アフリカの多くの国、特にFragile State(脆弱国家)に分類される国々への民間資金流入は限られている。Fragile Statesへの民間資金の行き先はナイジェリア等の限られた国へ偏り、多くの国は資金流入の原資をODAに頼っている。そのため、責任ある企業行動の推進において国際協力のアクターが担う役割は大きい。

本報告は、アフリカにおける責任ある企業行動の推進に国際協力のアクターの取り組みが与える影響に焦点を当て、国連関係の報告等の資料分析を行うとともに、報告者が企業や国際協力の関係者に行った聞き取り調査をもとに、国際協力と責任ある企業行動の実践の関係を分析する。

ナイル川の水資源開発と流域安全保障上の挑戦
エチオピア・ルネッサンスダム建設を事例に

アブディン モハメド (学習院大学)

**The Development of Water Resources and the Rising Challenges on the
Security of the Nile Basin
The Case of the Great Ethiopian Renaissance Dam**

Mohamed Abdin (Gakushuin University)

2011年にエチオピアは、ナイル川の支流であるブルー・ナイルにアフリカ最大のダムを建設すると発表した。このダムはスーダンとの国境付近に位置し、エチオピア・ルネッサンスダム (Great Ethiopian Renaissance Dam: GERD) と名付けられている。このダムの高さは145メートル、貯水能力は740億立方メートルであり、この水量は、ナイル川の下流国であるエジプトが使用する水の一年分に相当する。

このダムの水力発電によって、エチオピアは自国の電力自給率を高めるとともに、近隣諸国にも電気を売却することを企図しており、自国内の水資源を開発する権利を主張している。一方、下流国であるスーダンとエジプトは、1959年に締結された「ナイル川協定」で定められた水資源の利用配分を脅かすような開発を容認しない姿勢を貫いてきた。「エジプトはナイルの賜物」といわれるように、エジプトは従来、ナイル川の問題を自国の国家安全保障にとって最も重要な要素のひとつと位置づけてきた。

しかし、2010年以後に中東で発生した民衆蜂起によって、エジプトの国内情勢が混乱に陥り、ナイル川の問題に対する発言力が低下した。2011年2月にムバラク大統領が失脚してからまもない時期に、エチオピアはGERDの着工を発表したのだが、このことは、それまでは差異が歴然としていた両国間のパワーバランスが、徐々に拮抗するようになったことを明瞭に物語っている。

一方、2012年以降にはスーダンの立場も変化した。バシール元大統領がエチオピアとエジプトの仲介役を演じるようになり、また、スーダンのメディアでは、GERDの建設によってスーダンは最も大きな恩恵を受ける国になるという見方が流布するようになった。「このダムの建設によって、ブルー・ナイルの流れが安定するようになれば、洪水の発生を防止できるし、スーダンは年間を通してナイルの水を利用して農地面積を拡大できる」という利点が強調されたのである。そして、ダム建設の危険性を論ずる専門家がナイル川問題の交渉チームから外されるなど、スーダンはエチオピアと歩調を合わせるようになっていった。

本発表では、GERD建設がナイル川流域の安全保障環境に与えた影響を解明することを試みる。2011年以降に始まったエチオピア、スーダン、エジプトの3か国間の交渉プロセスの変遷を整理したうえで、特にスーダンの立場が変化した背景と、それに付随する地域の安全保障上の挑戦を明らかにする。本発表は、先行研究や報道資料、2019年末に実施した現地調査で得られた専門家や研究者などの知見を資料として用いている。

マンデ文学研究 3
マサ・マカン・ジャバテによるマンデの「人間喜劇」

鈴木裕之（国士舘大学）

Studies of Mande Literature 3
Mande “human comedy” by Massa Makan Diabaté

SUZUKI Hiroyuki (Kokushikan University)

本発表は、第 55 回および第 56 回学術大会に続く、「マンデ文学研究」の第 3 回目である。「マンデ文学研究の定義」（第 55 回）、「ギニアのカマラ・ライ」（第 56 回）に引き続き、今回はマリの作家マサ・マカン・ジャバテ Massa Makan Diabaté をとりあげる。

1938 年、マリの西部キタで生まれた彼は、グリオの名門の家系出身で、高名なグリオ、ケレ・モンソン・ジャバテ Kele Monson Diabaté をオジに持つ。

<口頭伝承研究>

ギニアのコナクリのリセ（中等教育後期課程）で学んだ後、フランスに留学し、社会学、政治学、歴史学を修め、マリに帰国後は、情報省、教育省などで要職に就きながら、1970 年にマンデの口頭伝承に関する著作を発表した。

①1970, *Kala Jata*, Bamako: Éditions Populaires. (ケレ・モンソン・ジャバテの語るスンジャタ叙事詩をリズムカルな文体によるフランス語の文学作品にした。)

②1970, *La dispersion des Mandeka*, Bamako: Éditions Populaires. (キタに伝わるマンデ拡大にまつわる叙事詩を原文とフランス語の対訳で出版した。)

③1970, *Janjon et autres chants populaires du Mali*, Paris: Présence Africaine. (グリオの歌の代表的なレパートリーの歌詞をフランス語訳のテキストで紹介した。)

<現代文学>

④1978, *Le lieutenant de Kouta*, Paris: Hatier.

⑤1980, *Le coiffeur de Kouta*, Paris: Hatier.

⑥1982, *Le boucher de Kouta*, Paris: Hatier.

1978 年から架空の街クタ（彼の故郷キタをモデルとしている）を舞台とした 3 部作④『クタの中尉』、⑤『クタの床屋』、⑥『クタの肉屋』を発表し、小説家としてのキャリアを開始した。これは皮肉とユーモアに満ちた一種の人間喜劇であるが、共通の登場人物たちが織りなす人間模様の背景は、マンデの伝統的規範や社会構造に規定されている。

⑦1980, *Comme une piqûre de guêpe*, Paris: Présence Africaine.

⑧1985, *L'assemblée des djinns*, Paris: Présence Africaine.

また、男子に対しておこなわれるマンデの割礼儀礼を扱った⑦『スズメバチの刺し傷のように』、ある村におけるグリオの権力闘争を描いた⑧『鬼神の集会』において、マンデ社会に生きる人びとの生態を生き生きと活写している。

こうして、その豊富な口頭伝承に関する知識に裏づけされながら、まさに「マンデ文学」と呼ぶにふさわしい小説を矢継ぎ早に発表したあと、1988 年 1 月 27 日にマリのバマコにて逝去した。

<文学的特徴>

マサ・マカン・ジャバテの小説スタイルは、「小エピソードの連続」という特徴を持つ。

ひとつの「出来事」は、ある社会的状況（セッティング）において、一定の人間関係（ネットワーク）が、一定の社会通念（アイデア）にしたがって行為（アクト）することで発生し展開してゆくが、それらはマンデの「共同性」に支えられている。マサ・マカン・ジャバテはこの出来事の連続としてひとつの作品を編んでゆき、「口承性」を意識した口語体の文体である種の「人間喜劇」を創出するが、それはマンデ共同体の「生態誌」の様相を呈することになる。彼の文学作品はすべて、マンデの民の生態の一側面を切り取ったスケッチであると言えよう。

発表では、この文学的特徴を、いくつかの具体例を示しながら提示してゆく。

ソニンケ民族の文化運動と地域ラジオ局
「文化週間」の映像取材から見えてきたもの

三島 禎子 (国立民族学博物館)

**Cultural movement and regional radio of Soninke people
Behind the video coverage of culture week**

MISHIMA Teiko (National Museum of Ethnology)

本報告は2017年にソニンケ民族が中心となってセネガルで開催された「文化週間」を記録した映像（みんぱく民族映像誌第34集『セネガルを越える人と地域ラジオ』2020.3）を材料にしながら、そこに描き切れなかった運営組織や地域をとりまく社会経済的な状況を民族誌の観点から考察するものである。

この「文化週間」はセネガル、マリ、モーリタニアの3か国にまたがるセネガル河上流域に居住する複数の民族が、それぞれの文化を紹介する行事である。2017年は10回目の年にあたった。1週間かけて20あまりの村々を回り、舞台が繰り広げられる。演目の内容は、儀礼、工芸、文化、農耕、食、舞踊など多岐にわたった。

行事はセネガルのソニンケ民族が中心になって開催されるが、民族という分類に収まらない複数の主体が関わっている。地域ラジオ局は運営と実施にあたり、ラジオ局が組織した女性グループはそのなかで舞台制作を担い、楽師（グリオ）は行事の進行において伝統的な役割を演じている。ラジオ聴衆者や国内外への呼びかけに応じた篤志家は、寄付や行事の観賞をとおして参加する。「文化週間」の会場となる村々の人びとは当事者に位置づけられ、首都や隣国など村外から訪れて舞台を鑑賞する「招待客」もまた、当行事の意義を高める重要な役割を担っている。

開催側が掲げた目的は、(1)海外への労働移動と世代の交代によって失われつつある民族文化の継承、(2)宗教対立や政治的な危機によって分断された地域間の連帯、である。ソニンケが居住するセネガル河上流域は海外への半世紀以上にわたる海外への労働移動、1990年代から盛んになるアジア・アフリカ間貿易などで成人男性の不在が顕著である。それゆえ、「文化週間」は文化の再興をめざしたものと捉え得る。他方、同地域は1989年のセネガル・モーリタニア紛争が勃発した場所であり、セネガル河を隔てた人びとの往来や牧畜民と農耕民の共生などの習慣が失われて久しい。また近年のイスラーム過激派などの運動によって、地域の安全が危ぶまれている。これらを踏まえると、この二つの目的は理にかなったものである。

一方、異なる視点から「文化週間」を表すとすれば、(3)国家が介入しない地域主導の文化運動、あるいは(4)反エスノセントリズムの民族主体の地域運動、と言い換えることができる。また報告者の関心は、(5)労働移動によって蓄積した富の価値とその利用にあった。利益を生み出さない文化運動に投資するのは、かつて移民が村落のモスクや学校などの施設建設に投資したように、ある種の威信なのではないかと予想したのである。これらを出発点としながら、映像をとおして浮かび上がってきたのは、(6)国家と交渉する民族、(7)「残る」ことを選択した人びとの生活戦略、(8)伝統的社会の変革であり、公式な目的とも予想した構図とも異なるものであった。

ラジオを考察の主体にするとメディア研究を無視することはできないが、メディアそのものを人間の社会生活の変容媒体にとらえ、その技術的機能と社会的役割に注目するという方向性では、この文化運動を理解することができない。「地域ラジオ」の設置がユネスコ主導で進められるなか、このような動きをユネスコが提唱する社会コミュニケーションと民主化の核として評価する傾向もある。しかし、どのような枠組みで考察するかによって、現象の性格が異なって見えるおそれがある。本報告は事例報告にとどまるが、このような動きを分析するうえでの理論的考察への第1段階としたい。

A6

「“システム”に尋ねろ」

現代カメルーンにおける社会的課題に対するヒップホップ・ミュージシャンの見解

矢野原 佑史（京都大学）

“(Go and Ask) Why”

Social Solution through the Viewpoint of Cameroonian Hip-Hop Musicians

Yushi Yanohara (Kyoto University)

発表者は2005年より、カメルーンでヒップホップ・ミュージックを実践するラッパーやプロデューサーたちのコミュニティにおいて参与観察を行ってきた。その際、彼らの「日常生活空間」と楽曲中で表現される「演出空間」を比較して、彼らにとっての「リアルなヒップホップ」がなぜ若者たちから支持されるのかについて考察してきた。これまでの調査では、歌詞やミュージックビデオで表現される世界観の分析から、「日常生活での経験を多分に演出することで生まれる演劇的空間」としてのヒップホップの側面が見出され、そのエンターテインメントを享受するオーディエンスとしての若者たちの姿も明らかになった。つまり、「リアルなヒップホップ」は多分にファンタジーを含むものであり、そこにオーディエンスからの需要が発生していたのである。

しかし、2018年10月のカメルーン大統領選挙期間中に行なった現地調査では、ファンタジーの側面を前景化した楽曲の量産より、「事実を伝えようとする姿勢から生まれる直情的な歌詞を大衆に届ける“場”」としてのヒップホップの可能性を希求しながら議論を重ねて制作に取り組むラッパーたちの姿と、その方向性に必ずしも同調しないラッパーやオーディエンスの多様性が浮かび上がった。このような状況が生まれた背景には、大統領選挙とそれによってヒートアップしていた世論だけではなく、近年見られるアフリカの都市部におけるヒップホップの流行や、国際的なオーディエンスとミュージシャンの接続が可能となった情報環境など、いくつかの要因が考えられる。そしてラッパーたちは、それらを俯瞰することで得た視座から、啓蒙活動とエンターテインメントの双方を成り立たせる「現代カメルーン産ヒップホップ」の歌詞世界と音響的世界観に挑戦していた。

本発表では、2018年に現地で制作された楽曲「システムに尋ねろ」を取り上げ、その歌詞と楽曲制作現場などにおける議論の分析から、現代カメルーンにおける社会的課題に対するヒップホップ・ミュージシャンたちの見解を考察する。

グイのラメラフォンの構造的変化
共鳴板の形態と鍵の本数に注目して

松平勇二（兵庫県立大学）

**Structural Changes of the Glui Lamellaphone
Focusing on the Shape of Sound Board and Number of Keys**

Yuji MATSUHIRA (University of Hyogo)

中央カラハリ狩猟採集民の間では4種類のラメラフォンが演奏されてきた（池谷 2006、Ikeya 2006）。ラメラフォンとはいわゆる「親指ピアノ」のことである。その4種類は、カラニャネ、ツァオンツァオン、エナーテ、ルンバである。本発表ではこのうち、ルンバとカラニャネについて、過去20~30年から現在にかけての作製技術の変化の一端を明らかにする。調査データとその分析は、ボツワナ共和国ハンシーディストリクトのニューカデ村におけるグイのラメラフォン奏者2名からの聞き取りと、1990年代と2019年に作成されたカラニャネの構造の比較によっておこなう。

2019年の調査時に、ニューカデで演奏されていたラメラフォンは3種類あった。それぞれツォウツィイ、カラニャネ、ルンバという名前であった。カラニャネという名は、共鳴板に設置され、鍵の振動に共振して摩擦音（いわゆる『さわり音』）を出す金属部品に由来する。ルンバはもともと、ツァオンツァオンという名前と呼ばれるラメラフォンであった。それがいつしか、ブーブと呼ばれるようになり、さらにルンバと呼ばれるようになった。ブーブとはクモの卵を包む膜のことである。この膜は共鳴板にあけた穴に取り付けられ、鍵の振動に共振してブーという音を出す。その後ブーブには1980年代初頭に8-9本の鍵が追加され、次第にルンバと呼ばれるようになった。ルンバという名称の由来はザイル起源のポピュラー音楽（いわゆる『リングラ』）にある。ブーブに鍵が追加された理由はその名の通りルンバを演奏するためだった。この楽器は現在ツァオンツァオンとは呼ばれず、ブーブまたはルンバと呼ばれている。ツォウツィイは今回の調査ではデータを得られなかった。

2019年にカラニャネとブーブを作成してくれた男性によれば、1980年代初頭以前と現在では、楽器における構造的な変化が2点ある。1点目は前述の鍵の追加である。かつてツァオンツァオンと呼ばれていたラメラフォンは、13本の鍵からなる6音音階の楽器であった。しかし、1980年代初頭に鍵が8-9本加えられ、ポピュラー音楽としてのルンバが演奏できるよう7音音階の構成に変化した。

第2の変化は、共鳴板の変化である。1990年代に作成されたと考えられるカラニャネでは、鍵を下から支える「枕木」のような木片が共鳴板に取り付けられ、また金属のブリッジが共鳴板に金属部品で取り付けられている。一方2019年作成のカラニャネでは、共鳴板と「枕木」が一体化している。「枕木」と共鳴板の一体化により、調律が安定するようになった。また、共鳴板の周囲の縁が残され、縁にブリッジ固定用の切れ込みが入れられる。ブリッジはこの溝に埋め込まれる。かつての作製法では、共鳴板に穴をあけ、金属部品を使ってブリッジを固定する必要があった。しかし縁を残す方法により、ブリッジ固定の金属部品が不要になり、また共鳴板を傷める可能性も軽減された。

池谷和信 2006 「サハラ以南アフリカにおける『親指ピアノ』とバンツー社会」 吉田憲司・飯田卓編『アフリカ・バントゥ文明の技術史的研究—博物館国際協力による、その拡大の歴史の解明—平成14—17年度科学研究費補助金基盤研究A(1)研究成果報告書』 pp.154-163

Ikeya, Kazunobu 2006 “The Thumb Piano and San Identity in Central Botswana” *Senri Ethnological Studies*, volume 70, pp.273-284

A8

ナイジェリアの国境閉鎖が与えるニジェールの物流と市民生活への影響

大山修一（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

Socio-economic impacts of border closure in Nigeria to the logistics and the people's life in Niger

Shuichi Oyama (Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University)

2019年5月30日、アフリカ55カ国のうち54カ国はアフリカ自由貿易地域（AfCTA: African Continental Free Trade Area）という協定を結んでいる。アフリカ連合の加盟国55カ国のうち54カ国が参画し、自由貿易地域を形成しようというものである。報道によれば、自由貿易地域の協定締結は歴史的な記録が残る第一歩だという記事もある。もし、これが実現すれば、高い経済成長を見込むことができる、巨大市場の誕生となる。この協定の旗振り役がニジェールのモハマドゥ・イスフ大統領であり、2019年7月に首都ニアメで開催されたアフリカ連合の総会では、自由貿易地域の設立にむけて基本文書がつけられた。

その基本文書は、1) 自由貿易地域の内部では製品やサービスの関税をなくし、自由な貿易を推進すること。2) 90%の物品の貿易については2020年7月までに自由化し、さらに10年から15年間の猶予期間のうち、7%の物品について自由化すること、3) 自由貿易地域における非関税貿易障壁を常時チェックし、廃止すること、4) アフリカで統一的な商取引、支払いを可能とすること、5) 自由な貿易を推進すべく、貿易に関連する情報や統計データの公開をめざすという5本の柱からなる。アフリカにおける域内貿易では、信頼しうるデータ・情報が不足しており、アフリカのビジネス環境に悪影響があると考えられており、非関税貿易障壁に関する情報の欠如は大きな問題となっている。

こうしたアフリカ域内における貿易自由化という、新たな時代の幕開けを感じさせる一方で、ニジェール国内では大きな問題が生じている。そのひとつは、深刻化するテロの問題、もうひとつはナイジェリアにおける国境封鎖である。2019年8月より、ニジェールでは経済や市民生活への影響が懸念されはじめ、景気の悪化が予想されていたが、ナイジェリア政府は10月にニジェール以外にも、ベナンとカメルーンの国境を閉鎖したのである。

国境封鎖は2020年1月まで継続するとされているが、それまで物資の輸出入は禁止されている。それは外国産の米の密輸入とナイジェリア産石油の密輸出の禁止が主目的となっており、ナイジェリア政府は税関やイミグレーション、警察、陸軍が連携して取り締まりを強化している。国境封鎖の実行には密輸対策のほかに、ナイジェリアにおける米の自給率向上、安価に輸出されるガソリンの違法輸出の取り締まりが主目的である。ナイジェリア産ガソリンの10~20%は密輸出されており、その正確な数字は分からないのが実情である。2019年11月14日にはナイジェリアとニジェール、ベナンの3か国は共同で密輸入の取り締まりをおこなうことで、国境封鎖の解除にむけた話し合いがもたれている。

こうした国境封鎖により、ナイジェリアでは輸出の不振と景気の悪化が危惧されているが、内陸国のニジェールでは食料や物資の不足、それにとともなう物価の上昇が懸念されており、物とサービス、人の自由な動きをうながす自由貿易地域の構想に逆行しているという強い意見も出ている。こうした動きによって、長年にわたり西アフリカで培われてきた取引慣行や信頼関係が破壊されることも不安視されている。

1970年代と1980年代の干ばつにより、サヘル地域では何十万人という死者が発生した。この甚大な被害が発生したのは、厳しい小雨—干ばつといった自然要因とともに、輸送インフラの欠陥、市場の機能不全により物資が運ばれなかったことも大きな原因のひとつであった。ニアメ市内と近郊農村におけるガソリンや米を中心とする物流、日常生活について報告し、ナイジェリアによる非関税障壁の設定によるニジェールへの影響を発表する。

ニジェール国ニアメ市における家庭ゴミ収集
— 手押し車を使った収集方法と収集人たちをとりまく社会関係 —

青池歌子（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

**Household Waste Collection in Niamey Metropolitan Area, Niger:
Pushcart collection and social network surrounding the waste collectors**

Utako Aoike (Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University)

本発表はニジェールの首都ニアメにおける廃棄物処理の実態とローカルなゴミ収集の方法を明らかにすることを目的としている。ニアメ市で廃棄される家庭ゴミの特徴や住人の日常実践、家庭ゴミ収集人の仕事に注目し、このゴミ収集人たちがニアメ市の廃棄物処理に果たす役割と彼らの社会関係を検討する。

ニアメ市では、都市人口の増加率が5.2%(2016)と非常に高く、都市化が進展している。排出量の増加する廃棄物の処理は、ニジェール政府とニアメ市にとって喫緊の問題となっている。廃棄物問題についての先行研究では、住人や民間部門との協働を通してどのように持続可能な廃棄物処理システムを構築するか、そして廃棄物の管理に必要な財源を確保するかが課題とされている。ニアメ市における廃棄物処理システムでは、行政サービスとしての廃棄物の戸口収集が欠如するなか、家庭ゴミ収集に従事する若者たちが存在する。農村から出稼ぎに来た若者たちの多くは、長期にわたりニアメ市に滞在している。なかでも収集業に従事する若者たちは手押し車を押して住区をまわり家庭ゴミを収集し、その収集料を住人から直接受け取って収入としている。この収集人が住人の戸口から中間集積地までの一次収集を担い、そして中間集積地から埋立て処分地までの二次収集と運搬を市行政が担っていることが明らかになった。

発表者は2か月半にわたり、ニアメ市内に居住する7世帯の家庭ゴミを分別し、その重量を計量した。合計1217kgのうち約40%が砂、約45%が落ち葉や生ゴミなどの有機物で、残り約15%がプラスチックなどの無機物であった。手押し車の使用は、重い土砂や有機物が大半を占めるニアメ市のゴミの特質に合致した運搬方法である。また手押し車は小回りがきくため、細い路地や曲がり角を縦横無尽に行き来することができる。この手押し車は鉄製で1990年代にゴミ収集用に溶接工が製作し、所有者が手押し車を貸し出すようになり、手押し車を借りてゴミを集める収集人が現れた。収集人たちはゴミを引き取るかわりに、その都度、もしくは月ごとに顧客の住人から収集料をもらい、ゴミを捨ててよい場所にまで運搬する。手押し車のオーナーによる貸出し事業によって、農村から仕事を求めてきた若者たちが少ない元手でゴミ収集業に参入し、収入を得ている。

ニアメ市の廃棄物処理において、ゴミ収集人の存在は戸口収集と収集料の徴収を通じた受益者負担を可能とし、市行政の廃棄物処理を補完しているといえる。住人と収集人との間の交渉では、収集人が顧客である住人の経済状況にあわせて、支払い可能な金額に収集料金を設定していた。収集人にとって、住人の経済状況や生活スタイルを理解すること、そして顧客である住人や手押し車のオーナーとの間に「信頼（ハウサ語でいう amana）」をもとにしたパトロン=クライアント関係を築くことが、不安定な収入に対処する重要な実践であることが明らかになった。

ニアメ市では、2019年7月に開催されたAU（アフリカ連合）の臨時総会の準備を機に急速な都市開発が進んだ。街路の変化や住人の生活変容がゴミ収集人の仕事や収入にどのような影響をもたらしたのか、その後の状況変化もふまえて、本発表で議論したい。

熱帯アフリカにおける舗装道路工事と住民の応答
カメルーン南部を事例として

坂梨健太（龍谷大学）

Local People's Responses to Paved Road Construction in Tropical Africa

**A Case Study of Southern Cameroon
Kenta Sakanashi (Ryukoku University)**

アフリカの熱帯林地帯の陸上交通路は、赤土の道、つまり、舗装されてない道路がほとんどである。町と町を結ぶ主要な交通路も赤土であることが多い。雨季になると、行き交う車やトラックは泥道にはまってしまい物流が滞ることもある。それは国家の財政にも影響を与える。そのため、赤土の道を舗装道路に整備することは、国家の見地からすれば、必要不可欠な事業であろう。

アフリカの道路や鉄道などの整備は植民地時代にも行われてきた。それは領域内における資源や農産物の輸送のためであった。アフリカ諸国が独立した後も自国内の交通網の整備が主であった。しかし、近年は、単一の国から複数の国にまたがる広範な交通網の整備が展開されている。内陸国の発展も視野に入れ、国際機関による援助や国内企業や多国籍企業による投資も盛んである。交通網整備の目的や主体が変化している一方で、現地の人びとの土地が奪われているという批判もあがっている。

本報告では、カメルーン南部の農民を主な対象にして、近年、展開された舗装道路工事がかれらの暮らしにどのような影響を与えたのかを例示する。調査地域の舗装道路工事は国内事情や近隣国の輸送の問題が関わっている。カメルーンの主要な港は経済都市ドゥアラにあるが、老朽化、稼働オーバーによって、南部州の都市クリビに新たな港がつけられている。カメルーン南部やコンゴ共和国の木材をはじめとした物資を首都ヤウンデやドゥアラだけでなく、クリビにも運べるように道路整備が計画されたのである。また、内陸部のチャドや中央アフリカ共和国の発展も見込めるため、多国籍のインフラ企業が関わっている。

このような大規模な道路整備のプロジェクトが展開していくなかで、調査地域にどのような変化があったのか、本報告では道路整備が進行していた時期を中心にみていく。

家計調査からわかったことは、食料品をはじめ商品の購入が急増していたことである。食料品はパスタやマカロニ、缶詰など、熱帯林で得られないものであった。また、食料品以外の商品の購入額は3倍程増加していた。とくに目立つのが小袋（5cc）に入った蒸留酒である。一方で、農作物や狩猟採集物は販売にまわされていた。とくにブッシュミートの販売額は道路工事が入るまえに比べると4倍以上に増えていた。販売先は、村に滞在していた労働者や幹線道路沿いにある比較的大きな村が目立った。一時的だが労働者が村に移入することで食料需要が高まり、一つの村だけで労働者への食事の提供に限界が生じた。そこで近隣の村からも料理を入れた鍋をもった女性がやってくるようになった。主食作物生産や調理を担う女性の地域内の移動が活発化したのである。

また、道路工事をめぐる補償金や人口増加による村の分割など、さまざまな問題も生じている。そのような問題は、よりよい生活のために、自分たちにも開かれた道をなんとかして活用する動きとして捉えられる。

本報告では、舗装道路が地域住民に与える影響について注目するだけでなく、事例を通して、かれらの日々の活動である農業や狩猟採集がなければ、道路工事の労働者を養うことはできず、舗装道路も完成しなかったという点を強調したい。かれらが行う農業や狩猟採集活動が道路工事に必要不可欠であったことを認識し、そこから、誰のための森林なのかを再び捉えなおす必要があるだろう。

マイクロクレジットを「分ける」
ブルキナファソ農村における又貸しを事例に

神代ちひろ（京都大学）

“Distribute” Microcredit
A Case Study from Relending in Rural Burkina Faso

Chihiro Kumashiro (Kyoto University)

本発表の目的は、ブルキナファソ農村の女性たちがおこなうマイクロクレジット（小口貸付金、以下「クレジット」）の又貸しの実態と、彼女たちが又貸しをする理由を明らかにすることである。

マイクロクレジットは、貧困層や低所得者層の貧困緩和や女性のエンパワーメントに有効な手段のひとつであると考えられ、開発援助において開発プロジェクトとも連動しながら重要な役割を担ってきた。1990年代には少額の貸付に加え、少額の貯蓄・保険・送金などのサービスと総合し、これらのサービスをマイクロファイナンスと呼ぶようになった。本発表で扱うのは少額の貸付である。

クレジットなどの金融サービスを提供する機関であるマイクロファイナンス機関は、クレジットの借り手、多くの場合は女性が、クレジットを元手とした現金稼得活動をおこなうことを意図して融資をしている。しかしクレジット利用の実態は、現金稼得活動のほかにも消費財や又貸しにクレジットが多く使われている。

「又貸し」とは、「自分が借りたクレジットをさらにだれかに貸す」行為を指す。又貸しは、借り手がエンドユーザーとならず、別の者がクレジットを利用することになるため、マイクロファイナンス機関の意図に反する行為である。また、女性がクレジット利用のコントロールをできず、男性親族に流用されてしまうことが批判的な文脈で報告されてきた。これに対し、本発表で報告するのは、女性が自律的な意思決定の下で、マイクロファイナンス機関から借りたクレジットの又貸しをおこなう事例である。

本発表は、ブルキナファソ北西部のパラコ村で約19ヶ月おこなった調査により得た資料に基づいている。パラコ村には、農耕民ブワが居住する。生業は農業であるが、近隣都市で働き、給与を得る者もみられる。パラコ村は、隣村にカトリック宣教団が拠点を持っていたこともありカトリック教徒が多い。本発表で事例として報告する女性たちもほとんどがカトリック教徒である。パラコ村はこの地域において、伝統的な中核となる村で、地域で一番古く、相対的に規模が大きい。五日に一度の定期市が立ち、隣村などからも品物の売買をしに人びとが集まる村である。

本発表で事例とする女性たちは、女性住民組織ハナーミの会員である。女性住民組織ハナーミは1997年に発足し、開発プロジェクトの実施やマイクロファイナンス機関のクレジット利用、独自の金融活動、菜園の経営などの活動をおこなってきた。本発表はそれらの組織活動の中の、マイクロファイナンス機関のクレジット利用に着目した報告である。

女性たちが又貸しをおこなうのは、自分のクレジット利用希望額を決めた上でそれ以上の額を借りられそうな場合や、自分ではクレジットの使い道がない場合のみであった。又貸しをする者にとって、又貸しを通じた経済的な利益は一切ない。又貸しによるトラブルも皆無ではないため、女性たちはその危険性も認識していたが、その上で又貸しを頻繁におこなっていた。

又貸しをしたことがある者は、調査対象とした女性のうち、約8割であった。又貸しをする相手の約7割は男性親族であった。本発表では、具体的に事例を示しながら、だれがいくらクレジットをどのように又貸ししているのか、又借りをした者はそのクレジットを何に利用しているのか、女性たちがどのような状況のなかで又貸しをしているのかを明らかにする。

ケニア・ナイロビにおける小規模零細事業主の資金調達
生産形態と在来金融の変化に着目して

井手上 和代（立命館大学）

**Financing of Jua Kali in Nairobi, Kenya
Focusing on the Production Patterns and Changes in Informal Finance**

Kazuyo IDEUE (Ritsumeikan University)

本報告では、金属加工業が集積するケニア・ナイロビのカムクンジ地区ギコンバおよびカリオバンギ地区における小規模・零細事業主の資金調達について、生産形態および新たな金融サービスの普及による在来金融の変化に着目して論ずる。本報告は、2019年2月、8月に行った現地調査に基づくものである。

近年のケニアの小規模零細事業主を取り巻く経済環境は大きく変化している。特に、携帯電話やインターネットなどの情報通信が広範囲に普及し、携帯電話を用いた金融サービスがこれまでに銀行を利用していなかった人々の間で急速に普及している。既存の途上国金融に関する議論では、小規模零細事業主は、担保が設定できないために生産活動に必要な融資を受けられない、また、銀行支店網が発達していないために適切な金融サービスを受けられないといったことが度々指摘されてきた。そのために、親族やコミュニティによる結びつきといった社会関係を基盤に在来的な金融取引が多用されてきた。その一方で、情報通信技術（ICT）を用いた新しい金融は、これまでのアフリカの信用市場に関する通説を覆し、信用制約を緩和することが期待されている。

ケニアでは、路上や野外でインフォーマルな商業・生産活動を営む人々をジュア・カリと呼ぶが、調査対象の二地域には、金属加工業を営むジュア・カリが地理的に集中している。カムクンジ地区には約5,000人のジュア・カリがクラスターを形成しており、鍛造を行ったり、金槌や金型などの工具を用いて一枚の大きな金属板から鍋やフライパン、学校用衣装ケースなど多種多様な金属製品を生産している。製造工程のうち、機械が用いられるのは溶接時くらいであり、それ以外は職人（または事業主）の熟練や技量を要する手作業で行われるため、初期投資はさほどかからない。そのため、調達資金の投下先は、もっぱら材料となる金属板の購入に充てられる。必要調達額は各職人の熟練度合いや技量に依存するが、ある熟練工の1日の平均的な生産量は、学校用衣装ケース5個、食料保温ケース5個であった。調査を行った2月は、新学期に向けて学校用衣装ケースが次々と売れていた。したがって、同地区では時期に応じて高まる製品需要に確実に応えるための材料費の調達をいかにスピーディーに行うかが重要であり、この点で携帯電話を通じた短期の低額融資が多用される傾向にある。一方で興味深いのは、相互監視が働かずにモラルハザードが発生する恐れのある在来金融よりも携帯電話を通じた金融の方が“煩雑でない”“持ち逃げされるリスクも少ない”と答えたジュア・カリがいたことである。

一方の調査地、カリオバンギ地区は1980年代の構造調整政策によって発生した失業者の雇用先を確保する目的で、地方政府が軽工業団地を設置したことに起源を持つ。そのため、同地区のジュア・カリの多くは金属を曲げる機械や旋盤など、高度な技術を要する工作機械を用いる。日々の生産活動の中で彼らが重視するのは、自らが持つ“特殊で高度な技術”を武器に「いかに顧客の要望に応えることができるか」である。得意客の様々なオーダーメイドに応えるためには、新たな機械を導入する必要がある。これには前述の金属板購入のケースとは異なり、多額で中長期的な資金が必要であり、最大借入額が100,000KSHの携帯電話を用いた金融では彼らのニーズを満たさない。したがって、同地区では深刻な資金不足に陥っていると同時に、依然として在来の高利貸しに頼るジュア・カリがみられた。

A13

ザンビアの農業投入財支援プログラムにおける情報技術の導入と 農業組合における化学肥料の分配

田端 友佳（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

Introduction of Information Technology and Sharing of Fertilizer among the Cooperative Members in Farmer Input Support Programme in Zambia

Tomoka Tabata (Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University)

ザンビアでは多くの農家が、国内の重要な主食作物であるトウモロコシを生産している。その生産には化学肥料の投入が重要であるが、その供給は政府の農業投入財支援プログラムに依存しているのが実情である。農業省は2015年に農業投入財の配給を容易にする「電子バウチャー」を導入した。この農業投入財支援プログラムは「e-FISP: Electronic Voucher Farmer Input Support Programme」と呼ばれる。電子バウチャーはプリペイド式で、クレジットカード型のカードである。2018年の場合、小規模農家が銀行に400クワチャを入金すると、政府からの補助金1700クワチャが付与される。補助金の比率は、81%となる。各農家の携帯電話に送られるコード(数字4桁)とこのカードを農業資材店で提示すると、化学肥料と種子を中心に、自由に買い物をすることができる。この導入には補助金給付の透明化と効率化の目的があり、化学肥料の安定供給と人々の生活向上が期待されている。

ザンビア北部ムピカ県 M 村では、55 世帯の農家すべてがトウモロコシを栽培している。e-FISP の受給者は農業省の方針により、希望農家の 30%と限定されている。そのため M 村において電子バウチャーの受給対象となりうる 97 人のうち 29 人(29.9%)のみが電子バウチャーを取得していた。電子バウチャーの導入を機に、携帯電話番号と国民登録カードの提出により個人特定が可能になり、受給予定者が確実に補助金を受け、投入財を取得できるようになった一方で、以前のように農家の属する農業組合内で組合長や役員の裁量、メンバー間の話し合いでメンバー全員に化学肥料が行き渡るように分けることは難しくなった。

本発表では、組合内で電子バウチャー取得者と非取得者が化学肥料を分け合っている事例を分析する。組合のなかでの肥料分配には 3 パターンがある。(1) 組合全体で分け合う場合、(2) 農家が個人の裁量で化学肥料を分配する場合、(3) 組合が分け合う組み合わせを指名する場合である。(1) の場合には、いったん入手した投入財を 1 ヶ所に集め、メンバーになるべく同量になるよう配られる。(2) の場合には、個人は自由に化学肥料を分けてくれる相手を選ぶことができるが、その相手に拒否されることもある。(3) の場合には、権限の強い組合執行メンバーは肥料を 2 人で分け、肥料をもらえない人が出てこないように、他メンバーには 3、4 人で分けることにする。電子バウチャー 1 枚あたり供給される肥料は 6 袋であり、1 枚の電子バウチャーを分け合う人数が多くなるほど、入手する肥料は少なくなる。

農家の組合加入目的は化学肥料の入手であり、組合長たちは化学肥料が全員に行き渡りよう、受給者に化学肥料を供出するよう説得するが、拒否する受給者がいることも事実である。政府による化学肥料の供給方法の変更により起きた、各農業組合における取得者と非取得者の交渉を分析したうえで、各農家のトウモロコシ生産量や自給の可否、販売量を検討する。

小規模農家による契約農業への参加と離脱
ケニア・ナクル県におけるサヤインゲン栽培の事例から

久保田 ちひろ（京都大学）

**Participation and Withdrawal of Contract Farming by Small-scale Farmers
A Case of French Beans Cultivation in Nakuru County, Kenya**

Chihiro KUBOTA (Kyoto University)

契約農業（Contract Farming）は、企業と農家の間で作付け前に農作物の買取価格や品質について取り決めを締結することで、消費者には作物の品質保証を、生産者には現金収入の向上をもたらすものとして注目されてきた。特に、近年の輸送技術や食料加工技術の発展に伴うサプライチェーンの緊密化により、契約農業によってアフリカで生産された農作物を先進国が輸入する事例が広く普及している。この潮流に加えて、アフリカにおける多くの農村においても商品経済が普及し、食費や医療費、教育費として多くの場面で現金収入が求められている。

契約農業についての先行研究は、統計分析を用いて農家への経済効果を測るものなどが中心であった。これらの多くの先行研究では、契約農業が小規模農家の経済状態を向上させていると結論づける。しかし、発表者がケニアの 7 県において実施した予備調査によると、現在、契約農業を行う小規模農家 24 グループ中、13 グループ（約 54%）が契約農業を開始して 3 年以内と、契約の継続が比較的短期にとどまっていることが明らかとなった。現金収入が求められるケニア農村社会の現状において、経済効果が期待される契約農業が長期的に継続して選択されないのはなぜか、先行研究では明らかにされていない。

本発表では、グループとして契約農業を行う小規模農家を対象とし、各農家の契約農業への参加と離脱を分析することによって、何を判断基準として契約農業へ参加、あるいは離脱しているかを考察することを目的とする。

発表者は、2019 年 7 月から約 3 ヶ月にわたり、ケニア中西部ナクル県でサヤインゲン（French Beans）の契約農業の当事者である小規模農家グループを対象に調査を行った。

調査対象グループは、主にフランスへの輸出用とされるサヤインゲンを 1kg あたり 50 ケニアシリング（約 54 円）で買い取る契約を企業と締結している。サヤインゲンの種子は企業から提供され、種子 1 袋あたり 350 ケニアシリング（約 380 円）が種子代として買取金額から控除され、種子 1 袋からは平均で 56.3kg のサヤインゲンが生産されている。また、肥料や農薬、収穫の際の人件費等は農家が負担する。調査の結果、このグループに属し、契約開始直後の初回から種子の配付を受けた 44 名の農家のうち、その後、半数以上の種子配付に参加し、契約農業へ参加した農家は 16%（7 名）に過ぎず、80%（36 名）は半数以下、4%（2 名）は 1 回の参加で契約農業から離脱していることが明らかとなった。

インタビュー結果によると、サヤインゲンの栽培から離脱した理由として、主に以下の二点が挙げられた。一点目がグループ運営上のミスによって、不利益を被った経験である。企業から買取金額が振り込まれた後の各農家への配分は、企業は関与せずにグループが自主的に行う。その際の手続きの煩雑さにより、金額の配分にミスが生じ、本来農家が得られるはずの現金を得られなかったことで離脱する例があった。この場合、農家の関心はグループの運営改善に向かうことはなく、離脱していく傾向が明らかになった。二点目は、他の商品作物へ転換を行なった事例である。農家は自分の圃場の中で最大限の利益を得るために、他により利益が出る作物があれば、それに転換する事例が見られた。これらの農家については、作物の転換期において、サヤインゲンの栽培の利益が得られると判断した場合には、長期間離脱していても契約農業を再開する場合があることが明らかとなった。

以上の考察から、既存の統計分析では明らかにされていない契約農業への参加と離脱に関する農民の選択と行動のありようを明らかにする。

タンザニア北部における農業経営目的の多様性
—キリマンジャロ州の2農村を事例として—

佐藤 秀（京都大学大学院農学研究科）

**Diversity of Farmers' Management Objectives in Northern Tanzania:
Case Study on Two Villages in Kilimanjaro Region**

Shu SATO (Graduate School of Agriculture, Kyoto University)

ハイデン（例えば Hyden（1980）など）は、アフリカ農民は「情の経済」の中で「補足されない」農民として、アフリカ小農世界を形成しているとの見方を主張し、杉村（2004）は、ハイデンのそうした小農理論を背景に、アフリカ農村にみられる停滞のメカニズムを説明する。杉村によれば、アフリカ農耕システムの中には、生産を必要以上に拡大せず、生存維持性（サブシステム）が確保されれば増産をとどめる農耕が展開しているという。そうした新自由主義的な市場経済に支配されていない（と言われる）アフリカ農民の行動原理を解明することは、アフリカ型農村発展を模索するために不可欠である。

本研究は、行動原理の解明のため、アフリカ農民の経営目的に着目し、東アフリカのタンザニア・キリマンジャロ州の2農村を事例として、農民が抱く農業経営目的を明らかにすることを目的とする。

農業経営目的について、日本の農業経営学における議論を整理したい。大沼（1951）によれば、農業経営本来の目標は、経営生産力の増強によって、農家所得の拡大をはかることであるとする。それゆえ、農業経営改善の目指すものは、「総収益の拡大」と「経営費の節減」であると述べ、同時に「生活改善への寄与」を満たすことが条件であるとした。「農家所得の拡大」という目的に対して、「総収益の拡大」や「経営費の節減」を想定した大沼の経営目的の論理は、アフリカ農民の経営目的や目標・経営行動を理解するための重要な視角であり、本研究における調査研究枠組みの基礎とした。

また、農家所得の拡大を単一の経営目的とする大沼に対し、複数の目的の間に均衡をとりその効用の最大化をはかる複数目的均衡論を提起する沢村（1971）や、経営形態の違いによる目的の差異を想定する木村（2008）、農家経済経営学における大槻（1977）や金沢（1967）などの議論を踏まえ、本稿では、8つの経営目的を想定した。経営目的の「生活できる所得確保」を、利益追求としての「農業所得の増大」と区別したことは、サブシステムの役割が強調されるアフリカ農村社会の特質において、重要な論点であると考えられる。

調査地はタンザニア・キリマンジャロ州の、標高 1,100–1,300m の山麓にあるフカ村および、標高 1,500–1,700m にあるルカニ村であり、2018 年 8 月から 10 月の約 2 ヶ月間で調査を行った。両村では、伝統的に換金作物のコーヒーや、食糧作物のバナナやトウモロコシの他に、果樹や野菜など様々な農産物が栽培され、牛・ヤギ・鶏などの家畜も飼養する農畜複合経営が行われている。

フカ村の平野部では、近年の降水量減少に伴い、コーヒーやバナナの栽培を放棄し、トウモロコシとインゲンの栽培が中心となっているため、食糧作物と換金作物の区別をしていない農民が多い。

調査では、調査 1 として、耕種経営・畜産経営の目的を自由回答形式で質問し、先行研究の整理から導出した調査枠組みに当てはめる。枠組みの中に区分できないものは、新たな経営目的として枠組みに追加する。さらに、調査 2 として、先行研究から整理した 15 項目の改善目標の中から重要であると思うものをすべて選択してもらい、選択した改善目標に関わる改善策（具体的な経営行動）を、質問する。農家属性として、年齢・性別・家族構成・所有農地面積・栽培品目や農家所得に占める農業所得の割合なども質問した。

本発表では、調査の結果と考察、および研究における今後の課題について報告する。

新たなコモンズと資源管理システムの生成
 —エチオピア西南部農牧民 Tsamako における灌漑システムの事例から—

宮脇幸生（大阪府立大学）

**New Commons and Creation of Resource Governance Systems
 : Irrigation Systems among the Tsamako in Southwestern Ethiopia**

Yukio Miyawaki (Osaka Prefecture University)

本研究は、科学研究費基盤研究 B『経済開発と資源の重層的ガバナンスに関する人類学的研究エチオピアの事例から』の一環として行われたものである。エチオピアはこの15年ほど、年10%前後の高い経済成長を維持している。この経済成長を維持するために、エチオピア政府は大規模な資源開発に乗り出している。この資源には、労働力から生態資源まで多様なものが含まれ、それらの資源管理は、ローカル、リージョナル、ナショナル、グローバルと多様なレベルのアクターが関与する重層的なものとなっている。新たに生成しつつあるこれらのシステムを明らかにするのが、本プロジェクトのねらいである。

本報告が対象とするエチオピア西南部は、かつては国家の統制の届かない最辺境部とみなされてきた。だが近年ではこれらの地域は Land Grabbing の対象となり、かつて農牧民が利用してきた広大な土地が、国内・国際資本の経営するプランテーションとなろうとしている。本報告であつかう Woito 川下流部でも、1990 年以來この川の水を灌漑用水とする綿花プランテーションが作られた。当初プランテーションに居住地を奪われた現地の農牧民 Tsamako は、これに抵抗した。しかし 2000 年代以降、プランテーションの隣接地域およびウエイト川の河岸で、水路によって灌漑される広い耕作地を確保し、そこで耕作するようになった。

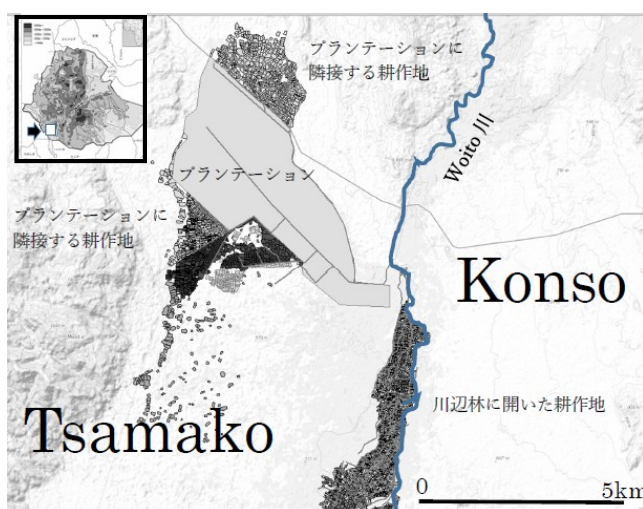
1990 年代までの Tsamako の耕作地は、天水によるものしかなかった。本報告で明らかにしたいのは、1) Tsamako が新たに導入した灌漑耕作は、どのようになされているのか、2) いかなる経緯で Tsamako は灌漑耕作を行うようになったのか、3) 耕作地と用水（小雨季には希少なコモンズとなる）の管理はどのように行われているのか、4) 農耕システムの変化は、Tsamako 社会にいかなる変化をもたらしたのか、という 4 点である。明らかになったのは、次のとおりである。

1) Tsamako の灌漑耕作地とは？ 大雨季と小雨季の年 2 回耕作される。プランテーションに隣接し、プランテーションの用水路を利用する耕作地と、川辺林に開かれ、Woito 川から直接取水する用水路による 2 種類の耕作地がある。前者は Tsamako の地域集団が利用し、管理する。後者はかつて敵対していた隣接民族である Konso と共同利用・共同管理している。

2) いかなる経緯で灌漑耕作を行うようになったのか？ プランテーションに隣接する耕作地は、地方政府の主導による。川辺林の耕作地は、Konso と共同して開拓した。

3) 管理システムは？ プランテーションに隣接する耕作地は Tsamako の地域集団が管理、利水に関しては地方政府を通してプランテーションと交渉している。川辺林の耕作地は Tsamako と Konso の共同管理。どちらもコモンズである用水の濫用を抑止する懲罰組織を持つ。

4) Tsamako 社会の変化は？ 伝統的な天水耕作地の分配組織が機能停止し、地域集団ごとの新たな分配組織が形成された。また耕作地が私有化され、世帯間の生産力の格差が固定化された。



A17

Nigeria ケッビ州は 2011-19 年で 10 万 ha 規模の新規水田稲作を内発的に拡大したか？

若月利之（島根大学）

Did the Kebbi state, Nigeria, has been expanding more than 100,000 ha of sawah (SUIDEN) based rice farming endogenously during 2011-19 ?

Toshiyuki WAKATSUKI (Shimane University)

FAOSTAT2019年によると2006/7-2016/7年でSSA諸国は年間籾生産量を1465万から3139万tonに増産した。NigeriaがNo.1で700万tでSSA全増産の42%であった。以下Mali171万t, Tanzania167万t, Cote d'Ivoire143万t, Guinea81万t, Sierra Leone65万t, DR Congo64万t, Senegal60万t, Ghana48万t, Burkina Faso29万t, Cameroun29万t, Benin22万t、以上12カ国で全増産の94%を占めた。Madagascarは354万tから346万tと減産に転じた。

Kebbi州はナイジェリア北東部に位置し、Niger川とその支流Rima(Sokoto)川, Zamfara川等に合計50万haの氾濫原が分布し、稲作と漁猟に伝統がある。Nigeriaの公式統計(NAERLS/FDA)を見ると2012年まではKebbi州の稲作面積は5万haで収量2t/ha、年間籾生産は10万tであったが、2017年時点で年間作付面積(乾季と雨期作合計)は約30万ha、籾生産量が約150万t(平均収量5t/ha)というデータが報告され、USAID, Michigan州立大, IFPRI, GEMS4等が追認している。MaliやTanzaniaの総生産量に匹敵する生産量である。

我々は2010-15年、科研(特別推進、基盤A)プロジェクトで世銀支援のケッビ州FadamaIII/ADPと農民組合を対象に、NCAM(ナイジェリア国立農業機械化センター)と組んでKebbi州の主な稲作地帯6ヶ所(Arugungu, BirninKebbi, Jega, Sangelu, Suru, Bagudo)でアフリカ水田農法(Sawah Technology)のデモンストレーションと訓練を実施した。しかし2017年にGoogle earthの2010-19年の時系列画像が全州で観察可能になるまで、実情は把握できなかった。Sangelu, Suru, Arugungu地域の氾濫原が顕著であるが、5m以浅の地下水を2台500ℓ程度の携帯ポンプで汲み上げ1haを灌漑する。燃料とポンプの維持償却費は150-200ℓ/ha/作で、1tonの増産でこのコストが償却できるため、水田開発が農民の自助努力により急速に拡大し、2019年時点では水田面積は10万ha以上に拡大したと推定され、乾季作も急増していることがわかった。Google earth画像だけでは農民による内発的(自力)水田開発であることは確認できなかったが、現在実施中の科研国際強化Bにより、2019年1-2月の乾季と2019年8-9月の雨期の現地調査によりGround truthとして内発的開発が確認できた。

一方、Kebbi州以外でもEbonyi, Delta, Lagos, FCT, Benueの諸州で同様のデモンストレーションと訓練を実施したが、Kebbi州のような内発的発展は認められなかった。我々が1986年以来アクションリサーチを継続しているNiger州でも最近までは見るべき成果はなかったが、2017年以降小規模の内発的発展が確認できるようになった。その他Sokoto, Zamfara, Kano, Kaduna, Borno, Anambra州には政府が外発的に開発した大規模灌漑地があるが、水田は日本の弥生前期の小区画水田の進化段階と同等で、内発的水田進化は確認できなかった。

ガーナ共和国首都アクラ沿岸漁業における魚の仲買
—ガ民族の小規模漁業の事例—

古澤 礼太 (中部大学 中部高等学術研究所)

Fish Brokerage of the Fishery in Accra, Ghana
The case of Artisanal Fishery of Ga People

Reita Furusawa (Chubu Institute for Advanced Studies, Chubu University)

ギニア湾に面したガーナ共和国首都アクラ沿岸部には、ヨーロッパ人の到来以前からガ民族が暮らしており、小規模（職人的）漁業を営んでいる。ガーナ沿岸部では、伝統的に男性の漁師が漁に出て、漁師の妻が漁獲の仲買・販売をおこなっていた (Odotei 2002)。こうした家族経営や男女の役割分担は、現在のガーナの漁業ではどのように変化しているのだろうか。本稿では、現代のアクラの小規模漁業における魚の仲買方法を分析する。

首都アクラの二つの漁港、ガマシ港とオス港はいずれも、船着き場などの近代的設備を備えない砂浜海岸である。アクラ最大のガマシ港には常時約 200 隻、アクラ東部のオス漁港には約 40 隻の木造小型船が砂浜海岸に引き上げられている。

二つの漁港で確認された漁師の漁獲販売方法は大きく二つに分かれる。1) 仲買人に販売する方法と、2) 仲買人を介さずに漁師や船主自らが直接客に販売する方法である(表 1)。後者は主としてオス漁港でみられた。

仲買人を介す方法は、さらに三つに分けることができる。第一に、船母 (*Lele-nye*) と呼ばれる船主の妻による仲買である。現在でも家族経営漁業が残るガマシ漁港では、夫の漁船のすべての漁獲の仲買をおこなう妻＝船母が存在している。他方、オス漁港ではそうした家族経営は稀であり、船母は一人しかいない。第二に、魚女 (*Loo Yoo*) と呼ばれる女性仲買人による仲買である。現在、ガマシ漁港ではこの方法が最も一般的である。魚女は、水揚げと同時に、仲買契約を結んだ船主や漁師から魚を仕入れて顧客に販売する。第三は、近年ガマシ漁港で問題となっている「サイコー (*Saiko*)」と呼ばれる男性による仲買である。サイコーは、小型の手漕ぎ舟で、ガマシ漁港に帰還する前の漁船に近づき、海上で現金による即時支払いで魚を仕入れる。漁獲が港に到着する前におこなわれるサイコーの仲買行為は、魚女の商売を邪魔するものなので、サイコーと魚女たちの対立が深まっている。

仲買人の支払方法に着目すると、船母と魚女は信用取引が多い。しかし、サイコーは現金による即時支払いに特化しているので、漁師はサイコーとの取引を好む傾向にある。すぐに現金を手に入れるために、伝統的な仲買の規範に反するサイコーと取引する漁師もいる。しかし他方で、魚女との取引を維持する漁師もいる。なぜならば、魚女との仲買契約を維持することで、相互扶助関係を保つことができるからである。

現在のアクラ漁業の仲買には、近代的な利潤追求と相互扶助による生活保障とのせめぎあいが見られる。漁師は状況に応じて漁獲販売方法を選択しているのである。

表 1 アクラ漁師の漁獲魚の販売方法

仲買人への販売	販売相手	仲介人性別	販売方法
無	(客への直接販売)		現金
有	船母 (<i>Lele nye</i>)	女性	売掛
	魚女 (<i>Loo Yoo</i>)		売掛/現金
	サイコー (<i>Saiko</i>)	男性	現金

発表 B 会場

B1

経済活動から見た北部エチオピアの 2 王国の比較研究

石川博樹（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

A Comparative Study of the Two Kingdoms of Northern Ethiopia Based on the Analysis of Their Economic Activities

ISHIKAWA Hiroki (Tokyo University of Foreign Studies)

エチオピアの北部からエリトリアにかけて広がる高原地帯では、古代から王国が成立したことが知られている。まず 1 世紀頃にエチオピア北部のアクスムを都とするアクスム王国が誕生した。同王国は周辺地域に版図を拡げたものの、7 世紀以降衰退を始める。この後文字記録が乏しい時期が続くため、アクスム王国の衰退期に関しては不明な点が多い。その後 12 世紀前半にエチオピア北部のラリベラを中心としてザグエ朝が成立し、さらに 13 世紀後半にソロモン朝エチオピア王国がエチオピアの中央部を中心として創始された。

アクスム王国とソロモン朝エチオピア王国はいずれもアフロアジア語族セム語派に属するセム系言語の話者を主体とする王国である。ソロモン朝エチオピア王国期に成立した王統譜によれば、同王国の君主はアクスム王国の諸王の末裔であり、その血統を遡れば『旧約聖書』に見えるソロモン王に至るとされていた。

このようにソロモン朝エチオピア王国期に同王国はアクスム王国の後継国家と位置付けられ、エチオピア史研究においてもそのような解釈が踏襲されることが多い。しかしながら両者には経済活動その他に多々相違が見られる。まずアクスム王国はアラビア半島に軍事遠征を行って版図を拡大するなど紅海周辺地域への対外進出を進め、また地中海世界とインド洋世界を結ぶ東西海上交易に直接参画するなど交易活動にも積極的であった。その一方で少なくとも成立から 6 世紀頃までエチオピア内陸部への進出には消極的であった。それに対してソロモン朝エチオピア王国は専ら内陸部に版図の拡大を試み、長距離交易はムスリム商人の手に委ね、交易港を含め沿岸部への関心は希薄であった。

アクスム王国とソロモン朝エチオピア王国の研究には史料上、また研究方法上の断絶があるため、両者の比較は管見の限り十分に行われていない。本報告では、両王国の主要生業であった農牧業に着目しつつ、両王国に関わる各種史料を再検討することにより、両者の性格の相違をもたらした要因を検討する。

検討の結果得られた結論は以下のとおりである。

アクスム王国の王都アクスムは温帯夏雨気候に属し、考古学・貨幣学研究の結果、王国内ではコムギ、オオムギを中心として、エチオピア特有の穀類であるテフの栽培も行う農業が行われていたことが明らかにされている。それに対してソロモン朝エチオピア王国の中心地は成立から 17 世紀初頭まではエチオピア中央部のショア地方にあり、その後 17 世紀前半にエチオピア北西部のゴンダールへと移った。同王国の版図は、アクスム王国の版図に比べて降水量が多く、より温暖な温帯夏雨気候に属していたと推定されるが、17 世紀にこの王国を訪れたイエズス会士の記録からは、王国内ではテフの栽培が重視されるとともに、コムギ、オオムギ、モロコシ、シコクビエなども栽培されていたこと、王国内で多数の家畜が飼育され、人々が特に牛に価値を見出していたことがうかがえる。

このようにアクスム王国とソロモン朝エチオピア王国の版図は同じ温帯夏雨気候に属しつつ、後者の方がより温暖湿潤な環境にあり、穀類栽培と家畜飼育に適していた。ソロモン朝エチオピア王国ではアクスム王国に比べて農耕と牧畜の経済活動における重要性が増し、それゆえに同王国は内陸部への版図の拡大志向を強めるとともに、東西海上交易およびそれに連結される内陸部の長距離交易への関心を失ったものと考えられる。

B2

曖昧な「ボンベイ・アフリカン」 ジェイコブ・ウエインライトの日記を手掛かりに

鈴木英明（国立民族学博物館）

Ambiguous “Bombay African” Observations with Diary of Jacob Wainwright

Hideaki Suzuki (National Museum of Ethnology)

イギリス帝国によるインド洋西海域における奴隷交易廃絶活動は 19 世紀後半に本格化し、船舶の拿捕など具体的な成果を急速に挙げるようになるが、それは多くの救出した奴隷の処遇という新たな課題を帝国に突きつけるに至る。アデン沖の救出奴隷の留置所は人で溢れ、彼らの処遇は喫緊の課題となった。そうした状況下、聖公会宣教協会（CMS）のインド・マハーラーシュトラ州ナーシク宣教所は「アフリカン・アシュラム」という救出児童奴隷のための施設を設け、併設された職業学校で訓練を施す事業を始める。ここで教育を受けた元奴隷たちは「ボンベイ・アフリカン」として知られるようになる。「アフリカン・アシュラム」に代表されるナーシクの救出児童奴隷に関する一連のプログラムが将来的なアフリカ大陸東部での宣教活動に向けた人材養成の側面を強く持っていたことは既往研究の指摘のとおりである。事実、ザンジバルのブー・サイド朝によって宣言された 1874 年の奴隷交易禁止に先立ち、CMS によってモンバサ郊外に建設された解放奴隷の共同体フレータウンにおいても、多くの「ボンベイ・アフリカン」が指導的な役割を期待されて投入されている。このように、アフリカ大陸における奴隷廃止、帝国の拡大、キリスト教の介在は広く認められ、具体的な事実にも事欠かない。しかし、その一方で、これら三者をつなぎ合わせる元奴隷についてはこれまで資料的な限界によって、その実態解明が大きく阻まれてきた。

「ボンベイ・アフリカン」のなかでも最も早くにアフリカ大陸に送られたうちのひとりで、かつ最も広く知られたのがジェイコブ・ウエインライトである。ウエインライトはヤオ出身とされ、デイヴィッド・リヴィングストンの最後の旅に同行し、彼の遺骸を沿岸部まで持ち帰ったことから、ロンドンのウエストミンスター寺院での葬儀にも参列したことでイギリス国内はもとよりヨーロッパで広く知られるようになった。いわば「ボンベイ・アフリカン」を代表する人物といえよう。

その一方、彼の肉声を伝える資料はこれまで発見されてこなかった。しかし、近年、彼の日記が発見され、その一部が公開されるようになった。本報告では、まずボンベイ・アフリカンの軌跡を辿り、ウエインライトの日記を用いて、彼がいかなるアイデンティティを持っていたのか、持とうとしていたのかを探る。それとアフリカン・アシュラムに代表される「アフリカ人元奴隷帰還事業」の目指すところとの断絶を明らかにしたい。それは声なき存在として扱われてきた元奴隷のあり方の理解の一助となる、あるいは、奴隷廃止、帝国の拡大、キリスト教の三位一体のあり方の問題点を逆照射するだけでなく、これまで大西洋の事例をもとに醸成されてきたいわゆるアフリカン・ディアスポラの理解に対する問題提起にもなるはずである。

タカラガイの季節的暴落
 仏領西アフリカの内陸における植民地通貨導入直後の貨幣状況

中尾世治（総合地球環境学研究所）

Seasonal Depreciation of Cowry
Monetary Situation after the Introduction of Colonial Money in the Inland of
French West Africa

Seiji NAKAO (Research Institute for Humanity and Nature)

現在のブルキナファソの領域にあたる地域では、植民地統治以前、一般的にタカラガイが貨幣として広く用いられていた。フランス軍による征服のなされた19世紀末、この地域には、ヨーロッパ諸国の貨幣はほとんど流通していなかった。そのような状況下で、1900年代半ば頃から仏領西アフリカの植民地通貨であるフランによる人頭税の徴税が開始される。1900年代後半から1910年代前半まで、この地域では納税期になると、タカラガイが暴落した。

ブルキナファソの歴史人類学的研究では、タカラガイの季節的暴落は断片的に記述されるだけであった（Skinner 1962; Somda 1976, 1993; Duperray 1984; Şaul 2004）。特に、植民地通貨の導入がいわゆる「商品貨幣」との併存状況を生み出し、住民が植民地通貨に「抵抗」してきたことをボボ・ジュラソ管区の行政文書から論じた研究は（Şaul 2004）、近年のアフリカ経済史研究における複数貨幣状況を論じる研究の先駆となった一方で（e.g. Gardner 2014; Pallaver 2019）、この地域内での状況が深く検討されていない。Şaulはボボ・ジュラソ管区の事例をこの地域全体の状況として論じているが、当時、ボボ・ジュラソ管区は天然ゴムの輸出を行っていた特殊な状況にあった。

これらを踏まえて、本発表では、これまで断片的にしか報告されてこなかったタカラガイの季節的暴落の（のちにブルキナファソの領域となる地域における）全体像を、フランス海外公文書館、マリ国立公文書館で収集した第一軍管区とオー・セネガルニジェール植民地の行政文書から明らかにし、住民の複数の貨幣それぞれに対する選好を示す。

Duperray, A. *Les Gourounsi de Haute-Volta. Conquête et colonisation 1896-1933*. (Stuttgart, 1984).

Gardner, L. 'The rise and fall of sterling in Liberia, 1847-1943,' *The Economic History Review* 67.4 (2014): 1089-1112.

Pallaver, K. 'A currency muddle: resistance, materialities and the local use of money during the East African rupee crisis (1919-1923),' *Journal of Eastern African Studies* 13 no.3 (2019): 1-19.

Şaul, M. 'Money in Colonial Transition: Cowries and Francs in West Africa', *American Anthropologist* 106, no. 1 (2004), pp. 71-84.

Skinner, E. 'Trade and Markets among the Mossi People', in Bohannon, P. and G. Dalton eds., *Markets in Africa*. (Evanston, 1962), pp. 237-278.

Somda, N. 'Les cauris du Lobi', *Notes et Documents voltaïques* 10, (1976), pp. 75-91.

———. 'Les cauris du pays Lobi', in M. Fiéloux, J. et al. (éds) *Images d'Afrique et sciences sociales: Les pays lobi, birifor et dagara*. (Paris, 1993), pp. 232-246.

創られた「伝統」の浸透
ズールー語教科書の出版と歴史意識

上林朋広（一橋大学大学院博士後期課程）

The Infiltration of the Invented “Tradition”
The Publication of isiZulu Books and Historical Consciousness

Tomohiro Kambayashi (Hitotsubashi University)

本報告は、1930年から50年にかけての南アフリカ連邦ナタール州（現クワズールー・ナタール州）のアフリカ人教育におけるズールー文学・歴史教育を分析することで、同期間のズールー・ナショナリズムの内容とその広がりをも明らかにする。具体的には、学校教育で使用されたズールー語の教科書と、シラバス及び試験問題など教科書の読み方を規定したと考えられる史料を用いることで、主任原住民教育視学官であったダニエル・マック・マルコムを中心としたナタール州教育行政と保守的なズールー知識人の協力のもとで生み出されたズールー語の歴史叙述が、人種隔離政策と親和性を持つようにズールー・ナショナリズムを特定の形態へと導こうとする試みであったと主張する。

20世紀前半におけるズールー語の歴史叙述の果たした役割については大きく分けて二つの立場がある。一つは、ズールー・エスニシティを強調した保守的知識人とアフリカ人統治に関わった白人行政官の協力体制に焦点を当て、彼らが人種隔離政策を正当化したという側面を強調する立場である。他方は、ズールー人の歴史叙述、特に歴史小説を分析対象として、植民地支配への抵抗の可能性を見出す立場である。前者の観点を打ち出したマークスの論文(Marks 1989)は、ナタール州のアフリカ人教員団体ズールー・ソサエティが、家父長的で植民地支配に融和的なズールー・エスニシティ観を提示したと主張する。しかし、その分析の射程は、アフリカ人統治行政とアフリカ人知識人の協力関係を対象とするにとどまっており、学校教育で使用された具体的なテキストを対象としているわけではない。一方で、文学研究者ピーターソン(Peterson 2012)に代表される後者の立場は、テキストの内容にのみ焦点を当て、それが学校教育で学生に特定の価値観を教えるために利用されたという側面を等閑視してきた。上記の研究動向に対して、本報告では、学校教育を中心としたズールー人の歴史について読み・書くという行為が、その共同体のあるべき姿を議論する公共圏を形成してきたという観点から、ズールー語による歴史叙述を分析する。具体的には、ズールー・ソサエティの史料、特に同協会の事務局長を務めたチャールズ・ムパンザとマルコムの間で交わされた書簡を検討することを通して、教室において学生がズールー語で執筆された教科書を読むという行為に、特定の社会的規範を教え込む役割が期待されていたことを明らかにする。

参考文献

- Marks, Shula. 1989. “Patriotism, Patriarchy and Purity: Natal and the Politics of Zulu Ethnic Consciousness.” In *The Creation of Tribalism in Southern Africa*, edited by Leroy Vail, 215–40. Berkeley: University of California Press.
- Peterson, Bhekizizwe. 2012. “Black Writers and the Historical Novel: 1907–1948.” In *The Cambridge History of South African Literature*, edited by David Attwell and Derek Attridge, African Edition, 291–307. Cambridge: Cambridge University Press.

B5

性的寛容な社会において男性の選り好みの強さが女性の性戦略に及ぼす影響 —ボツワナのカタの連続的単婚の事例から—

寺本理紗（京都大学）

How Male Mate Preference Affect Female Mating Strategy in Sexually Indulgent Population: The Case Study of Sequential Monogamy among Kgatla in Botswana

Risa Teramoto (Kyoto University)

ひとの女性は年間を通じて生殖が可能であるが、こうした女性の生殖期間の拡張にどのようなベネフィットがあるかは明らかではない。

生物一般的に、メス（大きな配偶子をつくる側の性）の交尾コストはオスよりも大きく、交尾回数とそのベネフィット（e. g. 子殺し回避）の間にはトレードオフが起こることが予測されている。そのため、メスが交尾回数を増やす方向に選択性が働くには、単純な繁殖成功度を超えたベネフィットの存在が研究者によって説明されてきた。

一方で、ひと集団での先行研究では、牧畜民ヒンバの女性が婚外子を増やすことで自身の繁殖成功度を高める例が示されているが（Scelza, 2013）、ひとの女性のマルチプルメイトティング（Multiple Mating）のベネフィットについては不明な点が多い。

そこで発表者は、自由恋愛での連続的単婚（Sequential Monogamy）のみられるカタ集団（Kgatla）を対象に、女性のマルチプルメイトティング傾向が女性の出産間隔に及ぼす影響について調査した。

発表データは2018年8月—11月と2019年8月10月の合計5か月間、ボツワナ南東部カテン地区での聞き取り調査によって得られた女性61人分の生殖記録と出産間隔（IBIs）を使用する。

結果として、カタでは、(a) 生涯で1人以上の父親の子どもを産む女性と、(b) 1人しか父親をもたない女性とで性戦略が分かれていることが分かった。カタの女性の出産間隔はペアをかえない女性と変える女性とで異なる傾向がみられたが、マルチプルメイトティング傾向の強い女性（父親数が4人以上）では出産間隔がペアをかえない女性とかわらない可能性が示された。また、ペアをかえる女性とそうでない女性のグループとで子どもの総出産数に有意な違いはみられなかった。

本発表では、カタ女性の性戦略の違いを比較することで、ひとのマルチプルメイトティングのベネフィットについて議論する。

- Monique Borgerhoff Mulder and Cody T. 2019. Unpacking mating success and testing Bateman's principles in a human population. *Proc. R. Soc. B* **286**:2019.1516.
- Palombit RA. 2015. Infanticide as sexual conflict: coevolution of male strategies and female counterstrategies. *Cold Spring Harb. Perspect. Biol.* **7**, a017640.
- Scelza BA. 2013. Choosy But Not Chaste: Multiple Mating in Human Females. *Evolutionary Anthropology* **22**:259–269

小さな島のゴシップ
モザンビーク島の女性たちの断片化された交際圏

松井 梓（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

Gossip in a Small Island
Fragmented Social Circles of Women in Mozambique Island

Azusa Matsui (Kyoto University)

本発表の目的は、人々が稠密に居住しゴシップが濃密に行き交う小さな島において、人々が常に隣り合って「居る」という隣人との社会生活の在り方がどのように可能になっているのかを明らかにすることである。具体的には、まず同島ではゴシップがなされる範囲を含めた近隣における親しい交際圏は小さく断片化していることを示す。そしてその断片化ゆえに、ゴシップの対象となった者のコミュニティ・地域全体からの排除や周縁化が起こりにくいこと、そしてある交際圏において自らがゴシップの対象となっても、その小さな交際圏から抜け出せばこれまでの交際圏のすぐ隣で生活を再開することも可能であることを示す。さらに、その居住の緊密さに起因する日々の頻繁な接触から、ゴシップが原因で一度不和がもたらされた関係も、一定の期間を経て修復され得るものであった。

モザンビーク島はモザンビーク北部のインド洋沿岸に位置し、ポルトガル植民地期には首都も置かれた南北約 2.9km、東西約 460m の小さな島である。大陸とは約 3km の一車線の橋で結ばれる。古くからインド洋交易で栄えたが、1500 年代よりポルトガルによる統治開始以降 1898 年の南部マプトへの遷都まで、同島は商業および行政の重要拠点であり続けた。このような特異な歴史を持つ島に解放奴隷や港湾労働者などの「原住民」の居住が許可され、それまで「市域の外側」であった島の南部にこれらの人々の居住地区（島民による呼称に従いパイロと呼ぶ）が形成されたのは 1866 年以降である。その後パイロは急速に拡大し、1960 年代頃までには島の南端まで住居が埋め尽くす現在の景観が形成された。さらに 1980 年代後半内戦を逃れた人々の周辺地域からの流入により各住居に居住する人数や家族が増え、パイロは過密を極める。

パイロでは主に女性らによる濃密なゴシップが見られる。植民地期にはゴシップは警察による取り締まりの対象であったこと、多くの人々が経済的に安定していたこと、女性らも昼間働きに出ていることから、濃密なゴシップは見られなかった。しかし独立後多くの人々は職を失い貧富の差が顕在化したこと、女性たちが「座ってお喋りをする」時間が増えたこと、しかしそれでも生活を可能にする海がもたらす富の存在、そして周辺からの人口流入により異なる出身地の人々による稠密な居住が進んだことから、ゴシップは人々が「他のどの街よりもひどい」「洗濯をしてもゴシップされる」と評するまでになった。

ゴシップは、時に対象者の排除や周縁化をもたらす[Besnier 2009]。本発表は、ある住居の家主の妻とそこに間借りしていた女性という同居する二人の関係を事例に、他者と常に緊密に隣り合う人々が、排除や周縁化をもたらすゴシップに常に触れる生活とどのように折り合いをつけているのかを描く。本事例においても、確かにゴシップの対象者が属する小さな交際圏からの排除が見られ、両者の間には決定的な別離が生じたように見えた。しかしながら、この女性は彼女のことを「よく知らない」人たちが住む、ゴシップが及んでいなかったたった 4 件先の近所に引っ越し、およそ半年後には彼女のゴシップの発信源であった家主の妻と挨拶を交わす程度に関係が修復されていた。同島においては、親しい交際圏の断片化によりゴシップは対象者のコミュニティ全体からの排除は見られない。周縁化された人にも逃げることのできる別の隙間があり、そして関係の悪化後も常に顔を見る必要を生む居住の緊密さから、その関係はいずれ修復され得るものであった。

Besnier, Niko 2009 *Gossip and the Everyday Production of Politics*, University of Hawaii Press.

ケニア・ナロクにおける FGM/C 廃絶運動の拡大とマサイの女性の参画
林 愛美 (大阪府立大学・客員研究員)

**The Role of Maasai Women Leaders
in The Expansion of Anti-FGM/C Movement in Narok, Kenya**
HAYASHI Manami, Ph.D. (Visiting Researcher, Osaka Prefecture University)

本発表の目的は、ケニア・ナロク州における FGM/C 廃絶運動の拡大に伴って活動の場を広げているマサイの女性たちについて報告することである。

ケニアに暮らす牧畜民マサイ (Maasai) の社会では、通過儀礼の一環として女性に性器切除 (Female Genital Mutilation/Cutting、以下 FGM/C) が課される。しかし、FGM/C は心身に深刻な弊害を及ぼすことから、女性への人権侵害であるとして 1970 年代より廃絶に向けた国際的な議論が行われた。その流れを受けてケニアでは、1982 年に FGM/C 禁止の大統領令が出された。FGM/C 廃絶が国際的な傾向になると、2001 年には子ども保護法で 18 歳未満に対する FGM/C が禁止され、2011 年には全ての女性に対する FGM/C の禁止を定める法律が成立した。2013 年には「公共サービス青年ジェンダー省」内に Anti-FGM Board が組織された。これらの政策と並行して NGO による FGM/C 廃絶運動も展開された。

マサイが多く暮らすケニアのナロク州 (Narok County) ナロク北部 (Narok North Constituency) では、FGM/C 廃絶運動が様々なレベルで行われてきた。国際 NGO の World Vision や国内のフェミニスト NGO である Maendeleo ya Wanawake Organization はコミュニティ開発の一環として FGM/C 廃絶に関わってきた。またローカル NGO の Tasaru Ntomonok Initiative は、早期婚と FGM/C の廃絶に特化して活動している。その他、マサイの地元 NGO の Mission with a Vision Organization や Full Gospel Church of Kenya が FGM/C や早期婚から逃れた少女のためのレスキューセンターを提供している。これらの組織は、マサイのスタッフを擁し、地域に密着した活動を展開している。

マサイの通過儀礼における FGM/C は排他的に女性の領域であり、男性が関わることはタブー視されてきた。したがって、FGM/C の廃絶運動でも自ずと女性が活動の主体となってきた。例えば 2013 年の調査時、World Vision のナロク北部代表はマサイ系牧畜民の女性であった。また、Tasaru Ntomonok Initiative は、マサイの女性が 1999 年に設立し、代表を務めてきた。さらに、1996 年から 15 年余り Maendeleo ya Wanawake Organization のナロク代表をしてきた女性は、筆者が調査している村落に暮らすマサイの女性である。

これらの女性たちは、ナロクでの FGM/C 廃絶運動の拡大と共に活動の場を広げてきた。2014 年に組織された Anti-FGM Board の代表には、Tasaru Ntomonok Initiative 創設者のマサイの女性が選ばれた。また、World Vision のナロク北部代表を務めてきた女性は、2016 年に Anti-FGM Board の CEO に就任した。2019 年に調査地のレスキューセンターを訪れた際には、大学を卒業したばかりのマサイの女性がファームオフィサーとして働いていた。

ケニア全体で見ても、FGM/C 廃絶運動は年々拡大している。2018 年には第 1 回「ケニア FGM 会議 (National Conference on FGM)」が首都ナイロビで開催され、第 2 回会議は 2019 年にナロク州都にあるマサイマラ大学で行われた。2019 年 9 月には Anti-FGM Board がウガンダおよびタンザニアの代表団と FGM/C 廃絶についての国際会議を開催している。FGM/C 廃絶運動に携わったマサイの女性たちは、運動の拡大とともに活動の場を広げており、Anti-FGM Board のメンバーのように、一部は政治進出も果たしている。

2019 年 11 月 8 日には、ケニヤッタ大統領が国内の FGM/C を 2022 年までに廃絶することを大統領府で宣言し、ケニア 22 州で指導的立場にある人びと (opinion leaders) が宣言書に署名した。この宣言を受けて、ケニア国内の FGM/C 廃絶運動は今後一層加速することが予想され、同運動に関わるマサイの女性たちの役割も拡大していくと考えられる。

眞城百華（上智大学）

Comparative Study on “Female Soldiers” in Africa

Momoka MAKI (Sophia University)

アフリカにおける「女性兵士」と聞いて何を想起するだろうか。アフリカにおける紛争と女性に関する議論では犠牲者、被害者としてのアフリカ女性像が一般的に取り上げられてきた。女性兵士についても紛争に強制的に参加させられた側面が主に議論される傾向にある。他方で、紛争に自発的に参加した女性については、紛争と女性というテーマにおいて十分議論されていない。

本報告では、多様な形で紛争に関与したアフリカの女性兵士について取り上げる。特に70年代、80年代を中心に解放闘争に参加した女性に焦点をあて、女性たちのエージェンシーが紛争という過酷な環境下でどのように発揮されたのか、もしくは制限を受けたのか、について紛争中と紛争後を中心に検討したい。紛争下で生じた女性兵士の被害や犠牲についても言及する。

アフリカにおいて政府軍、反政府軍、民兵組織に女性・少女が兵士として参加した国として以下の国々が指摘できる。アンゴラ、ブルンジ、コンゴ民主共和国、エリトリア、エチオピア、コートジボワール、リベリア、リビア、モザンビーク、ルワンダ、シェラレオネ、ソマリア、南アフリカ、スーダン、ウガンダ、ジンバブウェなどがある。

本研究において特に注目するのは、エチオピアのティグライ人民解放戦線（TPLF）、エリトリアのエリトリア人民解放戦線（EPLF）、南アフリカのANCの軍事部門であった民族の槍（MK）、ジンバブウェのジンバブウェ・アフリカ国民同盟—愛国戦線（ZANU-PF）と、各解放戦線に参加した女性兵士である。各組織が結成された年や経緯はもちろん分かれるが、70年代に武装闘争を実施し、80年に独立したジンバブウェ以外の3組織はともに70～80年代に解放闘争を経験した。1980年に独立したジンバブウェのZANU-PF以外は、1990年前後に終戦を迎えており、アフリカにおける「民主化の波」にのり政権交代や独立を果たした。またTPLFとEPLF、ZANU-PFとMKはそれぞれ解放闘争期に連携を図っており、組織間の女性兵士や女性に対する政策に及ぼした影響についても比較する際の検討対象とする。

4組織の女性兵士に関する比較において、現時点では以下の項目を基に比較を行う。

武装闘争中については、解放組織参加への強制の有無、従軍の経験、解放組織下における女性兵士の扱い、女性兵士の経験、女性解放政策の有無、結婚許可の有無、妊娠・出産の経験、女性への土地の付与である。

紛争後社会における女性兵士についても検討し、その際以下の項目を検討する。戦後の国軍などへの軍事統合の有無、DDRプログラムの有無、DDRプログラムへの参加の有無、War Veteran Associationへの参加の有無、負傷兵への手当、年金の給付、戦後の女性への土地の付与である。

本報告では、上記の項目の検討に加え、解放闘争に参加した元女性兵士へのオーラルヒストリー調査に基づいて元女性兵士のエージェンシーについても検討する。参加の動機、戦場の経験、戦後の人生や経験、政治や社会活動への参画などの検討を通じて兵士としての経験が女性たちのエージェンシーにいかに関与を及ぼしたのかを考察したい。

他方で一連の女性兵士に関する研究においては、各解放組織における女性政策や女性兵士に関する方針、ジェンダー規範や男性兵士との関係なども深く影響を及ぼしており、この点についても言及したい。

B9

野生植物を食べると健康になる？

タンザニア中部ドドマ州 Chinangali I 村における質問票インタビュー調査より

○阪本 公美子 (宇都宮大学) 大森玲子 (宇都宮大学) 津田勝憲 (宇都宮大学)

Does eating wild edible plants improve health condition?

From questionnaire interviews in Chinangali II, Dodoma, Central Tanzania

SAKAMOTO Kumiko, OHMORI Reiko, TSUDA Katsunori (Utsunomiya University)

背景: タンザニア中部ドドマ州は、半乾燥地であることもありしばしば食料不足に見舞われ、その対応のためにも野生食用植物を使用するなど創意工夫により生計を成り立てている (Tsuruta and Sugiyama 2018)。しかし、これまでの研究では、その野生食用植物の活用が、住民の健康にとってどのような影響を及ぼしているか、明らかにされていない。

方法: 本研究では、ドドマ州 Chinangali I 村の各村区において 81 名の成人男女を対象に、75 の質問を含むインタビュー調査を 2019 年 8 月に実施した。本発表では、そのうち野生植物の季節的摂取の頻度と、主観的健康評価や 5 歳未満児の死亡に関する分析結果を考察する。摂取の頻度は、日本における栄養素摂取に関する先行研究 (Mizoguchi et al. 2004; Tsunoda et al. 2015) を参考にした。主観的健康評価に関しては、世界的に使用されている QOL 尺度のうち最も集約されている SF-12 を、既にタンザニアでスワヒリ語版の有効性を実証された SF-36 (Wyss et al. 1999) から抽出した。

結果: 野生食用植物は、乾季には 48%、雨季には 71% の回答者が週 1 回以上摂取していた。それらの摂取頻度と SF-12 の相関関係を分析した結果、雨季における野生食用植物の摂取頻度が高い程、8 つの主観的健康評価の観点のうち、社会的機能 (SF)、全般的健康観 (GH)、体の痛み (BP) の評価が良好であった。バオバブは、乾季には 89%、雨季には 30% が週 1 回以上摂取していたが、乾季におけるバオバブの摂取頻度が高い程、5 歳未満児の死亡が少なかったが、雨季における摂取が高い程、逆に成人の活力 (VT) が少なかった。

考察・課題: 本分析結果による傾向に基づき、雨季における野生食用植物摂取に焦点を当て、どのような野生食用植物を摂取しているか調査し、健康評価が高まる原因が特定の野生植物の摂取によるものか、どの栄養素摂取によるものか、明らかにしたい。またバオバブが子どもの離乳食に利用されている結果、子どもの生存に寄与しているのか、季節外である乾季の摂取が健康上問題あるのか、解明したい。

謝辞: 本研究は、科研費 18H03438, 18H00776, 15H05139 の成果である。Dr. Anita Wagner 及び Dr. Barbara Gande からは SF-36 のスワヒリ語版を共有してもらったことを感謝する。

参考文献

- 溝口景子・武見ゆかり・足立己幸 (2004) 「若年勤労男性の「仕事意識の良好さ」と食生活ならびに労働生活との関連」『栄養学雑誌』62 (5): 269-283.
- Sakamoto Kumiko, Ohmori Reiko, and Tsuda Katsunori (2020) “Health, Livelihoods, and Food Intake of Children and Adults in Central Tanzania,” 『地域デザイン科学』(7): 43-64.
- Tsunoda N., Inayama T., Hata K., and Oka J. (2015) “Vegetable Dishes, Dairy Products and Fruits are Key Items Mediating Adequate Dietary Intake for Japanese Adults with Spinal Cord Injury,” *Spinal Cord* (53): 78-790.
- Tsuruta Tadasu and Sugiyama Yuko (2018) “Coping with *njaa* (food shortage),” *Mm. Fac. Agri. Kindai Univ.* (51): 11-12.
- Wyss, Kaspar, Anita Wagner, David Whiting, D.M. Mtasiwa, Mathew Tanner, Barbara Gandek, and P.M. Kilima (1999) “Validation of the Kiswahili version of the SF-36 Health Survey in a representative sample of an urban population in Tanzania,” *Quality of Life Research* 8 (1-2): 111-20.

B10

エチオピア南西部地方都市におけるヘルス・エクステンション・ワーカーによる保健衛生活動:公衆衛生活動に注目して

鈴木功子

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Healthcare Activities by Health Extension Workers in local city, Southwestern Ethiopia: With Special Reference to Public Health Activities

Noriko Suzuki

(Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University)

本発表の目的は、急速な人口増加と都市化が進むエチオピアの地方都市において、ヘルス・エクステンション・ワーカー（以下、HEWs）が実施する保健衛生活動、特に公衆衛生活動の実態を明らかにし、その役割について考察することである。調査は、エチオピア南西部アルバミンチ市 G 地区において、2018 年 10 月 4 日～11 月 9 日と 2019 年 6 月 11 日～7 月 26 日に実施した。G 地区に常駐する 4 人の HEWs のうち 2 人に集中的なインタビューを実施したことに加え、彼女たちに同行し、世帯に対して行なった保健衛生活動を観察すると同時に、196 世帯の世帯主および世帯構成員に対して病いに関する聞き取り調査を行なった。HEWs によるヘルス・ポストでの活動、世帯訪問における活動、G 地区住民との関わり方について検討した結果、以下の 7 点が明らかになった。

(1)HEWs は、世帯での保健衛生指導、子どもへのワクチン接種、活動報告書の作成等のオフィス業務に従事していた。(2)G 地区 1,910 世帯 (2019 年調査時) を 4 人の HEWs がそれぞれ約 500 世帯を訪問することが課せられていたが、実際にはオフィス業務を行なう日数が多かった。(3)HEWs の保健衛生活動は、国の施策であるヘルス・エクステンション・プログラム (以下、HEP) に基づき行われており、特に環境衛生、マラリアの予防、母子の健康に関する活動を重点的に行われていた。(4)環境衛生に関する住民へ指導では、HEWs は、排泄後・食事前の手洗いの励行、食器や衣類を洗った後の廃水の処理、蚊帳の使い方などについて具体的な指導を行っていた。また、住民居住空間に加えて、道路などの公共の場の環境に対しても住民達への指導をしていた。また、住民への聞き取り調査では、HEWs から受けた指導では、居住空間、個人の衛生、ゴミの処理、排泄物の処理に関する助言が多かった。(5)HEWs は、ヘルス・ポストが立地する地区の中心地から周縁の丘陵地域に暮らす世帯を訪問していた。しかし、G 地区には、昨年中に、HEWs が一度も訪問していない世帯が G 地区全体中心地に点在していた。(6)HEWs の活動に対して、住民のなかには、彼女たちの活動が健康的な生活を営む上で重要な役割を担っていると評価する者もいれば、彼女たちの限定的な活動を消極的に評価するものもいた。(7)HEWs の世帯訪問を受けていない世帯群では、HEWs による直接的な関与なしに、住民が相互扶助組織を活用してコミュニティの衛生活動を実施していた。

HEWs の保健衛生活動は、新生児・乳幼児死亡率の低下を目指して、環境衛生や母子保健に特化した政府のプログラムに従って実施されてきたため、活動地域や対象者が限定されていた。その一方で、G 地区の HEWs は、全員がその地域出身者であり居住者でもある。時に彼女たちは、HEWs の職務を超えて人びとの健康管理に関与していることが示唆された。彼女たちは、エチオピア地方都市における近代的な保健衛生の推進者として職務を遂行すると同時に、在来の組織や知識などを活用して、地域に暮らす人びとの健康に関わる問題と地域社会の発展を促す役割を担っている可能性が示唆された。

B11

エチオピア農村におけるリプロダクティブヘルスをめぐる男性の役割

有井 晴香（北海道教育大学）

Male Involvement in Reproductive Health in Rural Ethiopia

Haruka ARII (Hokkaido University of Education)

1994年にカイロで開催された国際人口開発会議を機に、リプロダクティブヘルスの改善は世界的に取り組むべき重要課題であると認識され、家族計画の普及、医療機関での出産や、訓練を受けた医療従事者による出産介助などが推奨されてきた。また、リプロダクティブヘルスの改善に向けて、男性の関与の仕方・態度・認識が重要であることが開発学、人口学を中心に指摘されてきた。

アフリカでは、近年、急速に出産の医療化がすすめられており、出産をとりまく環境は大きく変化している。フェミニズムの観点から、女性がいかに出産に関する選択を自律的におこなえるのかについて大きな関心をはらう一方で、男性は女性の選択を抑制する要因として二項対立的に位置づけられる傾向があり、男性が担う役割については見過ごされてきたといえる。また、アフリカの在来のお産に関する文化人類学的研究において、出産に関わるプロセスは女性の視点を中心に描かれることが多く、男性が直接関与する事例に焦点をあてて描かれることはほとんどなかったといえる。しかしながら、出産に関わる環境の変化とともに、ジェンダー規範・価値観も変化していると考えられる。それでは、アフリカ村落部のお産に関する場において男性はどのような役割を担うことが期待され、また実際にどのような役割を担っているのだろうか。

本発表では、エチオピア西南部に暮らすマーレの人びとを対象に、リプロダクティブヘルスに関わる行動について検討することを通して男性が担う役割について明らかにする。とくに、家族計画の実施と分娩時の役割の2点に焦点をあて事例をもとに検討する。

マーレ社会では、出産は基本的に女性の領域として捉えられ、従来の自宅出産においても介助にあたるのは親族・近隣の女性たちであった。しかしながら、配偶者あるいは親族男性が出産介助に関わる事例もあることが聞き取りを通して明らかになった。また、家族計画に関しても、女性の問題として捉えがちな傾向がある一方で、積極的な姿勢をとる男性も少なからず存在しており、出産の選択に大きな影響を与えていた。

エチオピア政府はリプロダクティブヘルスの改善において、男性の積極的な関与が重要であることを示しており、住民集会などを通して、家族計画の推進、医療施設での出産の状況改善にあたり男性の協力を促し、指導する取り組みがおこなわれている。調査対象であるマーレ社会でもまた、2010年代以降、家族計画の推進や、医療施設での出産の義務化がおこなわれるなど、出産を取り巻く環境が大きく変化している。こうした新しい取り組みをうけ、住民のあいだで男性の役割がどのように認識され、実践がなされているのかについて考察を加えたい。

SDGs ゴール 4 達成に向けたアフリカ諸国数学カリキュラムの基礎的研究
 -分数の学習内容とその配列に焦点をあてて-
 日下智志 (広島大学大学院国際協力研究科)

**Basic Research of Mathematics Curriculum in African Countries
 for Achieving SDGs Goal 4:
 Focus on Fraction's Learning Content and Sequence
 Satoshi Kusaka (Hiroshima university)**

分数は小学校の算数教育において最も重要でありかつ困難性の高い学習内容のひとつであることが先行研究から明らかとなっている。これらは先進諸国に限った話ではなく、アフリカ諸国においても同様である。東南部アフリカ諸国連合 (Southern and Eastern Consortium for Monitoring Educational Quality : 以下, SACMEQ) が実施する 6 年生の国際学力調査では, 参加 16 か国中の 12 か国において, 分数の簡単な計算ができることはおろか, 図に描かれた分数を数字で表せるレベルにも到達していないことが明らかとなった。アフリカは地球最後のフロンティアといわれながらも, 教育の質に関しては世界の中でもとりわけ低く, 学力の向上が喫緊の課題である。しかしながら, 国家の教育の指針となるカリキュラムにおける数学の学習内容およびその配列などに関する基礎的な研究はまだ活発になされていない。Sustainable Development Goals (SDGs) ゴール 4 において, 教育の質の向上が全世界の共通の目標となるなか, アフリカ諸国の数学教育に焦点をあて, カリキュラムおよび教科書における分数の学習内容とその配列を比較分析することはとても意義が深い。アフリカ諸国の小学校算数のカリキュラムでは分数の学習内容がどのように配列され, 教科書ではどのように提示されているのだろうか。本研究では, それらを比較分析することにより, アフリカ諸国における分数の学習に関する特徴と困難性の一端を明らかにすることを目的とする。

比較分析を行う対象国として, エチオピア, ザンビア, モザンビークを選定した。これら 3 か国を選んだ理由は, 各国の植民地の歴史の違いである。途上国で成立している学校教育制度は, 植民地時代に宗主国が持ち込んだシステムを原型として成立していることが多く, 数学のカリキュラムもそのまま持ち込まれている場合が多い。そのため近隣国でありながらも植民地に関する歴史の違う 3 か国を比較することとした。

本研究の目的を達成するために次の方法により研究を行った。(1)分数の困難性に関する先行研究の整理, (2)カリキュラムに記載されている分数に関する学習内容とその配列の比較分析, (3)教科書における分数の提示方法, (4) (1)~(3)を基に分数字学習の問題点および困難性の原因の考察

分析の結果, 分数の学習学年に大きな違いがあり, 学習内容の配列についても一定程度異なることが明らかとなった。学習内容の配列における 3 か国の共通点は, 分数の乗法および除法の扱われ方である。分数の加法および減法さらに分数の種類については, 3 か国共に学習学年を分けて扱われている一方で, 乗法および除法に関しては, 一学年ですべての内容が指導される。また, 分数の意味の指導に関しては 3 か国共に主として分割分数が用いられ, 量分数が全くといってよいほど扱われていない。つまり, 分数を量として捉えないうまま学習が進められるため, 子どもの分数の理解が非常に狭い意味に限定されてしまう。分数の乗法及び除法が丁寧に扱われないこと, さらに量分数の軽視が, 分数の困難性を招いている大きな原因の一つであるといえる。これらは, 分数の意味の理解よりも分数の計算ができるようになることが主の目的とされていることから生じていると示唆される。分数の学習学年およびその配列には一定程度違いがみられたものの, 分数の困難性を招く原因については 3 か国に共通性があることが本研究において明らかとなった。本研究は東部および南部アフリカの 3 か国における一例に過ぎないが, このような基礎的研究の蓄積が SDGs のゴール 4 で目標とされている真の教育の質の向上への示唆を得ることにつながるため, 他国においても同様の研究が行われることが期待される。

クク人はなぜウガンダ人になったのか？
南スーダンからウガンダ南部への移住とブゲレレの今

飛内悠子（盛岡大学）

Why were Kuku come to Ugandan?
The Migration from South Sudan to Southern Uganda
and The Present-day situation in Bugerere
Yuko TONIAI (Morioka University)

2013年から開始された南スーダンでの内戦により、多数の難民がウガンダに逃れた。彼らは避難先で決して楽とは言えない生活を送っている。その難民たちの動向を見ていると、頻繁に移動を繰り返していることがわかる。南スーダン南部出身者たちは南スーダンとウガンダの難民居住区を行き来するだけではなく、ウガンダの南部を含めた各地を転々としている。確かにウガンダの難民法は一定の制限はあるとはいえ、難民の移動の自由を保障するが、ひとは何の当てもなく移動、移住するわけではない。そう考えたとき、南スーダンの南部出身者、特に西ナイル地域との国境地帯出身であるクク人の移住の過程は少々特異であるように見える。なお、ウガンダ—南スーダン国境地帯には両国側にまたがって住む民族もいるが、基本的にクク人は南スーダン人と考えられる。

その移住を可能にした大きな理由の一つが、1930年代から開始されたクク人のウガンダ南部、カユンガ県への移住の歴史である。1890年代にイギリスの保護領となったウガンダへ、クク人たちはより良い土地と働き口を求めて移住した。当時はガンダ王の支配下でもあったカンパラからほど近いブゲレレ（現在のカユンガ県）に近い砂糖製造工場で働き始めた彼らは、次第にブゲレレに土地を買い、親族を呼んだ。そして、勤勉に土地を耕す彼らをガンダ王は認め、市民権を与えたという。

現在、カユンガ県にはクク人が約5万人いるといわれる。彼らはウガンダ国籍を持ち、現在も市民権を与えてくれたガンダ王に感謝をし、公式にはカユンガ県といわれる場所を今でもブゲレレと呼ぶ。だが彼らは自身がクク人であり、南スーダンにルーツを持つことも忘れない。というより忘れることができない。彼らはウガンダ国籍を持ちながらも1950年代から休戦期間を経つても現在まで続く紛争や、ウガンダの政情不安を時代的背景としつつ、自身のより良い人生のためにウガンダの各地と南スーダンを行き来した。さらにはカジョケジやジュバといった南スーダンから親族を呼びよせることもあった。ウガンダ国籍を持っていなくともクク人の多くはブゲレレに親族を持ち、就学や就業のためにブゲレレと南スーダンを行き来したのである。つまり、クク人であれば、誰か親族が土地を持っているケースが多い。そしてこうした国境を越えたネットワークは現在も維持されている、というよりむしろ現在の内戦により強化された。そしてこのネットワークとそれを基盤とした移住の繰り返しは彼らの国家観に大きな影響を与える。はたして彼らはウガンダ人なのか、南スーダン人なのか、難民なのか。

元来、難民とは国家から切り離された存在とみなされていた。しかしそこに生きる人は、難民であると同時に国民でもある。また難民になることにより、逆に国民や国家へと意識が向けられることもあった。

本発表は、クク人の移住の歴史の一端と、それがもたらした現在をしめすことでそうした国民意識醸成の背景にもう一つの移住の歴史を加え、その精緻化を図ろうとするものである。それと同時に、和平協定が結ばれて1年以上たつ現在も多くの難民が生活を続けるウガンダにおける南スーダン難民とされるククの人々の動きの一端を示し、経済的な理由による移住と避難をつなげ、彼らの移住の歴史を再構成する試みでもあった。

サヘルにおける農耕民と牧畜民の対立と共生 現地調査とシミュレーションによる検討

阪本 拓人（東京大学）

Conflict and Coexistence between Herders and Farmers in the Sahel Examination with Field Data and Computer Simulation

SAKAMOTO Takuto (University of Tokyo)

サヘルを中心とする西アフリカでは、近年、テロリズムなどと並んで、農耕民と牧畜民の衝突の頻発が、地域的な安全保障上の問題として認識されるようになってきている。サヘルにおける農耕民と牧畜民の生業上の依存関係は複雑であり、またその社会関係も乾季と雨季で異なる様相を見せるなど流動的である。その一方で、両者の衝突を惹起する大きな契機としてよく指摘されるのが、雨季から収穫期（おおよそ6月から11月）にかけて頻繁に起きる、家畜による農耕地の侵害、すなわち食害（crop damage）である。本報告では、この食害に焦点を当て、ニジェール南部で収集したデータに基づき、食害の分布を広域的に評価し、さらにその低減のための方策を検討するための研究を紹介する。

この研究は、現地調査、衛星画像解析、シミュレーションという三つの手法に依拠している。具体的には、まず、ニジェール南部での現地調査（2017年9月、2019年9月に実施）で得た牧民のキャンプの位置情報や日帰り放牧のトラッキングデータに加え、衛星画像（ESAのSentinel-2）の解析から植生や農耕地の分布に関する面的データを取得する。そして、これらのデータに依拠した牧民の土地利用に関するシミュレーションモデルを構築することで、どの場所で食害が発生しやすいかを示す、広域的な「ハザードマップ」を生成しようとするものである。さらにこのハザードマップを起点に、様々な予測や政策評価も行う。たとえば、近年サヘル地域で広範に進行する耕作地の拡大や土地荒廃の農牧紛争に対する影響を評価することができる。また、土地造成や牧草地の囲い込みなどの介入の評価も厳密に行える。

本報告では、上述の「食害ハザードマップ」の構築を中心に、プロジェクトの内容と現状を簡潔に説明する。

B15

エチオピアの職業技術教育・訓練(TVET)機関における実務訓練プログラム —工場で学生はなにを学ぶか?—

島津侑希 (名古屋大学)

Cooperative Training Program at TVET Institute in Ethiopia: What do the students learn at the factory?

Yuki Shimazu (Nagoya University)

本研究の対象国であるエチオピアでは、公的な職業技術教育・訓練機関(Technical and Vocational Education and Training 機関、以下 TVET 機関)において、市場で必要とされる技能を確実に修得することを目的とし、TVET 機関で基礎的な技能を学んだ後、実践的な技能を地元の受入企業での研修を通して身に着ける、TVET 機関と企業が連携した「実務訓練プログラム」が導入されている。政府の指針では「TVET 機関での授業:受入企業での研修=3:7」とされている。しかし先行研究では、同プログラム導入後も、TVET 機関の卒業生は未だに現場で通用する十分な技能を有していないとされる。

また、TVET 学生にとっても同プログラムは魅力的なものであるとは言い難い。例えば、報告者が参加するプロジェクトで 2016 年にエチオピアの首都に立地する TVET 機関で実施した質問票調査では、「あなたは実務訓練に満足していますか?」という問いに対して、学生 28 名中 16 名が反対した。また、「企業は適切な訓練を提供していますか?」という問いに対しては、教員 8 名中 7 名が賛成したにも関わらず、学生 28 名中 18 名が反対した。

そこで報告者は 2018 年 3 月に同機関および受入工場を訪問して聞き取り・観察を行い、実務訓練の現状を把握するとともに、多くの学生が訓練を魅力的に感じない要因を調査した。また、実務訓練を通して学生はなにを学ぶかについて考察した。

教員への聞き取りでは「実際に使用している機械や設備を使用できる良い機会である。(教員 B)」や「経験を積むために必要である。授業で学んだことを、実際の現場でやってみることが大切である。(教員 C)」という肯定的な意見が多かった。一方で「学生のためになる可能性がある。しかし現状は、工場内では学生は高度な技術が必要なセクションには関わらせてもらえないため、習得できる職業技能が偏る。(教員 A)」という意見もあった。

縫製工場での実務訓練は 9 時~16 時で実施されていたが、TVET 機関での授業内容と学生が行う作業にはつながりが無く、政府の目指す形とは乖離していた。学生は企業に到着した順に空いている作業を割り当てられ、ほとんどの学生は小物の縫い付け・糸の始末・荷物の運搬など、単純作業のみに関わることを許されていた。最初に到着した学生数名はミシンを使用できたが、遅刻した学生たちは半日以上ボタンの仕分けをしていた。工場内には学生を指導する者がおらず、学生は周囲の従業員から「見て」「聞いて」自ら学ぶ必要があった。積極的に周囲とコミュニケーションをとる学生は、限られた中でも様々な作業を体験し、ある程度の新しい技術を習得できていた。しかし黙って一人で作業していた学生は、一つの作業が終わった後にすることが分からず、ただ座って時間を過ごした。他にも、十分に理解しないまま間違った方法で作業を続け、工場長に注意されている学生もいた。

今回の調査では、政府・TVET 教員・学生は実務訓練プログラムを「授業で理論を学んだ後に、実践的な職業技術を習得する場」と考えている一方で、受入企業側は学生を「単純作業を担う労働者」として扱っていた。このような違いが、学生の不満に繋がっていると言える。これは受入企業の体制が整っていないことや、TVET 機関との連携不足であり、プログラム自体の課題であると言える。一方で、学生自身にも改善すべき点があるのではない。同じ工場であっても、学生によって経験に大きな差ができており、特に「時間を厳守する」と「コミュニケーションをとる」が必要不可欠であった。このような非認知的能力は就職する際にも、企業が重視する点である。実務訓練は、実践的な職業技術を学ぶ場というよりも、非認知的能力を高める場として活用されるべきであるかもしれない。

ケニアにおける中等教育の急速な拡大と卒業生の進路 通学制の学力上位者に焦点を当てて

小川未空（広島大学）

How do secondary school graduates access higher education?

The case of top students from a day school in rural Kenya

Miku OGAWA (Hiroshima University)

1990年を一つの契機とし、国際社会は、アフリカにおける基礎教育の拡充を推し進めてきた。そこには、学校に行くことで、人びとがより豊かになるだろうという前提があった。ケニアは、アフリカで最も急速に教育普及が進む国のひとつである。8年間の初等教育は普遍化（純就学率91%）し、4年間の中等教育も急速に大衆化（純就学率51%）している（2017年時点；KNBS 2018）。しかし現実には、多大な費用を投じたにも関わらず、学校を卒業しても仕事がないという問題に直面する中等学校卒業生は多い。とくに、高学力・高所得者層が集まる全寮制ではなく、就学機会を広げるために近年急増した通学制校の卒業生が、そのような困難に直面しやすい。このため、卒業生の多くは、不安定な労働に従事するか、あるいは、高等教育での就学を継続する状況となっている。ケニアの高等教育就学者数は、10年間（2005→2015年）のうちに19万人から71万人へ増加し、教育機関数では57機関から1,341機関へと激増した（KNBS 2018）。しかしながら、高等教育への進学は、機会費用のみならず、学費などの就学費用が中等教育と比してもかなり高額になる。

以上の状況を踏まえ、経済的問題で寮制校へ進学できなかった通学制校の生徒は、卒業後、どのように高等教育へアクセスしていくのだろうか。本発表では、西部地域の中等学校（以下、A校）の卒業生の事例について報告する。A校は、2006年に設立された通学制校である。対象とするのは、A校の2016年卒業生のうち、入学時点で最も学力の高かった3人（学力上位から順に、マイク、ケビン、ローズ。いずれも仮名）の事例である。同年のA校卒業生のうち、彼らを含む学力上位層である1割程度が大学へ進学、そのほかは職業訓練校や日雇い労働、家事労働などに従事していた（2019年調査時点）。

3人は共通して、全寮制に進学できる学力がありながらも、経済的問題で通学制のA校に進学した。また、高等教育への進学時、いずれも、保護者や家族からの恒常的な支援を得られていない。中等学校での非常勤教員（マイク）、初等学校での非常勤教員（ローズ）、ナイロビでの出稼ぎ（ケビン）などの方法により、中等学校卒業後に自ら働き、進学のための費用（学費や生活費）を工面していた。マイク（入学時・卒業時1位）とケビン（入学時・卒業時2位）の事例からは、彼らの高い学力こそが彼らの進学費用を軽減したことが分かった。両名は、中等学校での学費未納分をA校長より容赦され、また、高等教育進学にあたっては政府から奨学金を得る、といった便益を受けていた。ただし、奨学金を得るために、小規模の大学（マイク）や、私立の大学（ケビン）など、不本意にも学歴としての価値が相対的に低い教育機関に進学しなければならなかった。これに対しローズ（入学時3位・卒業時8位）は、最終学年において学力が少し下がったことも影響し、マイクやケビンのような経済的恩恵は得られなかった。一方でローズの場合、学費などの貯金のために2年ほど遅れた進学ではあったが、希望の有名大学への入学は果たせた。ただし、学位取得までの4年間の学費を支払えるほどの見通しはたっていない。

高等教育は急速な拡大を遂げているが、その質は十分に担保されていない。ケニアにおいて、このまま学歴インフレーションが進行していくことは、高等教育を修了してもなお失業するという負の連鎖を生み出しうる。さらにいえば、大学間での横の学歴が問われるようになってくれば、奨学金を得ないと進学できない学力上位者を、奨学金を得ずに大学を選択できる相対的富裕層が逆転する可能性も出てくるだろう。学力だけに基づかない新たな進学格差が、中等教育と高等教育との接続点に生じうるといえる。

マラウイの小学校における留年・転校・退学要因
～学校要素と個人要素の分析から～

谷口京子（広島大学）

Factors Influencing Grade Repetition, Transfer and Dropout in Primary School in Malawi: School and Student Level Factors
Kyoko Taniguchi (Hiroshima University)

多くの開発途上国では、留年や退学が初等教育の修了を妨げている。また、近年、転校も初等教育の修了の妨げになっていることが分析されている(Taniguchi, 2017)。本研究の対象であるマラウイにおいても同様であり、留年率は 19.1%(MoEST, 2014)、転校は約 15%(Taniguchi, 2017)、退学率は 14.6%(MoEST, 2014)と非常に高く、初等教育修了率は 52%と非常に低い (MoEST, 2014)。

本研究は、マラウイの初等教育修了率の向上のために、児童の留年・転校・退学の実態を明らかにし、進級と比較して、留年、転校、退学には、どのような要因が影響しているのかを実証的に検証した。マルチレベル多項ロジスティック回帰分析を用い、学校要素と個人要素の占める割合を算出し、学校要素と個人要素を分析した。

調査対象地域は、マラウイのドウワ県、ムジンバ県、ンカタベイ県の 3 県であった。これらの 3 県における主要な民族は全て異なっている。また、初等教育修了試験の合格率が異なっている。研究の対象は、公立小学校 28 校(ドウワ県 10 校、ムジンバ県 10 校、ンカタベイ県 8 校)における 5 年生と 7 年生であった。本研究では、同じ児童を長期間に渡って追跡する生存分析を用い、児童個人レベルと学校レベルの縦断データを作成している。現地調査は、2016 年 9 月～11 月(第一次調査)、2017 年 9 月～11 月(第二次調査)、2018 年 9 月～11 月(第三次調査)に実施した。本報告では、第一次調査から第二次調査までの 5 年生の結果のみ報告する。

第一次調査では、5 年生 2091 名に学力試験と質問紙調査を実施した。第二次調査では、これらの児童が進級、留年、転校、退学したかどうかについて追跡した。つまり、第一次調査から第二次調査までの 1 年間に留年、転校、退学する児童を明らかにした。結果、第一次調査でデータを収集した 2091 名は、第二次調査時では、進級 1115 名(53.7%)、留年 562 名(27.1%)、転校 319 名(15.4%)、退学 81 名(3.9%)、その他 14 名(4 年生へ留年 2 名、死亡 1 名、不明 11 名)となっていた。学力テストと質問紙調査から変数を作成し、マルチレベル多項ロジスティック回帰分析を用い、留年、転校、退学要因を明らかにした。モデルは、まず、ヌル・モデルを作成し、学校要素と個人要素の割合を算出した。次に、学校要素と個人要素を投入したモデルを作成し、留年、転校、退学要因を分析した。

学校要素の占める割合は、留年は 15.2%、転校は 9.5%、退学は 16.4%であり、留年や退学は比較的高かった。つまり、留年や退学は、児童個人要素だけではなく、学校要素も関わっていることを示している。転校は、児童個人要素が大きい。留年は、主に学力が低いことが要因であったが、初等教育入学時の年齢が高いことも要因であった。転校は、両親の無が要因であった。退学は、初等教育入学時の年齢が高いこと、これまでの転校回数が多いこと、教員の遅刻が多いことが要因であった。

参考文献

- Malawi Ministry of Education Science and Technology (MoEST). (2014). *Educational Management Information System (EMIS). Educational Statistics 2013*. Lilongwe: MoEST.
- Taniguchi, K. (2017). Determinants of Student Mobility in Primary School in Rural Malawi: An Event History Analysis. *World Journal of Education*, 7(2), 19-30.

B18

絵本を読む子どもの反応と絵本寄付の可能性 絵本でつなぐアフリカと日本

児玉 夏菜、國枝 美佳（慶應義塾大学 湘南藤沢キャンパス（SFC））

Assessing the potential of donating children's books The story book connection between Africa and Japan

Kana Kodama and Mika Kunieda (Keio University Shonan Fujisawa Campus)

図書館で児童書コーナーにある小さな椅子に座って目を輝かせながら本を読む子どもたち。寝る前に両親に読み聞かせてもらいながら眠りにつく子どもたち。子どもたちが読む「絵本」には子どもを楽しませる仕掛けがたくさん詰まっている。そして子どもたちは絵本とともに成長していく。これはどこでも当たり前なのだろうか。日本には書店がある、図書館がある。しかしながらケニアのキベラスラムには至る所に図書館があるわけでも書店が立ち並んでいるわけでも、本を買うお金があるわけでもない。今回、私はキベラスラムにある学校やモンバサ郊外の村にある学校を訪問し、日本の絵本を手にとった子どもの表情、絵本を読んでいる子どもの反応に焦点を当て、フィールドワークを行うことにした。

絵本を手にとった子どもたちはどのような表情をするのか、言語が違っても子どもを楽しませるといふ絵本の役割を果たすことができるのか。丹念に観察し、こちらに注目していく。また、日本の子どもとキベラスラムの子どもの読み取り方、感じ方も記録し分析する。ケニアの学校に通う子どもたちは日常的にどのような本と触れ合っているのか、絵本に対してどのようなイメージを持っているのかの現状把握も同時並行で行なう。

私がアフリカの子どもたちと何かできることがないだろうかと思った時に思いついたのが絵本の寄付であった。しかしながら、絵本を寄付すると言っても、言語の違う絵本をどのような形で寄付をすればいいのか、果たしてアフリカの子どもたちは喜んでくれるのか、一時の支援で終わらせないためにできることは何か。子どもたちに分類や管理のことを話したら自分たちで何かよい方法を編み出してくれるか。実際にアクションを起こす前で浮かび上がった不安をなくすために、事前調査と位置付けてこのフィールドワークを行う。この結果を通して、アフリカへの絵本の寄付に対する不安が少し取り除くことができたと願っている。また、実際のアフリカの子どもたちと本との関係を自分の目で見ることで、アフリカの子どもたちと本のこれからの将来について考え、この2つの関係が良い方向になるように働きかけられればと考えている。

発表 C 会場

南アフリカの経済的不平等と BEE 政策

西浦昭雄（創価大学）

Economic Inequality and Black Economic Empowerment (BEE) Policy in South Africa

NISHIURA Akio (Soka University)

世界的に所得格差の拡大が懸念される中、トマ・ピケティやジョセフ・ステグリッツらの経済的不平等（主に所得・資産格差）に関する研究が注目されている。本報告で対象とする南アフリカは、1994年の民主化達成時から経済的不平等は貧困・失業問題とならび一貫した課題であり、経済的不平等の指標は世界で最も高い国である。同国では経済的不平等の是正と経済変革（Economic Transformation）の手段として Black Economic Empowerment (BEE) 政策が実施されている。

これは、アフアーマティブ・アクションの一種であるという側面があるが、人種（民族）間の所得格差の是正をめざしているという点では、マレーシアのブミプトラ政策と並ぶ大規模な試みともいえる。長年のアパルトヘイト政策を経験し、人種間の所得格差が著しい南アフリカにおいて民主化後に推進されている BEE 政策は、歴史的に差別を受けてきた人々（黒人や女性、障がい者等）を対象にした、管理職への昇進、株式所有の移転、優先調達、技能開発といった一連の優遇策を総称したものである。BEE 政策は全体的には強化され、所有・経営支配面から優先調達による黒人中小企業の育成にその焦点がシフトしてきているようである。BEE 政策は、国家規模で取り組みであり、南アフリカ経済・社会のみならず企業経営にも与える影響は大きいと予想されている。他方で、BEE 政策が、黒人内での経済的不平等をむしろ拡大させているのではないかという懸念があり、汚職に結びついているという批判もある。

BEE 政策は南アフリカの経済的不平等の是正につながっているのか、それとも悪化させているのだろうか。また、BEE 政策は経済変革への有効な手段といえるのだろうか。さらには、そもそも経済的不平等への是正策と経済発展／成長は両立しうるのか。報告者はこれらの「問い」に対して、企業経営への影響、とりわけ企業統治の視点から BEE 政策を捉えることで、中長期的な南アフリカへの影響を考察できないかと考えている。

これまで BEE に関する先行研究については、法学や政治学、経営学等のさまざまなアプローチがされてきたが、経営学からは、①BEE を推進している企業の業績や株価との関係を分析した研究、②企業の社会的責任という観点から BEE を論じている文献が主であった。BEE は短期的な企業収益や株価に対する影響よりも、むしろ中長期的な経済変革を意図した面があるため、企業の意思決定の仕組みやステイクホルダー間の利害調整の変化を理解する上で、企業統治論の視角は有効であると思われる。しかし、企業統治論の視点から BEE を扱った文献は少ない。本研究では、①取締役会の役割変化、②取締役会および執行役員構成の変化（黒人・女性比率の変化）、③株主との関係変化（株価収益率等の指標の活用）、④その他、ステイクホルダー（銀行、機関投資家、消費者）との関係変化、⑤企業グループの変容、の5点について、量的・質的手法を組み合わせ分析することを最終目標に掲げている。

本稿では、こうした研究の端緒として南アフリカにおける経済的不平等と BEE 政策の変遷について考察したい。筆者は、上記課題に対して文献調査とともに現地予備調査として通商産業省や金融部門移管評議会といった公的部門、南アフリカ商工会議所、ダーバン商工会議所、南アフリカ銀行協会等の経済団体、ウィットウォーターランド大学、ヨハネスブルグ大学、南アフリカ大学等の研究者、現地・外国資本の企業関係者にヒアリングを実施してきた。

なお、本調査は2018～2020年度科学研究費基盤研究(C)「南アフリカにおける黒人経済力強化(BEE)政策と企業経営の変容に関する研究」(研究代表者：西浦昭雄)による研究に基づいている。

Electoral Blind Spot in Africa**Takashi Nagatsuji (Graduate School of Political Science, Waseda University)**

Does an electoral turnover improve the quality of elections in the future? I argue that an electoral turnover decreases the quality of the following election by creating electoral blind spot. The conventional wisdom dictates that an electoral turnover is one of the key elements in democratization and democracy, and a country gains a good reputation from citizens and the international community when an election changes the political leaders. However, an assumption that the newly elected leaders will hold free and fair elections in the future creates an electoral blind spot where the international community becomes soft in monitoring the following election. The international community mistakenly extends the reputation for the leaving leaders to the new leaders who constitute the new governments. The former opposition leaders who endured electoral manipulation in the past know the strategies of manipulation from the former leaders who dominated the government. They may take advantage of the blind spot and use the same old manipulation strategies in the following election. I test implications of this argument through the statistical analysis of electoral data in Sub-Saharan Africa. By theoretically and empirically unveiling the negative impact of electoral turnovers, this research contributes to the literature on democracy and also helps election observation missions to have appropriate plans for their observer dispatches.

2019年ナイジェリア総選挙から見えた「地域」の重み

島田周平(名古屋外国語大学)

Importance of Regional Issues in Nigerian politics seen in the 2019 General Election

Shuhei SHIMADA (Nagoya University of Foreign Studies)

はじめに

2019年2月23日、第4共和制で6度目の大統領選挙が実施された。現職のブハリ(Buhari)大統領(全進歩会議 APC)が元副大統領アティク(Atiku)(人民民主党 PDP)を破り勝利したが、この選挙では、「若手」政治家たちの挑戦というもう一つの戦いが行われていた。彼らの挑戦は予想外の大敗に終わったのであるが、本報告ではその原因について検討してみたい。

1. 既成政党の戦い

二大政党の論戦は、ブハリ政権の4年間の評価と、アティク候補の公約と資質に焦点が絞られた。前者に関しては、汚職追放の不徹底、政治運営能力への疑問、ボコハラム掃討作戦の失敗、アムネスティ計画の予算削減の影響、そして大統領の健康問題に批判や疑問が集中した。アティクの経済自由化の主張は、彼自身の汚職の過去が暴かれる中でさらなる汚職拡大につながるような印象を与え、彼に不利に働いた。接戦の予想とは異なり、ブハリが15,191,847票を獲得しアティクの11,262,978票を大きく上回った。

2. 若手政治家たちの挑戦

ここでいう若手政治家とは、ニューヨークでサハラ・レポーターズという放送局を運営するソウォレ(Sowore)や、ナイジェリア中央銀行副総裁を務めたモガル(Moghalu)、さらにはコンサルタントのドゥロトイエ(Durotoye)など、海外で高等教育やビジネスを経験した国際経験豊富な候補者を指す。彼らは年齢的には決して若くはないが、既成政党の二人の政治家とは一線を画す若手と呼ばれた。彼らはディアスポラの支持も得て、SNSや海外のメディアを使い新しい選挙戦を展開した。

3. 若手政治家たちの大敗の原因

スマホの普及率が30%弱、世帯のパソコン所有率が10%程度(2014年)とまだ低いが、20歳以上35歳未満の有権者が5割を占める中で、彼らへの支持の行方に関心が集まったが、彼らの得票数はそれぞれ、33,953票、21,886票、16,779票と惨敗であった。

敗北の第一原因は選挙実施方法に求められる。大統領選挙は、連邦議会、州知事(一部)、州議会の選挙と同時に実施されるので、既成政党の地方政治家の支持が不可欠である。その上、投票予定日(2月16日)の早朝に選挙実施の1週間先送りが突如発表され、投票のため休暇を取って選挙区に帰郷していた若者から投票の機会を奪ったといわれる。

しかし、彼らが支持を得られなかった原因はその選挙公約にもある。政治の民主化、汚職追放、経済再建等を訴えたが、人々の主要関心事である「牧畜民問題」、ビアフラ独立問題、デルタ地域の反政府運動等の「地域」の問題への切り込みは弱かった。

4. ナイジェリア政治における「地域」の重み

ブハリ政権にとって最も重要な課題となってきたのは、若手政治家たちが避けた「地域」問題である。「牧畜民問題」と関連するRuga(放牧地)計画、IPOB(ビアフラ地元民)のビアフラ独立運動、西部の州知事たちが発表したAmotekun(レオパード)作戦等である。

若手政治家たちがより多くの支持を得るためには、人々が日々直面している「地域」問題に積極的に発言する必要がある。しかし、そのことは彼らの主張である「地域問題の超克」に反する危険性があり容易ではない。同じく若手政治運動家として有名なIPOBの指導者カヌ(Kanu)は、ビアフラ独立こそ「地域問題の超克」の一つの答えだという立場に立ち、そもそもナイジェリアの大統領選挙を認めない立場を取った。ナイジェリアの政治家にとって、「地域」問題に取り組むということは容易ではないのである。

今回の選挙で国民が若手政治家たちに求めたのは、「地域問題の超克」は「地域」問題の直視から始めなければならないという基本的な政治姿勢だったのではなかろうか。

大統領の椅子

特に、ガーナ共和国における大統領のガバナンスと政権交代の事例を中心として

阿久津昌三（信州大学）

The Presidential Seat

A Case-Study of the Governance of President and Regime Change in Ghana

Shozo Akutsu (Shinshu University)

1981年12月26日ナイロビを飛び立ったエチオピア航空で念願のガーナ共和国の首都アクラに到着した。タラップを降りたときの熱気は今でも忘れることはできない。5日後の12月31日にローリングス空軍大尉によるクーデタが起きた。ガーナの政党政治に関する調査研究を計画していただけに政党活動の禁止はさすがにショックを受けた。しかも10年間も軍事政権下におかれた。アフリカ諸国の民主化の動きのなかで政党活動が解禁されたが、ガーナの大統領選挙及び総選挙は大学の業務が多忙な時期に実施されるため調査することができなかった。大学の定年後の仕事としてこの古くて新しい研究テーマに挑戦したい。

ガーナは2000年に行われた総選挙で、それまで野党であったNPP（新愛国党）のクフォーが新大統領に当選し、翌年にはNPPを与党とする新しい政権が発足した。約19年間続いたローリングス独裁政権が終焉を迎え、8年間与党の座にあったNDC（国民民主会議）が野党に転落した。ガーナの政治史上はじめて選挙による政権交代が実現した。その後、NPPとNDCの二大政党による政権交代が続いている

本研究発表では、1992年から2016年までの大統領選挙と政権交代の概要を明らかにことが目的である。また、2020年の大統領選挙ではNPP（新愛国党）となるのかNDC（国民民主会議）となるのか政局を展望する。

- | | |
|--|-------|
| ① P NDC（暫定国家防衛評議会） | P NDC |
| （ローリングス空軍大尉、1981—1992年。1990年末に民政移管の具体的な日程を表明、10年ぶりに政党活動解禁される。憲法の改正など）。 | |
| ②1992年大統領選挙（ローリングス政権） | NDC |
| （大統領選挙不正問題と野党による議会選挙のボイコット問題。一党独裁体制の確立）。 | |
| ② 1996年大統領選挙（ローリングス政権） | NDC |
| （大統領3選問題。3選問題とは最高指導者が3選禁止規定を改変して政権に留まる現象のこと） | |
| ④2000年大統領選挙（クフォー政権） | NPP |
| ⑤2004年大統領選挙（クフォー政権） | NPP |
| ⑥2008年大統領選挙（ミルズ政権→マハマ政権） | NDC |
| （2009年のミルズの死と副大統領マハマの昇格。副大統領とは何か） | |
| ⑦2012年大統領選挙（マハマ政権） | NDC |
| （アクフォ＝アド、2013年の選挙結果を無効とする最高裁訴訟。敗訴） | |
| ⑧2016年大統領選挙（アクフォ＝アド政権） | NPP |

「大統領のガバナンス—J・J・ローリングス空軍大尉の事例を中心として」

（日本アフリカ学会第51回学術大会、京都大学稲盛財団記念館、2014年5月25日）

「大統領のスピーチ—Kwame Nkrumahの独立式典の事例を中心として」

（日本アフリカ学会第53回学術大会、日本大学生物資源科学部、2016年6月4日）

「大統領の国葬—Kwame Nkrumahの埋葬、再埋葬、再々埋葬の事例を中心として」

（日本アフリカ学会第56回学術大会、京都精華大学、2019年5月18日）

（謝辞）本発表は、JSPS科研費「アフリカ諸国における独立記念式典の変容過程に関する民族学的研究」（JP17K3279）の助成を受けたものである。

セネガルの高等教育の場におけるイスラーム
～社会変容の現場から～

阿毛 香絵（京都精華大学）

Islam and higher education spaces in Senegal
Knowledge, power and social change

Kae AMO (Kyoto Seika University)

白い宗教儀礼用のブブーに身を包んだ学生達が金曜礼拝に集い、それぞれのグループの集会場集ってズィクル（神の名を繰り返し唱える宗教実践）を行ったり、コーランの勉強会、宗教や社会をテーマとした講演会を開催したりする様子がダカール大学キャンパス内で頻繁に見られるようになったのは1980年代に入ってからだ。植民地時代にはフランコフォン・エリート層の育成を行い、それに次ぐセネガル独立前後の1950、1960年代にはマルクス主義やレーニン主義など左派の政治運動で沸き返ったダカール大学は、近年になって学生達が堂々とイスラームの儀礼や実践を行う場所となっている。

キャンパス内にイスラーム・アソシエーションが多数作られたのと同時期に、大学外にも私立の「フランコ・アラブ学校」やイスラーム大学が多数設立された。これらの学校の多くは、地元のイスラーム教団のリーダー達や改革主義の指導者達が立ち上げ、時にアラブ、中東地域の異なる提携先から支援を得るなどして発展してきた。特に1990年ごろから、政府の方針である高等教育の自由化に後押しされる形で、セネガルにおける教育の現場において影響力を強め続けている。また近年のIT化、情報化によって、これらのイスラーム教団や教育機関は、それぞれのメディア媒体を整えて教育の情報化を行ったり、独立したテレビ局やラジオ局、インターネットサイトなどを通して新たなイスラーム教育を発展させている。

以上で述べた高等教育の場における多様なイスラーム化の動きには、セネガル全体の社会、政治的変容が背景にある。本発表では社会運動や政治運動を先導してきた都市の若者達や学生達、教育者達の活動、政治観や宗教観に注目し、高等教育機関における近年の多様なイスラーム運動発展の経緯について論じる。

始めに、セネガルを含む西アフリカにおいてイスラーム、高等教育、政治とが密接に関わり合いながら社会を形成してきたことについて指摘する。11世紀より点在したコーラン学校、植民地時代にフランス政府によって設置されたマドラサ、それぞれのスーフィ教団の教育施設、アラブ地域からの支援を得たアラブ・イスラーム学校等、現地における多様なイスラーム教育機関は全て、それが発展した当時の政治的背景と密接に関わっている。

次に、独立後のセネガルにおける政治と大学、宗教の関わりを概観し、1960年代に政治運動の場であった国立大学が1980年代に入ってからイスラーム復興運動の場になった経緯について、社会主義、マルクス主義の敗退や、学生の社会における地位の変化、経済と政治の自由化に伴う都市の若者達の運動などとの関連から明らかにする。特にセネガル前大統領、ワッド大統領の率いる自由主義政権（2000-2012）において、それまでの社会主義政権によって暗黙裡に構築されてきたイスラーム教団と政府との関係が表立って政治に利用されたことによって、それに準ずる、あるいは反対する新たなイスラーム政治運動が都市の若者達の間で発展した経緯について指摘する。

最後に現在の学生達の宗教実践について現代社会との繋がりから考察する。近年の若者達の宗教実践の個人化、理性化の現象について延べ、それぞれの解釈によってイスラームの教えを理解し自らの生き方や新たな社会改革の柱としている現代の若い世代の実践について述べる。

以上の考察を通し、大学を含む高等教育の現場が若者達、学生達の宗教活動や政治活動を通して、セネガルにおける社会変容のダイナミズムを形成してきたことを指摘する。

盛 恵子 (国立民族学博物館外来研究員)

**Women's religious authority in a Sufi Order,
Tijāniyya Ibrāhīmiyya of Senegal**

Keiko MORI (Visiting Researcher of National Museum of Ethnology)

イスラームにおいて、特にスーフィー教団において、女性は周縁的で受け身である、という通念を否定しようと意図する研究には、いくつか例を挙げれば、女性はジェンダーによる差別を表面的には受容するが、象徴的な方法で男性優位の体制を批判し相対化する手段を持っている(Andeziān 1997)、女性は公的な活動をしないが、神の恩寵であるバラカを得るために、スーフィー教団を積極的に利用する(Coulon 1988)、教団の権威者を後ろ盾にして、イスラーム的魔術の術者として authority の獲得に成功した女性たちが存在する(Gemmeke 2009)といったものがある。しかし、イスラームの非公式な領域で女性がいかに能動的・活動的であったとしても、公的な領域への女性の参加が許されない限り、女性の地位は周縁的でありつづけるといわざるを得ない。

ここにおいて、ティジャーニー教団の分派であるティジャーニーヤ・イブラヒミーヤ、通称ニャセンは、女性に宗教的権威を認めるスーフィー教団として、注目に値する。ニャセンは、イブラヒマ・ニャス(1900-1975)によってセネガルにおいて創始され、サハラ以南アフリカの全域に信徒を有する。ニャスは、神の唯一性(tawḥīd)を認識することがイスラームの信仰の土台であるとして、この認識を得ることを目的とした独自の霊的教育タルビヤ(tarbiya)を受けることを、すべての信徒に対して義務とした。セネガルのニャセンでは、男性指導者に混じって女性指導者が存在する。彼女たちはスーフィーの師として、男女両性の弟子を持ち、弟子に対してタルビヤを行い、数十人から時に百人を超える弟子から成る信徒団を率いる。スーフィー教団においては、弟子は師に対して絶対服従すべきとされるので、ニャセンにおいては男性の弟子が女性の師に対して絶対服従するという、ムスリム社会の通念を覆す関係があり得る。セネガルの他の主なスーフィー教団、すなわちムリッド教団、ティジャーニー教団の別の分派であるティジャーニーヤ・マリキーヤ、そしてライエン教団には、このような女性の指導者が存在しない。この3つの集団の男性指導者たちは、イスラームにおいては、女性はモスクでの礼拝の時のように、常に男性の後ろに在るべきなので、女性が宗教指導者になることは許されないと述べた。

ニャセンの男女の指導者たちによれば、女性が宗教的権威を持つことができる理由は、イスラームには外の・明らかな(zāhir)次元と隠された(bāṭin)次元があり、隠された次元においては、性別は存在しないからである。神は意のままに、人間の中のある者たちに、秘密の知識を与える。秘密の知識を持つ者、ウォロフ語で *boroom bāṭin* である女性は、そうでない男性たちに勝り、したがって彼らの上に立ち、彼らを指導することができる。私はダカールで4人の女性指導者に会ったが、そのうちの3人は、ニャセンの最高権威者である男性指導者たちから、指導者となるべき免許を与えられていた。このことは、ニャセンの中枢部に、女性指導者を作り出そうという意向が存在することを示すといえる。

(引用文献)

Andeziān, S.(1997) The Role of Sufi Women in an Algerian Pilgrimage Ritual. *African Islam and Islam in Africa: Encounters between Sufis and Islamists*, pp.193-214, Hurst & Company, London.

Coulon, C.(1988) Women, Islam, and Baraka. Cruise O'Brien and Coulon(ed.) *Charisma and Brotherhood in African Islam*, pp.113-133, Clarendon Press, Oxford.

Gemmeke, A.(2009) Women in Dakar: Creating Authority in Islamic Knowledge. *Africa*, Vol.79, No.1, pp128-147.

参詣の場における「声」の権威

セネガル・ムリッド教団の祭事マガル・トゥーバの事例

池邊智基（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

Authorizing the Voice in the Space of Pilgrimage Practice

The Case of the Festival *Magal Touba* of Mouride Sufi Order in Senegal

Tomoki Ikebe (Asian African Area Studies, Kyoto University)

本発表は、セネガルの西アフリカ・セネガルのイスラーム神秘主義教団のひとつであるムリッド教団の祭事「マガル・トゥーバ」において開催される参詣ズィアールの実践形態を対象にする。そして、儀礼空間で語られる演説ワフターンでは、その空間において最上位の導師の声は聴衆には聴こえない。しかし導師の言葉は、伝達役がマイクを使って話すことによって聴衆たちへ媒介され伝えられる。この「声」について、本発表で検討する。

マガル・トゥーバは、ムリッド教団の開祖アマドゥ・バンバ (Amadou Bamba 1853-1927) がフランス植民地行政によって流刑に処された日である、イスラーム暦のサファル月 18 日 (西暦 2019 年では、10 月 17 日) の前後一週間ほどの期間を通じて、トゥーバ市内の各地で開かれる。一般的にスーフィー教団の祭では、コミュニティごとにモスクの周辺などにテントを設営し、豪華な食事をとりながら、信徒たちのクルアーンや宗教詩の朗唱といったプログラムが昼夜を問わず開かれる。セネガルのスーフィー教団には、秘儀的で階層的な知の体系を教示するセリン (*seriñ*) という導師がおり、信徒 (タリベ *talibe*) がセリンのもとに帰属するという師弟関係の階層構造がある。マガル・トゥーバでは、国内外の信徒がセネガル中部のトゥーバに集まり、セリンのもとへ参詣 (ズィアール *ziar*) をする。

このマガル・トゥーバのプログラムのひとつに、参詣ズィアールと、そこで語られる演説ワフターン (*waxtaan*) がある。参詣 (アラビア語で *ziyāra*) は、マッカへの巡礼 (ハッジ) と明確に区別された実践であり、神の「恩寵」の宿る聖者廟や聖墓などに詣でることを指す。セネガルのムリッド教団の場合、「参詣」(ズィアール) は、開祖の子孫である導師のもとへ訪問・謁見することを指す。本発表で扱う事例では、マガル・トゥーバの前夜に行われるイベントである、贈答品や献金 (*addiya*) を渡すために導師のいるモスクのもとへ信徒たちが一斉に行進し、米袋や家畜などの物品を届ける「ズィアール・セリン・ビ」(*ziar seriñ bi*) について検討する。この参詣では、多くの信徒がセリンと同じ空間に居ることができる時間となる。モスクに大挙した数百人もの信徒たちは、広場で側近たちと共に座しているセリンを囲む。信徒たちから持ち寄せられた贈答品がセリンのもとに受け渡され、信徒を代表するもの (*jawriñ*) によって演説が行われる。

この演説を、2019 年 10 月 16 日の夜に録音したウォロフ語転写資料をもとに分析する。まず、この演説中にセリンが発する声は聴衆には一切聴こえないような小声で話されているが、伝達役 (*jottalikat*) によってマイクで聴衆へ、直接または間接引用の形式で伝えられる。その直接・間接引用による語りは、セリンの言葉だけでなく、セリンの祖父である開祖バンバなどの言葉も語られる。このとき、セリンと開祖バンバの言葉は主にアラビア語で引用される。特にバンバの言葉の場合、アラビア語の著作や韻文などからの直接引用をするが、伝達役はそれをウォロフ語に翻訳して聴衆へと伝える。このことは、聴衆には聴こえないセリンの声と、聴衆の多くが解さないアラビア語の文言 (バンバの言葉) が、「聴こえず」、「理解できない」地点に一度置かれる「権威化」が行われていることを示す。その上で、伝達役によってウォロフ語への翻訳が行われ、それが大声で発せられることで、「聴こえ」、「理解できる」地点まで引き寄せる「共同化」が行われている。このような参詣の空間における「声」の権威について詳細に検討し、語りの内容についても発表で扱う。

イスラーム世界の女性をめぐる研究

ヘバタッラー・オマル (名古屋大学人文学研究科博士課程 1 年)

Research on women in the Islamic world

Hebatalla Omar (Nagoya University Graduate school of Humanities DC1)

フランスの人権宣言やアメリカの独立宣言で言われていた「人」という概念には、女性は含まれていなかった。そのため、フランスのオランプ・ドゥ・グージュが『女性の権利宣言』(1791年)を書いて、この著作によりグージュは断頭台で死刑となったことや、西洋政治哲学における女性認識の歴史を読むと西洋の女性解放運動の年齢 2 世紀に過ぎないことが分かる。それに対し初期のイスラーム時代や、中世時代の歴史における女性の社会的そして宗教的な地位をみるとびっくりする。同時代の西洋史の女性地位と比較すると一層驚いてしまうはずだ。イスラームの女性は、イスラームのハディース学やコーラン学の記憶力が必要な学問だけではなく、分析の必要な学問に名前を残したイスラームの女性が少なくない。ウマル・イブン・アルハッターブムハマド預言者の友情そして第 2 代正統カリフ (634年 - 644年) が、才女のアルシェファール・ベントアブドッラー・アルマフズーメヤを裁判官として務めたこともその一例である。現代イスラームの女性の問題にかかわる諸現象の社会的な歴史的な背景を探ること興味深くなっていくはず。

近代の西洋のイスラームの女性をめぐる多くの研究は、イスラームの女性の問題や悩みの性質無.その問題の歴史的な背景や社会的な背景を視している。多くのイスラーム女性の側の西洋の研究に対する対立の気持ちそのために過ぎない。イスラームの国々と西洋の国々の関係は、長い歴史がある。イスラームの女性の性差という課題が占領の正当化に使われた。それは西洋のイスラームの女性の先行研究は、非常に多い一つの原因だ。19 世紀のイギリスの女性解放運動非常に反対したクローマ-の東洋の女性に対する政策という背景にもみられる。現在のアフガニスタンの占領のイスラームの女性解放という課題一例である。すべての西洋研究は政治的な目的のため行われたと言いたいわけではないがほとんどその目的に使われている。イスラム教徒の女性に関する学術文献は特に、過去 30 年間で膨大な量になったため、本書では、イスラームの女性、特に中東のイスラームの女性に関する日本研究者、西洋研究者、中東系の研究者のそれぞれの文献の特徴や関わりを取り上げる。

ペンテコステ派・カリスマ派を起因とする霊的存在の変容
ベナンのデリヴァランス儀礼を事例として

村津蘭（京都大学）

**Transformation of Spiritual Entities under the Influence of
Pentecostal/Charismatic churches
A Case Study of Deliverances in Benin**

Ran Muratsu (Kyoto University)

20世紀北米に端を発するペンテコステ派・カリスマ派教会は、今日のアフリカ諸国において存在感を強めており、ベナン共和国も例外ではない。ベナン共和国で2009年以降急速に成長した、ローマ・カトリックから派生した新宗教「イエス・キリストの大聖教会バナメーミッション」(La Très Sainte Église de Jésus-Christ, Mission de Banamè、以下「バナメー教会」)や、2017年以降テレビ番組を利用した布教で注目を集めるカリスマ牧師率いる「イエスの復活の力の国際ミニストリー」(Ministère International de la Puissance de la Résurrection de Christ)教会では、「デリヴァランス」と呼ばれる儀礼が重要視されるが、この儀礼もペンテコステ派・カリスマ派から影響を受けた実践である。本発表では、このデリヴァランス儀礼を分析することにより、ベナンにおいてペンテコステ派・カリスマ派の影響が広がる理由を考察すると同時に、霊的存在のあり様と人々の関わりがどのように変容しているのかを明らかにする。

本発表で事例とするのはバナメー教会の教区で行なわれるデリヴァランス集会である。デリヴァランス儀礼は「悪霊・悪魔」からの浄化を目的とし、集会では、神父が信者一人一人に対して「按手」を行なう。その際、信者の身体の中に「悪魔・悪霊」が入っていると、信者は意識を失い倒れるとされる。倒れた後、信者の身体にいる「悪魔・悪霊」が暴れたり、正体を告白し始めたりすることがある。その告白によって「悪魔・悪霊」は「妖術師」であったり、「精霊マミワタ」であると識別されるのである。最終的には、神父や聖女マリア像によって信者の身体に送り込まれる「霊的な火」によって、悪霊が祓われるというのが、デリヴァランスの標準的な流れといえる。

この集会の中で憑依された女性14人に、彼女たちに憑依した霊の種類について聞き取ったところ、憑依した霊は14人中4人が精霊マミワタ、8人が妖術師霊、1人がヴォドゥン神格だったと答え、1人は霊が話し始めなかったため種類は不明であると答えた。ベナンにおいては妖術師は、超常的力で親族に災厄をもたらす存在とされている。しかし、一般認識において妖術師は「なる」ものであり、「妖術師霊として憑依する」ことはない。またヴォドゥン神格や精霊マミワタも、神格としてシャーマンに憑依することはあっても「悪霊」として憑依する霊ではない。すなわち、これらの霊的存在は、デリヴァランスを通してシャーマン外の人物に憑依する存在になり、身体的に現出することが可能になったといえる。

更に細かく見ると、妖術師として憑依した霊の種類の内、8人中6人が存命の親族、1人が既に亡くなった親族、1人が元所属していた教会の祭司であった。ベナンの一般的な概念では「亡くなった人物」が妖術師とされることはない。従って、「既に亡くなった親族」は、デリヴァランス儀礼によってはじめて「妖術師」と見做されるようになっている。「妖術師」と目される範囲は、デリヴァランス儀礼によって拡張しているのである。

一方、憑依された女性たちは、憑依をきっかけに個々の災厄の経験を新たに紡ぎなおしている。例えば、妊娠や結婚できない理由は親族である妖術師のせいであることが、憑依を通してわかる例などがある。デリヴァランスにおける憑依は、経験を組織化しなおす機会を提供しているのである。

発表では、このような霊的存在の変容と憑依による経験の組織化という観点から、ベナンにおけるペンテコステ派・カリスマ派の興隆理由について議論する。

C10

野生チンパンジーのメスにおける隣接集団関係

橋本千絵、竹元博幸、古市剛史（京都大学・霊長類研究所）

Inter-group Relationships of Female Chimpanzees in Kalinzu Forest, Uganda.

Chie Hashimoto, Hiroyuki Takemoto, and Takeshi Furuichi (Primate Research Institute, Kyoto University)

ウガンダ共和国カリンズ森林では、人づけ・個体識別された2集団（約100頭からなるMグループと約30頭からなるSグループ）の野生チンパンジーを対象に研究を続けている。さらに、この2集団は個体識別がされていないWグループとも隣接している。この3集団は遊動域の一部が重なっており、時々集団間の出会いが観察されている。

2018年に行われたアフリカ学会第55回学術大会において、橋本らは、M集団とS集団の出会いについて2件の報告を行った。1例目の事例では、複数のオスとワカモノのメスからなるSグループのパーティが、Mグループのオトナのメスとその子どもたち（ワカモノメス、コドモメス、アカンボウオス）からなるパーティに、1.8km離れた場所から意図的に接近してきた。オスたちのうち1頭がオトナメスに接近し、オトナメスからオトナオスへの毛づくろいが見られた一方、攻撃的な交渉は起きなかった。Sグループのオスたちとワカモノメスは立ち去った時が、オトナメスの娘であるワカモノメス *Nk* は、Sグループのワカモノメスに追従していった。このときには *Nk* は母親の元に戻ってきたが、その後Sグループに移籍した。

2例目の事例では、Mグループの新生児をもつメスが、Sグループの3頭のオスのパーティと出会い、Sグループのオスによる新生児とそれを守ろうとする母親への攻撃が観察されたが、Sグループの1頭のオトナオスは、母子を守るような行動をとった。新生児はその後消失したので、この攻撃によって死亡したと推定された。結局子どもを亡くした母親メスはMグループに戻り、再び妊娠・出産した。

チンパンジーの若メスの移籍に関しては、これまであまり報告がなく、これらの2例の報告は、若いメスの移籍に関する貴重な情報といえる。今回の発表では、新たに観察された、母親と移出した娘との出会いに関する報告や、集団に移入したメスに対する定住メスの反応などについて報告を行う。これまでの研究とあわせて、野生チンパンジーにおけるメスの移籍に関して、考察を行いたい。

何が父系社会を進化させたのか
ヒト亜科とクモザル亜科の比較から

古市剛史（京都大学霊長類研究所）

*** Factors responsible for evolution of male-philopatric group
From the comparisons of Homininae and Atelinae**

Takeshi Furuichi (Kyoto University Primate Research Institute)

集団で生活するほ乳類の大半は、メスが集団にとどまりオスが集団間を移籍する母系社会を形成する。ところが霊長類では、ヒト亜科、クモザル亜科、アカコロブス、マントヒヒなどに、メスが集団間を移籍する社会が見られ、雌雄双方が移籍する種も多い。なぜ霊長類でこのように大きなバリエーションが見られるのか、またどのような要因が父系社会を進化させたのかといった問題の解明は、メスが集団間を移籍する社会がルーツだと考えられるヒトの社会の進化の解明のための最も重要な課題である。オスが集団にとどまるという傾向は霊長類の様々な種で散見されるが、そのような傾向がまとまって見られるのはヒト、チンパンジー、ボノボ、ゴリラからなるヒト亜科とクモザル、ムリキ、ウーリーモンキーからなるクモザル亜科である。本研究では、これら 2 つの系統群を比較して、父系社会を進化させた要因について考える。

Pan 属（チンパンジー、ボノボ）を中心とした研究で父系社会を進化させたと考えられてきた要因のひとつは、前・中期中新世のヒト上科の共通祖先で起こった体の大型化である。大型化に伴い、未成熟期および出産間隔が長期化し、メスの性的受容期間が短縮することによってオス間の性的競合が激化した。そのため、集団内・集団間の競合に勝つためには血縁関係にあるオス間の連合が有利に働き、血縁関係の連合相手を容易に得られる出自集団にオスがとどまるようになったとする説である。しかしこの説では、ヒト亜科ほど大型でないクモザル亜科における父系社会の進化を説明するのが難しい。また、上位のクモザル科には父系社会をつくらないホエザル亜科が含まれるが、クモザル亜科とホエザル亜科では体のサイズに大きな違いは見られない。

近年考えられているもうひとつの説は、母親が息子に与える支援が重要な役割を果たす種では父系社会が進化するというものである。一般に、メスの繁殖成功度は順位にあまり影響されないが、オスでは高順位の個体がより高い繁殖成功をあげられる可能性が高い。したがって、母親の支援が息子の順位に影響する種では息子が母親とともに出自集団にとどまって父系社会を形成するようになるという考えである。そしてこのような傾向は、子どもが母親の支援をより長く受ける種、すなわち前説と同様に未成熟期および出産間隔の長い種で進化しやすいと考えられる。こういった観点から出産間隔について比較すると、ヒト亜科では *Pan* 属の 5-6 年、*Gorilla* 属の 3-6 年と他の霊長類種に比べて極端に長く、クモザル科でも、父系社会をつくらないホエザル亜科では 1-2 年と短いに対し、クモザル亜科では 3 年前後と長い。

だとすると、父系社会の進化に結びつくのは、必ずしも体の大型化ではなく、未成熟期間と出産間隔の延長をとともなうスローライフヒストリーだということになる。この要因が、メスの発情の抑制とオス間の性的競合の強化によるオス間の連合を促進し、一方で母親の息子に対する支援の有効性を増大させて、父系社会を進化させると考えられる。アフリカ大型類人猿ほど大きな体をもたないクモザル亜科でなぜスローライフヒストリーが進化したのかという点については現時点では明確な仮説を示すことができないが、これを起点に置くことによって、霊長類における父系社会の進化に関する研究にひとつのブレークスルーがもたらされる可能性がある。

サイチョウが育む森の保全と利用
タンザニア、東ウサンバラ山の事例

伊谷樹一（京都大学）、小林淳平（京都大学）、神田靖範（国際農林業協働協会）

Conservation and utilization of forests grown by Hornbills

In the case study of the East Usambara Mountains in Tanzania
Juichi Itani (Kyoto Univ.), Junpei Kobayashi (Kyoto Univ.),
Yasunori Kanda (JAICAF)

タンザニアの森林が急速に失われるなか、わたしたちは各地で森林が維持あるいは拡大している事例を調査しながら、森林再生のあり方を模索している。本会では、その一環として最近着手したタンザニア北東部の東ウサンバラ山塊の事例をもとに、森と鳥と人の関係について報告する。

東ウサンバラ山塊の東斜面にはアマニ自然保護区（Amani Nature Reserve）に指定された山林が広がっている。タンザニアでは、インド洋に突き出た山地には熱帯雨林や山地林が形成される。アマニ自然保護区も熱帯雨林のような密林で覆われた山域であるが、その森が他と大きく異なる特色は、構成樹種に多くの外来樹を含んでいることである。

1902年、ドイツ領東アフリカの植民地政府は東ウサンバラ山塊の東斜面（現在のタンガ州ムヘザ県アマニ郡）にアマニ生物・農業研究所を設立した。急峻な斜面では標高差を利用してさまざまな外来植物が試験的に植えられ、同研究所の樹木園で環境への適応性や有用性が調べられていた。保護区内の高所には、日本のスギ、ヒノキ、クスノキの林を今でも見ることができる。また、ザンジバル諸島で薪炭材・建材として広く利用されているオーストラリア・ブラックウッド（*Acacia melanoxylon*）、タンザニアの南部高原に定着したタンニン採取用のモリシマ・アカシア（*Acacia meansii*）、建材として高地で植林されているパツラマツ（*Pinus patula*）、輸出用高級材チーク（*Tectona grandis*）、電柱や薪などに利用されるユーカリ（*Eucalyptus spp.*）など、現在のタンザニア林業を支える主要な樹種のほとんどがアマニ研究所を経由して普及していたのである。

アマニ研究所に導入された外来樹のなかには、種子で繁殖しながら群落を拡大していく樹種もあった。もともと西アフリカの熱帯雨林に自生していたクロウメドキ科の *Maesopsis enimii* は、アマニ地域の生態系を脅かす侵入樹木として拡大が危惧されてきた。保護区の斜面を登っていくと、暗い密林のなかに白い *M. enimii* の直立した幹が目につき、やがて大きな純林となって林冠を形成するようになる。*M. enimii* は樹高が 30m にもなる高木で、生長が早いだけでなく、わずか数年で径 3~3.5cm の大きな果実を着け始める。この種子の散播を担っているのが、アマニ山域に生息しているサイチョウであった。アマニ自然保護区には 5 種類のサイチョウがいるとされ、体長 80cm にもなる最も大型のギンガオサイチョウ（Silvery-Cheeked Hornbill : *Bycanistes brevis*）は好物の *M. enimii* の果実を丸呑みして種子をまき散らしているのである。伐採跡地にはこのパイオニア樹が純林をつくり、その木々のあいだをギンガオサイチョウの群れが悠然と飛び交っていた。

アマニ自然保護区の研究者はこの侵入樹木の増殖に頭を悩ましているようだった。しかし、*M. enimii* が多雨地域の急斜面を土壌浸食から守ってきたのはまちがいない。そして、*M. enimii* が保護区外にも広がることで、その材木が地域住民の貴重な収入源となっていった。材木を搬出する道路にはトラックの積み荷を検査するゲートがあって、自然保護区の係官は材木商のトラックに積まれた木材量に応じて税金を徴収する。その少くない収入は保護区の運営に貢献しているはずである。大木にできた洞で繁殖するサイチョウは大きな森林の指標である。サイチョウが広げた森林は地域住民と保護区の経済を潤し、保護区が樹木の伐採を禁じることで *M. enimii* の大木が維持されてきたのである。タンザニアの自然保護区のなかに、外来種をめぐる鳥と人の関係があった。

マダガスカル・アンカラファンツィカ国立公園における
自然保護と地域住民による生業活動

山田 祐 (京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科)

**Conservation Activities and Local Livelihood
in the Ankarafantsika National Park, Madagascar**

Tasuku Yamada

(Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University)

アフリカにおける自然保護活動は植民地時代に勃興し、住民を排除する要塞型保護から住民参加型保護へ転換したとされるが、マダガスカルにおける自然保護活動は異なる経緯で展開されてきた。マダガスカル北西部に位置するアンカラファンツィカ国立公園は、そうした異なる自然保護活動が展開された保護区のひとつである。アンカラファンツィカ国立公園は公園内に 930km² の面積を占める落葉乾燥林を基盤とし、8 種のキツネザルをはじめとする哺乳類や湖畔に生息する鳥類など、固有種の割合が高く、種数も豊かである多様な動植物が残された重要な保護区である。これらの動植物は保護対象とされ、観光資源として活用されているが、同時に生態系の育む豊かな資源は地域住民によっても利用されている。

アンカラファンツィカ国立公園はガラファンツィ台地に残る動植物の保護を目的とし、1927 年にアンカラファンツィカ厳正自然保護区として設立された。同保護区では設立当時から、区内における住民の生業活動や居住が許可されてきた。現在でも国立公園における居住や森林資源の利用、稲作をはじめとする生業が公園を運営する NPO 法人マダガスカル国立公園によって許可されている。

現在のアンカラファンツィカ国立公園の内部には計 2000 人ほど住民が定住しており、公園内で水稻を中心とする農業や、野生植物の採集業、酒の醸造業、ウシやニワトリによる畜産業、観光業、小売業など複数の生業を組み合わせる生計が立てられている。このうち農業は移植水稻栽培、点播陸稲栽培による稲作とトウモロコシやキャッサバなどの畑作、マンゴーやバナナなどの果樹栽培が、公園内の豊かな自然環境が育む腐植土や水資源などを用いて実施されている。特に水稻作においては古くから建設されてきた灌漑設備や、多くの品種、年間を 4 季にわたる耕作季など、稲作についての膨大な知識が蓄積されており、現在でも近代的な農薬や稲作設備などを使用せず、実践されている。収穫物である米は住民の重要な主食となり、貴重な収入源ともなっている。また採集業は村落が公園内に立地していることで成立する生業であり、すでに公園外では失われた森林資源を自然保護政策による規則のもとで利用がつけられている。ほかにホテルの清掃やガイドなどの観光業への従事も、国立公園が設立されたことで始まった生業である。

アンカラファンツィカ国立公園では公園内の住民による生業活動が許可されるとともに、監視業務や防火帯の設置など、住民参加型の保護活動に公園内の住民を参画させている。現在のアンカラファンツィカ国立公園においては自然保護活動によって守られた生態系を利用することで住民活動が成立し、委託された保護活動を住民が実践することで公園全体の自然保護活動が成立している。森林破壊の主要な要因とされてきた住民活動が、自然保護活動のなかで許可されている矛盾にはアンカラファンツィカ国立公園において自然保護活動と住民活動が相互に補助し合いながら共存していることが原因にある。

C14

ガボン共和国ムカラバ・ドゥドゥ国立公園周辺地域における 地域住民の野生動物保全に対する認識 ：アフリカゾウによる被害と国立公園からの利益の影響

寺田佐恵子（東京女子大学/JSPS）、松浦直毅（静岡県立大学）

Local people's perception on wildlife conservation in areas surrounding Moukalaba-Doudou National Park in Gabon ： effects of damage by elephants and benefit from the National Park

Saeko Terada (Tokyo Women's Christian University/JSPS),
Naoki Matsuura (University of Shizuoka)

アフリカゾウは、生息地の減少や密猟などによる個体数の減少が懸念される一方で、アフリカ各地で甚大な農作物被害や人的被害を引き起こしている。このようなヒトとゾウとの軋轢は、とくに保護区周辺で高まりやすい。保護区の設置は、野生動物の保全やその観察を目当てとした観光に貢献する一方で、狩猟や採集の制限や獣害の増加など、周辺住民に対する外部不経済を引き起こしうる。ヒトとゾウの軋轢が高まることによって、住民の保全に対する認識や行動に負の影響が生じることが懸念されており、地域住民のためにもアフリカゾウ保全のためにも、ヒトとゾウの軋轢を軽減することが重要である。

そこで本研究では、1. 害獣でありながら保全対象となっているアフリカゾウとの共存を保護区周辺の住民がどのように捉えているのか、2. その認識は被害の大きさや保護区から得られる便益によって異なるのかを明らかにするために、ガボン共和国（以下、ガボン）南西部のムカラバ・ドゥドゥ（Moukalaba-Doudou）国立公園周辺地域で住民の認識についての調査をおこなった。国土の大半を森林が占めるガボンでは、森林性アフリカゾウ（マルミミゾウ）は貴重な観光資源となっているが、一方で、国内各地で甚大な農作物被害を引き起こしている。調査は、国立公園に隣接する D 村から最寄りの地方都市まで（約 70km）のあいだに点在する計 10 村で行った。調査地域の特徴として、1. おもな生業は焼畑農耕で、その他の産業は乏しいこと、2. 人口密度が低く、人間活動が限定的であることが挙げられる。一方、同地域において、D 村は、1990 年代から野生動物の研究・保全の拠点となっており、近年エコツーリズム開発事業も継続的におこなわれている点で特異な地位を占めている。調査は、各村で 1～数名に対して、①アフリカゾウによる被害と対策、②アフリカゾウそのものに対する認識、③野生動物または国立公園からの便益についての聞き取りをおこなった。

調査の結果、国立公園または地方都市からの距離に関わらず、すべての村で、アフリカゾウの被害は非常に深刻なものとして認識されていた。9 割以上が「最も被害が大きい動物」としてアフリカゾウを挙げ、8 割以上がその被害を「非常に大きい」と評価した。さらに、ゾウによる農作物被害は現金収入源の喪失を招いており、そのことが村の人口流出の一因となっていることが示された。このため、村を問わず、住民はアフリカゾウに対して強い憤りの感情を示した。被害防除のために一部のゾウ個体を駆除することについては、ほとんどの回答者が賛同の意を示したが、D 村でのみ「ゾウは観光や研究に必要とされている」ことなどを理由に否定的な意見も確認された。野生動物の近くで暮らすことや野生動物や国立公園の便益についても、大半が否定的な回答であったのに対して、D 村では研究や観光による収入を理由として便益を認める回答者が多かった。

人口密度が低く、保護区外にも森林が多く残っている本調査地では、保護区からの距離に関わらず、ゾウによる農作物被害は村の存続を脅かすレベルにまで至っていることが明らかになった。一方、そのような状況下でも、保護区から経済的な利益が得られる場合には、地域住民はゾウを含む野生動物やその保全に肯定的な感情を持ちうることも示された。今後、同公園周辺の他地域でも同様の調査を行い、住民の認識の違いとその要因についてさらにくわしく検討したい。

サハラ以南アフリカにおける世界農業遺産サイトの保全と活用
 オルドニョキエ／オルケリ マサイ牧畜遺産サイトの事例から

内藤直樹（徳島大学）

**Conservation and Utilization of GIAHS sites in Sub-saharan Africa
 The Case of Oldonyokie/Olkeri Maasai Pastoralist Heritage**

Naoki Naito (Tokushima University)

本発表の目的は、①世界農業遺産（Globally Important Agricultural Heritage Systems: GIAHS）の展開について概観し、②サハラ以南アフリカにおける世界農業遺産登録、保全および活用の特性について検討した上で、③GIAHS 推進に関わる日本とサハラ以南アフリカ間の協力体制構築の可能性について考察することにある。

世界農業遺産プログラムは、国連食糧農業機関(Food and Agricultural Organization of the United Nations: FAO)によって、2002年にヨハネスブルクで開催された持続可能な開発に関する世界首脳会議においてスタートした。このプログラムの目的は、グローバル化のなかで大きく変容しつつある家族農業（family farming）や伝統的な食料生産システムの保全にある。そして人類の食糧安全保障と生物多様性および文化多様性の保全に貢献する食料生産システムを人類全体の遺産として認定している。GIAHSは農業に限らず、狩猟採集や漁撈、牧畜等の多様な食料生産システムを含む。2019年11月現在の認定サイトは21カ国58箇所、地域別の内訳はサハラ以南アフリカ地域3、アジア・太平洋地域36、ヨーロッパ・中央アジア地域7、ラテンアメリカとカリブ海地域3、中近東・北アフリカ地域9である。

GIAHSの特徴は、本プログラムの創始者であるパルヴィス・グーハフカンが「化石化しない保全（Conservation without fossilization）」と呼んだ、農民が環境や社会経済的な変化に対応して食料生産システムを変えていくことを積極的に評価するダイナミックな保全を推奨する点にある。これはユネスコの文化遺産が、対象を可能な限り「そのまま」保全することを推奨するのは対象的である。この化石化しないダイナミックな保全という考え方は、熱帯農業研究において指摘されてきた「実験する農民（Richards 1989 など）」像をグローバルな文脈に置き換えたものであると言える。

サハラ以南アフリカ地域には数多くのユニークな農業システムが存在するにもかかわらず、GIAHSサイト数は世界で最も少ない3箇所（ケニア:1、タンザニア:2）にとどまっている。それとは対象的に、世界で最もGIAHSサイト数が多いアジア・太平洋地域を見ると、中国には世界で最も多い15箇所、日本にはそれに次ぐ11箇所ものサイトが認定されている。このため日本・中国・韓国のGIAHS実務者による東アジア農業遺産学会(ERAHS)も存在するほどである。東アジア地域においては、過疎化による農村の荒廃が社会問題化しており、GIAHSを活用した農村振興をおこなおうという明確な目的が存在する。これに対して、他の地域では、GIAHSの保全と活用に対する目的意識が明確で無い傾向にある。

本発表において検討するオルドニョキエ／オルケリ マサイ牧畜遺産サイトは、タンザニアのエンガレソロ マサイ牧畜遺産サイトと共に、乾燥・半乾燥地域における持続可能性の高い牧畜システムとして2011年にGIAHSに登録された。このうちオルドニョキエ／オルケリ マサイ牧畜遺産サイトにおけるGIAHSの登録過程および保全と活用の現状について報告する。そのうえで日本のGIAHS登録・保全・活用およびアフリカ研究の知見を、サハラ以南アフリカにおけるGIAHSの登録・保全・活用に活かしていく可能性について考察する。

東アジアからアフリカへ ラゴスの中国系移民コミュニティと現地社会の関係

松本尚之（横浜国立大学）／川口幸大（東北大学）

From East Asia to Africa Chinese Community and Its Relationship with Nigerian Society

Hisashi MATSUMOTO (Yokohama National University)

Yukihiro KAWAGUCHI (Tohoku University)

東アジアとアフリカを結んだ人の移動は、21世紀に入って顕著となり、注目を集めるようになった。「世界の工場」と呼ばれる中国・広州市は現在、東アジア最大のアフリカ人集住都市となっている。その一方で、アフリカ大陸が「地球上最後のフロンティア」と呼ばれるなか、西アフリカ最大の商業都市、ナイジェリアのラゴスには巨大な中華街が建設されている。それと同時に両国で反移民感情が高まっており、移民とホスト社会が衝突する出来事も起きている。

重要なことは、これら二大陸、二国家を結んだ二つの移民の流れは、互いに独立した出来事ではなく、相互に連動した現象だということである。一方で、中国のナイジェリア系移民とラゴスの中国系移民は、生産地と市場を結ぶ商活動において、時に協同し、時に競争する関係にある。また、発表者らが出遭ったナイジェリア人のなかには、広州におけるナイジェリア人排斥の動きに言及しつつ、ナイジェリアにおける中国系移民の増加について批判的な意見を述べる者もいる。二つの国において、反移民感情が連動して生成されているのである。従って、東アジアとアフリカを結んだ人とモノの移動を動的に把握するためには、アフリカ系移民と中国系移民の両者を結ぶ関係性の変化と相互連関に注目する必要がある。

これら二方向の移動の関係に注目した研究は、基本的に二大陸あるいは二国家間の政治経済的な関係に注目したマクロな分析が多い。移民による経済活動など、フィールドワークにもとづくミクロな研究については、どちらか一方の移動主体のみを対象としており、両者の関係性については十分に検討されていない。このようなアプローチの偏りは、個人単位でフィールド調査を行うミクロ分析の制約とも関わる。

そのため発表者らは、中国研究者とナイジェリア研究者の協同作業により、二つのフィールドにおいて二つの移動主体を対象とした調査研究を進めている。二都市においてゲスト＝ホストの関係が逆転する二つの移動主体に注目し、経済活動を通して生まれる両者の間の関係性を動的に把握することを目的とする。今回の発表では、第一回の報告として、2019年9月にナイジェリアのラゴスにおいて実施した調査の成果報告を行う。

ラゴスの中華街は、新しく渡来した移民が最初に拠点とする場所として、ナイジェリアの中国系移民コミュニティの中心地となっている。「万里の長城」を模したとされる中華街はセキュリティが常駐し、夜は巨大な門を閉ざす典型的なゲイテッドコミュニティである。その一方で、卸商を営む中国人たちが顧客とするのは、現地のナイジェリア人たちであり、両者の間に経済活動を契機とした様々な社会関係が生まれている。中華街の店舗の売り子としてナイジェリア人たちが雇用されているのみならず、中華街内に30以上ある店舗のなかには、中国人妻を持つナイジェリア人をはじめ、現地の商人たちが経営する店も存在する。さらに、中華街の外に目を向ければ、中国系IT企業の進出や、高等教育機関における中国語教育、ひいては中国への留学支援によって、ナイジェリアの若者たちの間に中国との新しい接点が生まれている。本発表では、これら拡大するナイジェリア＝中国の関係について論じたい。

セネガル人女性の日本移住に関する予備的考察

— 愛知県名古屋市を事例に —

菅野 淑 (愛知淑徳大学)

A preliminary consideration of Senegalese migrant women in Japan.
- In the case of Nagoya-City, Aichi Prefecture-

Kanno Shuku (Aichi Shukutoku University)

2019年6月末現在、日本には約17,000人以上のアフリカ地域出身者が住んでいる。その数は、年々微増している。在日アフリカ人の大半は男性である。統計上の数字を見ると、男性が約13,000人であるのに対し、女性は5,000人にも満たない。在留資格別で見ると、「日本人の配偶者等」および「永住者」の資格を持つものが全体の約半分を占めている。彼らは学業や商売のためなど多様な経緯で来日しているが、中には在留許可の期間が過ぎた後も日本に居残る事例が散見されている。彼らは手早い在留ビザの獲得として、日本人や日本での永住権ないし定住権を取得している外国人と婚姻関係を結び、「配偶者等」の資格を得て正規滞在するようになってきている。その多くが日本人女性と夫婦になっており、アフリカ人夫婦で在日している事例は非常に少ない。しかし近年、発表者が調査地のひとつとしている愛知県名古屋市およびその近郊で、セネガル人同士の夫婦が数組見られるようになった。その妻らは、留学生である夫や日本で働く夫が呼び寄せて来日しており、日本で出産も経験し、子育てをしている。

そもそも在日アフリカ人自体が他の在日外国人よりも圧倒的少数の、まさにマイノリティの中のマイノリティだ。女性は更にマイノリティであり、中でも在日セネガル人女性の数は非常に少ない。しかし、夫婦で来日し子育てもしているこの女性たちの事例は、見逃すことのできないものである。

在日アフリカ人に関する研究はこれまで、和崎【和崎 2008 他】や松本【松本 2008 他】などによるアフリカ人の経済活動やコミュニティなどに関する報告や、鈴木【鈴木 2008 他】や菅野【菅野 2008 他】などによる在日アフリカ人ミュージシャンの活動報告などがあった。しかしいずれも男性が中心である。在日外国人女性に関する研究は、日本人男性と国際結婚したアジア人やロシア人に関するものや、セックスワーカーやエンターテイナーとして来日したフィリピン人に関するもの。在日コリアンや高学歴中国人女性、介護職として働く外国人女性に関する研究などが存在する。しかし、セネガル人はおろか、在日アフリカ人女性に関する研究はほぼ見当たらない。

本発表は、在日セネガル人女性の日本での生活実践に関する事例を報告することが第一の目的である。また、「外国人であること（エスニシティ）と女性であること（ジェンダー）の双方の影響を強く受けることから、移住先での社会的統合が困難になるという『二重の障害” Double Disadvantage”』」

【Boyd 1984】【是川 2019】という考えを元に、セネガル人女性の日本社会への統合／参入を検討することが第二の目的である。さらに、園部【園部 2014】によるフランスの西アフリカ出身移住女性の事例とも比較検討する。移民大国、旧宗主国であるフランスと日本とでは、比較対象としてやや適切さに欠けるが、一夫多妻婚による問題や女性の社会的参入、日常実践など、個別事例での比較・参照をしたい。

<主要参考文献>

- 是川夕 2019 『移民受け入れと社会的統合のリアリティー—現代日本における移民の階層的地位と社会参入課題』 勁草書房
- 園部裕子 2014 『フランスの西アフリカ出身移住女性の日常実践—社会・文化的仲介による「自立」と「連帯」の位相』 明石書店
- 法務省 『在留外国人統計（日登録外国人統計）』 http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html (2020年1月13日最終閲覧)
- 和崎春日 2008 平成16年度—平成18年度科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書 『来日アフリカ人の相互扶助と日本人との共生に関する都市人類学的研究』
- Boyd, Monica 1984 “At a Disadvantage: The Occupational Attainments of Foreign Born Women in Canada,” *International Migration Review* 18(4) pp. 1091-1119

発表 D 会場

D1

Estimating the Injury Rates and Causes of Fatalities in the Japanese Mining Industry, 1924–2014

John Ngoy Kalenga, Lecturer at Faculty of Economics, Hosei University, Tokyo, Japan.
Corresponding Email: kalenga.n.john.24@hosei.ac.jp
Address: 194-0298 Tokyo-To, Machidashi, Aiharacho 4342 Japan.

Abstract

This article investigates the trends in injury rate and cause of fatalities in the Japanese mining industry. Accidents data were collected from the Japan Statistics Yearbooks released by the Bureau of the Prime Minister from 1949 to 2016. These data were analyzed to estimate the injury rates and accident causes in the Japanese mining industries. In Japan, the median injury, severe injury, and fatality rates were 129.25/1000 workers, 5.44/1000 workers, and 2.99/1000 workers, respectively. A collapsing roof in an underground mine was the principal cause of fatal accident, accounting for a median value of 21/1000 worker deaths during the entire period under study. In comparison with the accident experience of the USA and the DRC, countries with substantial mining industries, the median values of the fatality rates were 0.28/1000 workers and 0.58/1000 workers, respectively. Based on our data, we conclude that Japanese mineworkers were most exposed to the risk of accidents during the prewar era. They were exposed to more fatal accidents than their American and Congolese colleagues during the period of the rapid economic growth in the 1960s. Our findings suggest that the safety policies enacted in Japanese mines improved working conditions and reduced the rate of accidents.

**Food portion photographs:
Validity for portion size estimation in food intake surveys in Mukono, Uganda**

Seera Georgina (Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University)

The food frequency questionnaire and the 24-hour diet recall are the most used methods for dietary assessment studies in Africa (Vila-Real et al., 2017). Quantities are often based on 'household' measures with few studies reporting how these are quantified and converted into the energy and nutrient equivalents (FAO). This study was conducted to develop and validate food photographs for estimating the usual portion size of women, and subsequently their usual energy and nutrient intake from food.

The results of the most consumed staple food item (rice) and side dish food item (beans) are illustrated in this presentation. Food was prepared at the home of one of the women in the study, with the help of two women from the community. At the usual time for the midafternoon meal, women (N=29) from the community were invited to come and dish up their desired portion sizes, as they would if they were serving in their own homes. Standardized plastic plates with a known weight (63g) were used for all women. All dished up portion sizes were weighed using a TANITA digital kitchen scale. This method was adopted from a similar study in South Africa (Lombard et al., 2013).

For each measurement, the women were asked to first serve themselves the staple and measure it, then they served the accompaniment and measured the combination of the staple and accompaniment, then they added the soup and took the measurement of the main food together with the accompaniment and soup if any. Later, the quantity of the staple in grams was determined by subtracting the weight of the plate which was already known from the combined weight of the plate and the staple. The weight of the accompaniment was determined by subtracting the combined weight of the staple and plate from the combined weight of the staple, plate and accompaniment. The weight of the soup if any was determined by subtracting the combined weight of the plate, staple and accompaniment from the combined weight of the plate, staple, accompaniment and soup. Food portion size photographs were developed based on the 25th, 50th and 75th percentiles of the different values in grams of portion sizes served by the women in the study.

The average portion size of rice from the food measurement sessions was 484.6g (SD=156.7). The smallest portion size was 242g. The largest portion size was 901g. The value at the 25th percentile was 365.8g, the one at the 50th percentile was 457.5 and the one at the 75th percentile was 568.2g. These are the 3 portion sizes that were represented in the photographs. The average portion size of beans from the food measurement sessions was 290.2g (SD=102.0). The smallest portion size was 115g. The largest portion size was 465g. The value at the 25th percentile was 199g, the one at the 50th percentile was 287g and the one at the 75th percentile was 384g. These are the 3 portion sizes that were represented in the photographs.

These were tested by interviewing another group of 13 women using a Photograph-aided Quantitative Food Frequency Questionnaire (PQFFQ). The women were asked to choose which food photograph best represented the portion they usually ate. In addition, the food portion sizes of women in their daily lives were examined using a 7-day Observed and Weighed Food Record (OWFR). Here the 13 women were observed from the time they woke up to the time they went to bed and everything they ate or drank was weighed. An independent samples t-test was then conducted to compare the food portion size in grams as determined from the PQFFQ, to the food portion size in grams as determined from the 7-day OWFR.

The food portion sizes of women as determined from the PQFFQ was not significantly different from the food portion sizes of women as determined from the 7-day OWFR, for both rice and beans.

1) Rice (Mean = 447.2, SD = 83.8), according to the PQFFQ method and (Mean = 462.7, SD = 182.6), according to the OWFR, conditions $t(21) = -0.267$, $p = 0.792$

2) Beans (Mean = 268.8, SD = 76.6), according to the PQFFQ and (Mean = 259.6, SD = 74.7) according to the OWFR method, conditions $t(23) = 0.3$, $p = 0.764$

Food portion photographs can therefore be useful aids for individual portion size estimation in food intake studies in the study area.

D3

Terminal Management in Addis Ababa Analyzing the role of *Tera Askebaris* in Megenagna terminal

**Eunji Choi (Graduate School of Asian and African Area Studies,
Kyoto University)**

In Addis Ababa, there are a group of people called '*Tera Askebari*,' who are controlling the vehicles and passengers in the minibus terminal. Urban public transport service has become highly important in meeting the demand of growing mobility in Addis Ababa. The increasing needs by users caused unexpected social problems such as robbery and hit-and-run at minibus terminals, but the city government did not take effective measures in curbing these problems. These phenomena caused a formation of the self-vigilance group, called *tera askebari*. Most of the *tera askebaris* in the present are using their unique methods in controlling the minibuses. However, their activities have not deeply scrutinized in related literatures.

In this presentation, the role of *tera askebaris* is examined through analyzing a series of their management activities, specifically in the case of group α in the southeastern part of Megenagna terminal. Fieldwork was performed from August 24 to October 31, 2019, for 69 days. I adopted qualitative methods, largely participatory observation, and interviews. It is found out that the *tera askebaris* in this terminal were using their own methods to retain the peace. For protecting the law-abiding minibuses, they ejected foul makers from the territory or imposed a penalty. However, their rule was somewhat flexible, as they accepted many of their acquaintances to commit a foul. Second, the concept of *gulbetegna*, strong men, was important quality for the *tera askebaris* to compel minibus operators to follow their rule. Through a series of case studies of their activities, the presenter illuminates that *tera askebaris*' activities and 'informal' regulations have implied power to sustain peace and order in minibus terminal.

Keywords: *Tera Askebari*, Transport Management, Minibus Business, Addis Ababa, Ethiopia

D4

タンザニアにおける、栄養を重視したマーケットの成長：「混合粥の素」を例に

加藤(山内) 珠比

京都大学アフリカ地域研究資料センター

Growing market on nutrition in Tanzania: mixed porridge flour

Tamahi Kato-Yamauchi

CAAS, Kyoto University

In Tanzania the market for mixed porridge flour called ‘lishe’ (nutrition in Swahili) has been expanding for being consumed by babies and sick persons. It is produced by small-scale women processors. This research is conducted in Morogoro region, middle-scale town in Tanzania in order to understand the struggle of the small-scale women lishe processors to do and expand their business, and how the market was originated and been growing.

The history of lishe is told. The current ‘lishe’ is a developed version of indigenous porridge in the area. But the name of lishe (nutrition in Swahili) was originated from the time after HIV/AIDS was spread around 1990, the ‘nutrition’ of HIV/AIDS patients became priority, which started the name ‘lishe’ being popular in food items. That was when the name ‘lishe’ was attached to the mixed porridge, which was also developed as a food for HIV/AIDS patients. Then since around 2000 donors and local institutions supported women to process this lishe for their empowerment, entrepreneurship, leadership, and income generation. That was the origin of the lishe processing in the area.

There are two sides in the ‘lishe’ market: the demand side of consumers seeking better nutrition; and the producer side of processors for business and income generation. This research studies about these both sides. It researches on how the processors produce lishe and seek for income generation, as well as how consumers are educated about nutrition and demand for lishe as seeking better nutrition for children and sick persons. It touches also on people’s contradictory accounts of history of lishe and the different views on lishe as better nutrition and as the misleading food item which is called ‘nutrition’, although it includes only a part of five nutrition category: carbohydrate, protein, and fat and oil. The micro-enterprise women lishe processors seek for expanding their business for bigger income generation by getting loans in women groups. With people’s increasing awareness of food safety it is becoming to be demanded to get certification from TFDA (Tanzania Food and Drug Authority) as safe food. Even processors’ groups have the limited capital to obtain the premises with adequate facility to get certificate. But through grouping the possibility of formalization of their business is foreseen.

コンゴ民主共和国におけるアメリカの責任

パワーダイナミクス、「虐殺」とルワンダ難民の強制帰還

米川正子（筑波学院大学）

**US Responsibility in the DRC:
Power Dynamics, “Genocide”, and Forced Repatriation of Rwandan
Refugees**

Masako Yonekawa (Tsukuba Gakuin University)

The year 2020 commemorates the 10th anniversary of publication of UN Mapping Report (2010) that documented crimes of humanity and “genocide” in eastern DRC in 1996-7, as well as 10-year silence by the same organisation that has not followed up any suggestion since then.

I argue that, apart from Rwanda, the responsibility of the US, a close supporter of the RPF, needs to be examined. The US was involved indirectly and possibly directly in massacring civilians, mostly Rwandan refugees but also Congolese residents, as well as in fuelling forced repatriation of Rwandan refugees. Behind the “genocide” and forced repatriation or mass *refoulement*, which became two sides of the same coin, the US government was re-installing a pro-US government in the DRC under the leadership of Kabila.

The US government started to be engaged in assisting the RPF before the 1990s through the activities of the NGO US Committee for Refugees. Although it is said that in early 1995 or at least since early 1996, the US military started a training programme for RPA, the report from the US Department of Defence said that the training had already begun in January 1994 when the RPF was still a rebel group (Amnesty International, *Rwanda: Ending the Silence*, 1997). Prior to the RPA/AFDL’s invasion in eastern DRC, US planes transported supplies out of Uganda and Rwanda towards eastern DRC, and offloaded arms and other equipment in Goma.

During the RPA/AFDL’s rebellion, refugee camps were destroyed and refugees were scattered. In response to this crisis, the UNSC authorised the deployment of multinational force (MNF). However, soon after one-third of the refugee population (400,000) already crossed into Rwanda. This sudden mass return of refugees led the Rwandan government to argue that the MNF was no longer relevant. This mass return took place because the US military had announced to the refugees a few days before the destruction of the refugee camp, to take advantage of the US presence in order to go back to Rwanda, otherwise it would be too late.

Organising mass repatriation at this time was crucial for the RPF for three reasons: to cancel the plan to deploy the MNF which could have posed an obstacle to Kagame’s victorious sweep across Zaire; to justify the RPA’s invasion in the DRC under the cover of liberating refugees who were allegedly prevented by the ex-FAR and *Interahamwe* from returning to Rwanda; and most importantly, to help conceal the extent of refugee massacres not only in the DRC, but also in Rwanda upon their return. Therefore, in order to hide these facts, the US lied about the number and fate of remaining refugees so that the deployment of MNF could be shelved.

As a result of Washington’s support for the RPF and its concerted role in covering up RPF crimes, Kagame and his senior officers have gone unpunished. US policy has therefore fuelled the culture of impunity and contributed to an escalation in the RPF’s predatory activities in the region

D6

Did social unrest thwart the battle against Ebola in the Democratic Republic of Congo?

Christian Otchia (Nagoya University)

Doctor Richard Valery Mouzoko Kiboung, a Cameroon epidemiologist with the World Health Organization and coordinator of the response to the Ebola virus in the Democratic Republic of Congo (DRC), was killed on 19 April 2019 in an attack on the university hospital in Butembo in the eastern part of the DRC. Although the recent outbreak in the DRC is the ninth since 1976 when the disease was first detected, such direct attacks on Ebola responders exploded in January 2019. Although the number of victims of these attacks remains speculative, available statistics show that the recent outbreak in DRC is the second-largest and second-deadliest Ebola epidemic in the world. A total of 1,290 confirmed and probable cases of Ebola were reported on 16 April 2019, including 833 deaths. Doctor Mouzoko's death underscores the enormous impact of attacking health workers during high-risk infectious disease outbreaks. However, there has been no detailed investigation of the consequences of these attacks. The aim of this study is therefore to investigate the causal effect of social unrest on the spread of Ebola in the context of the most violent Ebola epidemic in history. The identification strategy is based on the policy change of the electoral commission in November 2019, which, as a measure to prevent the spread of the disease, excluded villages with a high Ebola prevalence from the general elections. I exploit the dynamics of the policy and weekly frequency data at the local level to analyze the effect of social unrest on new infections.

D7

ACHIEVING SUSTAINABLE DEVELOPMENT; THE CASE OF ENVIRONMENTAL AWARENESS AMONG FARMERS AND SENIOR HIGH SCHOOL STUDENTS IN GHANA.

*ADU, K. I¹; PUTHENKALAM, J. J., SJ.¹; EFFAH, A. K.²

¹Graduate School of Global Environmental Studies, Sophia University, 7-1 Kioicho, Chiyoda City, Tokyo 102-8554, Japan

²Natural Resource Canada, Great Lakes Forestry Centre. 1219 Queen Street East, Sault Ste. Marie, Ontario, P6A 2E5, Canada

*E-mail: lordadu18@gmail.com , k-adu18@eagle.sophia.ac.jp

Abstract

The main objectives of the study is to determine how farmers and students perceived to have knowledge in environmental issues and problems; to assess their sense of environmental responsibility and to evaluate how farmers and Senior High School (SHS) Students thinks about law and regulations preventing the current environmental mess and to make recommendations based on the findings from the survey. The survey was administered to 376 farmers from two municipalities and 200 SHS students studying seven (7) different courses from four (4) municipalities/districts in the Eastern Region of Ghana. The sample uses Likert scale item to ask open-ended questions to determine the depth of students' and farmers' knowledge and awareness on several environmental issues and problems that are of concern. The results of the survey revealed that both farmers and students demonstrated a considerable environmental awareness. However, the farmers showed slightly higher and acceptable knowledge than the students confirming the age-environmentalism theory. Over 97% of students were pessimistic of the future environment compared to the 82% of farmers, a confirmation of the socioemotional selectivity theory. Also, there exists a positive correlation between all the ten environmental variables used in the questionnaire in both cases. There is significant association between gender and environmental knowledge, male farmers and students have high environmental awareness than the female. Furthermore, over 60% farmers and students strongly agree that government/municipal assemblies should be responsible for solving environmental problems in the municipality/country as compare to 50% placing the burden on the individual citizens and less than 50% for the Business and industry as well as the agricultural and forestry sectors. These results confirm the stakeholder theory, a clear demonstration of collective environmental responsibility for sustainable development, inter-generational responsibility and entitlements. A rising environmental awareness among high school students could spark environmental activism which could propel the achievements of a sustainable development.

Key words: *Environmental awareness, sustainable development, farmers, SHS students, Ghana*

D8

Prevention measures and coordination efforts against violence recurrence

The Case of Bawku conflict in Northern Ghana

Doke Victor (Hiroshima City University)

Bawku is located in the Upper East region of Northern Ghana. Violence has recurred with fatal events in the 2000s and 2010s between the two ethnic groups, the Kusasi and the Mamprusi. The conflict is related to the chieftaincy title. Several attempts for mediation were implemented by the national and local governments with the cooperation of civil society organizations (CSOs), but have not been successful. This study aims to enumerate and examine the types of preventive measures and to ascertain opinions of stakeholders on the importance and effectiveness of the preventive measures. The field work in Bawku was conducted from August to October 2019. Information is collected by semi-structured interviews with informants from relevant stakeholders, which include state agencies, (e.g. national/local governments and National Peace Council (NPC)), CSOs (e.g. West African Network for Peace (WANEP), and Belim Wusa Development Agency (BEWDA)), and community representatives (e.g. Kusasi Chief (*Bawku-Naba*), Bawku Inter-ethnic Peace Committee (BIEPC), leaders of women and youth groups).

As a result of the field research, it is researched that direct prevention measures such as coordination, extensive dialogue, verifying intelligence gathered and community engagements are implemented by the state agencies with support from the CSOs. The CSOs also have been engaging in continuous interactions, community engagements, peace sensitizations, monitoring, and dialogue/negotiation together with early warning activities to identify signs of the recurrence of violence. Also, specific activities and opinions held by the major stakeholders are confirmed. For example, the NPC in their submission liaises with the CSOs on community sensitization, monitoring early warnings signs with respect to recurrence of violence. On the side of the CSOs, WANEP has developed what it calls the community monitoring team (CMT) in Bawku to monitor and detect early warning signs on impending violence which it relays to other stakeholders especially the NPC for quick interventions to prevent any violence. Similarly, BEWDA led the formation of the BIEPC which has come up with the alert system and continuous community engagements as their preventive measure to curb future violent recurrences. According to the BIEPC, WANEP and BEWDA have supported technically in training and organizing workshops on negotiation skills all geared towards prevention. The BIEPC largely represents the community with technical support from these CSOs, and continuously engages the community on the need to maintain the relative peace currently in the area through various peace workshops.

The CSOs collectively opine that, the state needs to play a more complementary role towards the resolution of the conflict. Further on, the CSOs and the community have expressed dissatisfaction with the national and local governments with respect to prevention of violent recurrences. As it stands now, the state agencies rely on the CSOs on early warning and peace related sensitizations in the community. The technical effort by the CSOs has enabled the relative peace in Bawku to be sustained. They further admonish the central government to take a more focal role in resolving the conflict by resourcing and equipping the NPC. The much touted achievements by the BIEPC with respect to prevention through their coordination has yielded some results described by WANEP and BEWDA as encouraging but point out there still remains more to be done as the conflict they describe is on hibernation and any misunderstanding could result in the rise of tensions nullifying efforts made in prevention.

Influence of TICAD on Trade: The Case of Ghana

Stanislaus Acquah (Utsunomiya University)

The Tokyo International Conference on African Development (TICAD) since its inception in 1993 recognizes the importance of trade as a major tool for promoting Africa's development in addition to aid. TICAD, therefore, has been adopting various approaches to promote the benefits of trade for African countries. It called for the removal of barriers and other practices that prevent the expansion of African exports. According to Watanabe (2008), TICAD IV placed emphasis on economic growth which was a shift in Japan's development assistance for Africa. Trade is key to promoting economic growth in Africa. The question is, has TICAD's promotion of trade enhanced the benefits of trade for African countries? Ghana's exports and imports with Japan and globally have been examined to understand TICAD's influence on the country's trade.

Ghana is regarded by Japan as one of the model countries for Japan's growth promotion support in Africa (Ohno: 2007). Ghana is also regarded as a model country for Japan's aid to Africa (Government of Japan: 2006). Therefore, in addition to providing aid for various social services, a large amount of Japan's aid to Ghana under TICAD is also channeled to promote trade.

TICAD is making efforts to support high value products from Ghana through capacity building and infrastructure. However, Ghana's exports remain primary products or raw materials. In 2016, 99.5% of Ghana's exports to Japan was cocoa beans. Meanwhile, Japan's exports to Ghana is increasing (as Japan's aid to Ghana increases), as well as Ghana's global imports. This is resulting in Ghana experiencing trade deficits with its trade with Japan and also globally. Although Ghana from 1972 to 1984 experienced trade surplus with Japan, Ghana's trade deficit with Japan has so much widened since TICAD.

Despite TICAD's efforts in promoting Ghana's exports especially to Japan, these efforts have rather promoted Japan's exports to Ghana more. Although it was hoped that TICAD would engender trade surplus for Ghana, the opposite is the case, which is likely to have implications on the country's development.

References

Government of Japan (2006) "Country Assistance Program for the Republic of Ghana," Country Assistance Program Report 2006, Tokyo, p. 2.

Ohno, Izumi (2007) "Country-Specific Growth Support in East Asia and Africa —Japan's ODA to Vietnam and Ghana," *GRIPS Development Forum* Discussion Paper (16):18-26.

Watanabe, Matsuo (2008) "Japan's Foreign Aid Policy in Transition: An Interpretation of the TICAD IV," *Japan aktuell (German Institute of Global and Area Studies)* (3): 7-26. (https://www.grips.ac.jp/forum/pdf08/jaa_0803_fokus_watanabe.pdf) (accessed on 05/01/2020)

Africa (or Asia) Renaissance?

Pedro Miguel Amakasu Raposo de Medeiros Carvalho
(Faculty of Economics, Kansai University)

The essence of Africa Renaissance goes back to the Pan-Africa Conferences and Congresses held in Manchester in 1945. Since then there has been numerous declarations of intention and principles towards Africa Renaissance, and here lays part of the problem. Despite sound economic prospects, the pace of African revival has been slow. Likely reasons are poor governance, deindustrialization, insufficient development financing, and shallow regional integration. Whose Renaissance and for whom? Africa has attempted to resurge so many times that one wonders if this time is the one. Currently, the Africa Union (AU) Agenda entails that the Africa Renaissance refers to the present and future Vision of the “Africa We Want” with Africans at the center, to be completed by 2063. To accomplish this vision a transformative and development change through mutually beneficial relations with other continents and regions is needed. Although not specifically mentioned in the Agenda 2063, the Assembly of the AU seems to indicate the preference for Asia international cooperation to partner with Africa. However, this paper argues that if African Renaissance is to be meaningful, Asian development agenda must be more in line with African development needs and normative principles, such as democracy and good governance, and less with their own strategic priorities, vague ideological principles and growth concerns. This paper explores the normative scope, the economic ambitions, and the implications of the development duplication of the Asian connectivity agenda, namely the so-called Belt and Road Initiative (BRI) and, inter alia, the Japan Free and Open Indo-Pacific (FOIP) vision, and the Asia-Africa Growth Corridor for Africa (AAGC) Renaissance embodied in the AU Agenda 2063. An overall conclusion is that Asian partners are not doing everything they could to integrate Africa in the Regional and Global Value Chains in terms of development effectiveness and coordination efforts of their connective initiatives toward Africa Renaissance.

Determinants and Impacts of Chinese Foreign Direct Investment (FDI) in Africa:

Analyzing the Mechanism and Evidence of FDI-Domestic-Unemployment Reduction Relationship

AMANFO Smart Edward (Sophia University)

Over the past six decades or so, economists have sought to provide various, and sometimes divergent theoretical and empirical reasons that potentially explain the persistent under-development in the Global South; particularly, in the Sub-Saharan Africa. Paul Romer 1993 from his endogenous view of development analysis has strongly theorized that, under-development is a phenomenon of mutually reinforcing '*Object Gaps*' - lack of infrastructure, and '*Idea gaps*' - lack of knowledge or ingenuity. The *idea gaps* as suggested by Romer could be viewed in modern context as technology and innovation gaps.

Provocatively, these existential gaps have sustained African's under performance in terms of the global comparative multiple human development indicators - healthy life, decent living, and knowledge as indicated in various Human Development Index (HDI) annual reports in spite of the Continent's endowment of natural resources. Some analysts, including the international community, have argued that foreign direct investment (FDI) remains a critical conduit, in part, in addressing *Romer's Gaps* in Africa's context. However, the existing empirical and theoretical literature developed to explain the covariates of FDI outflow into developing regions have failed to produce any conclusive evidence (Chaudhuri & Mukhopadhyay, 2014; Markusen, 2002). Particularly, the continuous Chinese FDI domination in Africa is making the discourse on the determinants of FDI in the Continent more complex. In that, the white paper on China-Africa Trade and Economic Corporation estimates, between 2009 and 2012, Chinese investment in Africa grew on average by 20.5%. Furthermore, Chinese investment in Africa represents the second highest in the world, 57% after Europe, and 65% with majority of these FDI's concentrating in South Africa, Nigeria, Zambia, Algeria, Sudan and Angola. It also been suggested that the explosion of Chinese FDI's in Africa is preceded by consecutive visits of various Chinese presidents to Africa in the era of South-South development corporations.

In this paper, I will present the estimates of the determinants and impacts of Chinese FDI on selected African economies; and analyzing the potential mechanism in which Chinese FDI outflow into Africa helps Chinese domestic unemployment rate reduction.

By estimating multiple models; and analyzing the determinants of Chinese FDI's to Africa, this paper will provide a novel option by offering contextual and theoretical justifications for including the number of Chinese workers in Africa in attempt to empirically understand what factors influence the decision of Chinese investors to invest or to become a dominating country in terms of investment in Africa. Potentially, by controlling for such critical variable which has never been considered in the previous studies, the literature on the subject matter would be expanded by providing mechanism (if any) in which FDI could create a symbiotic relationship between the hosts (Africa) as well as FDI source country (China).

D12

Regulating the commercial use of Cameroon's Non Timber Forest Products in a challenging context of access and benefit sharing: state of the art and prospects for conservation and development

Fongnzossie Fedoung Evariste (University of Douala, Cameroon)

DINGOM Aurelie Taylor (Cameroon)

NGUENANG Guy Merlin (Consultant, Cameroon)

Abstract

In Cameroon, Non Timber Forest Products (NTFP) have become real resources whose ever-increasing market value attracts the interests of private companies and industrialized countries. Concerns about misappropriation and patenting by scientists and industries with little compensation to the State and the local communities have resulted in increased regulation of their trade, including both biotrade of raw materials and bioprospecting for genetic resources. Cameroon is party to the United Nations Convention on biological diversity and has also ratified the Nagoya Protocol on access and benefit sharing (ABS). These policy tools are essential to create conditions that are conducive to the preservation and maintenance of not only these resources but also of the associated traditional knowledge. However, little investigation has been done to assess the implications of these policy tools for achieving conservation and development goals. This paper is addressing this gap by examining current efforts and progress to regulate commercial use of NTFP and bioprospecting in Cameroon. Based on the analysis of some case studies, the implications of this policy tool are discussed.

Key words: Non Timber Forest Products, Cameroon, access and benefit sharing

D13

An Understanding of Kianda, the Symbol of Luanda City

**Kye Ri Kim (Graduate School of International and Area Studies,
Hankuk University of Foreign Studies)**

Kianda is a beloved symbol of Luanda, the capital of Angola. It is deeply rooted in the culture of Mbundu ethnic group. It is used in diverse ways in Luanda as such; a slogan of the city is 'a city of Kianda', local radio says at the end of news that 'you have heard these news by the voice of Kianda', and one of the news channels is by the name of 'a post office of Kianda'. Fictions and diverse commercial brands also both hold a mermaid shape as a Kianda and appropriate its name.

The original meaning of Kianda in the local language of Mbundu, Kimbundu, refers to nature spirit or supernatural power, which causes violent waves of the ocean. However, nowadays lots of people conceive of Kianda as a mermaid. Furthermore, contemporary Kianda has developed as a complex concept without any clear definition. It ranges from a cause of waves, spirit of the nature or of the water, female deity, and ancestor underneath the ocean, etc. Moreover, people perceive Kianda as a culture or tradition, island or ocean, and even Luanda itself. People even identify themselves and their society with Kianda. Therefore, it has complex meanings in it and it varies a lot when it comes to different situations. These diverse interpretations of Kianda indicate the cultural diversity or even fragmented contemporary Luanda society.

Hence, I try to understand the transformational conceptuality from past to contemporary Kianda, the historically influential factors on it and social meanings and roles of it from the anthropological perspective.

Keywords: Kianda, Luanda, Water Spirit, Mermaid Symbol, Anthropology

ポスター発表

P1

Voicing and phonation in African languages using Electroglottograph

Seunghun J. Lee (International Christian University, University of Venda)

Electroglottograph (EGG) is used to measure the movement of vocal folds by placing a two-headed electrode outside of the vocal folds. Using EGG, researchers measure phonation type and/or voicing pattern in various languages. In Xitsonga, a southern Bantu language spoken in South Africa, for example, breathy nasals contrast with modal nasals, suggesting that speakers actively utilize the setting of vocal folds in producing two types of nasal sounds.

The goals of this interactive presentation are three-fold. First, audience members will be able to see how EGG works and also will have an opportunity to use EGG while recording their own speech. Second, visualization tools called Egnog will be shown in order to demonstrate how EGG data can be processed and analyzed (see figure 1). Third, analysis of Xitsonga data will be presented to show EGG in action.

African languages display diverse patterns stemming from the laryngeal setting, including but not limited to prenasalization, breathiness, as well as creakiness. EGG can be used to uncover various laryngeal setting if a language employs such variation in the speech.

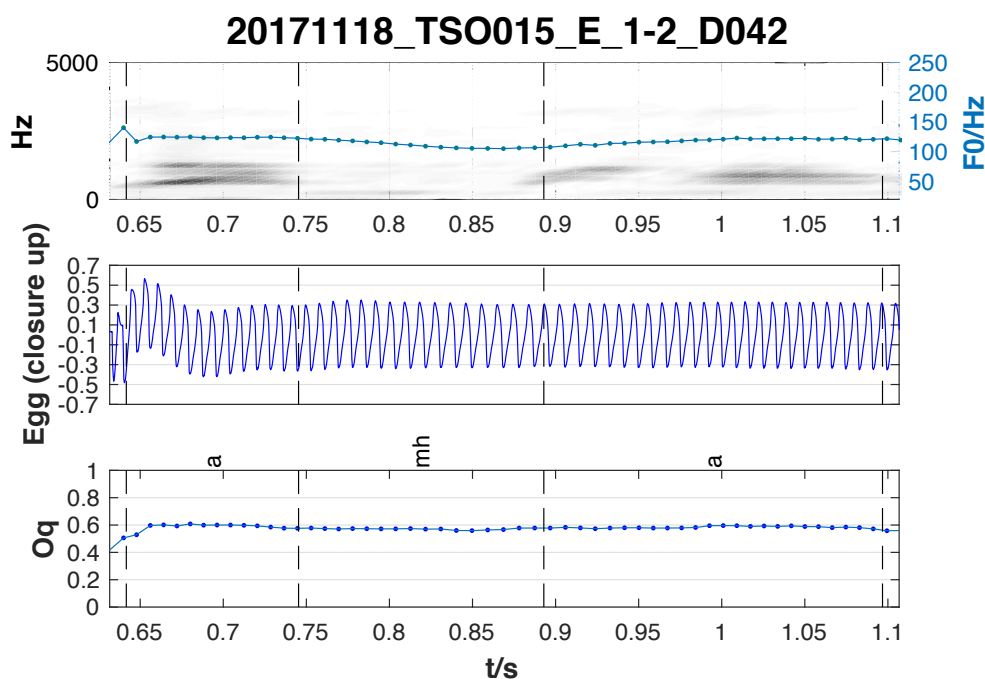


Figure 1. A result of Egnog. The top panel shows the fundamental frequency (Fo), the middle panel displays the EGG signal, and the bottom panel shows the open quotient (Oq).

P2

コンゴ盆地森林住民による森林景観認識の多様性 カメルーン東部州のバカとバクウェレにおける事例研究

大石高典（東京外国語大学）、エヴァリスト・フォンゾッシ（ドゥアラ大学）

Diversity of forest landscapes recognized by forest dwellers of Congo Basin Intra- and inter- group variation among the Baka and the Bakwele of southeastern Cameroon Takanori OISHI (TUFS), Evariste Fedoung Fongzossie (U of Douala/ TUFS)

Indigenous peoples living in tropical forest have developed their own traditional ecological knowledge base, which has enabled their sustainable exploitation of local natural resources. Whereas there are many studies on ethnobotany, ethnopharmacology, and cultural recognition of plants of Congo basin hunter-gatherers, less focus have been put on their recognition of forest landscape itself. Investigating folk classification of tropical forest landscapes can help us to more exhaustively assess habitat diversity, and to demonstrate its potential for the subsistence and well-being of forest-dependent local peoples, as well as provide meaningful information for establishing sustainable social forestry programs. We described 20 forest nomenclatures for Baka and 10 forest nomenclatures for Bakwele that respectively correspond to different forest habitats. Recognized habitats are defined based on their flooding regime and soil characteristics, indicator species, distance from the village, visibility in the understory, canopy structure, history of past land use, and forest hydrology. The Baka informants clearly distinguish and name relatively stable habitats featured by hydrological constraints, land form, and monodominance by specific species. The Bakwele informants cited more about human disturbance in describing different forest conditions. We also observed considerable variations in their cognition of forest vegetations between different individuals among the Baka informants. Further study is needed to examine what factors of developmental, ecological, and socioeconomic conditions influence on their diverse ways of forest landscape recognition.

Key Words: landscape ethnoecology; tropical rainforests; Congo basin hunter-gatherers; Bantu farmers; Cameroon

ザンビア都市部における家内工業のワイヤーおもちゃ製造と廃材利用

川畑一朗（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

Home Industry and Utilization of Solid Waste for Wire Toys Manufacturing in Urban Zambia

Ichiro Kawabata

(Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University)

本発表は、ザンビア都市部の家内工業によるワイヤーおもちゃの製造と廃材利用に関する予備的な報告である。ワイヤーおもちゃとは、ワイヤーを成形することでモノの様相を表現したおもちゃであり、乗物や動物、生活用品などさまざまな形がある。Deregowski（1980）によると、その起源はジンバブウェおよびその近隣諸国とされているが、Donton（1999）では南アフリカが発祥とされるなど、諸説ある。

代表的な形は、クロスカントリー車に子どもが立ったまま押せるようなハンドルがついたものであるが、先行研究やコッパーベルト博物館の展示において、乗物や動物、日用品などさまざまな形が確認されており、それらの製造は家内工業によって行われる（Deregowski 1980; Donton 1999）。

発表者は、ザンビア第二の都市であるコッパーベルト州キトウェ市において 2019 年 11 月から 2020 年 2 月にかけて現地調査を実施した。この調査では、キトウェ市に居住する職人数名からの聞き取りと、その製造作業に参加させてもらい、手押しの自動車やモーターバイクなど主に乗り物のおもちゃを製作する過程を観察し、材料と製作手順を記録した。

製造を確認したモデルは、1) クロスカントリー車、2) オートバイ、3) チョッパーバイク、4) 自転車、5) 三輪車、6) 二輪車、7) ボート、8) ヘリコプターの 8 種類であり、車両のみの形態と運転手や乗客が乗車している形態とが見られた。後者の形態は基本的に車両のタイヤあるいはペダルと乗客の脚部や腕部と連結しており、タイヤの回転とともに乗客が足踏みする・ペダルやパドルを漕ぐ・音が出るなどの仕掛けが施されていた。

主材料である金属製のワイヤーは、銅精錬プラントに勤める知人や廃線や雑線などの産業廃棄物を取り扱う金物屋から購入されており、新品を購入する場合もあるが、多くは汚れの付着や錆の発生が見られる古物であった。また、タイヤの部分には使用済みの蚊帳やゴミ袋、古布などの家庭ゴミが使用されていた。このワイヤーおもちゃのなかにはワイヤーを骨組みにし、そのうえに装飾を施す製品もあり、装飾の部品にはペットボトルやボトルキャップ、スナック菓子の袋、プラスチック片、段ボール、タイヤチューブ、古布など路上に落ちている固形廃棄物が多く使用されており、その多くが職人の自宅付近で拾われたものであった。製品により価格は変動するが、多くは 25~70 クワチャで販売される。

固形廃棄物について、その不十分な管理は、経済発展による都市化や消費パターンの変化にともない、数多くの国が直面している問題である。ザンビアにおいても固形廃棄物の管理は大きな課題であり、2004 年時点で処理が徹底されていたのは、国内の住宅地のわずか 10% 未満であった（ECZ 2004）。また、コッパーベルト州では産業廃棄物の不法投棄が問題となっており、Osei-Hwedie（1996）は経済成長に没頭するあまり環境問題への対策について議論が不十分であることを指摘している。こういった状況を受け、ザンビア環境省は廃棄物管理戦略を施行しているが、物流のフロー管理に関して予算、人員の両面の不足のため不徹底であり（Mwiinga 2014）、都市の郊外を歩くと多くの廃棄物が路上に散乱している様子が現在でもうかがえる。このように負の面が強調される廃棄物の路上投棄がある一方、これらの廃棄物を用いておもちゃを製作・販売することが、若者の稼ぎの一助を担っている側面もあることを本発表のなかで提示したい。

田中 文葉（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科）

Attachment Behavior of Young Children in Playful Song and Dance among Baka Hunter-gatherers

Ayana Tanaka

Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

【背景と目的】

狩猟採集民研究は、人類進化の再構成を試みるための手がかりを提供しうる。しかし、狩猟採集民の文化は多様であり、それゆえ人間の社会のアーキタイプを議論する上で様々な論争がなされてきた。そのような例の一つとして愛着理論にかかわる論争がある。愛着理論は、乳幼児期における母性的な養育は精神の健康にとって不可欠なものであるという主張をもとにしており、Bowlby (1969) によって提唱された。その理論化に際して、アフリカ狩猟採集民のブッシュマンの母子の親密性に関する研究が重要な役割を果たした。一方、この理論では、乳児期には特定の養育者（多くの場合母親）との間で愛着が形成されることが強調されたが、アフリカ狩猟採集民のピグミーの子育てにおいては、乳児の養育に多くの人に関わるマルチプルケアが見られることから、愛着を形成する対象者は複数いてもよいのではないかという主張がなされ、愛着理論は修正を迫られることになった。

このように、狩猟採集民の社会関係は民族によって様々に異なることがわかっているものの、養育者と子どもがどのように関わり合っているのかについて、日常生活の中でなされている相互行為のレベルでの検討は、ほとんどなされていない。そこで、本研究は、愛着理論にかかわる議論の深化に貢献する基礎資料を得るために、幼児の愛着行動とその対象者の応答について、質的な記述をおこなった。

【方法】

調査地はカメルーン東南部で、バカの家に滞在して参与観察を行った。愛着行動の観察は、日常生活にくわえて歌・踊り遊び中に実施した。対象は、乳児に比べ主体的な接触行動が明確で、愛着行動のレパートリーが拡大する、幼児とした。幼児からの身体的な接近に焦点をあて、対象者との相互行為を記録した。歌・踊り遊びは、幼児達が日常多くの時間を過ごす家の前の広場で行われる。その空間には、母親、父親、兄弟姉妹、叔父叔母、祖父母、訪問者などコミュニティのメンバーが行き交うので、集まった人々一人ひとりが幼児のことをどのように気にかけて、ケアをしているのかを観察し、記録するのが容易である。また、幼児達は、歌・踊り遊びに参加したり、演者たちの周囲をうろうろしたり、自分の意志で行先を決めて歩行したりするが、そのとき幼児が誰に接近しようとするのかを判定しやすい。

【結果】

他地域のピグミーにおいてマルチプルケアが指摘されてきたのと同様、本研究でも、幼児に対して、母親だけでなく父親、兄弟姉妹、叔父叔母らに関わっている様子が見られた。しかし、皆が同じケアをしているわけではなく、父親と母親、また、長女と他の兄弟姉妹とでは関わり方に質的な差異があった。母親は身の回りの世話をするために幼児を抱き、父親は遊ぶためや遊びに参加させるために幼児を抱きあげる傾向が見られた。長女は他の兄弟姉妹とくらべて母親代わりとして突出していた。

幼児は、コミュニティのメンバーに愛着をもっていた。しかし、ケアする人の役割と責任の程度が異なるように、幼児からの愛着の程度は人によって異なっていた。年齢の低い幼児ほど母親や長女に強い嗜好性を持っており、年齢が上がるにつれて母親や長女への嗜好性が弱くなっていく。先行研究では、接触時間を元にピグミーのマルチプルケアについて議論されてきたが、本研究からはケアや接触の内容について考慮した行為レベルの分析の蓄積が必要であることが示唆された。

Bowlby John, 1969. Attachment and loss, vol.1: Attachment, London: Hogarth.

タンザニアにおける「フィールド実験」の展望

島田将喜（帝科大生命環境）・高橋康介（中京大心理）

The perspective of “Field experiment” in Tanzania

Masaki Shimada (Teikyo Univ. of Science), Kohske Takahashi (Chukyo Univ.)

2017年夏から、タンザニアの調査地を初めて訪れた実験心理学者（高橋）と現地の被験者たちの間で、「フィールド実験」が行われている。この実験の様子を、アシスタントの立場で参与した島田が人類学の視点で紹介する。また島田が高橋の「実験室実験」に被験者として参与した経験や、治療儀礼の過程で用いられる描画行為との比較を通じて、フィールド実験の特徴を明らかにする。

主な調査地は西部タンザニアの粗放的焼畑農耕民トングウェが多く暮らすカトゥンビ村である。野生チンパンジーの長期調査のために島田が毎年訪問するマハレ山塊国立公園と隣接しているため、その調査アシスタントが多く暮らしており知り合いが多い。実験課題は、各被験者に汎用型携帯タブレットを操作して表示された画像の表情を判断してもらう「表情認識実験」と、紙にペンで表情イラスト（emoticon）や提示された人物画像を描いてもらう「描画実験」であり、被験者一人につき所要数分程度が想定されていた。2017年はフィールドを歩き回るなどして被験者を募り、2018年からは被験者に調査拠点に来ていただいて実験に参加してもらった。

たとえば描画実験では、想定をはるかに上回る時間をかけて描画する被験者が多数いた。またまったく予想外のこと、顔の描出において眉から鼻へかけてのライン（眉鼻ライン）が強調されるイラストが多数得られた。こうした描画はケニアやカメルーンからも同様に得られるが、日本やフィンランドからはほとんど得られないことも分かってきた。こうした質的な気づきは、当初の実験目的を越えて、既知の顔認知の最小要素に関する私たちの常識を揺るがせ、これを確かめ得る新たな実験系を考案するドライブとなった。

フィールド実験において統制困難な社会的・物理的環境あるいは被験者の要求特性などの結果への影響は大きかった。しかし被験者体験をしてみると、実験室実験でもこれらの影響は無視できないことに気づかされる。つまり実験に参与するという営為自体が相互行為性を帯びていることが示唆された。このことを前提にするならば、実験者と被験者、あるいは被験者同士の関係、被験者の属性に目を向けることが、得られた結果の人類学的「理解」には必要である。お絵描きという実践もまた本来相互行為的であり、社会的遊びの側面がある。トングウェの治療儀礼では、呪医たちが地面に作画を行うが、その作画行為や生み出された絵、そして絵に物語を与える行為が、被治療者らの面前にさらされる。相互行為的に生み出される力は、たとえば多くの洞窟壁画や儀礼において、人の顔が表象的に「描かれない」理由の一つになっている可能性がある。

フィールド実験は、実験自体の方法や結果をめぐって心理学的説明と人類学的理解の両者がせめぎあう場でもあり、心理学者と人類学者がその「面白さ」を共有することで成り立つ異分野間コラボレーションの幸運な事例であると言える。

カメルーン東南部における地域住民の居住形態
 ー狩猟採集民バカと焼畑農耕民コナンベンベ、農耕民ンジメを事例にー

彭宇潔（国立民族学博物館）

**Residence styles among local people in southeastern Cameroon:
 Cases from Baka, Kounanbembe, and Nzime**

Yujie Peng (National Museum of Ethnology, Japan)

本発表はカメルーン東南部の狩猟採集民バカ、焼畑農耕民コナンベンベとンジメを対象に、彼らの居住形態について報告する。狩猟採集民バカと焼畑農耕民の接触は数百年前からすでにはじまっており、当時バカは森での遊動生活をしていた。一方で農耕民は、森の中で畑を開墾して農耕をしながら、バカとの相互依存関係を維持してきた。1930年代に植民地政府による森林地域への定住化政策が実施され、農耕民諸集団は道路沿いに定住するようになった。しかしバカたちは農耕民ほどすぐには定住化せず、森での遊動生活を続けた。バカが道路沿いに定住するようになったのは1990年代になってからのことである。定住化後に、バカと焼畑農耕民諸集団を含む森の住民たちは激しい社会的変化を経験している。本発表は、定住化後の狩猟採集民バカと農耕民コナンベンベ、ンジメを事例に、森の住民たちの居住と移住・移動の実態について、2010年から2019年にかけてカメルーン東部州で実施した断続的な調査にもとづいて報告する。

バカは、様々なかたちで外部から強制されて、1950年代からの約50年間で森での遊動生活から道路沿いで定住生活に移行し、農耕もするようになった。定住化後のバカの居住形態は、近縁の親族とともに少人数で同じ集落に住むのが基本である。それと同時に、婚姻によって移住したり、親族訪問によって移動したりする。発表者の調査では、バカには親族呼称の活用（父方オジを父と同じ親族名称で呼ぶなど）を通して親族関係の社会的距離を縮ませる傾向がみられた。そうした親族システムは集団内での社会的規範として、彼らの居住と移動に強く機能している。また、定住化後には能動的な移動や移住がみられるようになった。バカの移住史を眺めると、これまではそのほとんどが外部からの強制による一方的で受動的な移住だった。しかし定住化後は、近隣農耕民に起きた生活の変化や、接触する他集団の増加など、集団間の相互作用に応じて、個人が自ら選択する能動的な移動や移住が多くおこなわれるようになったのである。

一方で、定住民として特徴づけられた焼畑農耕民たちは、1990年代のカカオ価格の高騰によって、2000年代にかけてカカオ畑の面積を急激に拡大した。このような畑の拡大や現金獲得手段の多様化などによって、農耕民において、親族間の居住距離が広がる傾向がみられる。ンジメでは特定の親族が子どもの名づけ親になる慣習があるが、そうした親族間の関係は彼らの居住地や移動先が決められることはない。女性の結婚による移出以外、生業活動（畑や出稼ぎなど）によって居住地が決められるのがほとんどである。また、農耕民は親族間の訪問はバカほど頻繁ではないが、労働力の借用による親族間の移動がよくみられる。例えばコナンベンベの子どもたちは、通学時期には学校に近い親戚のところに、休み中は労働力が必要とされる親戚のところに行くといった移動が特徴的である。しかし、現金獲得手段がより多様になったンジメにはそうした移動が減少している傾向がみられた。したがって、農耕民諸集団の居住形態は彼らの生業形態に強く影響されていると考えられる。

野生動物との近接は魅力的か？

—マウンテンゴリラのエコツーリズムに関連する YouTube 動画における
人間とゴリラとの近接に着目して—

大塚亮真・山越言（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

Are close interactions with wild animals attractive?

: Focusing on close interactions between humans and gorillas
in YouTube videos related to mountain gorilla tourism

Ryoma Otsuka and Gen Yamakoshi

(Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University, Japan)

エコツーリズムは世界中で人気のレジャー活動となり、巨大なツーリズム産業のひとつとして著しく成長している。アフリカでは、とりわけサファリなどの野生動物ツーリズムが盛んである。本来、エコツーリズムは野生動物やその生息環境の保全活動を経済的に支え、保全活動と両立することが期待されている。しかし、エコツーリズムの実施と観光客の欲望や期待が野生動物やその生息環境に対して負の影響を与える事例は珍しくない。IUCN のレッドリストで絶滅危惧種（Endangered）に指定されているマウンテンゴリラ（*Gorilla beringei beringei*）のエコツーリズムは、ウガンダ共和国、コンゴ民主共和国、ルワンダ共和国で実施されており、高い人気を維持している。マウンテンゴリラのエコツーリズムは莫大な観光収益を創出し、地元の経済や開発にも貢献してきた。一方、エコツーリズムの実施にともなう人間との接触により、獣共通感染症のリスクが深刻な懸念事項のひとつとなり、そのリスクを最小限にとどめるために、観光客はゴリラとの間に少なくとも 7m の距離を保って観察しなければならないというルールが定められた。しかし、観光客はマウンテンゴリラをより近くで観察することを期待しており、情報化が進む現代社会においては、そのような期待はインターネットの関連コンテンツに強く影響を受けている可能性がある。そこで本研究では、マウンテンゴリラのエコツーリズムに関連する 282 本の YouTube 動画の内容分析を実施した。282 本の動画のうち約 70% で人間とゴリラの両方が同時に確認され、約 40% で人間とゴリラの接触や手の届く範囲での近接が確認された。さらに、YouTube 動画に対する視聴者の反応を示す指標（視聴回数といいね数）に影響を与える要因を明らかにするため、人間とゴリラが同時に映っていた 206 本の動画を用いて一般化線形混合モデル（GLMM）と AIC モデル選択により分析を実施した。動画のサムネイル画像が人間とゴリラの両方を含む場合は、ゴリラを含まない場合より多くの視聴回数といいね数を獲得する傾向がみられた。一方、サムネイル画像がゴリラだけを含む場合はゴリラを含まない場合に比べてより多くの視聴回数といいね数を獲得する傾向はみられなかった。さらに、動画のなかで人間とゴリラの接触または手の届く範囲での近接がはっきりと確認された場合は、7m 以内の近接が見られなかった場合と比べてより多くの視聴回数といいね数を獲得する傾向がみられた。これらの結果は、マウンテンゴリラのエコツーリズムにおいて、近距離での人間とゴリラのインタラクションがより多くの社会的関心を集める可能性があることを示唆している。さらに、このようなソーシャルメディア上のゴリラとの接触や近接を含む映像が、ゴリラに近づきたい、あるいは近づかれないという観光客の期待を創出あるいは増大させる可能性が高い。今後は、このようなソーシャルメディア上の映像が視聴者の認識・行動にどのような影響を与え、また現場において観光客の認識・行動、そして野生動物の生存にどのような影響をもたらすかについてより詳細な研究が求められる。また、人間はなぜ、どのようにして、野生動物と近接したがるのかを問いただすことが、野生動物の保全活動とエコツーリズムによる負の影響とのバランスを保つうえでの重要な課題となるだろう。

カメルーン南東部におけるカメラトラップを用いた食肉目の占有推定
被食動物・人間活動との関係に着目して
南倉輔（京都大学）

**Occupancy estimation of carnivore by camera trapping in southeastern
Cameroon**
Focus on the prey animal and human activity
Sosuke MINAMI (Kyoto Univ)

背景と目的

食物網の高次消費者である食肉目は草食動物の個体数を調整し、それに付随して生態系内の生物多様性を高く維持する重要な存在である。食肉目の役割については大型種で盛んに議論されてきたのに対し、中・小型食肉目についての研究はまだ数が少ない。栄養カスケードにおける中・小型食肉目の存在はその個体数・種数の多さゆえ大きく、より包括的に食肉目を対象とした研究が求められる。調査地である中部アフリカのカメルーン共和国南東部は、コンゴ盆地につながる熱帯雨林地域であり、保全優先度の高い生物多様性ホットスポットである。本調査地には、頂点捕食者であるヒョウ (*Panthera pardus*) をはじめとした各種食肉目、偶蹄目、霊長目、げっ歯目など 40 種類以上の野生哺乳類の生息が確認されている。本調査地では地域住民である狩猟採集民バカによって、数百年前から狩猟が行われており、人間活動が野生動物の個体数・分布に大きな影響を与えていることが予想される。また地域住民の主な狩猟対象は偶蹄目であり、食肉目の主な餌資源と重複している。そこで本研究では、カメラトラップによって得た偶蹄目、げっ歯目などの獲物動物のバイオマスや撮影頻度と、地域住民の狩猟圧の代替指標として村や狩猟キャンプからの距離という要素に着目して食肉目の占有率を推定することで、直接的には見えづらい食肉目—人間の獲物動物を介した関係を明らかにすることを試みた。

方法

2019年5月～9月、2019年12月～2020年5月の合計9か月間、カメルーン南東部のNki国立公園(面積3093 km²)及びその周辺村にて、①カメラトラップ調査および②地域住民の狩猟キャンプの記録と聞き取り調査を行った。カメラトラップ調査では自動撮影カメラを1088 km²の範囲に各カメラ最低5.6 kmの間隔で合計37台設置した。設置場所は予め発生させた設置点から半径250m以内の獣道とし、地上40 cm高さにカメラを設置した。カメラ設定は3連写真撮影、各撮影の独立性を確保するため撮影後1分間のインターバルを設けた。地域住民の狩猟キャンプ調査では、キャンプサイトの位置をGPSに記録し、キャンプの目的(狩猟、搔い出し漁、採集など)、キャンプサイトの作られた時期、そこで生活する期間や季節などを地域住民バカへの聞き取りによって調べた。

結果と考察

カメラトラップ調査では、2664カメラ日で合計27682枚の写真が撮影され、撮影頻度は偶蹄目、げっ歯目、霊長目、鳥類、食肉目、ゾウ、センザンコウの順で高かった。狩猟キャンプ調査で得たキャンプの分布から、地域住民が狩猟などで頻繁に利用する地域は村から約20 kmの範囲であることが推測された。偶蹄目は、村やキャンプからの距離が伸びるほど撮影頻度が高くなった。げっ歯目の撮影頻度は食肉目の分布や狩猟キャンプとの目立った相関は見られなかった。カメラサイトごとの中・小型食肉目の村や狩猟キャンプからの距離に応じた撮影頻度は種によって異なる傾向が見られた。これは中・小型食肉目の食性が多様であるためだと考えられる。ヒョウの撮影頻度は分布の推定が困難なほど低く、餌資源不足やその他の要因によって個体数が減少している可能性がある。これらの結果から、人間の狩猟圧が高い地域では偶蹄目の個体数密度は低く、食肉目の分布や個体数にも影響を与えていると推測される。しかし、食性の違いなどにより食肉目各種における人間との関係性とその度合いは異なると考えられる。

関野文子（京都大学）

Interaction of Project and Local System in Baka society**Ayako Sekino (Kyoto University)**

近年、開発プロジェクトや援助の実践において、住民の在来的な知識や文脈的な知識の重要性が認識されつつある。一方で、実際にはそれらが無視されプロジェクトの実施者と住民側でのニーズの齟齬や軋轢が依然として存在していることが指摘される。本研究の目的は、カメルーン東部州に暮らす狩猟採集民バカのコミュニケーションの方法と資源共有に着目し、それらのローカルなシステムと外部より導入された住民参加型のプロジェクトとの関係性を明らかにすることである。バカのコミュニケーションや社会システムは、明確な権威やリーダーシップが確立されていないこと、食物などの頻繁なシェアリング等によって特徴づけられる。本研究ではこれらバカ社会のローカルな実践やシステムを再考するとともに、バカが外部の農業・森林資源関連の NGO 活動とどのように関わり、相互作用しているのかを検討する。

発表者は、プロジェクト関係に限らない合意形成や交渉などの日常会話の記録をした他、複数村の住民を対象にプロジェクトの活動歴について聞き取りを実施した。また、それらのプロジェクトに対する住民の評価や反応を記録するとともに、プロジェクトの活動や会議場面の観察を行った。さらに詳細な情報を得るため、これらの会話を書き起こし、内容を分析した。分析の対象とした聞き取りと会話は、(1) 農具や学用品の配布といった物資の支援活動ではなく、住民の主体的な参加を求める国内外の NGO やプロジェクトなどの活動に関する地域住民への聞き取り、(2) NGO やプロジェクト運営者への聞き取り、(3) バカ自身が代表となり活動していた NGO の中心メンバーへの聞き取り、(4) コミュニティ内部の課題や問題解決のための合意形成、および金銭や食物といった資源共有をめぐる親族間でのトラブルや交渉に関わる会話の4点である。

(1) の結果、活動内容に関する理解度や評価、住民の主体的な参加度は、村や地域によって大きく異なることが分かった。共同農場が住民によって作られたものの、以降作業が行われず放棄されたり、資金不足によるプロジェクトの活動停止によって畑が放棄されたりといった実態が明らかになった。これらは資金的な問題といった外部要因のほかにも、村内で活動を主導する人がおらず、活動が活性化しなかったことが背景にあると考えられる。一方で、住民の組織化が進み、共同労働などの農業アソシエーションが機能している村もあることがわかった。(2) の結果、住民の組織化や民族関係が課題として挙げられることが分かった。(3) の結果、バカが代表となり主導する NGO 活動でも、受益者である村人とのコミュニケーションがうまくいかず、活動内容への理解が得られないといった問題が明らかになった。また、NGO 運営側の組織構成は外部制度に準拠していることが示唆された。(4) の結果、土地や食物などについて所有の意識や概念が明確に存在すること、村民全体に関わる会議の場において進行役は存在せず、周囲の支援によって中心人物が頻繁に交代するというコミュニケーションの特徴があることが示唆された。

以上の分析から、バカ社会で展開する NGO 活動には、バカ社会における慣習的な所有概念、利益共有、合意形成などについてのローカルな実践やシステムと、農耕民や外部からもたらされた組織制度との両方が入り混じっていることが指摘できる。外部からもたらされたシステムや合意形成の仕組みがローカルなシステムに受容され、改変されあるいは拒否されたりといった過程を経ることにより、コミュニティ内外のシステムが多様な形で共存し、その結果、プロジェクトの結果や住民の反応が村によって異なる形で現れていると考えられる。

Stadia, Sport Infrastructure and Heritage in Nairobi, Kenya

Devena HAGGIS (Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba)
Peter Kariuki KAMAU (School of Architecture and the Built Environment, Kenyatta University)

Stadia and their management around the world seek and find ways to engage the public in the practice and participation of sport, whether as an athlete, attendee or more recently as a means to facilitate sports tourism. Stadia are also used for a variety of social and cultural events. As such stadia are not merely locations for sport competition, they become a lens through which to view and experience various aspects of the society's history and culture – whether in the practice or creation of history or as a means for sport education. Building the connection between the infrastructure and the public is one aspect of this engagement as stadia increasingly diversify their operations. The Safaricom Stadium at the Moi International Sports Complex in Kasarani, Nairobi, Kenya is depicted by Sports Kenya as the '*The Home of Heroes*'. This hope, perhaps refers to the fact that Kenyan sports people have a distinguished history and heritage on the international stage of sporting success. Similarly the Nyayo National Stadium, also in Nairobi played an important role in Kenyan sporting past – its completion heralded the successful bid for the 4th All Africa Games in 1987, conferring international status on Kenya. The impact of these two stadia, on Kenyan sport is underrepresented in the discourse on sport and infrastructure, as is its potential for sport and heritage education.

Therefore, this poster outlines the current use of the two largest sport infrastructures in Nairobi; the Moi International Sports Complex in Kasarani and the Nyayo National Stadium and considers how these two locations might be able to implement strategies in relation to sport, sport heritage, sport tourism and spatial planning, location, support services and infrastructure development to more adequately assist in illustrating Kenyan sporting culture.

It also considers the linkages between sports, infrastructure and heritage currently reflected in the planning and implementation of the Tokyo 2020 Olympic Games and whether the strategies engaged there have anything to offer the Kenyan context. It also suggests ways in which the above mentioned facilities may leverage their sporting history, culture, spatial planning, location, support services and infrastructure development to develop effective government policies to support develop sports and sport heritage while at the same time educating members of the public and tourists on the excellence of the Kenyan sporting past and present. Strategies to facilitate these goals are timely, given the awarding of the 4th Youth Olympic Games to Dakar, Senegal for 2022 where the world's attention will be on African sport and represent an opportunity to showcase the Kenyan experience.

農村部における学校アクセスと見守りの輪

望月 優、國枝美佳（慶應義塾大学）

Rural access to schools and community surveillance

Yu Mochizuki and Mika Kunieda (Keio University)

アフリカの国々では就学率が徐々に上がってきている。子ども達にとって教育を受けることは財産となり、教育を受けたかどうかでその後の人生は大きく変わり得る。全ての子どもが平等に教育を受けられるようにすることが望ましいと考えられる。しかし、急激に発展している都市部と農村部では学校を取り巻く環境に大きな違いがある。学校までの通学方法や距離、道の整備度合いなど様々な点で教育の受けやすさに差が出てくる。都市部ではスクールバスや親の送迎があるため子どもたちの学校アクセスという観点において安全がある程度保証されていると言えるが、農村部ではそのような手段がないため危険が潜んでいる。

本発表ではケニアとルワンダを対象地域として農村部における子どもたちの学校アクセスの環境について調査し、その中に潜むリスクについて明らかにする。その上で現状取られている対策、新たに考えられる対策について検討する。

手法としては子どもの親に通学に関する聞き取り調査、スマートフォンのアプリケーションを利用し緯度や経度の記録を取りながら実地調査を行う。そして得られた情報を GIS そして紙の地図に落とし、リスクマップを使って対策を検討する。

農村部では学校アクセスの環境において村全体で子どもの通学を見守るコミュニティが存在していると考えられる。そこには近所との関係が希薄化していつている日本が学ぶべき要素が存在しているのではないかと期待される。このようなコミュニティがどのように作られたのか、どのように維持されているのかも合わせて調査したい。

野生チンパンジーの採食行動の発達過程
-チンパンジーの子も「おやつ」を食べる？-

松本卓也（総合地球環境学研究所）

**Developmental research on feeding behavior of wild chimpanzees
Do young chimpanzees have a “snack?”**

Takuya Matsumoto (Research Institute for Humanity and Nature)

これまで、類人猿の子（＝未成熟個体）は離乳後に独立して食物を獲得することができるようになるにもかかわらず、ヒトの子は離乳後であっても母親などの年長者から食物を与えられる依存的な存在である、と考えられることが多かった。一方、近年の狩猟採集民の子を対象とした生態人類学的な調査によって、子はオトナから食物を与えられるだけの受動的な存在ではなく、オトナたちが狩猟採集に出かけている間、キャンプの近くで自らの食物獲得を能動的に行っていることが指摘され始めている。また、そうした子独自の食物獲得の量は集団間のばらつきが大きいため、子の食物獲得の寄与は条件的な適応であるとされている。本研究では、人類の進化過程における子の食物獲得の重要性を検討するため、ヒトに最も遺伝的に近縁なチンパンジーの子を対象に、採食行動の詳細な記録・分析を行った。調査対象集団は、タンザニア連合共和国・マハレ山塊国立公園に生息するチンパンジーM集団である。

チンパンジーの子は、母親と同時に採食する際には果実など母親と共通の品目を、母親と異なるタイミングでは近場で手に入りやすい地上性草本植物および木本性つる植物の茎部をより高い割合で採食していることが明らかになった。後者において採食される食物の中には、50年の調査史の中でオトナの採食場面がほとんど観察されていないものも含まれていた。また、母親と異なるタイミングで採食する場合でも、子は母親から離れていることはほとんどなく、母親の移動に追随することによって採食時間長が短くなる傾向があった。これらの結果を解釈すると、チンパンジーの子は母親との同時採食によって主たる採食の機会を確保しつつ、消化器官が小さいという身体的条件に対応して、母親が食べないタイミングでも機会主義的に採食を行っている可能性が示唆された。

母親と異なるタイミングでの食事の特徴は、現生の狩猟採集民の子による食物獲得の特徴と共通する点が多くみられた。つまり、オトナと異なるタイミングで、オトナのあまり食べないような食物を機会主義的に採食している点で、チンパンジーと現生の狩猟採集民は共通していた。日に数回のオトナとの食事『以外』の場面で食物を消費することは、オトナよりも基礎代謝が高く消化器官が小さいという子の身体的条件への対応かもしれない。これらの結果は、チンパンジーとヒトとの共通祖先の子が、オトナから食物を与えられるだけの受動的な存在ではなく、能動的な採食者としての側面を持っていた可能性を示唆する。

また、霊長類学における『子の食べ方』を対象とした研究は、『食物分配』や『誰かと一緒に食べる』といった側面に焦点を当てたものがほとんどだった。本研究はそうした側面に加えて、『子が母親（あるいは他の年長個体）との食事以外の場面で食べること（「おやつ」）』の重要性、という新しい視点を提供するものである。今後、他地域のチンパンジーやチンパンジー以外の霊長類種においても研究が進むことで、このような子の食べ方が生息地域への条件的な適応なのか、あるいは多くの種で共通した特徴なのかが明らかになると考えられる。

カメルーンにおける狩猟採集民のトイレと子どもの健康状態
 小西達貴（北海道大学）、園田浩司（大阪大学）、彭宇潔（国立民族学博物館）、
 林耕次（地球研）、山内太郎（北海道大学、地球研）

**Sanitation facilities of hunter-gatherers and
 the health status of their children in Cameroon**
**Tatsuki Konishi (Hokkaido University), Koji Sonoda (Japan Society for the
 Promotion of Science, Osaka University), Yujie Peng (National Museum of
 Ethnology), Koji Hayashi (RIHN), Taro Yamauchi (Hokkaido University, RIHN)**

背景・目的 中央アフリカ熱帯雨林に住むピグミー系狩猟採集民は、森の移動キャンプ生活において野外排泄を行っている。1950年代以降は定住化が進んだが、定住集落内においても野外排泄の習慣が見られる。国連の「持続可能な開発目標（SDGs, 2016-2030）」においても野外排泄の撲滅を課題としており、現地においてもNPO団体などの活動によりトイレが導入されつつあるが、その実態は明らかでない。先行研究において、トイレ設備が不十分な地域では、子どもの下痢のリスクが高いことが報告されている。本発表では、トイレ設備が導入された定住集落で生活しているピグミー系狩猟採集民のトイレ設備の状況や、子どもの健康状態、また飲み水の水質に関する予備調査の結果を報告する。

対象・方法 2019年3月、8-9月に、カメルーン共和国東部州S村に住む、ピグミー系狩猟採集民（Baka）を対象に調査を行った。調査内容は、S村の3地域におけるトイレの状態やトイレへのアクセスについての観察（3か所）、身体計測（66名）、子どもの下痢の罹患（33名）及びサニテーションに関するインタビュー調査（51名）、家の飲み水の水質検査（大腸菌群数）であった。

結果

- ・ **対象地域**：S村は地理的に3地域（以下A、B、C）に分かれており、各地域に1つずつトイレ（ピットラトリン：穴に落とし込み地下浸透させる簡易トイレ）が設置されていた。調査時の各地域の総人口は、A：15名、B：65名、C：11名であった。
- ・ **トイレの構造**：A、Cのトイレは、足場が木材で作られているのに対し、Bのトイレは、コンクリートで足場が形成されていた。
- ・ **トイレへのアクセス**：家屋からトイレまでの直線距離は、A：約20-35m、B：約20-50m、C：約10mであった。
- ・ **トイレのプライバシー、衛生状況**：A、Bのトイレは周りに背の高い草や木が立っていたが、Cのトイレには周囲の目を遮るものがなく、プライバシーの確保が不十分な状況であった。また、衛生状況に関しては、Bのトイレでは、ハエなどの虫が飛び交っていた。一方、A、Cのトイレについては、目立った汚れなどは見られなかった。
- ・ **トイレの使用状況**：集落での排泄場所について尋ねたところ、トイレ、森と回答した者の割合はそれぞれ35%、57%であった（無回答：8%）。
- ・ **飲み水の衛生状態**：S村では、ほぼ全員が同じ水源（湧き水）を利用しており、その水源の大腸菌群数は、44 colony-forming unit (CFU)/mLで陽性を示していた。また、家に保存してある飲み水の平均大腸菌群数は、A、B、Cそれぞれ、52 CFU/mL、113 CFU/mL、134 CFU/mLであり、すべての飲み水に陽性反応がみられた。飲み水の保存方法は主に、バケツ、ポリタンク、ペットボトルであったが、それぞれの種類による大腸菌群数の差はみられなかった。
- ・ **子どもの健康状態**：A、C地域に住む子どもには、下痢の罹患はみられなかったが、B地域の子どもの罹患率は87%と高い割合であった。

まとめ 狩猟採集民の定住集落のトイレは、プライバシーや衛生面において問題点がみられた。トイレの利用率は低く、半数以上の者が野外排泄を行っていた。また、すべての飲み水（湧き水、家屋内の貯水）に大腸菌群の陽性反応がみられた。特定の地域の子どもの下痢の罹患率が高かったことから、飲み水やトイレとの関連について検討したい。

モザンビーク北部ニアサ州における住民の水の採取と利用
水源の選択に影響を及ぼす要因

近藤 加奈子（京都大学）

**Water Access and Use among Rural People in Niassa, Mozambique
Factors Affecting Water Resource Selection**

Kanako Kondo (Kyoto University)

【背景と目的】

「2030年までに、すべての人々の、安全で安価な飲料水の普遍的かつ衡平なアクセスを達成する」というSDGsの目標に対し、現在、井戸のような改善された水源にアクセスできない人は世界中に8億人以上おり、そのうちの二人に一人がサハラ以南アフリカに住む。そのため、SDGsの目標達成のためには、サハラ以南アフリカにおける水供給の問題に目を向けることが重要である。しかし、従来利用されてきた水資源はおしなべて安全ではないと否定され、新しいハンドポンプなどによる井戸の建設が支援の主要な方法となってきた。しかし、それらの施設はしばしば住民によって維持管理されず、放置されてきた。

本研究では、こうした状況を踏まえて住民たち自身のハンドポンプ等に限らない水利用のあり方や水に対する認識を実証的に捉え、現地の住民たちが水の種類をどのように区別し、どのような水源から入手しているのかを明らかにすることを目的とする。

【調査概要】

本発表の調査地はモザンビーク北部ニアサ州におけるヤオ人が住むL村である。モザンビークはサハラ以南アフリカの中でも給水率（改善された水源を利用できる人口の割合）が低い国の一つであり、中でも調査地であるニアサ州はモザンビーク国内で最も給水率が低い地域である。発表者は2019年9月から12月までの3か月間、ニアサ州のL村にてフィールド調査を実施した。フィールド調査では、世帯における水汲みと水利用を把握するための参与観察、所得調査、半構造化インタビューによる水利用の変化などの聞き取り調査および水源の水質調査等を行った。

【結果と考察】

L村には、井戸、沈砂池にチューブを取り付けたもの（「水道」と呼ばれる）、小川、湧き水をためた泉、ダムと呼ばれる大きな池など様々な水源があり、1年の半分を占める雨季には雨水も利用している。村の約370世帯のうち、2基ある井戸を利用している世帯は半数以下の約150世帯である。井戸を利用している世帯も含め、多くの世帯が複数の水源を利用している。住民の聞き取りから、白濁した泉の方が透明の小川より「良い水」であると認識されていること、雨が降ると、飲み水にも利用されていた泉は清掃するまで利用が避けられること、雨水にも時期によって「良い水」と「悪い水」があるとされていることがわかり、住民たちなりに水質の「良し悪し」を区別していることが明らかになった。

また、水利用において、各水源との距離は、主に利用する水源の選択に影響を及ぼす要因の一つである。住民たちは基本的に最も近くにある水源を好んで使うが、井戸が近くにあっても距離の離れた泉の水を利用する人もいるなど距離では説明できないケースもいくつか見られた。井戸の利用を避ける理由として、その利用料が理由として考えられるが、世帯の所得調査によれば、井戸の利用者・非利用者に経済的な格差は見られなかった。このことから、水源までの距離や料金発生の有無だけでなく、他の要因が働いていると考えられる。その他の要因として、井戸の利用者の混雑具合およびそれに伴う軋轢、水汲みに要する時間、さらに時間によって汲み上げが困難になることなどが考えられる。これらのことは、援助機関・政府側が一方的に井戸のあるべき水源として推奨し、整備しようとするには限界があり、安全な水供給にはより住民の水利用の現状に即した多面的なアプローチが必要であることを示唆している。

養育者の適切な子どもの給餌行動に関する態度の決定要因
～ケニア共和国クワレ郡における横断研究～

○日達真美¹, ワンジヒア・バイオレット², ニヤンディエカ・リリアン²,
ウエケサ・ノラ², チェプキルイ・フランチェスカ³, ワタサ・チャンゴマ⁴,
カラム・モハメド⁵, ミニウ・エラストゥス², 金子聰¹
¹長崎大学, ²ケニア中央医学研究所, ³ケニヤッタ大学,
⁴長崎大学熱帯医学研究所-ケニア中央医学研究所共同プロジェクト, ⁵ウマ大学

Determinants of Attitudes toward optimal child feeding among caregivers
～A cross-sectional study in Kenya, Kwale county～

**Mami Hitachi¹, Violet Wanjihia², Lilian Nyandieka², Norah Wekesa², Chepkirui
Francesca³, Changoma Mwatasa⁴, Mohammed Karama⁵,
Erastus Muniu² and Satoshi Kaneko¹**
¹Nagasaki University, ²Kenya Medical Research Institute, ³Kenyatta University
⁴NUITM-KEMRI project, ⁵Umma University

はじめに

世界における5歳未満児の死亡の約半数である300万人が、栄養失調に関連して命を落としておりと推定されている。また、子どもの栄養失調は、身体・知能の発達を阻害し、短期的のみならず長期的影響を及ぼすことが明らかにされており、長年の深刻な健康問題である。一方、子どもの良好な栄養状態のためには、養育者による適切な給餌行動が必要不可欠である。

本研究では、全国平均を上回る29.7%がstunting(発育阻害)と報告されているケニア共和国クワレ郡において、5歳未満児の栄養状態及びその養育者の子どもへの適切な給餌方法に関する知識・態度の実際を明らかにする。さらに、適切な給餌方法に対する態度の決定要因を明らかにする。

方法

首都ナイロビから約500km南西に位置するクワレ郡において、5歳未満児とその養育者700組を調査対象者として、2018年1月から3月に調査を実施した。基本属性、居住環境、経済状況、WHO・UNICEFが推奨する子どもの適切な給餌方法(Infant and Young Child Feeding)9項目についての知識・態度に関する質問紙調査及び栄養調査のための体重・身体測定を家庭訪問により行った。収集した情報から、養育者の基本属性、子どもの栄養状態と養育者によるその認識を独立変数、子どもの適切な給餌方法に対する態度を従属変数として多変量解析を行った。

結果

研究対象となった700組のうち、691組に対して家庭訪問調査を実施した(98.7%)。本研究に参加した子どもの月齢の平均値および標準偏差は27.9(±14.6)カ月であった。また養育者の59.0%が30歳未満であった。子どもの栄養状態に関して、30.1%がstunting、6.9%がwasting(消耗症)、16.0%がunderweight(低体重)であった。推奨されている適切な給餌方法9項目に関して、本研究のために作成した知識スコア(0～9点)の平均は8.69(±0.8)点であった。態度スコア(-9～+9点)の平均は7.56(±2.0)点であった。

多変量解析により、子どもの適切な給餌方法に対する肯定的な態度は、婚姻中であること(OR 2.73; 95%CI 1.44, 5.19)及び教育を受けていること(OR 1.84; 95%CI 1.24, 2.72)と有意に関連していた。

考察

知識があることと、肯定的な態度は必ずしも一致しないことが明らかとなった。特に離乳食の頻度や多様性に関しての理解を広く進める介入、さらに、教育を受けたことのない養育者および母親以外の養育者への介入の必要性が示唆された。

地域住民による糞便汚染・曝露の可視化を活用した水・衛生ワークショップ
ザンビア・ルサカでの初期的試み

原田英典, 鶴見茉由, Chua Min Li, 藤井滋穂 (京都大学), Sikopo Nyambe (北海道大学), Imasiku Nyambe, Meki Chirwa (ザンビア大学), 山内太郎 (北海道大学)

**A WASH Workshop Employing the Self-visualization of Fecal Contamination and Exposure
An Early Trial in Lusaka, Zambia**

Hidenori HARADA, Mayu TSURUMI, Min Li CHUA (Kyoto Univ.), Sikopo NYAMBE (Hokkaido Univ.), Imasiku NYAMBE (Univ. of Zambia), Taro YAMAUCHI (RINH, Hokkaido Univ.)

サブサハラ・アフリカ地域の都市部では水・衛生改善のための様々な試みが行われている。水・衛生の役割はいくつかあるが、その主要な役割として、生活環境の糞便汚染を低減し、多様な経路からのヒトへの糞便曝露を低減することで、糞便由来の感染症を制御することが挙げられる。しかし、トイレ導入や排泄物の処理・処分など、水・衛生介入が定着しない事例が現実には散見される。その理由の一つには、水・衛生介入の効果（例えば下痢頻度の減少）が短期間では実感しにくく、地域住民は水・衛生の重要性を認識はしているものの、生活により直接影響する他事項と比べてその関心が低いことが挙げられる。筆者らが他地域で行なった事例では、多様な媒体を介した定量的な糞便汚染・曝露データを外部者が住民に示すことで、住民の水・衛生への関心が高まり、行動変容に繋がることが示されている。これをさらに進め、糞便汚染・曝露データを外部者が与えるのではなく、アクションリサーチとして地域住民自らが簡便な方法で糞便汚染・曝露を調査し、自らデータを得る（可視化する）ことができれば、生活環境の糞便汚染・曝露と水・衛生の役割を実感し、主体的で効果的な水・衛生改善を実現する土壌を形成できる可能性がある。本研究では、生活環境の多様な糞便汚染・曝露を可視化するアクションリサーチを主体とし、住民参加型の水・衛生ワークショップをデザインした。コレラが散発するザンビア・ルサカの郊外スラムを対象とし、筆者らのファシリテーションの元、現地で環境・保健活動を行っている子供・青年クラブの青年メンバー向けに、ワークショップの初期的なモデルを実践した。糞便汚染の指標としては、大腸菌群を用いた。ワークショップは2日間で構成され、1日目（約2時間）には5名、2日目（約1時間）には7名の20歳前後の青年が参加した。1日目は、水・衛生の概要と糞便の汚染・曝露の多様性を筆者らが概説した上で、下痢を引き起こす上で重要だと考える媒体を参加者が列挙し、重要性の順位をつけた。続いて、参加者は2グループに分かれ、各6種類の媒体について試料採取、簡便な前処理の上、試験紙を用いて大腸菌群の培養に供した。2日目には、参加者らは試験紙上に形成された大腸菌群のコロニーの観察、計数を行い、筆者らがデータ処理の上、結果を図示した。参加者は前日の順位づけとの比較を行ない、その違いや多様な媒体の汚染の影響について討議した。さらに、1日の典型行動シナリオを参加者とともに設定し、糞便汚染結果を活用した経路別の曝露量を筆者らが推計・図示した上で、媒体との関係や曝露低減策について討議した。ワークショップを通じて、参加者の意欲的で興味深い態度が伺えた。筆者らが並行して実施した公定法の調査結果と比べたところ、参加者の測定に一定程度の妥当性を確認できた。また、大腸菌コロニーの視認や、生活環境の広範な汚染を示す結果から、糞便汚染とそれを通じた曝露を制御する水・衛生の役割について、実感を伴った理解を促す機会を与えることができた。今後は、参加者からのフィードバックを参考に方法論を改善し、今回の参加者がファシリテーターとなるワークショップを同地域にて実施予定である。

傷に刻む牧畜民マサイの感情
—ライオン狩りにまつわるナラティブに着目して—

田曉潔（筑波大学）

**The Emotions of Pastoralist Maasai in the Scars:
From the Narratives of Lion Hunting**

Xiaojie Tian (University of Tsukuba)

ケニア南部の牧畜民マサイのライオン狩りは、植民地時代より、冒険家や小説家によって語られてきた。その多くでは、文化的他者から見たマサイの身体的なかっこよさと勇敢さが議論の中心になっており、現代社会におけるマサイに対する認識に強く影響を与えている。近年になって、マサイのライオン狩りは、進行しつつあるライオンの減少を一因として、この「悪しき文化」を変えようと、様々な野生動物保全団体が活動を展開している。例えば、ライオン狩りから得る名誉をスポーツのトロフィーに変換しようとする「マサイオリンピック」の開催はその一例である。しかしながら、それらの団体の活動は、ライオンとマサイのコンフリクトの解消につながったとは言えない。これまで、マサイのライオン狩りについての学術的な議論は、限られた分野においてしかなされておらず、主に野生動物保全の文脈でその文化的・社会的な特徴が提起・解釈されてきた。一方、命をかけた相互行為とも言えるライオン狩りに対するこれまでの解釈には、マサイの経験と感情についての語りほとんどなく、凶暴なライオンと直面するマサイの身体的・感情的リアリティは十分に吟味されたとは言えず、さらに、ライオン狩りにおけるマサイの行動に対する解釈も、西欧の代弁者の目線からしか読み取れない。

発表者は、2017年からライオン狩りの経験者を対象にした聞き取り調査を継続してきた。調査地となったマサイの村は2つの国立公園に隣接しており、現地のマサイはライオン保全の活動に積極的に関わっている。一方、ライオンによる家畜被害に対する国や野生動物保全団体の対処に、不満を抱いているマサイが多数いる。聞き取りに際しては、ライオン狩りを経験した青年と長老を対象に、ライオン狩りへ出かけるきっかけや、時間、参加者、計画、対象となるライオンの特徴（例えば性別や、年齢、行動など）、狩りの実施の様子、狩りの後始末などについて詳細に聞き取った。

その結果、マサイは目的によって、異なる種類のライオン狩りを実践してきたことがわかった。多くの当事者は、野生動物保全の政策の実施によって、2000年代からは、名誉のためのライオン狩りができなくなっていると認識している。それ以降に実施されたライオン狩りは名誉よりも家畜や人の被害と関連するものが多く、それらの経験を語る際には、狩りの過程にとまなう危険や、想定外に発生した出来事が中心に語られた。また、自分の身体に残された傷を見せつつ、多様な身ぶりをういながら、狩りの経験をリアルに伝えようとする人もたくさんいた。本発表は、そのような当事者のナラティブに基づき、マサイにとってのライオン狩りの意味を、当事者の身体経験から再考する。

「熱帯下の警告」と現代アフリカ
開発の問題を中心に

発表者 関谷 雄一（東京大学）

Alerte sous les Tropiques et Afrique Contemporaine
Autour des problèmes du développement

Name SEKIYA, Yuichi (UTokyo)

独立期のセネガルにて歴史家・人類学者・物理学者そして政治家として活躍したシェイク・アンタ・ジョップ（Cheikh Anta Diop 1923-1986）は、アフリカのインテリゲンチヤの国際的アリーナであったプレザンス・アフリケーヌ誌・新シリーズ第5号（1955年12月から1956年1月）に「熱帯下の警告（Alerte sous les Tropiques）」と題される論文を発表している。

この論文は、同じ頃出版された彼の代表作「黒人国家と文化（Nations nègres et culture）」ほど注目はされなかったものの、のちに彼が投獄されるきっかけとなったアフリカ連邦国家論の基盤となる論考で、1950年代から始まったアフリカ独立の機運にのっとり、豊富な自然資源や土地を有効活用しながら思想的にも技術的にも成長を遂げるべき潜在力を大陸の人たちが持っていることを力説するメッセージが込められている。

注目すべきは、自然科学にも通暁していたジョップの博識を証明するように、当時のアフリカの自然環境（特に資源エネルギーに注目した観点から）、人口動態、社会制度的状況、国際関係論上の位置づけ等が、きわめて論理的かつ冷静な視点から分析されている点である。シェイク・アンタ・ジョップといえば、エジプト文明の黒人起源論など、極端なアフリカ中心主義を提唱したという印象で語られることが多い。しかし、彼の主旨は、エジプト文明に遡る豊かな歴史をアフリカの人々も共有していること、それを認めながら未来を見据えることが大切であるということ、さらに、それまでの歴史がいかに白人を中心として歴史家たちにより論じられてきたかを批判的に検証することにあつたのである。

いま一つ興味深いのは、その後アフリカが現代までたどってきた歴史の流れを意識しながら「熱帯下の警告」を読むことにより、世界の中の動的なアフリカが通時的にも共時的にも、より立体感をもって見えてくることである。例えば1950年代のアフリカにおける水力エネルギーの源として、コンゴ川流域（コンゴ）、ナイル川流域（スーダン・中央アフリカ等）、ヴォルタ川流域（ガーナ）を指摘しているが、その通り70年ほどの歳月を経た現在では、この3つの流域はアフリカ大陸における最大の水力発電地域を形成している。

また、アフリカならではのエネルギー源として太陽光発電の可能性も論じているが、このことは21世紀に入った現在、アフリカでも実用化に向けて動きが活発になっている。このようにアフリカの未来も的確に予想している点で、ジョップによるこの論考には未来予想図的な面白さもある。その後1964年に同じプレザンス・アフリケーヌ誌に、ニジュール出身の物理学者アブドゥ・ムムニが「アフリカ諸国における太陽光エネルギー（L'énergie solaire dans les pays africains）」という論考を寄せ、そうした考察に、かなり技術的に詳細な説明も加えてゆくが、こちらも注目されたい。

本報告では、70年前のジョップの警告が、アフリカ開発に関してどのような未来を思い描き、一方で実際には現代アフリカがどのように理想の未来に近づいている、あるいは遠ざかっているのかを、断片的ではあるが可能な限り考察を重ね合わせていきたい。そうすることで、ジョップやムムニら独立期のアフリカ知識人たちの未来予想図の実際に迫りながら、現実のアフリカの開発の在り方についても考察を深めることができれば幸いである。

日本アフリカ学会第 57 回学術大会事務局

大会実行委員長

武内進一 東京外国語大学現代アフリカ地域研究センター 教授

実行委員（五十音順）

石川博樹 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 准教授

大石高典 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 准教授

苅谷康太 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 准教授

桐越仁美 国土舘大学文学部 講師

坂井真紀子 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 准教授

椎野若菜 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 准教授

品川大輔 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 准教授

高橋洋成 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 特任研究員

出町一恵 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 准教授

中川裕 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授

中山裕美 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 准教授

松波康男 明治学院大学社会学部 准教授

村津蘭 東京外国語大学現代アフリカ地域研究センター 特任研究員

村橋勲 東京外国語大学現代アフリカ地域研究センター 特任研究員

アフリカ安全保障論入門

落合雄彦 編著 A5判 332頁 本体 3,000円
「紛争の大陸」から「平和の大陸」へ。紛争予防、平和構築を実現するには何が必要か？

人道支援は誰のためか

—スーダン・ダルフルの国内避難民社会に見る人道支援政策と実践の交差—
堀江正伸 著 A5判 260頁 本体 5,200円
人道支援政策と現実との乖離を解明し、政策理論と現場の融合を模索する。

グローバル社会の変容

—スコット・ラッシュ来日講演を経て—
中西真知子・鳥越信吾 編著 A5判 280頁 本体 3,600円
2018年のスコット・ラッシュ来日講演をきっかけに編まれた、グローバル社会の変容をめぐる縦横無尽な議論の成果。

再帰的近代のアイデンティティ論

—ポスト9・11時代におけるイギリスの移民第二世代ムスリム—
安達智史 著 A5判 480頁 本体 5,800円
多文化主義、女性とエージェンシー、情報化、解釈実践、ヒジャブの意味論などをキーワードに現代ムスリムのリアルを描きだす。

戦争と平和の経済思想

小峯 敦 編著 A5判 334頁 本体 3,200円
経済学の歴史の中から、平和構築への方策を探る意欲作！

日本のイスラームとクルアーン

—現状と展望—
日本のイスラームとクルアーン編集委員会 編 A5判 194頁 本体 2,500円
日本社会はいかにイスラームを迎えるか、クルアーンはやさしく読まれるのか？



イスラエルの占領・併合政策とパレスチナ人
—
A5判 304頁 本体 6,200円
山本健介 著
ますます混乱を深めていくエルサレム問題、そしてその中核に位置する「聖地の紛争」。争いはいかに始まり、どのように続いてきたのか。看過されがちだったパレスチナ人の視点を軸に、複雑化する紛争の多様な貌を照らし出す。

聖地の紛争とエルサレム問題の諸相



武器移転規制をめぐる言説や発想は、いかに構築され変容したのか。19世紀以降の武器移転規制論を基礎づける人間像や国家主権概念を解き明かし、武器貿易条約が抱える問題を分析する、批判的安全保障研究の試み。

武器貿易条約

人間・国家主権・武器移転規制
—
A5判 258頁 本体 3,800円
榎本珠良 著

晃洋書房

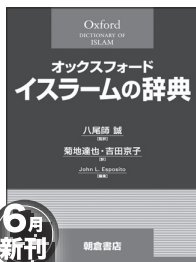
[京都本社] 〒615-0026 京都市右京区西院北矢掛町7 TEL 075-312-0788 FAX 075-312-7447
[東京本社] 〒162-0843 東京都新宿区市谷町3-1 eisuビル4F TEL 03-5227-1128 FAX 03-5227-1137

※表示価格は税抜

◎現代の世界を理解するには欠くことのできないイスラームのすべてを収めた一冊。

オックスフォード イスラームの辞典

J.L.エスポズイト編/八尾師 誠 監訳/菊地 達也・吉田 京子 訳



●A5判 400頁 定価 (本体9,000円+税) (50023-3)
15億をこえる信徒、世界約50カ国で多数派を占めるイスラームについて約1900項目で解説。信仰や思想・法に関わるものから、歴史や重要人物・地域、世界各地のムスリムのありよう、衣食住から慣習などの生活全般、言語・芸術・教育、さらには科学技術や女性問題など、幅広く重要なキーワードを取り上げて解説。

6月
新刊

東部・南部アフリカ

(ベラン世界地理大系 10)

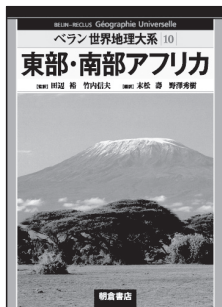
末松壽・野澤秀樹 編訳

●B4 変型判・パートカラー・232頁
定価 (本体 15,000円+税) (16740-5)

〔内容〕東部アフリカ (エチオピア・エリトリア/スーダン/ウガンダ/ルワンダ・ブルンジ/ケニア/他) / 南部アフリカ (南アフリカ共和国/ボツワナ・レソト・スワジランド/ジンバブエ/他) / インド洋南西部 (マダガスカル/他)

〔好評既刊〕

西部・中部アフリカ 定価 (本体 16000円+税) (16739-9)



◎基本用語から制度・文化までを網羅。実務・研究双方に役立つ事典。

観光の事典

白坂 蕃・稲垣 勉・小沢 健市・古賀 学・山下 晋司 編

●A5判 464頁
定価 (本体 10,000円+税) (16357-5)

観光に関する知見を全 197項目で網羅。観光学を学ぶ学生や研究者、観光行政・観光産業に携わる人へ。〔章構成〕1. 観光の基本概念 / 2. 観光の行政と施策 / 3. 観光と経済 / 4. 観光産業と施設 / 5. 観光計画 / 6. 観光と地域 / 7. 観光とスポーツ / 8. 観光と文化 / 9. さまざまな観光実践



アフリカ (世界地誌シリーズ 8)

島田周平・上田元 編

●B5判 176頁
定価 (本体 3,400円+税) (16928-7)

〔内容〕自然的多様性・民族的多様性 / 気候・植生 / 生業と環境利用 (焼畑・牧畜・ブドウ栽培) / 都市と農村 / 都市環境問題 / 地域紛争 / グローバル化とフォーマル経済 / 開発援助・協力 / 大衆文化 / 日本との関係



朝倉書店

〒162-8707 東京都新宿区新小川町6-29 (ISBN)は 978-4-254- を省略
電話 営業部 (03) 3260-7631 FAX (03) 3260-0180
http://www.asakura.co.jp

Confidential Print: Africa, 1834-1966

イギリス機密外交文書集データベース <アフリカ編 1834-1966>

イギリス機密外交文書 (The Confidential Print) シリーズは、1820年代以降、外交・植民地省が発行してきた、イギリス政府が製作する重要なシリーズの一つであり、多くの学術研究で活用されています。アフリカ編は、19世紀初頭の沿岸貿易から1884年のベルリン会議と後のアフリカ分割、コンゴ自由国への侮辱、熱帯病との戦い、エチオピア人に敗戦したイタリア、第二次世界大戦、南アフリカのアパルトヘイトそして植民地の独立への移行まで、近代のアフリカ大陸がヨーロッパにより植民地化されていた時代を網羅しており、アフリカ研究にご活用いただける資料を提供します。

◆Archives Directのプラットフォーム上で、「Apartheid South Africa 1948-1980」など、Adam Matthew社の英国公文書館外交文書データベースと横断検索が可能です。

- ◆フルテキスト検索可能 ◆価格はお問い合わせください。
- ◆1ヶ月間の無料トライアルが可能です。無料トライアル受付中!

AM Adam Matthew
A SAGE Publishing Company



【原本所蔵機関】

The National Archives, UK (英国公文書館)

【資料の種類】

外交特電 統計グラフ 勤務評定 行政資料
軍事/経済データ 書簡 地図 議事録 条約文書 等

【収録文書の種類】

C0879/1-190 C0886/1-11 D0116/1-8 F0341/1-3
F0401/1-48 F0403/1-482 F0413/1-99 F0458/1-157
F0468/1-4 F0485/1-3 F0540/1-6を網羅
CO 885/1-140 DO 114/1-120 DO 201/1-53
WO 287/1-287より精選

日本総代理店

MARUZEN-YUSHODO

丸善雄松堂株式会社 [学術情報ソリューション事業部 研究支援統括部]
105-0022 東京都港区海岸1-9-18 国際浜松町ビル e-mail: kenkyushien@maruzen.co.jp
TEL:03-6367-6025 FAX:03-6367-6188 http://yushodo.maruzen.co.jp

◎2020年新刊

アフリカで学ぶ文化人類学

民族誌がひらく世界

松本尚之・佐川徹・石田慎一郎・大石高典・橋本茉莉編 不朽の民族誌と最新の研究成果からアフリカの現在を考える。文化人類学やアフリカを学ぶ人に最適。 本体2200円

ビーズでたどる ホモ・サピエンス史

美の起源に迫る

池谷和信編 現生人類最古のアート、ビーズの誕生した二万年前、現代まで地球全域をフィールドに、まさにビーズを繋ぐように人類の歴史を描き出す。 本体2800円

かごバッグの村

ガーナの地場産業と世界とのつながり 牛久晴香著 本体3500円

中国の外交戦略と世界秩序

理念・政策・現地の視線

川島真・遠藤貢・高原明生・松田康博編 本体3500円

◎好評既刊

【好評重版出来】

先住民からみる現代世界

わたしたちのへあたりまえに挑む

深山直子・丸山淳子・木村真希子編 本体2500円

【新刊】

世界都市史事典

本体20000円

日本アフリカ学会編

アフリカ学事典

本体16000円

建築フィールドワークの系譜

先駆的研究室の方法論を探る

日本建築学会編 本体2800円

遊牧の思想

人類学がみる激動のアフリカ

太田至・曾我亨編 本体3300円

酒を食べる

エチオピア・デラシヤを事例として

砂野唯著 本体4800円

グローバル化する「正義」の人類学

国際社会における法形成とローカリティ

細谷広美・佐藤義明編 本体5400円

子どもたちの生きるアフリカ

伝統と開発がせめぎあう大地で

清水貴夫・亀井伸孝編 本体2700円

◎(地域研究ライブラリ) 好評既刊

アフリカ・サバンナの「現在史」

人類学がみたケニア牧畜民の

統治と抵抗の系譜

楠和樹著 ケニア北部の乾燥地に住む牧畜民の歴史を、イギリスによる植民地化から現在まで、史料分析とフィールドワークを駆使して描き出す。 本体6000円

地域研究からみた人道支援

アフリカ遊牧民の現場から問い直す

湖中真哉・太田至・孫暁剛編 本体6400円

人類の偉大な作品「都市」のグローバルヒストリーを概説し、世界各地約300都市の形成史をいきいきと描きます。

この半世紀間における、日本人によるアフリカ研究の特色を打ち出つつ、これからのアフリカ研究への手引きとなるような「読む事典」。

コンゴ・森と河をつなぐ

人類学者と地域住民がめざす開発と保全の両立

松浦直毅、山口亮太、高村伸吾、木村大治 編著 ©2300円
戦争でインフラが破壊され、流通が損なわれたままのコンゴの森林の村。そこを調査の拠点とする人類学者たちが、地域住民とともに河川舟運による新たな流通手段の開設に乗り出した。はたして商品は無事にコンゴ河沿いの都市に届くのか？ 波瀾万丈のプロジェクトの記録。

サバンナのジェンダー 西アフリカ農村経済の民族誌

友松夕香 著 ▶第23回(2019年度)国際開発研究大賞 受賞◀ ©5000円
フェミニズムと開発政策は女性たちを支援してきたのか？ 現地で収集した膨大なデータをもとに、男性と女性の不可分な生計関係と女性の労働の強化を明らかにした労作。農業の低迷と人口増加が続くアフリカ農村部での女性支援の政策に一石を投じる。

アフリカにおける遺児の生活と学校教育

マラウイ中等教育の就学継続に着目して 日下部光 著 ©3800円
世界の初等教育の不就児の半数が集中しているサブサハラ・アフリカ地域。マラウイの中等学校に就学している遺児を対象に、遺児が生活の中でいかなる困難に直面し、どのように対応したのか、また就学継続を可能にする要素やその相互作用について質的に分析し明らかにする。

世界はきっと変えられる

アフリカ人留学生が語るライフストーリー 山田肖子 編 廣瀬信明 絵 廣瀬桂子 編集協力 ©2000円
アフリカの若者と話をしたことがありますか？ 来日した5人の留学生に、彼らの子ども時代、今考えていること、将来の夢、そして日本の若者に伝えたいことをインタビューした記録をまとめました。彼らのストーリーから新たな「出会い」を見つけてみませんか。

発展途上国の困難な状況にある子どもの教育

難民・障害・貧困をめぐるフィールド研究 澤村信英 編著 ©4800円
発展途上国の困難な状況にある子どもの教育のあり方を、当事者である生徒、教師、保護者の視点から捉えたフィールド研究。社会・文化的背景からみた要因分析、フィールドワークによる事例研究、学校の支援事例と背景の分析等から主体的に行動する人々の姿を浮き彫りにする。

明石書店 〒101-0021 東京都千代田区外神田6-9-5
TEL.03-5818-1171 FAX.03-5818-1174
http://www.akashi.co.jp/ 振替00100-7-24505 *価格税別 *目錄送呈

SDGs時代のグローバル開発協力論

開発援助・パートナーシップの再考 重田康博、真崎克彦、阪本公美子 編著 ©2300円

開発援助から開発協力への転換期を迎え、地球規模の課題解決のために多様な担い手の包括的なパートナーシップ構築が求められている。紛争と難民、復興支援、農業開発、貧困・格差など、開発経験の実証的考察を踏まえ「共感」と「協働」の視点から展望する。

イスラーム・ジェンダー・スタディーズ【全5巻】

以後続刊

1 結婚と離婚

長沢栄治 監修 森田豊子、小野仁美 編著 ©2500円
「結婚相手は親が決めるの?」「女性から離婚することができないって本当?」世界のイスラーム教徒の様々な結婚・離婚事情を、実際のエピソードも交えつつわかりやすく紹介。イスラーム法の伝統と、時代とともに変わりゆく慣習が織りなす多彩な世界を活写する。

2 越境する社会運動

長沢栄治 監修 鷹木恵子 編著 ©2500円
グローバル時代の今日、社会運動はますます様々な境界を越え、時に世界をも変革する大きな力を持つようになっていく。ジェンダーの問題には保守的とされるイスラーム世界でもどのような広がりを見せるのか、各国の具体的な事例から多様な社会の現在を報告する。

- 現代エジプトを知るための60章
- リビアを知るための60章【第2版】
- チュニジアを知るための60章
- アルジェリアを知るための62章
- モロッコを知るための65章
- マリを知るための58章
- ガーナを知るための47章
- セネガルとカーボベルデを知るための60章
- ケニアを知るための55章
- ウガンダを知るための53章
- タンザニアを知るための60章【第2版】
- マラウイを知るための45章【第2版】
- ボツワナを知るための52章
- ナミビアを知るための53章
- 南アフリカを知るための60章
- マダガスカルを知るための62章

- 鈴木恵美 編著
- 塩尻和子 編著
- 鷹木恵子 編著
- 私市正年 編著
- 私市正年、佐藤健太郎 編著
- 竹沢尚一郎 編著
- 高根 務、山田肖子 編著
- 小川了 編著
- 松田素二、津田みわ 編著
- 吉田昌夫、白石壮一郎 編著
- 栗田和明、根本利通 編著
- 栗田和明 著
- 池谷和信 編著
- 水野一晴、永原陽子 編著
- 峯 陽一 編著
- 飯田卓、深澤秀夫、森山工 編著

世界の国と人を知るための知的ガイド
エリア・スタディーズ

四六判/並製 ©巻末2000円



アフリカ専門 輸入 卸販売

AFRICANSQUARE

アフリカの生産者とともに歩み続けて28年。

有限会社アフリカスクエアはアフリカ専門の輸入・卸販売会社として

20か国以上からファッション雑貨、民芸品、食品など幅広い商品を輸入しています。

農作業の傍ら木陰でバスケットを編む女性たち。彼女たちの手から作り出される製品は魅力に溢れています。

そんな「モノ」に出会うため、私たちはアフリカの各地に足を運びます。



【本社】〒350-1172 埼玉県川越市増形3-2 TEL049-241-9186 FAX049-248-5480 saitama@afrikan-sq.co.jp www.afrikan-sq.co.jp

【ショールーム】〒141-0031 東京都品川区西五反田7-22-17 TOCビル9F57号 TEL03-3494-8801 FAX03-3493-5106

【小売店舗】MANGOROB 川越店 〒350-0062 埼玉県川越市元町1-13-6 カサクラ元町1F TEL049-277-3853 ※火曜定休

【小売通販】■MANGOROB WEB SHOP www.mangorobe.com ■MANGOROB 楽天店 www.rakuten.co.jp/af-sq/





日本アフリカ学会 第57回学術大会実行委員会
事務局：

〒183-8534

東京都府中市朝日町3-11-1

東京外国語大学 現代アフリカ地域研究センター内

E-mail: jaas2020.tufs@gmail.com